

和風凌辱エロゲーの主
人公兼ヒロインの兄に
転生したんですが何か
違う

逆レイプ大好き侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どうやら和風凌辱エロゲーの主人公兼ヒロインの兄に転生した。何故かはわからないが、ゲーム通りの展開なら妖魔に妹が犯されると知っては黙って見ているわけにはいかない。妹を守るために頑張ろう!!

んん？なんか世界観が違うような……。

タグは指摘があつたら追加します。

目次

- 一話 凌辱エロゲーは油断できない
2
- 二話 トップはつらいよ
13
- 三話 兄よりデカイ妹など存在しねえ！
と思つたらすすくすすく成長して出来上がったでござるの巻
29
- 四話 催眠をかけるってほぼエロ確定ですよね
46
- 五話 凌辱されるヒロインを守つてたらクソデカ感情向けるようになったでござるの巻
59
- 六話 ◆ オラツ催眠！童貞もらうね♡
♡
- 催眠解除ッ！……お疲れさまでした兄様
(キリッ)
71
- 七話 病弱だけどもっちゃん強いつていいよね♡
93
- 八話 でかい女性に抱きしめられたら即落ち不可避でつせ
117
- 九話 序盤から強いボスって負けイベントですよね
139
- 十話 ◆ エロい赤鬼
150
- 十一話 砂糖とか交易品作るのは転生モノのお約束ですよね
189
- 十二話 ◆ 真・童貞卒業
204
- 十三話 男子の時点で金の卵を産む鳥扱
189

い不可避なのに、発明品やバグってる貞

348

操観念のせいで最早価値が付けられない

十八話 童話はちびっこ向けにやわら

レベルの存在になったでござるの巻

かい表現なのは当然ですよね —— 358

248

十四話 ロリ槍侍つて母音のイが多いね

十九話 作品を跨いで登場するキャラつ

—— 266

ていいよね、ゲーム会社のある種の看板
キャラつて感じで —— 378

十五話 催眠、お風呂、男女混浴。何も起

二十話 商人が強いのは某ゲームの影響

きないはずがなく —— 296

—— 391

十六話 ◆ エロゲーやAVのマッサージ

二十一話 たんたん狸の(以下略)

ジは普通のマッサージなわけないよねつ

413

て話 —— 313

二十二話 うオつ、でつか、ふつと、エツ

十七話 町に着いたら市場に行つて商品

口すぎ……違法建築物でしょ —— 435

確認するのはゲームのお約束ですよ

二十三話 ◆逆転すると、美少女を手籠

めにする狸の汚っさんみたいなもんでご

ざるの巻 458

二十四話 大昔の不治の病は金があると

解決できることってあるよね。ない場合

は…… 486

二十五話 呪いで命運尽きた子を看取れ

と言われて平気でいられるやつおる？

503

二十六話 フラグはボウリングのピンみ

たく全て取っていいもんじゃないんだ

ぞって話 539

二十七話 怪しいジジイと男色少年の下

に一人で行くだって？鴨葱ではとボブは

訝しんだ 563

二十八話 強い人に弟子入りはしない

といけないよね 589

一話 凌辱エロゲーは油断できない

それは満月の夜だった。真夜中だというのに、月のお陰で山の中も若干明るい。

僕たちは、周囲の村に出没する『妖魔』を退治するために屋敷から出陣した。

妖魔達は目がいいので、迷彩を兼ねて忍者のような黒衣を身にまとう。気休めかもしれないが、中妖くらいなら騙せる。体に靈力を巡らせ、現代社会の人間が見れば、まるでアニメや漫画のような忍者のように見える素早い動きをしながら目的地へと向かう。

「……………」

先頭を走っていた僕はそれを見つけ、木に隠れながら仲間に手信号で知らせる。仲間たちも即座にそれを受け、隠れる。

各々が木陰に隠れながら、僕が見つけたそれを見た。

それは人の形をしていた、が、人ではなかった。

旅人と思われる人を貪り食うその姿はもはや人ではない、体の至る所から体毛が生え、その姿はまるで狼——。

いや、正確に言うなら人と狼が合体した人狼とでもいうべき存在だった。

「……………」

舌打ちしそうになるのをグツと我慢する。僕の部下の小人達は靈力は少ないが、そんな彼女らでもはつきりと分かるほどの妖気が漏れている。この感覚の強さからすると、中妖どころではない、大妖だ。しかも最悪なことに人型だ。これが獣形態なら幾分かマシなのだが、人型は知能が発達してる故に恐ろしい。

その姿の様子を見ると、人狼が服を着ているがその服がボロボロだ。恐らく、ただの人間が狼の妖に噛まれたか何かで人狼化してしまった哀れな被害者だろう。そして、人喰い衝動に耐えられずに襲ったのだ。その死体となってる旅人は、よく見ると髪が長いし刀が落ちていたので女性の武芸者か何かだろう。襲われたところを反撃したが、相手が強く食われてしまったと見ていいだろう。

……大妖と焦って判断したが、落ち着いてもう一度集中して相手の妖力を探る。しつかりと判別したところ、中妖以上ではあるが大妖以下と言ったところだ。ほんの少しだけ余裕が持てた。ギリギリだが行けそうである。これで大妖以上なら確実に撤退しているが。

パッパッ

僕は手信号で部下に合図をし、戦闘態勢を整える。妖怪達は感覚が鋭く、反射光などでも感知する。故に、僕たちが持つ刃には炭などを塗って反射を抑え、更には鉄の匂いも出さない且つ毒を兼ねた薬品を塗ってる。当然無味無臭だ。僕がこの場のトップ且

つ槍持ちなので、僕が一番先に突撃することになる。

そして、下人達は合図を待つて待機した。僕は人狼の様子を見ながら合図を出すタイミングを図る。

人狼は一通り食べ終えて満足したのか、屈んでいた体を伸ばして顔を上へと向けた。月明りがその黒い体毛を妖しく照らす、返り血にまみれたその姿はギャップ差もあつて幻想的な光景を出していた。そして、その横顔は美しい女性の顔で、服の残骸からまろびでる二つの物体が大きく揺れており、腹は武芸者を食つて力を付けたせいかな筋肉質で6つに割れていた。

ほんの一瞬、情欲が出そうになつたがすぐさま鎮める。敵相手に何をやってるのか、と己を叱咤する。周りを見ると、部下の何人かが見とれていた。無理もないが、今は任務中だ。手信号をすると、見とれていた部下も慌てて武器を構える。そして、人狼が何かに気づいたのか、急にこちらとは反対側の向こうを向いた瞬間、僕は飛び出した。

「!!?」

音に気づいて人狼がこちらを向くが、僕は体に靈力を身にまとい、ロケットのような飛び出しで槍を突いた。

「ギッ!!」

「チイッ!!」

もはやほとんど避けられない状態まで距離を詰めていたが、人狼は咄嗟に腕で防御し、槍が腕を貫通した。腕がなければ心臓に刺さっていただろうに、初手が失敗して舌打ちする。

「頼様!!」

「頼む! つてうわっ!!」

部下が僕を援護するように人狼に躍りかかる、すると人狼はその膂力で突き刺さった槍を抜かずそのまま振って槍ごと僕を部下に当てた。

援護に入った部下とぶつかり倒れこむ。背中に柔らかな感触がした。人狼は倒れこんだ僕と部下にとびかかろうとした、僕の下に下人がいる状態なので、このまま僕を食う気か?! そう思つて、奴がしたように咄嗟に腕を出して噛まれないようにすると――

「ギャン!!」

横合いから、人狼に弓矢が刺さった。霊力がこもった矢故に、毛皮を抜けて突き刺さるだけでなく一種の質量弾みたいに重しを付与してるので吹き飛ばされる。これが退魔師の奴なら貫通するどころか、場合によってはバラバラにするものだが、下人が込めた霊力だからこれが限界だろう。僕は即座に立ち上がり、勢いをつけて奴の首に槍を突きさした!

「グアアアアア!!」

獣と女の声が混じったような咆哮を人狼は発する。刺さった槍を掴んで抜こうとするが、それを僕はさせないように押し込む。トドメとばかりに槍先から内部を破壊するように靈力を流し込む。これが効いたのか、しばらく暴れていたが、段々と力が失われて行き、やがて動かなくなつた。

「……」

僕は、無言で槍を抜き首を触つて脈を測る。動いてない。

敵とはいえ、美人顔の女性を殺すということに罪悪感を覚えるも、すぐさま振り払う。この世界の女性たちはやたら美人でこういう妖魔も同様だ、情が移りそうになるので気を付けないと。

人狼の死を確認し、ようやく後ろを向いた。僕の配下である下人3人がやって来る。一人は刀、一人は弓矢、もう一人は術担当と役割を割り振っていた。下人達は、僕の前を集まると膝をつく。

「全員無事か？」

「はっ」

「ならばよし」

替えの利く下人とはいえ、無駄に死なせることをしたくない。それに、女の死ぬところは見たくない、という安い男のプライドがあつた。そう、こいつら下人は女達である。

総じて僕より背が高い。その中の一人で、刀持ちの僕を援護しようとして一緒に飛ばされた下人が声を掛けてくる。

「頼様にお怪我は？」

「ない、お前が下になつてくれたおかげで背を打たずに済んだ」

「はっ、ですが私は頼様の援護に失敗を——」

「いい。僕があの人狼の力を見誤つていただけ、気にしないで」

そう言つて話を切り上げる。今まで人の上に立つたことがないのもそうだが、偉そうに振舞つたこともないので、虚勢を張りながら偉そうに言う。効果はあるようで、恐縮しながら下人は頭を下げた。

そして、今回の騒ぎの原因である人狼の首を取ろうと、僕は槍を置き腰の小刀に手を伸ばそうとしたが——

「ッ?!」

ぞわり。

背筋が粟立つ感覚がし、周りを見渡すと、それらはいた。

僕が人狼の首を斬るのを中斷し突然立ち上がつて周りを見たのを見て、下人達もようやく気づいた。周りから突進しながら妖魔達が襲つてきているのを。

「頼様を守れ!!」

彼女達は僕の中心に円陣を組み、奴らに備える。そう、人狼が最後に吠えたおかげで、小妖や中妖達を呼び寄せたのだ。

襲いかかる妖怪達を相手に、僕たちは立ち向かった。

半刻ほど戦い続け、妖怪達を殺し続けるも、限界がやってきた。いくら鍛えているとはいえ、疲労だけは避けられない。

「ぐうっ!」

馳の小妖の放ったホーミング鎌、本来ならば見切って避けれるのだが、動きが鈍って完全回避とはいかず、足を掠ってしまいその場で膝をついてしまう。

「頼様!!」

下人が心配する声を聞きながら、僕は即座に腰の道具入れの治療薬と解毒薬を取り出した。焼けるような痛みが襲ってくるのを我慢し、即座に解毒薬をかけ、上から治療の軟膏を塗る。

「僕は大丈夫だ! お前たちは?!」

「我らはまだいけます! 早く首切りと浄化を!!」

「奴らを足止めするので、お早く!!」

妖の生まれる原因は数あれど、最も知られているのは霊力を持つ退魔師や妖の死体を

獣が食うことだ。故に、それを防ぐために首を斬るか、切らなくても浄化しなければならぬ。妖が妖を食べるとさらに強くなるのは、退魔師の中では常識である。

本来ならば、綾絶家の当主代行として、北方守護の代表の退魔師として、配下の下人達を使いつぶしてでもこの人狼の首を斬って持って帰らねばならない。首さえ切れば、残った死体を妖が食っても強化はされるがそれほど強くないからだ。いざ、首切りをし浄化しようとしたその時。

——ぞくり

まるで、強者から睨まれた獲物のような悪寒が走った。すぐさま周囲に靈力を飛ばしてリーダーのように感知すると——見つけた、見つけてしまった。僕たちを圧倒する強者の存在を。

どう頑張つても勝てそうにないので、僕はこの場から撤退を選んだ。

「ちいッ、首切りは中止！ 撤退する!!」

「そんな?! 何故ですか?!」

「あれを見ろ!」

思わず指を差して示してしまった。

そこには、足元の人狼と同等レベルの妖力を持つ人狼がこちらを指さしながら小妖達を睨っていた。その姿は、僕達が退治した人狼と同じく筋肉質な女体であった。僕たち

が退治したのは黒い体毛だったが、あちらは月明りで照らされて白か銀に輝いている。顔も、黒毛の人狼と同じ、美しい美女であった。

「そんな、人狼がもう一体いるなんて……」

下人の一人が絶望の声を上げて僕は失敗を悟った。配下の士気というものは重要である。この時僕は説明するために指さしたのだが、説明は後からでも良かったのだ。士気の低下は、撤退にも影響を及ぼす可能性がある。そして、下人の士気が低下してしまつた以上、これ以上ここにいるのは拙い。何より、あの大妖級と思しき人狼が襲いかかつてきたら浄化も首切りも間に合わず仲良く全滅だ。それだけならいいが、全滅した後、僕たちの死体を食い、足元の人狼の死体を食えばさらに強化される。それだけは拙い。

ならば、僕たちがこの場で逃げれば、あの人狼が食べるのは足元の人狼のみとなる。どちらを選んでも強化されるが、最悪か、最悪の一步前かを選ぶとするなら後者以外の選択肢はないだろう。

「撤退だ!!」

僕は大声を上げて、腰の道具入れにある煙玉を足元に投げつけ爆発させる。妖達は、基本的に動物の形をしているのがほとんどだ。その中でも獣の妖はメジャーである。僕の煙玉にはカラシを混ぜているので、小妖や中妖の狼達はその場でキャインキャイン

と悲鳴を上げながら蹲る。

その隙に、僕達はその場から遁走した。追手がやってきたが、今度は懐から火薬を詰めた閃光玉を投げつけて視界を奪った。これで追手を撒くことができ、全速力で僕達は逃げ出した。

そして、僕は逃げ出しながらあることに気づいた。

黒毛の人狼に一番槍を突きさす前、奴は向こうを向いた、あのナイスタイミングとも言うべきあの時。その向いた先は、僕が見つけた白い人狼の居た方向と同じだった。

ならば、僕がああ黒毛の人狼を殺す前から、ああ白い人狼は居たのでは？ と

黒衣の人間たちが逃げ出したのを知ってたが、白い人狼は追わなかった。距離が離れすぎたので無駄だと悟ったからだ。

そして、人間たちが殺した同胞の元へとやってくる。足元の黒毛の人狼の死体を見て、白い人狼はその場に座り込み、その死体を食らい始めた。

人間が聞けば耳を塞ぐような嫌な音を出しながら、黒毛の人狼の頭を食らい、腕にか

ぶりつき、腹を裂いて内臓を食べ、豊満な胸すらも全て食らった。文字通り骨すら残さず食べた後、黒毛の人狼が食らった女の武芸者も残っていたので残さず食らい、そこに残るのは小妖や中妖といった死体のみとなる。

食べ終わってしばらくすると、白い人狼の体からゴキゴキと異音がなり始め、どんどん体が肥大化していった。

筋肉質な体はより強くなり、背丈も2mを優に超え、その胸には人狼の頭と同等かそれ以上のものがぶら下がっていた。

そして、白い人狼の体毛には黒毛が混じり、縞々の体毛となった。さらに強くなった人狼は、その場で歓喜の咆哮を上げ、そして次なる目的を決めた。

あの黒衣の人間たちの雌の中に混じった雄、あいつは私を殺した強い雄だ。あいつが欲しいと。

黒毛の人狼を食らい、女の武芸者も喰らって記憶が混じった白黒の人狼は、女の武芸者が使っていた刀を拾い。山の中を進んでいった。あの雄の匂いを辿り、発情して股から液を漏らしながらゆっくりと追い始めた。

二話 トップはつらいよ

「現世うつしよの波羅姫はら」というゲームがある。僕の前世……つまり二十一世紀では有名な凌辱ろうじゆくエロマルチアクションゲームであった。

開発したのはエロゲー会社で有名などころで、その手のストーリーものに一定の評価のある所だった。そこが作ったこのゲームは最初からエロゲーではなく、一般向けマルチアクションゲームとして作られたことも話題を呼んだ。そして、どこから開発費捻り出したのか？ 回収できるんか？ とでも言うべき豪華声優と美麗なスチル画、そしてたくさん分岐のあるストーリーのおかげで、様々なエンディングが見られるのも人気の理由だった。

世界観は和風ファンタジーと言うべきものでゲームもそれを宣伝していたが、ファンタジーというよりダークファンタジーと言った方が正しい。緩い世界観を醸し出して宣伝し、プレイした人達を鬱ふさにたたきこんだのは数知れない。

中世日本をモデルにした扶桑国がモデルで、江戸時代から戦国時代や室町、鎌倉時代のような日本をモデルにして開発したそうだ。

但し、中世ヨーロッパダークファンタジーなゲームではゴブリンだのドラゴンだのそ

ういったクリーチャーが出るが、このゲームでは妖魔達がそれらの代わりにおり、大昔から人と妖魔とで争いまくって割かし世紀末である。そういった連中を専門に退治していき、扶桑国をまとめた朝廷から役目を与えられ、各地の守護の任につくのが退魔の一族たちである。

そのゲームの主人公は、北方守護の任に着き、北から果ては海を越えてやってくる大陸からの妖魔を退治する名門である綾絶家^{あやたし}。その長女であり、タイトルにもついている綾絶波羅、それが彼女の名前だ。

名門である故に、先祖代々から受け継がれた血と、彼女自身の持つ異能によつて北方守護大名として、周辺の名家を束ねる存在として頭角を現していく。

心優しくも、主人公補正とも言うべきスペックの高さと、後はプレイヤー達の育成努力のおかげで、北方の妖達をガンガン蹴散らしつつ自分の領地を発展させ、都からも朝廷からも覚えが良くなり、褒章や高い官位を貰ったりして、最終的には辺境の大名でありながら、帝から求婚され正室となつてハッピーエンド。男性向けゲームなのに、女性プレイヤーの夢見るような乙女ゲーのような立身出世街道を走るのも特徴の一つで、その宣伝のおかげで数は少ないが女性プレイヤーの獲得もしている。

僕も友人からは是非ともプレイしてくれ！と薦められて、実際にプレイしてエロゲー会社があつた一般向けなんて大したものじゃないだろ、と小馬鹿にしてたがストーリーの

出来の良さに感動すると共にバッドエンドの鬱さに後悔したものの総じて名作であると言える。イラストは有名なイラストレーターに注文したらしいのでキャライラストの出来が良いだけでなく、背景や戦闘描写も非常に凝っており、設定資料集のラフ画の量も多く、それだけでオタク界限では大満足だ。

そして、最初から一般向けに開発されたというのに、冒頭で凌辱鬱エロマルチアクションゲームなんて紹介をしたのは、このゲームが世に出てしばらくし売れ行きが好調だったところ、デイレクターズカット版としてがつりエロを入れた成人版が発売されたのだ。その内容は非常にパワーアップしており、通常版の不満点の改善だけでなく、アクション以外にも政治などを盛り込み、領地経営がオマケ程度だったのがこちらにも力を入れ、アクションが好きな人はこちらを、そうじゃない人は政治や領地経営を頑張ればクリアできるように設計したという、贅沢な出来となり、こちらが本編と言ってもいいので、そう紹介したのである。

だがしかし、これは凌辱エロゲーである。ストーリーや戦闘などのシステムに感嘆の声が止まらないが、基本的には鬱である。特に、主人公である波羅は、女主人公であるからか、バッドエンドルートになったら妖魔達の孕み袋直行である。それだけでなく、数々の所にエロだけでなくグロイイベントが盛りだくさんで、多くのプレイヤーのS AN値を削ったものだ。

特にエロシーンは容赦がない。

この世界の妖達は、ゲーム序盤の小妖や中妖、ボスレベルの大妖となるとそこそこ歯ごたえある敵だ。だが、初見殺しの能力が多すぎて簡単にゲームオーバーからの凌辱シーンに突入する。

特に、主人公たちは最初からそこそ能力あるし鍛えていけばサクサク敵を倒せるから気にならないが、退魔師達はレアな存在であり、大半のモブ達からすれば、主人公からすればスライムレベルの雑魚の小妖でも簡単に死んでしまうのだ。

街道を歩く親子連れが、談笑している最中に急に父親の頭が弾け飛び、息子は丸のみにされ、妻は犯され孕まされる。なんてのは朝食を食べるのと同じくらい当たり前に起きるマツポーな世界だ。もちろん、主要街道は警邏や退魔師が巡回してるのでそういうことは起きないが、主要街道から外れた場所では度々起きるのである。

そんなわけだから、ネームドキャラもあっさり死んだり凌辱シーンに突入したりする。特に、妖達の性欲はすさまじく、女性キャラはほとんどが孕み袋になるし、最悪の場合利用し尽して、これ以上利用できないとなったらトドメとばかりの映画エイリアンよろしくのハラボテチエストバスターなんてのは女性キャラに起きるほうが普通といつでも過言ではない。

じゃあ、敵である妖魔達に気を付ければいいんじゃないか？と思つたそのあなた、甘い。前門の虎が妖魔達なら、後門の狼は味方陣営なのだ。権力闘争による暗殺謀略裏切りなど当たり前みたいに起きてしまい、それによつてラスボスをワンパン撃破できるほど鍛えた主人公が、予期せぬ裏切りからあつさりやられて孕み袋エンドに突入してしまい、その動画を流していた実況プレイヤーがガチ泣きしていたのは有名だ。

そんなわけだから、鍛えればOKというわけでなく、関係各所に対する政治なども必要で、外交なども駆使しなければならぬ。但し、外交政治オンリーの道を突き進んでハッピーエンドを迎えたルートもあるので、戦闘が苦手なプレイヤーにも救いはある。尤も、女性主人公だから、最悪朝廷の左大臣や右大臣といった上位連中だけでなく、大納言や参議みたいな朝廷連中からの共通孕み袋エンドもあつたりするのでそちらが楽というわけではない。場合によっては朝廷がすでに妖達の浸透工作を受け、朝廷主要人物達が全て妖魔化し都は知らないうちに陥落し扶桑国が妖魔国家に変貌。主人公は能力高いから妖魔達の国母となり、不老不死処理を施され出産の日々を送る……なんて最高にヤバイルートもある。

主人公は女性だから、負けるとレイプが当たり前。場合によつては領民を人質に取られたり、水源に毒を流すと脅されたりし、それを回避するために自ら体を差し出すシーンも存在する。そして、エロシーン回収のためにそれを狙つてわざと負けると、段々と

闇墮ちゲージが溜まっていき、最終的には闇墮ち主人公として覚醒し、妖魔達を率いて人間を滅ぼし都を陥落させるルートも存在する。といった具合に、色んな方向にフラグがあるのだ。そして、エロゲー故に、簡単にエロに突入するのもお約束だ。尤も、和姦なんて2割以下で大半が凌辱出産であるが。

そういうわけなので、この世界では簡単にエロシーンに突入するのである。

(尤も、そんな最悪と凌辱を煮詰めた世界で、僕は単なるモブみたいなものなんだけども……)

屋敷の一角にある和室で、僕は難しい顔をしながら上座から辺りを睥睨していた。

その和室では、主人公一家の関係者達が集まり、会議をしている。ここで気づいた読者のために説明するが、僕は当主代行である。

『大妖』になりかけの人狼とは、近頃の妖達は簡単に強くなっておらんか?』

僕から見て左右に家臣と親戚や分家が並ぶ中、左列から声上がる。

その声に反対するような声が右列から出る。

「いや、代行の報告によれば、武芸者を食らっていたとのこと。ならば、それによって中

妖から大妖になりかけになったと考えてよろしいでしょう」

「なんとそういうことだったのか、代行、間違いございませんか？」

最初に疑問を呈した老人が、僕に尋ね、一同の視線が僕に集まる。

この場合は、名門綾絶家の重鎮達が揃っているのです、部屋に籠る靈力の高さも相当なものだ。代行である僕からすれば、彼らの靈力の高さが羨ましいと思うと同時に、高い靈力で吐き気を催すがそれをどうにか耐え、顔にも出そうとせず難しい表情をしながら。

「はい、間違いありません。私が向かったときには既に食われていました」

普通ならば、当主代行の出した報告に簡単に疑問を呈するなど無礼と言うしかない。だが、この場で靈力が最下位である僕の立場は弱いので、不満を出さずにそう言うしかない。

「そうですか。しかし、人狼を退治したのはいいとして、その後死体処理をしなかったのは頂けませんな」

「然り、死体を食らった妖が強化されるなど常識中の常識。代行、詰めが甘かったのでは

ありませんか?」

「それだけに留まらず、退治に向かったときに下人と同じ服装をしていたそうではありませんか。貴方は我ら綾絶家の当主代行、ならば、それに相応しい服装をしなければ、我らの沽券に関わりませうぞ?」

粗探しするような親戚一同からの重箱の隅を楊枝でほじくる攻撃が始まる。最初と次に関しては言い訳があまりできないが、最後に關しては、わざわざ敵に頭を教えるなんてリスクの高いことをしたくないだけだ。僕は合理性を求めて退治に向かっただけである。それだけでも言い訳しようと口を開こうとすると――

「無礼な」

親戚一同は口を閉じ、冷や汗をかく靈力がやってくる。その言葉には言靈術を交えているので、一層言葉が響いた。

その声と靈力の元は、僕の右隣りに座っている少女。この世界のゲームの主人公であり、僕の妹になる綾絶波羅が放っていた。

「兄様は妖退治に向かう時、合理を求めています。下人の服装をするのも、妖に頭目の存在を教えないため。それらの合理を求めた活動により、我らの被害を抑え、下人の消耗も抑えています。まさか知らぬと言いますまいな？」

「ぬう、しかしですな——」

そこから始まる、妹と親戚たちの口論を横目で見ながら軽く目を閉じて現実逃避した。

この世界の、主人公である彼女の兄として生まれた僕は、それはもう絶望した。ゲームでは綾絶家は三人の子供がおり、一人が長女であり主人公の綾絶波羅。そして、残り二人は腹違いの双子の弟達で三人しかいない。そこに、僕というイレギュラーが生まれた。しかも長男で、男である。普通に考えて当主であるが、当主代行とさつきから言われているのは、父が病に臥せているから代行してるのもそうだが、最大の理由が僕の霊力が凡庸で、僕も凡人だからなのだ。

このゲームは友人に薦められてプレイした口だが、面白くて設定資料やスピンオフ小説や外伝も買って、完璧とは言えないがそこそこ覚えている。だが、そんな中でも主人公に兄なんて存在はいない。二次創作でなら、霊力を主人公以上にもつのはたくさんいたが、公式で兄は存在しない。

そして、もっと最悪に拍車をかけてるのがお家騒動だ。このゲームのお家騒動はある

にはあるが基本的に他家の出来事であり、主人公一族はほぼない。あつたとしても分家とかのクーデターなどで、主人公の名家にはない。理由は言わずもがな、主人公が強く霊力が高く、長女故の跡取りだからである。それ故に、彼女が引っ張っていったので、分家や親戚の裏切りなどはあれど、分裂するということはあまりなく、あつてもすぐ鎮圧できるような感じだ。双子の弟達は、彼女と比べて明確に劣る上に、弟達自身は最初から姉を支えようと頑張っているからバックにつく連中がいない。

もちろん、ルートによつては他家騒動ルートは確かに存在するが、割と普通に抑えられるので、そこから内紛に突入するつてことが起きにくい。弟達が妖魔の洗脳を受けて主人公を裏切るルートはあるが、それは内紛とは違うし。

ダークファンタジーな凌辱ゲーではあるが、これでお家騒動あつたらクリア不可能だな。というのは、RTAしてた有名プレイヤーの名言だ。そのプレイヤーのチャートなどを見てたがぎっしり詰まっていたので、説得力が非常にあつた。

それなのに、何の因果か知らないが、僕はこの世界に転生してしまった。長男として。しかも、僕自身自覚してるし、転生前なんかただのパンピーだったから理解してるが、カリスマなんてものはない。顔がエロゲー特有のイケメン……とは口が裂けても言わないが、基本的に竿男優みたいなキモい奴以外はモブであつても普通に整った顔であるので、前世の締まらない顔からすればちよつとは見れるかな？程度にまで美形になった。

だが、父や他のネームドキャラのような分かりやすいイケメンではないし、覇気などもない、凡庸な存在だ。極めつけは、妹より能力が劣っていること。

これで僕が顔やカリスマが凡庸でも、霊力が高いのならば、跡取りとしての存在は許された。だが現実是非情である。

明確に兄より優れた妹、それに対して兄は長男だからという理由で、病に臥せつてる父親に代わって当主代行。どう見てもお家騒動の火種です本当にありがたいがとうございまして。

親戚が僕のことを名前でも様付けでも呼ばず代行と呼んでるのも、お前に当主の座は相応しくない。と暗に言ってるのだ。実にねちっこい、悔しいけど反論できないし僕自身もそう思ってる。

そこで、今も終わらぬ口論の内容を、全く聞いていなかったが、流石にもう部屋に帰りたくなったので止めるために――

「各々方」

――妹がやったように、凡庸な霊力に言霊術を込めて、目一杯力を込めて言葉を放つ。流石に見下してはいるが当主代行というこの会議のトップであるためか、口論がピタ

りと止まり、一同の視線が僕に集中する。

全員に見られるという苦行を受けつつも、顔に出さずそれをじつくりと睥睨しつつ口を開く。

「私に対して思うことがあるのは重々承知、先ほどまでのありがたいお言葉も全て受け止めた上で言います」

一拍を置いて、はつきりと言う。

「私はあくまで、当主代行であります」

妹がしかめ面をし、親戚一同も何言ってるんだこいつみたいな顔で見る。

気持ちにはわかる、さっきの妹がやった見事な言霊術と霊力に対して、僕は遥かに劣っている状態で使っている。

子供が調子乗ってるようなものにしか見えないだろう、わかってるからそれ以上の視線はやめてくれ僕に効く。

「心配しなくとも、波羅が一人前になればこの子に当主の座を譲ります。それまでは私が、父から一時的に預かった当主です」

お家騒動なんかまつびらごめんだし、僕は妹を支えて双子の弟達を守ればそれでいいのだ。これ以上の面倒は御免である。

「ですが、私は非力故に、各々方の力を借りねばならない。そうしなければ、この北方守護大名である綾絶家を守ることができません。故に——」

上座からではあるし、胡坐をかいたままであるが。左右に握りこぶしを付けて深く頭を下げる。

「どうか、私のためではなく、綾絶家のために、各々方の力を貸してください」

代行とはいえ、当主が軽々しく頭を下げてはならない。とは代行を指名された父から教わったが、無茶を言うな。僕は唯の凡人だ。使えるものはなんでも使う努力はするし、頭を下げて問題解決できるならいくらでも下げてやる。

何よりも、前世で兄妹はいなかったが、この転生した世界では僕は長男なのだ、兄貴なのだ。ならば、妹を守ることをしなければならぬ。僕と違って妹達は優秀だ、当主

となる妹が一人前になるまでは僕が頑張つて地ならしをするしかない。兄としてやらねばならないのだ。何より、エロゲー世界だとわかったら猶のこと守らなければならぬ。妹が目の前で犯されるとか常識的に考えて許容できるはずもない。

「……」

僕が頭を下げたことで、一同静まり返る。流石に重鎮達といえど、当主が頭を下げた以上、それにあれこれ言うのはいくら何でも不敬を通り越して処罰を喰らつても文句は言えない。当主の下げる頭は重いのだ、僕は軽々しく下げるけども。

流れが変わったので、僕は当主代行として今後の仕事についての話を始めることにした。

「……では、今後は周辺の警戒と結界の強化、並びに冬が来るのでその備えを宜しくお願い致します。尚、三カ月後私は波羅と沙羅と由羅を連れて都に挨拶に向かいます。冬が来る前に向かわねば、帰りが大変になりますので。勿論、皆様方にもご協力をお願い致します」

僕の決定に誰も文句は言わない、言ってることがもつともだからだ。北方守護という

辺境を守るのは名誉ではあるし、与えられる土地も他の三方に比べて大きい。冬が非常に厳しく、早めに備えないと簡単に餓死や凍死が起こる。この世界の平民の命は軽い。僕は当主として、いくらでも沸くと言われる平民と言えども死者を抑える努力をしている。なぜなら税が下がるし労働力が減るからだ。

そして、都に挨拶に行くというのは。一年か半年に一度は最低でも挨拶に行き、守護大名としての報告やら、契約の更新やら色々せねばならない。他にも、帝や朝廷に捧げる供物の選定などもあるので忙しくなる。これに文句を言える人間は誰一人としていない、なぜなら非常に面倒だからだ。これに文句をつけると「じゃあお前が代わりに行ってくれ」と返されてしまうので、いつもは厭味を言う一部の重鎮も、都関係は普通かそれ以上に手伝ってくれる。まあ、手伝う代わりにお前がやれよ当主代行だからな、と言いたいんだろうが。

場を解散させると、重鎮達は静かに離れていく。にしてもおばあさんやおばさんが多いなあというか、ほぼ女やんけ。男が僕含めて片手で数える程しかないのは悲しい。原作だと重鎮としか描写されないから男女の比率なんて知らんけど。

当主である僕は最後に出るようになる。こういう場合は、トップが先に出るのだが、重鎮達の最後に出るということは、当主代行とはいえ貴方たちを見縊ってませんよ、

現に僕が最後だからわきまえてますよ、というメッセージだ。

尤も、僕はその場で重鎮達の動きを観察して何かあるのかを知る、という意味もあるが。急いで出るなら何かあったと見て、配下に調べさせたりして対処したりするのも当主の仕事だ。トップは辛いよ、誰か変わってくれ、というか妹がトップなるわ。でもあと数年待たないといけないから悪いやっぱ辛いわ。

「兄様」

色々と考えてたら、横から水を差されたのでゆっくりと顔を向ける。ゲーム主人公故に納得の、凛々しい美少女が、僕の顔を強く睨んでいた。

三話 兄よりデカイ妹など存在しねえ！と思っただらすく
すく成長して出来上がったでござるの巻

声を掛けられて横を見ると、今生の家族という鼻肩目を抜いても美少女がそこにいた。

背中まで伸ばした黒髪は、手入れをせずとも綺麗に輝き天使の輪を作っている。触ると絹のような手触りを約束することだろう。それをポニーテールにしていることで動きやすさを重視している。

顔はゲームの主人公だからとも言えるが、凜とした、それでいて可愛さを兼ね備えた顔をしている。アクションゲームだからか、ややつり目で力強い意志を感じさせる。その力強い目は僕を睨んでいる。ステータスを上げるとにらむだけで弱小妖魔を退治出来るから怖い。その片鱗を感じて漏らしそうだ。

それでいて、16歳の僕より2つ下なのに、体はほぼ成熟しており、かなり肉付きがいい。体のラインが分かりにくい和服なのに、胸と尻はその大きさを強調している。僕なんか必死に筋トレしてもマッチョにならないのに羨ましいわ。そして、彼女が怒る理由はわかる、僕をバカにした連中が許せないのだろう。

「波羅、どうした?」

僕は努めて優しく語り掛ける。

「なぜ、兄様は連中の暴言を許すのですか」

いかにも憤懣やるかたないといった表情だ、現に靈力がすげえ漏れてる。ちびりそう。やめてくれ、凡人の僕に効く。

「悔しいが事実だからだよ、言い返せない」

「ですが、先ほどなんか『当主代行の座を降りて、早く奥入れすれば我ら一族に貢献できますぞ』なんて言ったのですよ!」

えっ?! マジ? そんなこと言われてたの? 僕、お前が声を出した時の靈力に当てられてほとんど聞いてなかったわ。というより悪口なんかまともに受けたらメンタルやられるだけで何の得にもならんわ。ただでさえこの世界は厳しい世界でメンタルや

られるのに、これ以上やられたらどうしようもないから別のこと考えるようにしてるわ。僕の好きな口ポツト警察漫画のおまわりさんなんか、上司に怒られるとき今晚は天井にしようかな、なんて考えてまともに聞いてないんだからすげえわ、さすがカミソリと言われただけはあは。見習いたい。

「まあ、お前と比べて僕は霊力が非常に劣るからしようがない。それにいつの時代も、政略結婚なんざ当たり前だしそっちのほうが遥かに家に貢献できることを考えると猶更事実だからな、余計に言い返せないよ」

「しかし!! 実の兄を興入れしろなど娼夫の如き扱い、妹として断じて許せませぬ!!」

ちよつと字が違うんじゃない? 男の僕がそういうことしたって需要ないでしょ。というか、怒鳴るのはともかく霊力駄々洩れしてるから止めて止めてマジで僕に効く。流石ゲームの主人公ちゃんだわーという感想しかわかない。RTAプレイヤーの万夫不当を目指したプレイだと、某無双乱舞ゲーみたいに妖怪達をバツタバツタと草刈りすることが普通にできるし、ボスの大妖どころか大ボスの凶妖なんかワンパン撃破まで出来るスペック持つてるんだからやべえわこの子、この時点で既に片鱗あるよ。

「僕みたいな凡人が上に立つのが許せないのは理解できる。お前の方が優秀だからな。

だが、父上から引かされた貧乏くじを放り投げることは出来ん。お前が当主になるまでに僕が地ならしするから、どうか我慢してくれ。頼むよ」

「むう、そこまで言うのでしたら……」

渋々といった表情で引き下がる。良かった、僕に懐いてくれているとはいえ、この子が暴れたら手に負えないわ。流石にこの若きだと重鎮達には負けるけど、それでもいい勝負できるってのは先ほどの言霊術の霊力でわかる。14でまだ成長途中であるというのに、長生きしてる重鎮達とタメはれるところまで行けるって時点でもう才能の原石である。羨ましい。

だが、言葉だけでは解消できそうにないので、更に畳みかける。

「まだ怒ってるか、ならお前の願いをかなえてあげるよ。僕に出来る範囲ならね」

「で、では……今晚膝枕をして欲しいのです」

先ほどの怒った表情が打って変わって、赤面した年相応の少女の顔をする。

やだ、可愛い。そんな顔したらお兄ちゃん頑張るよ。ただ、男の僕が膝枕してあまり意味がないんじゃないかね? と思わなくもないが、それを口に出すと機嫌損ねそうだから黙ってその願いを聞き入れる。

今ではこんな風に懐いてくれてるが、少し前は僕が弱かったことからくる見下しで

ちよつと塩対応だった。反抗期みたいなもんだと思つて気にしなかったが、その反抗期みたいなもんが来る前は結構懐いていて兄様兄様とカルガモの雛みたいについてきたのは可愛かった。

塩対応から今のようになつてまた懐いてくるのには、それ相応の理由がある。

主人公の前日譚として、所謂チュートリアルプレイとして妖魔退治に向かうのだが、その妖魔退治が報告の中ボスたる中妖と違つて大ボスたる大妖が相手で、こちらがほぼ全滅するという負けイベントのようなものがあるのだ。ほぼ負けイベントで主人公は命からがら逃げることで、これで戦闘の基礎と強い敵には無理せず逃げるといふことを覚え、そして各種道具の有効性なども体感で学ぶというものである。ただ、倒すのは非常に厳しいが無理ではなく、アクションゲーム故にプレイヤーの腕が高いなら倒して一気に経験値やレアアイテムを手に入れたりできる。

この前日譚はほぼ全滅するがレイプされるわけでもないし、この敗北で「主人公は能力が高いが油断していいわけではない」と主人公とプレイヤーに教えるチュートリアルなので無視してもいいようなものだが、ここはゲームではない。何より、僕の知ってる『現世の波羅姫』に僕というイレギュラーは存在しない。

故に、心配になつて、貴重な隠密装備を駆使してこつそりと単独でついていったら、ほぼ全滅するところまで一緒だが彼女まで殺されそうになつた。これには慌てた。

本来ならば、この大妖である人狼が波羅をレイプしようとする寸前で、彼女は隙を見て大妖のイチモツを蹴り飛ばし、悶絶したところを一目散に逃げるといったものだった。

だが、彼女が相対して大妖は雄ではなく雌であった。そして、他にも雌の妖魔がたくさんおり、道案内の男の農民を逆レイプしてたのだった。大妖は雌で男が余っていなかったが故に、男をレイプすることなく波羅を殺そうとしてたのだ。

さすがにこれは拙いと思って、チュートリアルでも使われた閃光玉に煙玉、鼻を効かなくする臭い玉をありったけ駆使して何とか彼女を抱えて逃げる事ができた。この時の彼女はまだ小さかったので抱えることができたが、流石に僕ができるのはそれまでで、犯された男農民や、死にかかっている配下は見捨てることとなってしまうのが悲しかった。

だが、それ以上に妖魔達から必死に逃げていたのでそれどころではなかったというのが正直なところだ。ゲームだと各種道具は数回使う程度で済んだのだが、僕たちを追いかけてる妖魔が尋常じゃなくらいしつこかったのだ。

特に大妖の人狼が「あの雄を捕まえる!!」と僕を名指しで追いかけてきたのが怖かった。ヒロインである主人公凌辱エロゲーだが逆レイプがないわけじゃない、主にモブ男やネームド男に対するものなので、それと同じかと思った。人狼は雌で、顔はエロゲー故に高得点だし体付きも色々大きくてエロかった。が、エロい妄想をする暇もなくひ

たすら逃げまくって、手持ちの道具をすべて使い果たしてようやく逃げ切ることができた。

それまで、犯されるか殺される！ と背後からの恐怖を味わいながら逃げ切ったので、逃げ切ったら自然と涙が出て、妹も守り切ることができたので、泣きながら彼女を抱きしめた。もう二度とあんなことはしたくない。道具も使い果たしたから補充も面倒だった。

それからというもの、彼女は一転して甘えるようになったのだった。そして、僕がこの世界に転生してからあれやこれやとやっていた中で、調味料の一部や嗜好品の作成が上手くいき、それによる利益が出たので食事を作るようになった。その食事を振舞うともっと懐くようになった。そして彼女の体に変化が起きた。

「さて、昼餉もまだだったから食べようか。久しぶりに僕が作るが、食べるか？」

「は、はい！ 兄様の作る焼き飯が食べたいです」

「よしよし、じゃあ部屋に行っててくれ」

当主が料理なんぞする必要ないし沽券にかかわるとみられるが、僕は前世の味が忘れられないので色々と料理研究をしているのだ。最初は、もちろん重鎮達が馬鹿にしてきたが、出来た料理を僕が作ったと隠して食べさせ、美味しいという言葉を引き出した後に

作ったのは僕だという発表をすると、苦虫を噛み潰した顔をしたが、それ以降文句を言わなくなり、逆にこっそりと注文を付けたりしだした。今では立派な取引材料の一つになってる。

二人して立ち上がると、妹が甘えるようにこちらに正面から抱き着いてきた。それによしよしと背中を撫でると、僕の顔は妹の胸に挟まってしまふ。そう、胸である。数えで14くらいなのに、妹は僕より背が高い。僕が160cmくらいだとすると、頭1つ分はでかい。背がでかいぶん、色々とでかい。乳も尻も太もも大きいのだ。靈力を身に回して成長促進させたら体は大きくなると言うが、本人がそれをしたのかどうかは不明だ。だが、妹に見下ろされるといのはちよつと堪える。しかし、こうして甘えてくるとでかい大型犬みたいなもんで可愛い。胸が当たるのは役得だが、欲情はしない。そんなので欲情したら、ただでさえ兄貴としての威厳がないのに、殊更に無くなってしまうし、妹からも嫌われるだろう。主人公ちゃんに嫌われたら、この酷い世界で生きていける自信がないので、精神集中に靈力を集中させ煩惱を退散させてる。

妹がこんなに大きくなったのは、もしかしなくても僕が原因だろう。

僕は料理研究をしながら、ゲーム知識を思い出していた。そういえば、美味しい料理でステータスアップとかあったよな……、恒久的な奴と一時的な奴に別れるし、ゲームの知識がこの世界に当てはまるかどうか知らんけど、美味しい料理作って妹に食べさせたら

かなり強くなるんじゃないか？

という打算も込みで、色々研究してもりもり食べさせていったのであるが、ここまで大きくなるとちよつと食わせすぎたのではないかと思ひ始めている。兄よりでかい妹など存在しねえ!! と思ったが僕に今抱き着いてるこの子は妹です、姉ではありません。

彼女にされるがままにされてると、襖が開き二人の人物が入ってきた。

「兄上」

「姉上」

「会議は」

「終わりましたか?」

二人の可愛らしい双子の少女は僕と波羅の妹で、ゲームでも波羅を支えた彼女にとって大事な肉親である。名前は沙羅と由羅。姉の波羅の凛々しい顔とは違って、12歳相応の可愛さと明るさを合わせた顔をしている。髪は黒髪のボブカットでそれぞれお揃いの簪を左右違う場所につけて区別している。本当に顔が同じなので、簪を同じ場所につけたらわからないほどだ。

ゲームでは主人公である波羅の大事な家族であり、この双子の「弟」達を守るのも彼女の戦う理由の一つとなっている。

そう、ゲームでは弟である。だが、僕が転生したこの世界だと何故か二人とも女となっている。名前も元のゲームだと沙悟、由悟となっているが、それを当てたのか沙羅、由羅となっているのだ。

このゲームは主人公が女でそこから都でイケメン公家との結婚などのサクセスストーリーがあることで女性プレイヤーも少なからずいるのだが、それだけでなく双子の弟達も女性プレイヤーからは人気者だった。だがエロゲー故に、妖魔に囚われて改造され、無事取り返したと思っただら性欲が抑えられず姉である波羅を二人がかりでレイプする、なんていうルートすら作られてるから恐れ入る。さらにそこから、双子の性処理をしつつ妖魔の改造と洗脳を戻すのだが、性処理する際に波羅の上昇するステータスポーナスが高く、それ目当てでそのまま性処理し続けてたら避妊失敗して双子の子を妊娠出産、その子どもを育てて戦力増強、みたいな選択肢まで作られているのだからスタッフの作りこみには脱帽したものだ。

だが、僕がこの世界に転生して双子を見た時、女の子だったから驚いた。これを知った時、もしかしたら僕というイレギュラーがいたから変わったのかもしれないと考え始めた。公式スピノフのエロ漫画だと、妖魔連中に囚われた双子の弟の片方が性転換して、男の方は女妖魔の肉パイプとなり、女のほうは肉便器となった挙句、最終的には二人が合流したら性的開発されまくったせいかな、出会ったら発情して即合体し子供まで

作ったIFルートな漫画があった。

その関係なのかもしれないが……、如何せんはつきりとわからない。綾絶波羅という特徴的な名前でゲーム世界だというのはわかったが、全部が全部そうじゃないのかもしれない。やたら女性の権限が強いのと、女性の体格と身長が大きいことと、男があまり前に出ないこと以外は大体ゲームと一緒にのように見えるのだが……。

その疑問を顔に出さず双子にこやかに答える。

「ああ、終わったよ」

「それは良かった。ところで兄上」

「姉上にお昼ご飯を作るようですが」

「私達も」

「お腹が空きました」

「丁度いい、ならお前たちの分も一緒に作ってあげるよ」

僕がそういうと、喜んで僕に抱き着いてくる二人。僕の左右から挟むようにくつついてきて、僕の首元に顔を擦り付ける。そう、下の妹なのに僕と身長が変わらないのだ。上の妹は僕より大きく、下の双子も僕と同等で、兄としての存在感が薄れそうで悲しい。僕が16、波羅が14、沙羅と由羅が12とわかりやすく2つほど年が離れているが、そ

れの通りに身長差があるのかと思いきや、この成長速度だと、僕がこの中で一番背が低くなる。やめてくれ、身長差で負けるなんてただでさえ凡人の僕に効く。

ちなみに、双子も双子でかなり優秀だ。波羅がRPGのなんでもできる勇者だとすれば、双子は魔法使いと僧侶みたいなもので、姉と違って接近戦は得意ではないが、術に關してはちよつと上回るほどに得意である。言うまでもないが僕より上だ。ゲームでも主人公であり姉であり当主である波羅を支えてくれる数少ない最初から友好的なキャラである。ゲームでは波羅一人でも無双できるが、双子をサポートとして付けると隙がほとんどなくなり、最終まで鍛え上げるともうこの3人で扶桑国の平和を守ってしましました。というレベルにまで達してしまふ。

だから、親戚一同が僕が当主代行をしてるのが不満なのだがそりやそうだと僕も声を上げるだろう。上の妹と下の双子の妹に劣る兄。大体退魔師はどこも実利主義の傾向が強い、僕と妹達は腹違いなだけだが、主筋である僕が平凡で、傍流の妹が優秀と逆転状態なのが話がこじれる理由である。まったくなんでこんなことになってしまったのか、と、妹達に囲まれながら思う。

だが、妹達が妖魔の孕み袋になるのは何としてでも阻止したい。そのためにゲーム中で起きるフラグはどうかこうにか潰そうと対処してる。

先ほど説明した、ゲームのチュートリアル部分で波羅が死にそうになるイベントだ

が、あれと似たようなことが双子にも起きる。こっちは双子を操作するのだが、これで後衛の大事さを学ぶようになっていいる。波羅が前衛のチュートリアルだとしたらこちらは後衛のチュートリアルという風に分けているのだ。

そして、こちらも双子は波羅と同じように偽情報で中妖じゃなく大妖が相手となり、そこに分家の者と一団を率いて討伐しに行ったら全滅しかかるといいう内容だ。

僕は波羅で痛い目を見た反省を兼ねて、あの時は僕一人でこっそりで行ったが、当時の双子は幼い故に援軍を送るといいう名目で戦鬪団を率いることができたので、こちらの被害を抑えつつ双子が危険な目に会うのを防げた。この時、波羅も連れて行ったのだが彼女もあの時大妖に敵わなかった屈辱があったからか、一層鍛えていたおかげで主力として戦った。

もうばったばったとなぎ倒す姿は痛快としか言いようがなく、巨大熊の大妖もボッコボコにして倒していた。流石主人公といった感じで、双子の後衛の援護もあって、怪我人は出たが死者を無くせたのは良かった。

波羅と双子は乳母の教育方針か派閥争いかわからないけど、あまり仲が良いとは言えず僕が間に入っていた。なので、今回の救出劇も波羅が協力してくれるかどうか不安だったが、快諾してくれたので助かった。

双子も、自分たちが危険な目に遭ってしまったが、兄と姉が援軍としてやってきたお

かげで無事だったので死の恐怖から解放されたら僕らに抱き着いて泣き始めた。それからというものが、波羅と双子の仲も良くなったので、兄として姉妹の仲がよくなってるのはいいと思う。

ただ、こうして、僕に懐いてくれるのは嬉しいし、僕も彼女たちに優しくしてるからいい関係を築けているが、これが崩れたら真っ先に消されるよなあ……と思いつながら若干されるがままになっていった。四人兄弟の中で一番上の僕が平凡だから、お家騒動起きたら真っ先に消される可能性大であるし、妖魔との戦いでも四人の内誰か一人を生贄に捧げるって選択肢が出たら間違いなく僕が選ばれるだろう。

いや、妹達を守るためなら生贄になっても良いが、妹達が不幸な目に遭うのであればなるべく生き残って彼女達を助きたい。

それを、妹達からこうして懐かれることになってるのでそれを回避できるという意味でも一安心だ。

まだ抱き着いて離れない、見た目は凛々しい武人なのに甘えん坊な大型犬のような上の妹と、可愛らしい中型犬の妹達に昼飯作るからといって引きはがして、僕の部屋で待つようにいい、僕は厨房へと歩き始めた。

それにしても、この世界に転生し、あれやこれやと行動しながら思ったのだが、ゲームの世界観と一緒に思いきや、何か違うのである。何が違うのかというと、どうも男と女の考えや役割が違って見えるように見えるのだ。

ゲームだと男性向け故に、女性主人公であり僕の妹である波羅を中心にエロイベントがとにかく起こる。負けてレイプ、卑劣な罠にハマって孕み袋、有力貴族と婚姻結んで初夜が貴族によつてはラブラブもあるが凌辱する貴族もあり、中には妖側と手を組んだもしくは実は貴族の正体は妖で内部工作のために変化しておりそれに婚姻して初夜のと出産したら半妖の子を産み絶望した。といったルートもあつたりする。

男性向け故に、男から襲われるのは普通と言つていいだろう。妖も比率的に雄の妖が多く、雌もいないわけじゃないが比率は少ない。数少ないレズプレイはあるが、やはり生産性がないのでスチル画もどちらかというところ八割は男から犯される奴だ。何より、ゲームだと沙羅と由羅は弟であり男だったのだ。それがこの世界では女になつてるのが気になる。

どうにか十六で成人した僕は、今までに妖退治を何回かしに行つたのだが。なんか逆になつてる気がするのである。僕が先日仕留めた人狼も雌だったし、食われてた武芸者も女性だった。男の武芸者や陰陽師もいるにはいるし、うちの分家連中も男達は軒並み

強い。だが、それでも半数かやや上くらいは女性が多いし彼女達が強いように感じた。

何より、先日の退治は僕以外で出れる人間がいなかったから僕が出たのだが、基本的にあのような出撃は僕は認められていないのだ。病に臥せっている父も、看病してる母も、お前はなるべく前に出るな、攫われるぞと忠告してくれるのだが、これはまあ親として心配してくれてるからだろうとあまり気にしてなかった。

まあ、男性向けだから女性が多いとその分エロシーンがあるし、ゲーム中でもモブの巫女やら女武芸者もいたからそんなものだろうと思っていたが、喉に小骨が引つかかったような違和感が拭えなかった。

綾絶頼はうんうん唸りながらも答えを出せず歩き始めた。

そして、彼は知らなかった。この世界は彼が遊んでいたゲームの世界とほぼ同じのように見えて決定的に違うところがあると。

当主代行というと聞こえはいいが、まだ三か月も経ってない上に、彼自身が箱入り息子みたくないな感じで扱われてたゆえに、情報収集が限定的となっていたこと。親戚一同が興入れたほうがいいというのも、妹の波羅を当主に置くようにするのも、この貞操と

力関係が逆転した世界では女が上に立つので当然のことであつた。彼が男である故に、箱入り娘ならぬ箱入り息子として扱われたことも、世界観を良く知ることができなかつた。

故に、彼は彼自身がゲームにおけるエロイベントの中心になるとは、この時は微塵も思つていなかつたのだ。そして、後にそれを身をもつて、彼自身のこれからの人生によつて知ることになる。

四話 催眠をかけるってほぼエロ確定ですよね

退魔師はそれぞれの自室に防諜のための結界を張っている。見られては困るものな
どもそうだが、お家騒動などで弱点探りなどのために鼠や鳥といった小動物に化けた式
神を飛ばして探るなどよくやる手段だからだ。

かくいう僕も自室に術を張っている。だが、僕は当主の唯一の息子とはいえ、霊力は
中くらいと並みの退魔師しかない。だから、自衛の結界術と言っても上等な物ではな
く、中妖クラスまでなら防げるといふ程度でしかない。同じく、退魔師なら中級程度ま
でしか防げない。

そこで僕は、三人の妹達に頭を下げて頼んだ。僕が一番外側の結界を張り、真ん中を
波羅、内側を術が得意な沙羅と由羅という順番で三重結界を張ることに成功した。

ちなみに、退魔師は基本自己完結みたいな風潮がある。家族間の仲がいいなら普通に
協力したりするが、北方守護の綾絶家では厳しい寒さの土地柄故か、協力するなら一族
のみ、他家と協力は条件付き、みたいな考えだ。まあ、家を残すという考えでは間違っ
てないだろう。領地の村も、余裕がある時は協力するが完全にはシャットアウトす
るからな。みんな寒さが悪いんだよー寒さが。

で、我が家は僕以外は基本的に優秀だから、自分の結界は自分で張っている。そして、それをすり抜けたり破ったりして弱点の情報収集をしたりして、一族での出世や交渉に使ってる。と、設定資料集に書いてあったっけな。

尤もこの世界の貴族とか我が家みたいな有力な退魔師一族はそれが普通だそう。戦国時代かよと思つた。そうなると、僕から一番情報が抜かれるのである。僕が元服前だったなら、ただの当主の息子でだけでよかつた。霊力も高くなく、一族でも出来損ないと陰口叩かれてたし、事実だから無視していた。その時には既に優秀な妹達がいたから僕に目は向けられなかつた。

だが、当主代行となつた今では話が違ふ。

『現世の波羅姫』というゲームでは味方の裏切りや敵陣営との結託などで主人公の波羅が窮地に陥るが、その時のゲームパラメータでは結界術が重要になつて来る。結界術はゲーム中でも敵の攻撃を防ぐ、もしくは半減するといった感じで所謂シールドとして重要なのだが、そのシールドを防諜にも回すという設定には感心させられた。

ゲームを初めてプレイすると、部屋に結界を張るといふ選択がある。これは自分の部屋もそうだが、遠征先の宿場などでも選択がある。設定では、有力な退魔師がいる町などには要石を使った結界があり、それは我が家も例外ではない。宿場などの遠征先はともかく、ホーム画面で尚且つ安全地帯なのになんで自分の部屋に結界を張る必要がある

んだ？ と多くのプレイヤーの首を捻らせたが、それが防諜だと知った時感心したプレイヤーと、霊力減少が地味に嫌で面倒だし張らないでいいやと言う風に別れ、後者が急遽裏切りで敗北孕み袋ENDに直行して嘆いたプレイヤーが多く出た。

その裏切りが、朝廷のお役人もそうだが、朝廷の中枢の人間に変化して巢食っているお偉いさん、果てはクーデターを起こす分家連中等々がそれに当たる。なので、味方陣営だから手放しで安心できない、寧ろ妖陣営が非常に巧みなのでいつ裏切るほうに天秤を傾けてしまうか、それをさせないための手段の一つとして防諜があるのである。あくまで手段の一つではあるが、裏切り天秤というパラメータを傾けないためには重要なフアクターでもあるので軽んじてはいけない。

故に、当主代行となった僕から情報が駄々洩れになっちゃったら、今世の可愛い妹達が妖怪連中延いては都のデブ貴族や妖陣営と内通してる裏切り貴族の孕み袋になってしまう。それだけは断じて避けなければならぬと誓った。これがプレイしてた、所謂プレイヤーとしての神の視点ならば、イベントとスチル画回収の為にわざと結界張らない手段を取っていただろうが、今は現実である。そして、妹達と接したらとても可愛く癒された。こんな可愛い子達を酷い目に合わせないようにしたい、兄としての義務で僕は決意したのだ。使えるものはなんでも使ってみせると。

だから、自分の部屋の結界を彼女たちに協力してもらった。

今でも当主代行の仕事としての書物などが部屋にたくさんある。それらの情報を流出させないためにも、彼女たちに頭を下げた。結果、快諾して結界を張ってくれたから安堵したものだ。妹達と仲良くしてよかったと思った。一部重鎮がそれに気づいて

「当主代行は妹君に結界を張ってもらっているようですが、ご自分で結界を張れないのですか？」

と厭味を言ってきたので

「はい、その通りです。なぜならば、最近は鼠が増えてしまいましたね、大事な書類を穴あきさせられては当主の沽券に関わりますので」

と返してやった。

鼠とは言わずもがなスパイする式神で、穴あきとは情報を抜かれることを皮肉交じりに返したら、顔を真っ赤にして帰っていった。まあ、その重鎮は確か攻略情報にも載っていた裏切り天秤が傾きやすい奴だったから非常にわかりやすかった。恐らく、僕があの厭味に折れたら、当主代行ならば自分の結界は自分で張るものと論じて結界を弱めたところに式神送って情報抜くつもりだったのだろう。それを皮肉で返されたのだから、出鼻をくじかれた形だ。その手には乗らないぞ。

なので、僕の部屋は今のところ安心である。ゲームでも、プレイして最初辺りは別に結界を張る必要がないほどスパイが来ないのは数々の検証で確定しているが、この世界

では僕自身がイレギュラーだから、こうして張る必要がある。確か、原作開始が2年後で波羅が16歳になってからなので、それまでにはどうにか地ならしして、彼女に当主を譲り、僕はそれまでに別のことで支えていこうと思っっている。

で、厨房で焼き飯を作り、簡単な味噌汁と緑茶を用意して、お盆に載せて持っていく。この時、僕は作るだけで持ち運びは流石に一人は無理なので家人にやらせてる。厨房は料理長は男だがそれ以外は全て女だ。そして、料理長と僕が小さいだけなのかもしれないが、家人の女達は皆背が高いし胸も尻も大きい。最初運ばせたとき、家人を前にし僕を後ろにしたことがあったが、歩く度に大きな尻がぶるんつぶるんつと安っぽい服の上からでもわかるくらいに揺れて勃起したことがあったので、それ以降は僕が先頭に立っている。いやまあ、立場的に僕が先頭なのは当たり前だが、その時はちよつと手間取って完成させるのに時間かかったので先に行かせて僕が追い付く形になったんだが。

エロゲー世界だからと言えばそれまでなんだけど、こんなに女性の発育よかったっけ？ と首を捻るしかない。ゲームだと波羅を中心に、マッチョな雄の妖怪達がひたすらレイプといった男性向けだったが、モブの女性もそれなりに描写はあったしエロかったが、こんなに肉感的だったかなあ？ と首を傾げた。とりあえず今考えてもしようがないし、妹が待ってるからさっさと持っていくことにする。

頼は頭の中でそう考えながらもスタスタと廊下を歩いていたが、頼が家人を見て欲情してしまったように、家人も頼を見て欲情していた。ゲームだと女というだけで性欲の対象だったように、この世界の男というのはそれだけで性欲の対象である。頼の場合は、彼女たちから見て平均の男性より背は高いが、当主として退魔師として鍛え上げた肉体や首元のうなじ、当主一族の上等な服の上からわかる男の尻を見て、彼女たちは密に下着を濡らしていた。その事に彼は気づくことはない。

「兄様ごちそうさまでした」

「兄上、ごちそうさまでした」

「とても美味しかったです」

「はい、お粗末様」

空になった食器を、控えさせてた家人を呼んで片付けさせる。

僕の部屋には、さまざまな書類が山積みされている。当主代行としての仕事の関係で、領地の陳情書やら都からの税金関係やら、頭の痛くなるようなものが満載だ。それ

らの書類を、親戚一同の中でも味方してくる人に頭を下げて教えてもらったり、仕事を割り振ったりするのも仕事だ。この世に転生して16歳から会社の社長みたいなことをするなんて、考えても見なかった。パソコンと表計算ソフトが懐かしい。転生前は平凡な童貞サラリーマンだったが、もっとまじめに勉強しておけばよかったと思った。それ以外には、床の間に父から貰った当主の証としての鬼切丸という名刀がある。

ご先祖様がこれを使って凶妖を退治したという伝承が残ってる名刀だ、威力も序盤で手に入る武器の中では最高峰と言っている。このゲーム、他のRPG系と比べて序盤からトップ10入りしてる強武器が最初から手に入るといのが斬新だ。僕が使ってるのはもっぱら槍だから、こっちは使えるには使えるがあまり使ったことはない。何故なら、いずれ波羅に渡すからである。それまでは無理して使って折ったりしたらいけないだろうというのもあるし、ゲームで彼女が無双できたのは最初からこの刀があったから。それを自分のミスで無くしたりした、なんてことになったら詰んでしまう可能性がある。僕自身が間合いを取るために槍を使うのもあるが、そういう理由で基本的に当主の証として帯刀はするけど扱わないようにしてるのだ。まあ、本当に危なくなったら使うけども。背に腹は代えられないし。

出来ることなら今でも十分強い波羅に渡したいけどそれは流石にできない。当主代

行として渡された刀を正当な理由なしに波羅に渡したら、代行としての任を放棄したものの、一族の当主が持つ刀を軽々しく渡すとはやはり相応しくないだのと言われてしまう。ただでさえ一族からいいように見られてないのに総スカンを喰らってしまう。今でさえペコペコ頭を下げながら協力してもらってる現状で、さらに好感度下がったらもつと面倒なことになるからだ。出陣の時は、効率化という名目の為に一時的に彼女に預けることが出来るが、帰還するときは返してもらおうなど恒常的に渡すのは流石に出来ない。妹よ、早く当主になっておくれ。

面倒なことに日々頭を痛めているが、こうして妹達と触れ合えるのが唯一の癒しと言ってもいい。腹違いだし、共通の敵として妖怪がいるがこの戦国時代みたいな世界じゃ親兄弟でも普通に殺し合いが起きたりしてる。だが、現代人の倫理観を持つ僕はどうしてもそういう割り切りは出来なかった。まあ、術と霊力が強い彼女たちと仲良くしとけば自分は楽になるだろうという打算もあつたが、兄と慕ってくれる彼女たちに酷い態度などとれなかった。前世で一人っ子だったし、このような可愛い妹がいなかったのもあつて尚更に可愛いのである。友人のオタクが妹はいいぞ!! と熱を入れて言っていたが、あの当時はわからなかったが今になつたらわかる。もつと彼と話しておけばよかった。

食後に、僕は彼女たちとおはじき、貝合わせ、かるたといった遊びで楽しいひと時を

過ごす。ある程度遊んだあと、術の勉強に入る。この場合、生徒は僕で、先生は三人の妹達だ。

術は、手で印を結んでやる奴もあれば、使役の式神、目を使う瞳術、言葉を使う言霊術。果ては呪いまで様々な分類がある。

僕の霊力は平凡であるが、覚えないうという選択肢はない。先日の妖怪退治でも、反省点を洗い出したが、もう少し術を覚えたほうがいいという結論に至った。なので、それが得意な妹達に頭を下げてくださいるのである。

「兄様、大分上達しましたね」

「本当かい？」

「はい、最初の時と比べて」

「霊力の流れが徐々に洗練していつてます」

講師である彼女たちに褒められ悪い気分はしない。

「では、最後は催眠術に行きましようか」

「あー、やらないとダメかな？」

「妖はとても強い存在」

「言霊術で洗脳する事例がある以上、対策は必須です」

「だよねえ……」

催眠術というと、あまりいい覚えがない。エロゲー故に、そういうエロ方面でよく使われるのが催眠である。というのも、ゲーム知識だとその催眠術で彼女たちが捕まってる凌辱されるからだ。波羅は貴族の肉便器ルートや一族の裏切りで一族共用の孕み袋なんてルートもあつたし、双子の彼女たちはゲームでは弟だったが、催眠術で波羅のサポートをしているように見せかけ情報を流出させたりと地味に痛いことをしてきた。それに、一流の退魔師は言霊術でさりげなく洗脳したりする。そういう意味でも対策をしたほうがいいだろう。

「あーっと、じゃあ前みたいに僕からお前たちに掛けて、次に僕に対して、でいいかな？」
「はい、よろしくお願います」

妹達から教わっているが、催眠術に関しては先ほど話した順番でやっている。尤も、僕が催眠をしたとしても僕の霊力じゃ即座に解除されるだろうからあまり意味がないと思うし、それを指摘すると。

「やるのとやらないのでは前者のほうがいいでしょう？」

と波羅から言われ双子からも首肯されたのでやっている。僕がやる時、彼女たちは決まって待ち望んだ顔をするのだが何故だろう？　といつも思う。それはそうと催眠をかけるとするか。

催眠術は言霊術、呪術、道術、瞳術など様々な方向から掛けることが出来る。

言霊術は言葉から、呪術、道術は印を結ぶいつもの術式から、そして瞳術は目を合わせて発動するものだ。それぞれ利点と欠点があり、どれも正しく対処法を知らないと簡単にいかかってしまう。

特に、言霊術と瞳術は厄介である。呪術、道術は印を結ぶなどのアクションがあるため警戒できるが、言霊術は何気ない会話に紛れ込ませたりできるし、瞳術は目を合わせしてしまうだけで掛かってしまう初見殺しみみたいなものだ。

ゲーム中でも、訓練で耐性を上げていくことは初見殺し回避やトラップ回避でも重要だ。敵の中でも、ラスボスに匹敵する鶴と呼ばれる凶妖は、左大臣として朝廷に浸食して変幻自在に形を変えられる上に分裂できるので、多数の視線によって催眠術をかけてきたりする。元は人間であり朝廷の陰陽師を束ねる初代陰陽寮総監であり安倍晴明と呼

ばれた彼は、人類を裏切り鶴と名乗ると稀代の術師であることから非常に強く、主人公を物理一辺倒にすると倒すのに非常に苦勞する。だが、無理ではないことから良ボスとしても評価されるし、一切術を使わず物理オンリーで倒すと「この私が脳筋にやられるとは……」と世界観を少しぶつ壊したセリフを言うことから人気もある。外見がイケメンなのも拍車をかけており女性プレイヤーからの人気が高い。

だが、敵としての鶴はとても恐ろしく、朝廷に向かう際はそこらの雑用などからも催眠を食らうことがゲーム中であつたので、対策を施して損はないのだ。分裂すると弱体化するのはお約束だが、弱体化したとしてもそこらの雑用に変身し、目を合わせたら催眠にかかるといった初見殺しなトラップを普通に仕掛けたりするから陰陽師の厭らしさをプレイヤーに教えてくれる。当然、催眠から抜け出さないと孕み袋エンド直行である。故に、対策は必須とも言えた。

そして、僕は手で印を組み霊力を込め三人を見る。そして、掛かったかどうかを確認するべく

「右手上げて」

と言つて、三人がその通りに動き掛かつたと判断する。一流の術者なら掛かつたかどうかもわかるようだが、僕は三流なので相手にこうして命令し、その通りに動くかどうか

かで判断するしかない。

そして、エロゲーにおいて催眠術などそれはもう何に利用するかは明白だ。波羅は既に体格的に子供を作れるくらい色々大きいし、双子は姉に劣るがバランスよい体付きになっている。

「よし、じゃあ君たちに命令する——」

それらを見て、欲情しなかったと言えば嘘になる。ゲームで大変お世話になったことから、それを画像ではなくリアルで見ているから余計に欲情してしまったとはつきりといえる。それを認識したうえでの催眠の命令は——

「——危険が迫ったら、僕を捨てて逃げるように——
自身を見捨てるように言いつけることだった。」

五話 凌辱されるヒロインを守ってたらクソデカ感情向けるようになったでござるの巻

力があるのはいいいことではあるが、良くないことでもある。それを幼い時に嫌と言うほどに学んだ。

私は長女としてそして妹として生まれた。私の前にはいつも大きな背中の子がいた。周りは私を姫と呼び、親戚も私を姫と呼ぶ中で、家族が対等に見てくれた。中でも、兄様はいつも私を気にかけて可愛がってくれた。だが乳母は、一族と言えど隙を見せてはならないと言った。他人を蹴落とすことをいつも考えていると、それは当主の息子の頼様も例外ではないと。頼様からすれば、遥かに優秀な姫様は邪魔な存在、隙を見せてはなりませんと。

私は天才という奴だった。

生まれた時から高い霊力を持ち、難しい術を難なく覚えることが出来、武器を使った戦闘技術も数年で指南役を超えた。綾絶家の中でも、とびっきりの天才だと評価されて嬉しかった。その中でも、兄様はいつも私を褒めてくれた。乳母の話では嫉妬している

から気を付けろと忠告してくれたが、あんなに喜んで褒めてくれるのをみて嫉妬してるようには見えず純粋な行動なのがよくわかった。

だが、そこから更に技術を磨き、力を増していくと周囲の見る目が変わってきた。段々と化け物を見るような目になっていった。今まで褒めてくれた人たちの態度が変わったことはともかく、乳母まで余所余所しい態度を少し取り始めた時は私も落ち込んだ。それでも、兄様は私に変わらないう接してくれた。あの時、兄様がいなくなったらどうなっていたか……。それは同じようにみられていた沙羅と由羅も同じく救われたことだろう。

一族からは腫物のように扱われ、沙羅と由羅も同じように見られ、私達三人が固まって動くのは必然とも言えよう。だがそれでも、一族だからと信じていたが、その思いは砕かれた。

決定的だったのは、私が十歳の時に妖魔退治に出陣したときだ。私と配下を10人ほど連れて近くの村に中妖がいるから退治しに行ってくれと言われて向かうと、そこに居たのは大妖を中心とした大群だった。力を持っていたとはいえ、幼く未熟だった私は己の力を過信しやれると思っていた。だが、結果は全滅。気心の知れた配下の退魔師と下人達は踊り食われ、案内役を勤めてくれた男の農民は目の前で配下の妖魔に犯され連れていかれた。

私は、私の力を妬んで恐れていた連中に嵌められたのだと理解した。そして、大妖に食われそうになった時、兄様が助けに来てくれた。

私より弱い兄様は大妖に勝てるとは思えない。だが、兄様は視界を遮る閃光玉に煙玉、鼻を効かなくする臭い玉などを使って大妖から逃げ出すことができた。弱い兄様だからこそ使う手で、親戚一同では当主の息子として生まれておきながら下人のような道具を使うとは、と非難の声を上げてた。妖魔達相手に道具を使うこと自体は別に問題ないが、兄様の場合は名のある退魔師一族に生まれながら、卑しい下人の道具を使うというのが非難の理由であった。私も心の中では同意し、別の道具を使った方がいいのでは？と進言したこともあった。

「使えるものはなんでも使わないと、僕は弱いからな」

「道具に貴賤はないだろう？ 下人達が使うものだろうが、一流退魔師が使うものだろうが、妖魔に効果あるのならそこに垣根はない」

「寧ろ、そのような考えこそ改めなければならぬ。身分に見合うような道具を使って倒せる連中ならば、僕達人間はこんなに苦労してないよ」

進言したらそのように返答された。

当時の私は、軽々と兄様を超え一族最強と言われていたから、兄様の返答を弱者の返答だと失望したのだが、その失望した行動に救われたとなつては嫌でも考えを改め

ざるを得なかった。

ようやく安全圏から逃げ出した後、兄様は私を強く抱きしめ涙を流しながら

「無事でよかった……間に合ってよかった……」

と言ってくれた。あの温もりは今でも鮮明に思い出せる。領地に帰ってきたら、沙羅と由羅も泣きながら抱き着いてきた。

その後、私以外が全滅したことについての糾弾が行われたが、そこは兄様が全て助けてくれた。

中妖と大妖を間違えたことと、その間違った報告を上げた者に対するつるし上げ、相手の情報の違いで対処も違ってくる。それらを全て展開し、逆に間違った報告を上げた者は罰として謹慎処分にされた。処分にされた者は、それを報告した下人が悪いと蜥蜴の尻尾切りをしようとしたが兄様は逃げないように手を回しそれが全くの嘘だと突き詰め処分をさらに重くした。ただ私も全くの無罪と言うわけではなく、無理だとわかったら即座に引くようにと言われ、有用な配下と下人達が死んだことによる処罰の謹慎と厳しい修行を言い渡された。間違った報告を上げた親族より罰を重くしたのは、あちらが私をこれ以上警戒しないようにとの配慮だと後で兄様から説明を受けた。厳しい修行も、力不足を感じた私からしたら当然のことなので罰に当たらなかった。

ちなみに、この時の罰の取り決めなどは兄様に権限はない。まだこの時は父上が当主

として君臨してゐるため越権行為に当たるとは、父上は兄様の話と罰の取り決めを追認したので問題はなくなつてゐる。後で兄様に聞いたが、この時から少し前ほどから父上の体調が宜しくなく、兄様に当主としての仕事をさせていたという。今回の会議の進行と取り決めも、今後兄様が当主としていけるかどうかの見極めもあつたような。

結果は見事な進行と、相手に罰を与えつつ私の方を大きめにして不満を抑える手法だつたので、当主代行にされたと言つた兄様から聞いた。尤も当の兄様は、父上の弟である叔父上になるものだと思つており、それまでの父上に与えられた当主の仕事も叔父上を支えるつもりだつたと。まさか自分になるとは思つてもいなかったと驚いてゐた。

さらに後でわかつたが、由羅と沙羅も似たような任務を言い渡されたが兄様に阻止された。後で調べたら私と同じで中妖ではなく大妖が複数いた場所に討伐に向かわせられるところだつた。あの時、兄様が一団を連れ私に向かつて深く頭を下げて力を貸してほしいと頼み込んだ。正直言つて私は双子とあまり仲はよろしくない。だが、兄様の取り成しと頼みだから一緒に援軍に向かつた。

仲はよろしくなかつたが、共に背中を預けて戦つたことで良くなつた、そのことには兄に感謝してゐる。それと同時に、腹違いとはいへ、妹達を危険な目に遭わせるのには腹が立つた。

高名な退魔師である我が家、有力である私と双子まで謀略で殺そうとするのは何か？

それは、兄様が教えてくれた。他でもない僕のせいだと。

僕がお前たちより弱いから、お前たちを危険な目に合わせた。

僕がお前たちより強かったなら、このようなことは起きなかった。

僕がお前たちより立場が上だから、弱い僕を傀儡か他家から乗っ取りしやすいようにするために、今回の出来事が起きた。

全てが、自分のせいだと兄様は言ってくれた。

そして、私達を守るために、病に臥せった父上から万座の席で当主代行を言い渡された。その後着任した台詞が

「私は当主代行であります、ここに宣言します。私は当主の座を波羅に譲り渡すと」
「理由は簡単。彼女の方が私より強いからです、弱い私が上に立つては皆さま方も不満でありましょう。故に、強い彼女が上に立つ方が良いと判断しました。この事は当主である父上と相談し許可を貰っております」

「ですが、流石に半人前である彼女に今渡しても余計に混乱するだけです。ですので、彼女が一人前になるまでは私が預かります。それまでは、不肖この頼に皆さまの力を貸してください」

そう満座の席での挨拶で宣言した。

私達を守るために一族に頭を下げる兄様に、戦いのこと以外で手を回して助けてくれ

る兄様に、私達三人は何も恩を返せていない。

私達は、あの時妖魔に殺されかかった時の屈辱と敗北を糧にして、私達はひたすら鍛錬を続けた。

今までの驕っていた自分はいない、ひたすらに鍛錬をした。

兄様が私達のために手料理を作ってくれるのもあり、兄様の愛情を受けてメキメキと成長していった。

私達の体も大きくなり、私は見上げていた兄様を見下ろす形にまで成長した。双子も兄様と同じくらいの大きさとなった。女は男と比べて成長が早く体も強い。何より私達は兄様の手料理という美味しい食事のおかげで大きくなれた。

強くなった私達はそれからしばらくした後、どうにかして兄様に恩を返したいと思っていたところ、兄様が鍛錬をしているのを見て天啓がひらめいた。私達が兄様を鍛えれば多少は恩返しができるのではと。沙羅と由羅に話して、二人からも賛意を得て、兄様に私達が兄様の鍛錬に協力すると告げた。

その話をする兄様は、最初は驚き喜ぶ表情をするがすぐにしかめ面をし、次に困っ

た表情をして頭を抱えて悩みその場をうろろと動いて止まった後。

「……すまないが、宜しく頼む」

そう言ったので喜んだ。私達も多少は恩返しができると思っていたが、この私達の行動が兄様を傷つけているとは思ってもしなかつた。兄様が奇怪な行動をしたのは、優秀な妹達から鍛錬される劣った兄、自分はこの三人の兄で本当に良いのか？自分自身の存在が彼女たちの足枷になってるのではないか？いつそのこと、一族から言われたように他家へ嫁いだほうがいいのではないかと悩んだ行動だというのは、兄様自身から聞いたのだ。

なぜ、そのような自身の心境を赤裸々に教えてもらったのかというと、私達が兄様にする鍛錬の中に術式に関するものがあり、その中で敵の催眠術対策のために私達が兄様に催眠術を施しそこから聞いたからだ。

そして、その鍛錬を今からやる。この対催眠術の鍛錬は、そういう妖魔がいることから有用であるというのは兄様も知っていたからすんなり受けたし、私達も単に耐性を高めるために鍛錬をやっている、そこに不純な動機は一切なかつた。

そう、過去形である

弱い兄様はそちらの抵抗も弱いので、兄様を想う私達三人が獣欲に従って利用するのを思いついたのはさほど難しいことではなかつた。言い訳を言わせてもらうなら、最初

からそういう欲の為にやっていたわけではない。もちろん、兄様の体を見るたびに胸が熱くなるというのは言い訳しないし、女なら男の体に欲情するのは当たり前だ。

だが、その前に私たちは聞きたかったのだ。何故、兄様は私達に自分を見捨てるような選択肢を取らせようとするのかと。

催眠術にかけて聞いた結果――

「この世界は色々大変だ、生き延びるためとはいえ親兄弟も裏切り、口減らしのために子は売られる」

「貧農や寒村ですらそのようなことが起きてる、そして僕たち貴族はもつと酷い」

「君たちの力が強すぎて親戚に侮められたように、安心などない」

「都の貴族も噂に過ぎないが、一部は妖魔と繋がりがあるとも言われて安全な場所もない」

「かといって、海を越えた大陸は殺し合いの毎日だ、この国から離れても安全に過ごせるわけではない」

「そして、父上が倒れて僕が当主代行となつてしまった」

「僕は弱い、弱い奴は弱点となる、そこから突き崩される」

「僕だけ死ぬならまだいいが、妹達と両親が巻き添えを喰らうのは我慢できない」

「だから、僕というわかりやすい弱点は囷にして、妹達には生きていて欲しい」

「僕は弱くて足手まといだ、でも鍛えて足止めくらいはできるだろう。弱い自分が情けないが、妹を守るためにはなんだってやる」

催眠術はあまり強すぎると相手に違和感を残し、そこから発覚してしまう。

兄様は私達に劣るが、無能ではない。故に、ゆっくり時間をかけて、毎日は無理でも催眠術の授業では一言ずつ聞き出していった

この世に絶望を覚えながらも、それでも私達を気遣ってくれている。他家の中には姉妹で殺し合いをしたりするところもあるが、我が家はそういうことは起きてない。一時期、私は双子と仲が悪かったこともあったが、それも兄様が執り成してくれたおかげで仲直りし、今ではこうして共に過ごしている。尤も、三人とも兄様が大好きだからという理由で繋がったというのが大きい。

そんな大好きな兄様が、ここまで私たちのことを考えてくれている、それだけがとても嬉しく胸が熱くなる。

「兄様、貴方は自分が弱いとわかってるのに、無駄かもしれないのに何故そこまでするのですか？」

だが、そこまでする理由がわからない。この世は女性が中心だ。男は女に比べて色々と弱い。兄様もその例に漏れず弱い。ならば、素直に私達の庇護を受けなければいいのにと
思ひ、そう尋ねた。

催眠術で虚ろな表情をしながらも

「無駄だとか、弱いからとかじゃなく——」

その言葉には熱がこもっており——

「僕は兄なんだ、兄は下の子を守らなくてはいけないんだ——」

はつきりと——

「例え勝てない相手だとしても、守るために立ち向かわなければいけないんだ」
そう告げたのだった。

兄様のその言葉を聞いて、下腹部が熱くなり、私も双子も気が付いたら兄様に抱きついていた。

その後のことは、あまり覚えてない。気が付いたら、裸となった私達と、その中心に兄様がひっくり返った蛙のように痙攣しながら気を失っていた。

私達はその日、愛する男で処女を捨てるという、この世で貴重な体験をしたのだった。

今日も兄様は、私達に自分を見捨てるように催眠をかける。だが、弱い兄様の催眠なぞ障子紙のようなものでいつものように催眠を即行で解除しかかった振りをしている。

兄様が私達を守るための行動とは知っているが、そんなのを守る気はない。兄様は私達のものだ、絶対に見捨てない。

何よりも、このような催眠をかけて私達に手を出さないことが許せない。今日私が兄様に抱き着いたとき、霊力の流れで下半身に力を入れていたのを知っている。兄様が私に欲情しているという事実には歓喜すると同時に、欲情していないように見せていることに怒りを覚える。そのまま私を押し倒して、腰を押し付けても喜んで受け入れるというのに何をしているのか。

だが、弱い兄様が私達のことを思ってくれている、無駄な事とわかっているでもそれだけで心が熱くなる。そしてその熱は今も収まらない、今日も兄様と私達は熱く溶け合う。くだらない催眠をかけている分、しっかりとそのきれいな体に教え込んでやる。そう私達は思っている、兄様に逆に催眠をかけた。

六話 ◆ オラツ催眠！童貞もらうね♡催眠解除ツ！

……お疲れさまでした兄様（キリツ

「さあ兄様、服を脱いで」

兄様が私達にかけた催眠をかけたふりをしながら即効で解除し、次は私達が兄様に催眠術をかける番となった、お楽しみ時間だ。

虚ろな表情をしながらもゆっくりと服を脱いでいく。もつと強くかけるとテキパキ脱ぐ行動ができるのだが、それだと兄様にバレる可能性もあるし、何よりこのゆっくりと脱ぐというのが非常にそそるのでこれはこれでいい。双子も同意見だ。

服を脱ぎ終わったら、兄様の小さな裸体が視界一杯に収まる。

男性特有の細さはそうだが、兄様自身が日々鍛えているのもあり筋肉がふわりと浮き出ているのが股に来る。

そして、禪を脱ぎ去ったところには男の象徴がある。まだ小さく下を向いている。だが、これから私達の手で大きくするのだと思うと感慨深いものがある。乳母や配下から聞く話では、男は奥ゆかしいのがほとんどで簡単に勃起せず、女からの愛撫でも嫌がったりするのだと聞いた。どうしても性交する場合は薬を使って無理やり勃起させるの

も選択肢の一つなのだとか。

だが、兄様は違う。

私達の処女を散らしたあの日、兄様は私達の接吻と抱き着きで勃起したのだ。後に乳母に、それだけで勃起するのかと兄様のことを出さずそれとなく聞いてみたが、そんな男はいないとのこと。つまり兄様が特別スケベということだ。

「兄様、舌出して」

「……はい」

雛鳥のように出してきた舌に、私の舌を絡ませそのままゆっくりと唾液を交換する。

「兄上の乳首可愛い」

「私達のと違って、硬い、おいしい」

沙羅と由羅がそれぞれ左右の乳首を舐めたり吸ったりする。自分たちの愛撫に素直に反応してくれるのが嬉しくて、熱の赴くままに兄様に愛撫を続ける。その度にピクピクと反応してくれているのが可愛い、双子も兄様の反応を見て喜びで目を細めながら、空いた手で自分の股を触って高めていた。

私も双子に負けないように舌を激しく絡ませる。それだけでなく、自身の胸を押し当てるようにしながら唾液交換をする。すると、私達の愛撫で高まったのか、兄様の物が鎌首を段々ともたげる。しばらくすると、そこには天を突く一物がそそり立っていた。

「兄様の、大きい」

「兄上の、凄いです」

「こちらも頂きますね」

体を布団の上に寝かせて、双子は協力しながら兄様の一物を舐め始める。私は、兄様と接吻を続けながら、双子が兄様の胸からどいたので、そこを埋めるように自分の巨大な胸を押し付ける。そこからさらに、兄様の左手を持ち、自身の胸に押し当て揉ませる。右手を恋人が握るようになると、兄様も応えるように強く握り返す。それがとても嬉しい。

左手で胸を揉ませるのも痺れるような快感が胸から伝わってくる。

兄様は催眠にかかっている今はこちらの命令がないと動かないが、こういう胸揉みなどは導いてやると自発的に行動し始めるのを最近の調教で理解した。

双子が交互に舐めると、それにピクピクと反応し始める。そこからさらに玉袋を優しく揉み、舌を這わせ、舐めて快感を兄様に与えている。私達の愛撫が続くと、どうやら射精が近いようで双子が目敏く感知した。

「兄上の子種出そうですね」

「沢山出してくださいね」

「出して♡」

「出して♡」

「イケ♡」

「イケ♡」

双子の言葉責めと、交互の舌奉仕により、噴水のごとく射精する。それを私達は顔に浴びる。

生臭い匂いが鼻腔を突き抜けて、それが興奮を増やし、その興奮が子袋を熱く滾らせる。私達は、顔にかかった子種を残さず飲み干すと、次は周りに飛び散った子種を舌でなめとり始めた。

兄様の股間回りや腹に載った子種を犬が舐めるようになめとると、気持ちいいのか兄様がピクピクと反応している。

そして、一物がまたそそり立つ。

男は一度出したら次の日まで出せない、とは乳母から聞いた話だが、兄様は五発は余裕で出せる。それ以上出せるかもしれないが、流石にやりすぎると兄様の体に負担がかかってバレルかもしれないし、兄様の体の後遺症が出るかもしれないのでやめている。

だが、私達三人に短い期間で種を出せるということだけでも素晴らしいことだ。

「今回は私からですね」

「沙羅、次は私ですよ」

今回は最初に由羅、次に沙羅、最後は私と決めていた。

由羅が兄様の体の上に跨り、一物に手を添え自分の秘所に当てる。

狙いを定めて、ゆっくりと腰を下ろした。

「んんううううううっ、ふうううううううう……っ♡」

熱い吐息と押し殺した喘ぎ声で感じているのがよくわかる。

兄様の体に両手を置き、ゆっくりと出し入れし始めた。

「ふああ……♡きもちいい……♡」

「うっ、あつ、ふっ」

剛直を己の腹に入れる快樂に妹は声を漏らす。兄様も、虚ろな表情をしながらも体は実に正直で快樂の声を漏らしながら反応している。その兄様の反応が可愛くて、沙羅と共に兄様の乳首を指でいじり、こねくり回し、吸って快樂を与えた。

その度に、兄様のモノも反応しており、由羅の体の中で暴れる。それに反応して嬌声を上げる由羅。

「あつ、あつ、あつ、はあつ、ふあつ、あにうえつ、だしてっ♡だしてえっ！♡」

運動しながら、最後の声に合わせて力強く腰を下ろして叩きつけた。

それと同時に、兄様の子種が撃ち込まれたようで、のけぞる。

「ううおおおおうう、ほおおおおうううううう、で、でてるうううう……♡」

快樂で頭がどうかしながらも、由羅の体は本能の赴くままに腰を動かして兄様の子種を搾り取る。

大きくもゆつくりと動いて動いて、そして動きを止めた。どうやら搾り取りが終わったようで、ゆつくりと引き抜くと、下品な音を出しながら兄様の一物が躍り出た。それにゆつくりと跪くようにして、綺麗に舐めとる由羅。

私も乳母から教わったが、男は種を出して私達を孕ませてくれる大切な存在。故に、出し終わった後の一物を掃除するのは淑女として当然の作法だと。

次に沙羅だが、彼女は兄様の片足を垂直に持つようにしてから挿入した。彼女曰く、こうすると深く入ってくるそうなの。

その状況からゆつくりと腰を動かし、段々と叩きつけるような動きをする。

「ふっ、ふっ、ふっ、あうっ、ふっ、あ、あにっ♡、うえっ♡、だ♡、だいすきいっ!

♡だいすきいっ!♡」

「あっ、あっ、さ、さら、な、なにを、やって——」

いかん、兄様の催眠が解けかかっている。

私は兄様の顔を両手で掴み、虚ろになつて目を覗く。その状態から、催眠をかけなおす。

「兄様、兄様が今やってることは正しいことです」

「た、ただしい？」

「妖魔は男を犯します。兄様もそういうことが起きるでしょう。ですので、これは訓練。そう、訓練なのです」

「そ、うなの、かなっ」

「はい、ほら、訓練です、訓練。復唱して♡」

「くん、れん、くんっ、れんっ、うあっ」

瞳孔と復唱による二重の催眠をかけながらも、沙羅が運動をしているので、兄様の受け答えも快樂の声を漏らして途切れているが、その瞳を見て催眠が再度かかっていることを確認する。ダメ押しとばかりに、私は兄様と接吻をし、舌を絡ませて

「ほらっ、あにさまっ、んむっ、ちゅっ、くんれんですよっ♡、くんれんっ♡」

「あむっ、ぷあっ、はあっ、く、くんれん、くんれん、あ、あああああっ!!」

「ふあああああああっ!! ♡ あにうえええええええ!! ♡」

接吻で快樂を与え、沙羅の運動で快樂を与え、それに耐えきれなくなった兄様が射精し、受け止める沙羅が嬌声を上げる。

そのまま、ゆっくりと腰を円運動のように動かして搾り取って抜き取り、あとは由羅と同じように口で掃除をする。

最後は私だ。

私も、沙羅と同じように兄様の足を持ち上げる、が、彼女と違うのは彼女は片足を持ち上げて挿入するのに対して、私は兄様の両足を持ち上げ、それをでんぐり返すようにする。乳母から教わった、女性の正常位という奴だ。基本的には由羅がやったような騎乗位と呼ばれるのが男に負担を与えないやりかただと、だが私の体位は男の種を確実に絞るためのもので、性欲が強い者が良くやる体位だそう。

この状態だと、兄様の玉袋の裏どころか菊門まで見えて非常に興奮する。

兄様は、一族の女に限らず、里の女がすべて狙っていると言ってもいい美貌だ。本人は頑なに平凡だと言っているが、いつもの謙遜だろう。

男でありながら、積極的に外に出て、領地をどうにか良くしようと奮闘しているのは、領民ならば知っていることだ。

その際、兄様は泥にまみれるのも厭わずに作業をしたりもするので農民からの人気も高い。何より、作業の際には農民と同じ服を着て行動するのだが、その際に胸が見れたり、禪姿の兄様が見れたりするので、多くの女がそれを見て自慰をしているのは知っている。

そんな無防備な兄様の、誰にも見せたことがない場所を、私達は見れている。その優越感がとても堪らないんだ。

でんぐり返しした状態で、まずは貴重な子種を作ってくれる玉袋に舌を這わせる。
「あつ、ううつ、ふうつ」

男との性交は男は性欲が少ない上に、こういう愛撫は好きでない者が多いとは乳母から教わったが、兄様はスケベなのか、私達の拙い愛撫でも感じてくれている。乳母は、男が勃起を維持できる時間は短いから、勃起したら早めに入れて出してもらうのが重要だと言っていたが、兄様は一度勃起したらほぼそのままなので安心できる。

何より、愛撫をして感じている姿を見ると、支配欲というものだろうか、そのような漠然としたものが私達の心中を満たして高揚感を与えるのだ。こういう愛撫が効果的なのか自分でもわかっているとは言い難いが、兄様の体をみていやらしいと感じたところを攻めると鈴が鳴るように反応してくれるのを見ていて愉悦を感じているのもある。こうして、誰にも見せないような菊門にも舌を入れてほじると、面白いように反応する。

「あつ、そこはあつ、き、きたないよお……」

「兄様の体に汚いところなんかありませんね♡」

「そうですよ、兄上♡」

「兄上の体はどこも綺麗でいやらしいですよ♡」

兄様の弱弱い抗議を、私達の言葉で防ぐ。私は悶える兄様を押さえつけ、双子もそ

れぞれ片手を押さえつけ、身動き取れないようにしたところを同時に舌を絡ませて行動を防ぐ。この行動が支配しているという感覚を私達に教えてくれるので、それがまた興奮する。

十分愛撫した私は、兄様の上からのしかかる様に跨り、そして一物に手を添え狙いを定めて、自分の秘所に勢いよく入れる。

「お、っ♡」

「あ、うっ」

私と兄様は、どちらも急な刺激で思わず声を出した。

私の中には兄様の肉槍が突き刺さっている、初めての時は痛みがあつたがすぐに消えた。

今も感じるこの異物感、愛する兄様と繋がっている証拠であり、その愛を証明するかのように私に快楽の波がやってきている。

私は、その快楽をもっと味わいたいために腰を振る。世の女がやる基本的な正常位なるほど、これをやると気分がいいというが身をもつて理解できる。自身が腰を振ることとで快楽を食えることが出来る上に、男の上に覆い被さるため男は逃げることで支配欲が高まる。そして何よりも――

「はっ、あっ、ふっ、んうんっ♡」

兄様の顔を間近で見ることができ、快楽で蕩けた顔を。それを間近で見るのが堪らない。

「あつ、あつ、み、みないでっ」

「駄目ですよ兄様、顔を隠さないで♡、私達に見せて♡」

両腕を交差するようにして顔を隠そうとするが、私は両足に添えて腕を、兄様の両手を掴んで阻止する。

そして、露わになった顔を見ると、半開きにした口から熱い吐息を断続的に漏らして快楽に耐えようとしている健気な兄様の顔があった。その顔をもっと快楽に落とすたくて、口を奪い、舌をねじ込む。兄様は歯を閉じて防ごうとするも、私の方が早く舌を入れたため、そのまま私の舌に蹂躪される。

その間兄様は握りこぶしを作って、私の両手の抑え込みに可愛く抵抗していた。だが、この舌を絡める攻撃で緩んだため、私は手を滑らせ恋人が握るような握り方で抑えこんだ。この握り方は乳母から教わった親しい恋人や夫婦がやる特別な握り方だと教わったが、なるほどと納得して気に入っている。何より、この握り方で抑え込むと、兄様も強く握って抵抗するのだ。だが、非力な兄様の抵抗など可愛いものだし、その可愛い抵抗を無理やり抑え込むのが支配欲を強めて気に入っている。

そのまま、体を倒して私の巨乳を強く押し当てながら、腰を振る速度を上げる。

兄様のうめき声も強くなり始めたので、そろそろ出すのが理解できる。そして、私の中に子種が発射された。

「お、おお……♡♡♡」

「あ、あああ……♡♡♡」

私と兄様は共に快樂の声を出す。

私の中に、兄様の子種が入ってきているのがわかる。熱く、愛のこもった命の源だ。股間から背骨を通り、脳天に登り詰めた快樂の波がたまらなく気持ちいい。

あとは、腰をゆっくり動かし腹筋や内臓の筋肉などを使って兄様の子種を搾り取る。男の種は貴重なのだ、愛する兄様のならば尚のこと。

達した時は兄様の頭の横に私の頭を持っていつて体全体で押さえつけていたが、搾り取りが終わって顔を上げると、目を裏返すような惚けた表情をした兄様の顔がそこにあった。

この表情を見るのが、たまらない優越感を与える。

私の体で気持ち良くなってるといふ揺るぎない事実には、胸が熱くなる。その喜びを表現するように、だらしなく開いた口に自分の舌をねじ込ませて絡める。

「んっ、むちゅっ、あむっ♡」

もう反応する力がないのか、兄様はわずかに反応するが舌を絡めたりしなかった。こ

うなると、兄様は限界だというのがわかるので、名残惜しいがここまでとする。

ゆつくりと自身の腰を浮かせて兄様の肉槍を抜く。一滴も子種をこぼさないように力を込めて抜いたせいとか、ぢゅぽん！ と下品な音を立て、力を失った肉槍が露わとなる。私の肉壺で汚れたそれを、私はしゃがみこんで丁寧に舐めとり綺麗にした。

肉槍の掃除が終わると、汚れた兄様の体を三人で協力して拭き取り、換気をし周囲の掃除をする。全ての掃除が終わわり、周りには先ほどまでまぐわった状態など感じさせないほどそのままの綺麗な部屋となる。最後の仕上げとして、私達は自分自身に避妊の術をかける。本当は子供が欲しいのだが、流石に今の状態で作るのは拙い。何より、私を当主にしようとしてる兄様の努力を無にすることになる。避妊が終わると兄様の記憶の消去と、別の催眠をかけて眠らせる。これで、兄様は先ほどのことを一切覚えていない状態となるのだ。あとは、私が膝枕をしている状態から起こすだけだ。

気を失ったように眠っている兄様に、私は語りかけた。催眠術を解く文言を入れて。

「恐縮ですが兄様、起きてください」

「恐縮ですが兄様、起きてください」

優しく声をかけられて、僕はゆっくりと目を覚ました。

目を開けると、僕の顔を覗き込んでいた波羅の顔が映る。後頭部は柔らかい感触がある。もしかなくても膝枕をされているのだと気づいた。

「ああ……、ごめん、重いよね、起きるよ」

そう言ってゆっくりと上半身を起こす。なんだか体全体が怠い、そして何故だか知らないが体が火照ったような感覚がある。

そして、今までのことを全く覚えていない。双子も、波羅も僕のことを笑顔で見ている。

「えーつと……、もしかしてまたかい?」

「はい、兄様は私達の催眠にかかり、ずっと眠っていました」

彼女たちは、催眠術を僕にかけるがそれは眠るような奴だけだという。睡眠状態に陥る催眠術は基本的なものだ、そこから回復しなければならぬのだが、どうやら僕は毎度毎度この催眠術にやられているようだ、というのは三人の言である。

「にしても、僕が眠っている間、君たちは暇だったんじゃないのかな?」

「いいえ、そんなことはありません。兄様の眠っている表情を見るだけでも楽しいですよ」

「はいそうです」

「兄上の寝顔はずつと見ていて飽きません」

三人から笑顔でそう言われると困惑と羞恥が来て、誤魔化すように頬をかく。

「にしても、君たちの催眠術は本当に強いなあ。もう何度もやられてるけど未だに途中で解除できた試しがないよ」

「うふふ、兄様が遠慮なしでやってと仰りましたからね」

「私達と姉上の合体催眠術」

「うまくいけば、大妖や凶妖にも効果的ですよ」

三人が笑顔で言うがそれは間違っていない。ボス戦の時、ハメ技の一種として存在しているからだ。波羅が前衛としてウオークライなどを使って敵のヘイトを一身に受け、その隙に双子が後方からの援護で催眠術を敵にかけてというのが王道なのだが。そのヘイトを受け耐えてる最中にも波羅が呪文を双子と同時に唱えて三人の合体技として放つ技があるのだが、これが本当に強力でボスに効くのだ。流石に鶴といった術に特化したボスには効かないが、それまでのボスに有効打を与えることができるというのはRTA走者もオススメするほどの連携技である。

但し、効果的ではあるが簡単かと言われるとそうではなく、彼女たち自身のスキルレベルが高くないと発動しないし、何より三人の絆レベルも高くないと発動しないという制限がある。そして、この技の問題点は主人公である波羅は術は使えるが成長は遅いの

だ。双子は後方支援故にメキメキ上がるのだが、波羅は前衛なので唱えている暇がなくタンクとしてヘイトを集めて仲間に攻撃を寄せ付けられないという役割もあるので、術を唱える暇がないという弱点がある。術を唱える暇があるなら物理で殴ればいい、とはRT Aプレイヤーの言だ。どこぞのクソゲーの文と似ているが、気のせいだろう。

僕も、それを使えたらいいなと考えていたのだが、この世界に僕というイレギュラーがいることでお家騒動が起きそうなこともあり、彼女たちは最初の方は仲が良くなかった。間違いなく僕という存在のせいだが、これはこれで拙いので、ひたすら三人と交流し序盤のチュートリアルと言える戦闘でも三人を助けたおかげで仲良くなったので、絆の問題は解除出来た。

後は術をどうするか、彼女たちのスキルを上げるには……つまるところ術を何度もかけて熟練度を上げるにはどうするかを考えたところ、彼女たちから僕の鍛錬に協力すると言われたので、色々難しく考えたところ、三人が協力して僕に催眠術をかけることで、このボス対策の技が使えるようになるんじゃないんじゃね? と思ったのだ。

そしてそれは早速効果を上げてるようで、僕は未だに彼女たちの催眠を解除出来てない。

僕が彼女たちより弱いのもあるが、催眠術を彼女たちに解除されてからようやく起きるほどだから、スキルレベルが上がってるし合体技として使っているのだと信じたい。

「よし、もう暗くなったから君たちの授業もお開きにしようか、いつも僕を催眠術で鍛えてくれてありがとうね」

「いえいえ、愛する兄様のためならお安い御用ですよ」

「そうそう、兄上のためならいつでも授業しますよ」

「むしろ私達のほうが楽しみです」

「こら、余計なことを言うな」

「え？ 余計なこと？」

双子の片割れが楽しみだと言ったのを、波羅は咎めた。まるで、言っただけはいけないことのように。それが気になったので聞き返したのだが

「えーっと、兄様が成長するのを見るのが楽しみという意味です」

「そうです」

「兄上は着実に成長しています」

「?? まあ、ありがとう。君たちより劣るけど兄として頑張るよ」

腑に落ちない気もするが、三人が僕の成長を感じているとほめてくれたこともあり、それ以上気にするのをやめた。

昼飯を食べた後、少し遊んでそのあと特訓をしたのだが、僕が催眠術で寝ていたせいかもう辺りは暗くなっていた。これ以上僕の部屋にさせざるわけにもいかないし、僕も

当主代行としての書類仕事があるので、三人を部屋から出す。三人も、明日の訓練や妖魔退治の仕事があるので帰らせる。

「じゃあ三人とも、また明日」

「はい、また明日」

襖を閉めた後、結界を貼って仕事をする。

もうそろそろ都に挨拶にいかねばならない、そのための随伴する人選やら物資やらを色々考えて一族と相談しなければならぬ。何より、都は人が多いし、イベントで重要な人物とであつたりする。そのチャンスを逃すことはできないので気合を入れた。

この、気を抜くと凌辱が起きるようなエロゲー世界に転生し、主人公兼ヒロインの兄として生まれた以上、波羅の貞操を守らなければならない。そして、何故か知らないが弟が妹になってしまった双子の貞操もだ。イベントでは、家族の目の前や領民の衆目に晒されながら凌辱されたりとメンタルブレイクが起きたりするシーンがそれなりにある。

大変エツチだったし、僕自身もお世話になったこともある。それが、リアルとなつて目の前にいるんだからはつきりと言うが欲情を覚えたこともある。

だが、僕は兄なのだ。そういうのは兄としての矜持で抑え込み、彼女達の幸せを願い作らなければならない。危険な仕事から遠ざけたり、怪しい連中を捌いて、彼女達が良

い人と結ばれるように努力するのが兄として当主代行としての役割だと思っている。彼女達の貞操が、妖達に散らされるようなことは絶対に防がないと！

彼女達のためにも頑張ろうと、再度心に決めたのであった。

襖が閉まった後、三人はそこに佇み

「由羅、あれは危なかったぞ」

「そうよ」

「うう、ごめんなさい」

姉の波羅と沙羅に詰められ、由羅はしよんぼりした。

催眠術はとっさの出来事で解除されたりする。それは記憶に関してもそうだ。記憶を消すと言っても、体に染みついた行動は消せず、そこから違和感を感じて思い出す、といった事例は術の師匠から教わったりした。故に、先ほどの問答で兄が思い出す恐れがあったのだ。

「だがまあ、なんとか誤魔化せたな。兄様が私達のことを疑うようなことをしない人だよかった」

彼女たちの兄である頼は、それはもう彼女たちに甘いので疑うことをほとんどしない。それのおかげで口先で誤魔化すことができた。これが他の人間だったならば危なかったかもしれない。

「しかし姉上、兄上にかけてた催眠術。あれは大丈夫なんでしょうか?」

「兄上のある方向の催眠抵抗値をほぼ無くしてその上でそれを気付かせないようにする……、危険なのは?」

双子が姉に疑問を呈する。

これは、彼女たちが兄を催眠レイプした時から始めていた。

兄との催眠術の特訓で、自分たちが彼にかけて犯しているのだが、何度もそれをやると流石に抵抗が増していき、成長していく。それは兄にとっては厄介な妖魔の催眠を退けるという意味では正しい成長なのだが、彼女達からしたら愛する兄を犯せなくなるという欠点があった。

故に、色々な術を駆使して一定方向の抵抗値を上げて、確かに兄を成長させているが、その一方で別方向からの抵抗値を無くしていたのである。何度もまぐわうときに、度々催眠術をかけるのが面倒なので、簡略化させる意味もあった。具体的には一定の文言で話しかけたり、ある種の行動を取ったりすることだ。

「危険ではあるが、大丈夫だろう。なぜなら、兄様は守護するべき男なのだからな」

こう姉が言うと、双子は頷くほかない。

この世界での男は弱く、妖魔から狙われ犯される存在だ。故に女が男を守るのは当然であるし、自分たちが愛する兄の傍にいるから妖魔や狙う女達から守れる。そういう自信があった。

移動にしても、結界を張つてある領内から今まで勝手に出たことはないから、外に出て妖魔に攫われる心配もないから大丈夫だ。そういう考えがあった。

なので、彼女達は今後も自分たちが愛する兄とまぐわうべく、特別な催眠術をかけたのだ。

「だからまあ、今日はもう部屋に帰るぞ、兄様のことはまた今度考えればいいだろう。ずっと一緒にいるわけだしな」

「それもそうですね」

「私達と兄上は、一つですからね」

頼は、今後の強敵に対処するべく妹達の絆が強くなつてるといいなと思つて、色々仲良くさせようとしていたが、それは大成功していた。尤もそれは、彼自身が記憶にない状態で彼を中心に棒姉妹で繋がったからだ。これは彼女達に限らず、棒姉妹となつた女の絆は強い。愛する男を中心にまとまることこそが、この世界でのいい女という常識もあつて、最大級の絆レベルとなつていた。

しかし、彼女達が愛する兄を犯しやすくするためにかけた催眠術が、その後の世界に影響を及ぼすなど、この時は誰も考えもしなかった。

余談ではあるが、波羅は書類仕事が終わったのを見計らって、愛する兄に膝枕をしてみらった。その時の様子を頼は、まるで大型犬が甘えてるようだと感じたという。

七話 病弱だけどめつちや強いっていいよね♡

「叔父上、目録が出来ました」

「うん、確認しようか」

数日後、書類仕事を終え都への上洛のための献上品を認めた目録を、目の前の叔父に提出し頭を下げる。穏やかな顔をして眼鏡をかけた、髪の毛を短く刈り上げたその姿は現代社会の中間管理職のように見える。頭がハゲたら見事にそうなってしまいかもしれない。だが、細いような体付きをしているが、服の下は鋼鉄の筋肉でできており、あらゆる武器を使った戦闘では領内で一、二を争う武人。

叔父の名前は綾絶左門実光、僕の父で当主である綾絶右門実吉の弟だ。嫌味を言う親戚一同の中でも、数少ない嫌味を言わない人なので僕の精神的にもありがたい人だ。

そして、僕と波羅の武術の師でもある。

最も、僕はまだまだ未熟だから学んでいる最中だが、波羅はもう匹敵するほどの強さを持ったため、彼女は叔父から教わることはもうない。といっても組手は続けているが。

後は、兄を陰から常に支えており、兄が病に倒れ息子である僕を代行として任命して

もそれに文句一つ言わずに支えてくれている。

父が病に倒れた時、序列からして信頼できる弟である叔父が当主になるものだと一族全員思ってたし、僕もそう思ってた。しかし、結果は僕が代行だと、父が万座の席でもそう宣言したのだ。これには僕だけでなく一族全員が驚いたが、僕はその後の着任の挨拶で当主は成長したら妹に譲ると宣言したため動揺は収まった。

代行着任の挨拶の後、寝たきりの父が僕と叔父を呼んで、まず父が僕に謝罪と感謝を述べてくれた。僕に代行をさせるといふことと、僕の口から当主は波羅に譲るといふ言葉。お前には苦勞を掛けると言ったが僕は気にしていないと父に返した。僕からすれば、ゲームの展開的には彼女が当主になるんだし、優秀な彼女がなったほうがやりやすいだろ。という考えで深く考えてなかったがそれでも父は感動したらしい。

そして、父が僕を選んだことを説明してくれた。叔父の周囲の連中に怪しい動きをしている人が何人かいること、ここで叔父を代行とするとお家騒動の危険性が高まること、そして何より叔父自身がやる気が毛頭ないと自分から言っ僕を選ぶようにと進言したこと僕が選ばれた。

兄としては、今まで支えてくれていた弟を選びたいが、情報として挙がっていた怪しい動きをしている連中がどうも信用できず、涙を呑んで選ぶことが出来ないと言った。しかし当の叔父は、自分は男として女を支えず戦うことを選び娘のためにあくせく金を

稼ぐことしか考えていない愚か者。そして、自分自身が器じゃないということを理解していることを正直に話した。何より、娘のことを第一に考えているので当主は無理だとも。なので元から息子を、僕を支えるということも表明した。

蟠りが起きないように僕と叔父を呼んで説明した父は、涙を流しながら感謝し謝罪した。その時、すでに体調が良くなかったのでそのまま寝させて解散となったが、父の寝室から離れるとき、本当に僕でいいのかと叔父に聞いたが。

「私は先ほども言ったが、娘のことを第一に考えている。そんな私は、武器を振るうことが出来ても周りを導くことは出来ないよ」

「それに、お前は当主代行であると同時に、綾絶家の男なのだ。その価値は周囲からしても高いものとなるし、お前が妖魔に襲われても抵抗できるような力をつけさせるのが先達として、叔父としての仕事さ」

「何より、お前は万座の席で波羅に譲ると言った、あれに感動したのさ」

代行をお前がそのまま維持してなし崩しに当主になっても私はかまわなかった。だがしかし、自分より優秀な妹に譲るといふ決断は誰にもできることではない、とまで言つて僕が譲る宣言を褒めてくれたのだ。

だが、僕からすればゲームの展開もあるが、実際妹のほうが優秀なのである。故に、当主の座というのに微塵も興味がないので譲っただけだ。本心を隠してそう言つて謙遜

したのだが

「そういう割り切りを出来るところに感動したのさ。お前と波羅とでは確かに彼女が優秀だし、そこから嫉妬してお前が彼女を排除することも考えたよ、だが私はそれでも別にかまわなかった」

自分より優秀な人間を排除するなんてのは誰だってやることだからな、とまで言つてのけた。

僕は、彼女が優秀だからって排除することは微塵も考えてないですよと弁明したのだが、

「私は敬愛する兄者の手助けをすれば、そしてこの家を維持出来ればそれでいい。だから、お前が彼女を排除するのなら手助けしたつもりだよ。お前が当主としての仕事をしてくれるならね」

そうはつきりと言つたときには恐怖を感じたほどだ。二の句が継げぬ状態の僕に「だが、お前はそうしなかった。それどころか、女性の立場を守る行動に出た、そこに男を見たから手伝うのさ」

当主という肩書の維持のための肅清なんてのはどこも起きる、特に権力を持った者が目障りな連中を排除するなんてのは歴史上でもよくあることだと叔父が教えてくれた。だが、僕はそれをせず優秀だからと排除せず持ち上げて当主に据えるという見たことが

ない行動に惚れたと、そう言ってくれた。

そう褒めてくれるのはありがたいが、単に僕は彼女が当主の方がゲーム展開から対応できるし何より面倒なことしたくないから

「褒めてくださるのはありがたいですが、僕からしたら当主は貧乏籤なんで遠慮しますよ。だから波羅に譲るんです」

そう説明すると、キョトンとした顔をした後爆笑した。一頻り笑った後、僕を支えてくれると改めて宣言してくれたのだ。

叔父には感謝しかない。事実、僕がこうして代行できるのも、叔父が手伝ってくれているおかげだ。そして、妹の波羅にも武術の先達として鍛えてくれている。最も彼女はあのチュートリアルもどきの一件から真面目に訓練して叔父に匹敵するほどになっってしまったが。

そして、こうして都への献上品目録などを渡して意見を伺っている。

「叔父上、私が作った清酒はこれほど持っていますか、構いませんね？」

「構わんよ、在庫も十分あるし、何よりお前が作ったものだからな、好きなだけ持っていきなさい」

清酒は僕がこの世界で作ったものだ。確かにごり酒に灰入れるんだっけ？ と、うろ覚えな知識で何度も何度も試行錯誤を繰り返してようやく出来上がった代物で、今では

重要な交易品の一つにまでなっている。

といつても、転生小説みたいにも百科事典のごとく完璧に覚えてるわけでもない上に聞きかじり知識のガバガバっぷりもあつたので非常に苦労した。何分素人だったし、どれほど入れればいいのかもさっぱりだったので、たくさんの壺にこり酒を入れて、それを並べて順番に少しずつ灰の量を増やしていつて入れていつたりと、試行錯誤をどうにか出来上がったのだ。最初に結構な出費をしたが今では十分どころかそれ以上に元が取れており、普段嫌味を言う親戚一同すらこれには大絶賛をしているのだ、現金なのである。だが、これを作ったおかげで、自作の調味料やら何やらが出来るようになったし、交易品も高価なものを買えるようになったりした。領内の財政にもかなり貢献しており、事務方からも礼を言われるほどだ。金は天下の回り物とはよく言ったものである。

叔父から聞いた話では、都でも結構な話題となつていているとのこと。故に、献上品として、そして僕の目的のために多めに持つていくことにしている。都は様々な物と人が集まる、ゲームでのイベントキャラなども当然いるので、どうにかして顔をつなぎたい。他にも、持つていく牛車や連れていく下人下女達、挨拶回りの順番等々、考えなければいけないことがたくさんある。だが、どうにかして乗り越えなければならぬ、妹達のためにも。

「後は私が関係各所に話を通しておこう」

「ありがとうございます」

「代わりと言つてはなんだが、すまないが娘と話してくれないか？」

「ええ、喜んで。私の妻ですので、蔑ろにしませんよ」

「すまないね」

「いえいえ、叔父上には世話になっておりますからこのくらいお安い御用です」

そう言つて、僕は頭を下げ、部屋を退出し、目的地へと向かう。

目的地の部屋の前に行き、声をかける。

「桃代姉さん、頼です。入つてよろしいでしょうか？」

「あら、頼君ね、いらつしやい」

許可を貰つたので襖を開けて中に入る。そこには、桃色のふんわりとした髪を伸ばした女性が、布団から半身を起こしていた。背もたれには木で出来た座椅子を置いているおかげでゆつたりと背を預けている。手には、手編みで作つたであろう長い襟巻があつた。

彼女の名前は綾絶桃代。僕の叔父の綾絶左門の一人娘で、僕より年上の二十歳であ

る。

顔立ちはエロゲー故に美人だ。波羅が可愛いキリツ系、由羅と沙羅が可愛い系だとするならば、彼女はゆるふわ系と言ったところで、長いまつ毛のたれ目からこちらを覗く瞳は慈愛に満ち溢れている。ふわふわのピンク髪も現実だとあり得ないがエロゲー故に納得せざるを得ない。そのふわふわさは触ったら綿毛のような柔らかさを約束してくれるだろう。そして、年上の女性の包容力を雰囲気からでも感じる。

何より、母性の象徴たる胸が、波羅を超えてデカああああい!! 説明不要ツツ!! である。しかし、ゲーム内でも上位に食い込む巨乳キャラなのにエロシーンが敗北レイプしかなく、他は温泉入浴などの裸シーンしかない。だというのに、キャラクター人気投票では上から数えた方が早いくらいに高い。最も、エロゲーはエロシーンがいいなら人気が高いのは理由だが、エロシーンが非常に少ない彼女はエロ以外の理由が人気の高さである。

ここで、左門と桃代の説明をしようと思う。

先ほど、左門は僕らの武術の師と言ったが、最初からそうだったわけではなかった。彼は兄と同じように後方から支援する術者だった、しかしそちらの才能があまりよろしくなかったので大した活躍はせず、専ら兄を陰から支えるようにした。経理などをし始

めたのも、兄を支えるためだった。その後結婚し、娘である桃代が生まれた。だが妻は不治の病に倒れて、その状態から出産したため出産と同時に亡くなった。娘はその影響で母の治らない病を受け継ぎ苦しむこととなった。

桃代は見てわかるように、幼いころから病に侵されてこのような寝たきり生活を送っている。父である綾絶左門は、妻が残した忘れ形見である彼女を救おうと四方八方に手を出していた。だが、彼女の病は簡単に治るものではなく、良くて症状を抑えることが出来るだけだ。そのための薬はあるにはあるが非常に高価であり、綾絶左門は色々と財を切り崩して延命させたが焼け石に水だった。俸禄だけでは足りないのです、金を稼ぐために妖魔退治をし始めた。最初は、兄と同じように術を使ったが大した活躍が出来ずに妖魔に襲われ死にかかった。だがその時、護身用に持っていた刀を振るうと、術で倒せなかった妖魔をあつさり倒せたのだ。死の間際に振るったその力が、自分に武術の才があつたと確信することになり、そちらの修行をしたところメキメキと成長していった。遅咲きではあつたが才能は揺るぎない事実であつたため、そこからはひたすら武器を振るって妖魔退治をしまくっていった。遂には凶妖すらもその武で屠つたため、都にも覚え目出度くなり、さらには劍聖と呼ばれる人の弟子入りを許された。

後は、妖魔退治を頑張つたものの彼の体は一つしかなく働き過ぎて体を壊し、そこを妖魔に襲われて殉職した。というのが叔父上の設定だった。

なので、叔父上は本来このままならば原作開始後の数年以内に殉職するようにフラグが立っている。そのフラグをへし折るには、娘のための治療費を稼がなければならぬのだが、これがべらぼうに金がかかるのだ。はつきり言って、序盤の領地経営は慢性的な金欠のため、薬代をだしてたら出費の三分の一が消えるほどに高価な薬を買わなければならぬので、下手すると財政破綻となりゲームオーバーになる。終盤なら余裕だが、彼女の病は最初の内に薬を買っておかないと重篤状態になってしまい、絶対に治らなくなってしまうのである。彼女を救う方法は、最初辺りから薬を買って、病気の進行状況を一定ラインを超えないようにした状態で、病を治す手段を用いれば完治する。という風になっているのだ。

ここで面白いのが二人の設定だ。叔父上は剣聖の弟子になるほどに武力は頼りがいがあるので、生かしておくようにすると今後のゲームプレイが非常に楽になるのである。じゃあ、娘である彼女を生かす理由は？ と聞くと出てくる答えが、武という点においては父を超え剣聖に匹敵するから、という答えが出てくるのだ。

大体の創作世界では、親から子へ継がれる才能というのは基本的にあるし、平民凡人とは比べ物にならないから貴族や名家という存在が生まれる。僕の妹達が優秀なように、代を重ねるとどんどん強くなっていく。まあ、僕みたいな例外はいるが基本的には才能が有ると考えてよい。

で、父である左門が武の達人の才能が発覚したように彼女も才能がある。それもゲーム中トップクラスというパラメータ設定がされているのだ。場合によっては、隠しボスワンパンできるほど最強にまで育てた波羅ですら、下手すると負けると言う位の隠しボスを超えたさらなる隠しボス扱いとなってる。

実は、最初辺りで彼女とやり取りをするとその片鱗を見れるのだ。彼女に挨拶をして色々イベントを進めると、病で寝たきりの彼女を慰めるために庭で演舞や訓練をして欲しいと叔父から頼まれやってみる。すると、彼女が主人公の動きに刀の振り方や足捌きなどにアレコレ指摘するのである。その指摘も至極全うなもので、横で聞いている叔父も君が受け入れるなら受け入れてみるといいと言って選択肢が現れるのだ。ここで、とりあえず言われた通り修正するプレイヤーと、寝たきりのふんわり病弱美女の指摘なんて役に立たないだと選ばなかったプレイヤーとに別れ、前者の場合訓練時の上昇ステータスにボーナスがついて多くのプレイヤーが驚いたものだ。何故、病弱な彼女は正しい指摘をできるのかと。

その後、薬代を出して体調が持ち直したときに、桃代と武術稽古をやるという選択肢が出て、多くのプレイヤーが頭に？を浮かべてとりあえずやってみようと選択肢を選び、ポッコポッコにされた。というのはよくあるパターンだ。

普段寝たきりでこういった訓練のくの字もしたことがないのに、あらゆる武器を持た

せるだけで強い技を繰り出せる。その繰り出す行動も「お前絶対病弱じゃねえだろ!!」と多くのプレイヤーがマジ突っ込みするくらい飛んだり跳ねたりし、最大級の技だと剣聖が扱うような、一振りで大地を切り裂き山をも割る奥義——の劣化版を使うのだが、これを使った後血反吐をはいでダウンするのでここで強制的に訓練終了となるのだ。このイベントを見て多くのプレイヤーが、病弱状態でこれなら健康状態ならどうなるんだ……? と恐怖したものだ。

本人曰く、父が武の才能を開花させた後、欠かさず庭で修練をしてたのを見てたら出来ると思った。だからやってみた、と。プレイヤー達は、んなアホなー!! と突っ込みを入れるも、彼女の体調が持ち直す頃は主人公も鍛えてそこその力を持っているようになってるので、その状態で挑んだらボコボコにされたので納得するしかなかった。

しかし、先ほど説明したように非常に病弱というのが足を引っ張っている。仲間に迎えると戦闘に出せるっちゃ出せるが出た後のペナルティが結構キツく、一週間は寝込んで使えなくなるくらいが最も軽く、次で一か月、半年、最悪一年は病がぶり返して戦線離脱という状態が起きる。だがしかし、ここぞという時に使うと滅法強い。下手すると碌に育ててないのに凶妖をあっさり撃破などしたりする。使い道を誤らなければかなりの切り札となる。

一方、切り札となるのはいいが、その分死にやすいキャラであり、それが欠点且つ地

雷となつてゐる。

具体的に言うとうと、父と娘両方揃えていると安心だが、娘が死ぬと左門は生きる希望を失い戦線離脱する。

これだけならまだいい方だ。娘が死ぬときに、どういう状況で死ぬのかというフラグまで開発者は用意しているのだ。

仲間を迎えた後、ほとんど動かさず戦闘にも一定以上出さずに病死すると父は離脱。これが基本的な左門離脱フラグだ。主人公Ⅱプレイヤーに対する恨みも吐かずひっそりと離脱する。

次に、戦闘に出し過ぎた状態で戦線離脱しそのまま治らず病死すると、主人公Ⅱプレイヤーに対する恨みを吐きながらこつちに敵対してくる。剣聖の弟子とまで言われた人が敵になるのは恐怖でしかない、本当に強い。だが、この敵対は所謂反乱扱いなのでまだいい方だ。

最悪なのは、戦闘中に病が発症し妖魔に負けることだ。強いからつて戦闘に出しまくと、病氣ラインがどんどん下がって、戦闘中に発症しやすくなってしまう。そして敗北すると、通常のキャラなら孕み袋ルートになるが、病弱なため犯されてすぐに死ぬ。それを知った左門は、そういう風にこき使った主人公Ⅱプレイヤーが悪いとみなし、なんと妖魔側に寝返ってしまうのだ。

しかも、彼は娘の復活のために妖魔に全てを捧げる契約までした挙句、娘である桃代は復活すると病が無くなった完全なる体となって親子そろって主人公陣営に襲い掛かってくる。二人とも、主人公に対しての恨みを込めて襲い掛かってくるのだから非常に恐ろしい。絶望的な負けフラグとまで言われているほどだ。

彼女の、エロシーンが敗北レイプしかないので多くのプレイヤーが

「桃代姉ちゃんの巨乳をじっくり堪能してやるぜグヘヘ」

「妖魔の孕み袋になって、たくさん出産させて強い妖魔出させてそれを鍛えたこちらが討伐する。すると、高い経験値と報酬がもらえるという便利ループの完成よ」

「拙者、最強キャラがBUZAMAに妖魔に敗北レイプされるの大好き侍。義によってわざと敗北させるでござる」

とまあこんな感じで、他のネームドキャラと同じようなことが起きるだろ。と思つてやってみたら、孕み袋にならずさっさと死亡し、まさかの叔父が寝返りからの桃代姉ちゃん復活そして敵対という、凶妖百鬼夜行すら可愛く思える地獄が発生したので、スタツフは鬼か！　ここまで考えてるとはやはりスタツフの腹黒さは侮れぬ。といった評価が噴出した。

だが、それでもやりようによつては勝てるルートや方法まで用意しているのがニクイというのが専らの評価である。この敵対した二人を倒すとトップレベルの激レアアイ

テムが入手出来たりするので、それ目当てで地獄に突き進むプレイヤーがいるほどだ。なお、彼女の復活フラグは薬代を用意して父である左門を死なせないようにすることが条件だ。それを利用して、なんとRTA走者が厄介な凶妖に桃代をブチ当てて大幅タイム短縮させるという鬼畜技を編み出した。

まず、薬代を用意せずにフラグ通りにわざと左門を殉職させた後、薬をそこそこ購入して絶対に完治しないがまだ生きてるレベルまで維持する。そして、適当に育てて対処が面倒な凶妖にブチ当てそのまま病死させる。こうすると、左門の手により復活することなく、孕み袋として妖魔を出産することなく使い捨て出来るという方法を編み出したRTA走者がいた。能力が高いキャラが妖魔を出産すると、能力の高い妖魔が出て対処が厄介なのだが、桃代は病弱でそれが起きないのでそれを逆手に取ったという方法である。

画期的な短縮だが方法があまりにも想定外な外道だった故に、そのRTA走者に対して

「ゆるふわピンク髪の優しくて強くて病弱で可哀想な桃代ねーちゃんを使い捨てる外道」

「いともたやすく行われるえげつない行為」

「吐き気を催す邪悪」

「倫理観ゆるキャラ」

「救いはないんですかという問いに対する完璧な回答」

「RTAに魂を売った結果生まれたナニカ」

と、からかい混じりの罵倒が飛び交った。開発スタッフからも

「なんと……………なんと素晴らしい」

と、スタッフが想定してなかったようで、そこから褒められたほどだから、その鬼畜っぷりは推して知るべし。

一方で、RTAタイムを大幅に縮めたのは揺るぎない事実なのでそちらの評価は高い。それに、RTAならばタイムを縮めるのが大前提故に上の罵倒も半ば冗談のようなものだ。今ではそのプレイヤーがその外道方法を使わずにやや劣るくらいにまで縮めたチャートを作り上げたので。

「外道と言われたので、そういわれないようなルートを構築しました。ですが間違いない外道方法のルートの方がタイムが縮みます。悪魔に魂を売るかどうかの決断は貴方に任せます」

と締めくくり、RTAに挑戦するプレイヤーの多くを悩ませた。

——話が逸れた。

要は、左門と桃代はかなり役に立つ存在ということだ。だが、それを活躍させるため

には非常に金がかかる。故に、僕は転生小説でよくある知識チートで清酒などの交易品を作つて金を作り出した。それを使つていここにあたる彼女の薬代を出したので、叔父からは非常に感謝され協力するということになっている。こちらとしても、僕が当主を譲つた後の波羅の手助けになつてくれるのならという打算込みでやつているのでお互いwin-winである。彼女の背もたれに使つている木座椅子も、木工職人にあれこれ注文し、無理を言つたので交易品の清酒を振舞つたりして作つてもらつたところ、飛ぶように売れた。もつとも、清酒もそうだがこういった奴はほとんどがうろ覚えなので、再現するのに結構な金と時間がかかった。しかし十分ペイ出来たのでよしとする。

そして、僕がいとこにあたる彼女を嫁と言つたのは、叔父から土下座をされて頼まれたのだ。

治る見込みのない病に侵された彼女は、子を産むのが難しい。産んだとしても、彼女が母親から遺伝したようにその子に病が遺伝する恐れがある。故に、子を作つてはならぬと一族の会議で決まつたのだ。

だが、子を作つてはいけなすが結婚してはならぬとは決めてない。しかし、彼女を妻とする人は誰もいない。妾にして抱いて肉欲を晴らそうとしても、本人が病弱なので死ぬ恐れがあるのでそれでもできない。無理やり抱いて死んだなら、それこそ叔父の怒りを買うことになる。何より、二十はこの時代だと立派な嫁き遅れと見做される。故に、叔

父は僕に妾でいいから嫁に貰ってくれと土下座された。

僕としても、今後のことを考えると、左門と桃代は武力として頼りになるので恩を売って損はないから了承した。彼女が美人で病弱で可哀想だから救済したい、というのも理由であるけども。それに、治る見込みがない病と書いたが、それはその世界に住む人間の知識であつて、ゲーム上の設定だと治るつちや治るのだ。ただ非常に難しく面倒なだけだが、方法はしつかりと複数用意されてある。その複数の中には、神代の薬師と呼ばれた人の協力を貰う、土地神を殺しその力を使う、高難易度の術を使つて治す e t c, e t c, とあり、もしくは先ほど挙げたような妖魔にするというのも一つの手段だ。

なので、打算込で協力し、叔父の頼みを聞いたが流石に前世の感覚もあり

「叔父上の頼みであれば、これからお世話になるので断ることはしません。ですが、桃代姉さんの意思を無視して決めるのもよろしくないでしょう。ましてや妾ということ、を姉さんが了承するかわかりませんし、正妻でも構いませんよ」

と言つて返事を待った。すると、翌日彼女共々土下座されて妾でいいからお願ひされたのだ。これには面食らつたが、本人がいいならいいかなと思つて、式は上げないが公然の秘密のようなもので僕の妾と一族に周知された。当然、彼女のことを欲しがるといふ族も他家もいないので反対者は誰一人いなかった。ちなみに、正妻には出来ないの妾という立場だが、前世の感覚からしたら初めてのお嫁さんなので、非常にドギマギして

いる。独身で死んだ故に、こんな美人な人をお嫁さんに出来るなんて、と初心に喜んで
いるのもあった。

何より、彼女には僕がこの世界に生まれてからずっと可愛がつてもらっている。

もつとも、彼女は寝たきりなので僕が叔父から呼ばれて一緒に遊んだりしていた。僕
が妹達と貝合わせやかるたなどでいい勝負できるようになったのも、彼女から教わった
からである。そんな彼女も、僕が交易品を作つて莫大な利益を生み出し薬代を用意して
からは原作より体調が良くなっており、たまに僕と波羅の訓練相手をしてくれるほど動
けるようになった。

波羅は初めて対峙した時、寝たきりの病人に何ができるのかと見下していたが。五合
の打ち合いで敗北した。ちなみに僕は一合である、やだこのお兄ちゃんザコすぎ……？
言い訳するなら、条件付きなら最大三合は持つ。もつとも、それはゲームプレイで見
た剣聖様の技を使うので、その弾きタイミングを覚えているからというのが理由だ
が。

それからというもの、波羅はこの屈辱を忘れず体調がいい時に勝負を挑み、今では十
五合まで持つようになった。僕としても、波羅を強化するために必要だと思つたので、
それが発揮されてるようでも何よりだ。

「姉さん、息災ですか」

「ええ、貴方が薬代を払ってくれるおかげでね、いつもありがとうございます」

「いえいえ、お安い御用ですよ」

本心である。金を用意するだけで武力で有用なユニット手に入るんなら安いもんだ、とはRTA走者のセリフだがこれは多くのプレイヤーの声を代弁しているだろう。事実、本当に強くて最後まで使えるキャラでもあるので、こうやって支援しても損ではない。後は、前世は独身だった故に初めてのお嫁さんだから守らないといけない、という安い男のプライドがある。

何より、大人の女性としての包容力が高いのだ。それにとっても美人だというのも重要である。

その美貌もプレイヤーランキングで上位に食い込むことからも納得だ、エロゲーだからできる表現かふんわりとした桃色髪に、柔らかなたれ目、ぷつくりとした唇等々とてもエツチチである。一つだけ気になる点と言えば。

「今日はね、貴方の為に襟巻を作ったのよ」

「本当ですか？」

「ええ、首に巻くからこつちにいらっしやい」

そう言われて、正座のままずるずると近づき、真横に座って彼女を見上げる。

賢明な読者諸君ならお気づきであろうが、彼女は大きい。今はこうして布団から半身を起こしているが、目測だが身長が2m近くあるので、僕が正座の状態でも少し見上げてしまうのだ。桃代姉さんは、叔父上に挨拶とかするときには立ち寄りしてビジュアルを確認したことがあるが、その時からなんか………大きすぎない？　と思つた。いや、ゲーム中でも上位に食い込む巨乳の持ち主で身長も主人公の波羅より高めだったが、どうもゲームより一回り二回りはでかい気がする。身長も胸も尻も何もかも。波羅よりも大きいし、何よりその寝間着の上からわかるくらいに巨大なメロンの天辺にポチツとした大きな膨らみがあるほど色々デカイ。こうして近づいているだけでも、大人の色気がすさまじいし、いい匂いが布団から一緒に出ているためクラクラする。必死に勃起をしないよう靈力を集中させ、ゆっくりと彼女に近づいた。

彼女の傍にやってくると、手に持った襟巻を僕の首に巻いてくれる。

「もうちよつと近づいて、前かがみになってくれない？　じゃないと巻きづらいわ」
「いや、それは」

「いいからいいから」

ムギユ、と体に押し付けられる。巨大なおっぱいの横の部分に顔が埋まり、目の前が真っ白になる。妹の押し付けた胸とはまた違った、柔らかい感触。このままずっといたいと思わせるほどの暖かさを持っており、鼻腔から姉さんのいい香りが入ってきて僕の

愚息が限界状態になるも必死に押さえつける。慌てて離れようとしても、大きな体の彼女のどこかを触ってしまつて余計にわちゃわちゃしてしまう。

「んもう、暴れちゃだめよ」

ムギユと、もつと密着するように押し付けられ、顔は完全に横乳に埋まり、形がへしやげる。物凄いいい匂いと、びつくりするくらいの柔らかい感触で一周回つて落ち着いてきた。落ち着いてきたら、マフラー巻くだけなのにこんな密着する必要あつたわけ？ と疑問に思い始めた。そう思い始めたと同時に声がかかり、彼女の体から慌てて離れる。

「はい、巻いたわよ」

藍色の襟巻に、幾何学模様が入つていて中々にイカすと感想が浮かんだ。部屋の中にいた家人が用意した鏡を見て、

「とてもいいですね、姉さんありがとうございます」

「気に入つてくれてよかつたわ、最近のお仕事はどう？」

「はい、叔父上が手助けしてくれるおかげで助かつてます」

「ならよかつたわ、波羅ちゃんが当主になるまでの間、大変だろうけど頑張つてね」

「はい、お気遣いいただきありがとうございます」

「うふふ、ねえ、両手を上げてくれない？」

「え？ は、はあ」

言われた通り万歳の格好をする、すると、姉さんは脇の下に手を入れてヒヨイと僕を持ち上げた。そして、そのまま半身を起こしている彼女の体の上に持つていき、僕の体を抱きしめた。ちょうど、彼女の体に馬乗りに跨り、頭は彼女の爆乳の谷間に完全に埋まる。

あまりにもあつさり且つ素早い動きに理解が追い付かないが、武の達人であるため合気道や柔術といったことを本能で使えると設定資料集にあった。なので、通常なら持ち上げるだけなら足がぶらーんとなるが、僕を持ち上げる一瞬で馬乗り状態にまで持ち込む腕の良さに驚くしかない。

というか、思いつきりおっぱいに埋まって恥ずかしいので

「ね、姉さん?! お、おやめください!」

と抗議の声を上げるも。

「私とあなたは夫婦なんだから、恥ずかしがる必要はないのよ、ほら」

そう言つて、殊更に強く抱きしめてくる。武の達人だからか、押さえつけるだけなのに全く身動きが取れない。あの病弱な細腕だが、合気道と柔術の応用で、こうやつてがつちりホールドしているのだろう。

彼女の巨大な体に抱きしめられると、まるで赤ん坊のようになってしまう感覚とな

る。おっぱいの柔らかさもそうだが、温かく淫猥な空気を吸ってボーっとなる。そして、女性の体に乗っている状態が背徳感を感じ股座がいきり立つ。自分の尻や足に女性の柔らかさを感じ、彼女が強く抱きしめてくれるのもあって、考えが緩んで全身を使つて彼女の体に抱き着き返した。

姉さんの巨大なおっぱいに自分から頭を押し付けゆつくりと動かす。飽きない柔らかさを頭全体で感じ、頭を動かして感触をもっと味わうようにしてしまう。背中に回していた手も、欲に負けておっぱいに手を回してしまった。そこから、全身を預けて両手を添えたおっぱいを自分の頭に押し付けるようにしてしまう。明らかに自分本位の行動だが、姉さんは嫌がる素振りを見せず

「うふふ、いい子♡いい子♡」

と頭を撫でて肯定してくれた。自分の行動を肯定してくれることに、さらに頭が溶けていく。そして、頭が溶けていってしまったせいで、勃起しないように下半身に靈力を集中していたのが途切れてしまい、思いつきり勃起してしまった。

八話 でかい女性に抱きしめられたら即落ち不可避でつせ

「いい子♡いい子♡」

頭を優しく撫でながら言葉を語り掛ける。その行動で気を許してくれたのか、もつと力強く抱きしめ始めた。全身を使って体を押し付け、頭を動かして胸の柔らかさを堪能しているのがわかる。さらには、自分の背中に回していた腕を両胸に添えて、ぽよぽよと触って揉みながら自身の頭に押し付けるようにしている。

言わなくてもわかる、彼は自分に欲情していると。

女としての欠陥品である自分の体に欲情してくれている、その事実が何よりも嬉しいことだった。周りの家人達からは頼が欲情しているとは知らないが、自分たちの主人に年下の夫が甘えているように見え、ほっこりとした笑顔でそれを見ている。

「頼君、辛くなったらこうしてあげるからね？」

「ふあ……………」

胸の谷間から顔を上げた彼の顔を見ると、蕩けた顔をしていた。たまらなく可愛く愛おしい。

彼のことは、父からよく聞いていた。父が敬愛する兄に生まれた初めての子だと、兄は術者として都に名を馳せたが体が弱く他の男たちと比べて子作りがしにくい欠点があった。その兄に三人の妻の中の正妻が生んでくれたと、しかも兄の虚弱体質が遺伝せず健康体だと。父は我が事のように喜んで私に報告しており、父と共に挨拶に向かつて顔を見たら、なんとも愛くるしい男の子だった。

この世の男達は、私達女と違って奥ゆかしい存在だ。故に、大事な子作りは如何にして彼らから子種を頂くか、彼らにどれほど尽くすかがいい女の条件だと乳母から教わった。父のような前に出て戦う男はいるにはいるが私達女より数は少なく、後方で支えるのが専らの仕事だ。特に男は子孫を、家を維持するために一夫多妻が普通である。

だが、私は女として出来損ないだった。

死んだ母と同じ病に苦しみ、前に出て戦うことも出来ず毎日寝る日々。後ろから支えていくはずの父が、前に出て治療費を稼がなければならぬほど我が家の財政に負担をかけた。

体調がよかった時、慰めに父に頼み込んで武術の修練をしたら、父を軽く凌駕する才能を持っていたことがわかったが、この病弱な体でその才能が何の役に立つだろうか。

父が馬車馬のように働いて、私の薬代を稼ぐ一方で、寝たきりの私を慰めるようにこの子を呼んで一緒に遊んだ。

乳母も家人も、男は目に入れて癒されると聞いたがそれは本当だった。この子は私を姉さん姉さんと呼んで懐いてくれた、私が病で体が弱いということを考え無理をさせないように気遣つてくれるのも嬉しかった。しかも、この子の父親の虚弱体質と違つて遣伝せずいたつて健康体である。そのことが、一族全体の吉報であつた。この子の後に生まれた妹達も、健康体であることもさらに吉報であつた。

この子は、自分で作った交易品で稼いだ金子のほとんどを領地開発につき込んでいく。それだけでなく、父の代わりに私の薬代を払つてくれているということには心底驚いた。

この子は、遊んでくれた大切な姉さんがこのまま病に臥せつているのを見たくないからと言つて照れ隠しをしたが、それがどれほど私の心に響いただろうか。

父が、貰い手がいない私を彼の妾にと頼み込んだと知つた時は、流石に父に対して私は怒つた。ただでさえ薬代で迷惑をかけているのに、貰い手の無い私を宛がうのは大変失礼だし、彼の妻となる女達にも悪影響だろうと。

だが、彼は嫌な顔一つせず了承した。しかも、妾扱いだと私は嫌がるかもしれないし正妻でも構わないと気遣うほどだ。流石にそこまで厚かましいことは出来ないの、妾としてお願いし了承してくれた。私のような出来損ないを貰うもの好きはいない、子を産めないどころか夜伽すら出来ないお荷物だ。そんな私をこの子は受け入れてくれる

………。どれほど心が救われたことだろう。

今、この子が当主代行として働き、一族重鎮達から嫌味の応酬を受けているが、あれは女だからわかる。彼女ら重鎮達は、嫌味を浴びせることで都の役人連中に対する耐性をつけさせようとしているのだろう。父も度々都からやつてきた役人に嫌味を受けてげっそりしていたほどだ。当主代行ならもつとそれが行くだろうし、彼が無理をして当主をやる必要はなく、早く他家に輿入れして妻達を支えた方が良いと遠回しに言っているのだとあたりをつけた。もつとも、この子にはそれが全然伝わってないようだが。

妹達が生まれた時も

「姉さん、僕に妹が生まれました！」

「今度は双子が生まれました！」

「僕は兄として、妹達を守りたいです！」

そう元気に報告していたほどだ。

だが最近では、重鎮の嫌味を真面目に受け取り気が減入っているかもしれない。故に、こうして優しく抱いて慰めようとした。

するとどうだろうか、この子は私の体に欲情してくれている。周りの家人は気づかないが、密着させてる私はこの子の荒くも押し殺した淫蕩な息遣いが聞こえた。

彼に私の唇を重ねた。

激しい接吻は出来ないが、じつと重ね合わせて固定する。胸が熱くなり、彼のすべてが欲しくなる。今すぐにでも彼とまぐわい、子供を作りたい。だが、それを私は出来ないので名残惜しいが唇を離す。

「愛する旦那様、辛くなつたらいつでもこうして上げますからね？ 私のところにいつでも来てください」

「ひゃ、ひゃい……………」

真つ赤にした彼の表情を見るだけで、体調が良くなりそうだ。心がこんなにも温まる。

私の体に跨っている状態からゆっくりと彼は降りて、入り口の前に立ち。

「じゃ。じゃあ、姉さん。次に来るときはお土産を買ってきます」

「ええ、楽しみにしているわ」

そう真つ赤になりながら挨拶をして、慌ただしく出て行った。

旦那様が出て行ったあと、控えていた家人が近づき

「愛らしいお方ですね」

「ええ、本当に」

そう返すほかない。家人達から見ても、頼君は私に良くしてくれているからありがた

いのだろう。

「病に倒れるお嬢様と、それを支える頼様……………まるで、御伽噺のようですわ」

「出立にはお嬢様の接吻で送る……………、大変良いものを見させていただきました」

先ほどのやり取りを、家人達はきやいきやいと喜びながら話し合う。傍で聞いている私も、うれしさと恥ずかしさで火が出そうだ。

「お嬢様と頼様は本当にお似合いでございます」

「ありがとう、後は私の体が万全ならば、是非とも彼の子を産みたいのだけれど……………」

「うう……………お嬢様……………お劳しや……………」

私の台詞に家人が涙を流す。女として子を産むのは当然の義務だ、それが出来ない私は欠陥品の烙印を押されている。それを知っているからこそ、長く世話をしてくれる家人は嘆いてくれている。そのことを嬉しく思うが、私はあの時から絶望していない。

「すみませんが、そろそろ寝ます。少々疲れしました」

「わかりました、私達は失礼させていただきます」

私がそう言うと、背もたれの木座椅子を片付け、横になった私に布団をかけなおし、家人達は退出していった。

これはまあ、いい。私の病は音に聞くもので、貴族と言えども逃れられないと一般に知られているほどだ。だが、私は絶望していない。理由は簡単だ、この病が治ることを他ならぬ私の旦那様が教えてくれた。

あれは、私が彼と波羅ちゃんとの修練の時のことだ。私の才で彼らをコテンパンにしたが、最終的には私が血反吐を吐いたため途中で終了した。慌てて私のもとに駆け付けた父の肩を借りて、息も絶え絶えの時彼と父との会話が耳に入った。

「すまないね、うちの娘が迷惑をかけた」

「いえいえ、流石桃代姉さんですね。前、叔父上から姉さんは自分を超えると言ったことが半信半疑でしたがそれが本当だったなんて」

「だが、この子は病に侵されている。これさえなければ、この子も幸せを掴めただろうに……」

「大丈夫ですよ、姉さんの病は治ります。僕が治してあげますよ」

「そうかい、慰めてくれてありがとう」

あの時はまだ当主代行となる前だったため、父も彼の言葉を子供の言う慰めだと思つて流していた。だが、肩を貸されて意識が朦朧としていた私は、彼の言葉が嘘ではないと理解した。

父が言うには、武を極めしものは、相手の行動視線発言全てで情報を掴みとれる。と、

父自身が劍聖様から教わったそうだ。そして、私はその言葉の意味を彼らとの修練で理解した。刀の軌道、視線、足の動き、体幹の向き、それらから相手の行動がわかる。劍聖様はそれが出来るという。

そして、彼の言葉が………治るといふ言葉が決して嘘ではないというのを理解した。あの発言の声音、感情、それらが彼自身が治し方を知っているから出ているものだ。父は気づかなかつたが、私はそれに気づいた。あれは、慰めで言ったのではない。彼は、治し方を知っていると。

出来損ないの私のために高額な薬代を出し、貰い手がない私を妾ですら烏澁がましいのに正妻でも構わないと気遣い、更には治らないと思っていた病の治療法を知っており治そうとしてくれる。

これが、どれほど救われたことだろうか。どれほど、ありがたいことだろうか。そして、ここまでされて惚れない女がいるだろうか………。

なので、私は絶望していない。私の小さな旦那様のために、私は待っている。そして

「頼君。病が治ったら、子供はたくさん産むからね………」

———そう心に決めて、眠りについた。

桃代の色気にやられて勃起するなんて、滅茶苦茶に恥ずかしいことをしたと罪悪感で胸が一杯になっていた彼は、駆け出したまま部屋に戻る。

そして、敷かれた布団にそのままダイブしてしばし横になる。まさか、あんなことをして知られてしまうとは……。まるで、母親に勃起を見られたかのような羞恥心を感じてしまった。そのまま横になって、いきり立つ息子を優しくマッサージしてどうにかこうにか落ち着かせるようにする。しばらくすると、息子に溜まった血と熱が収まり、段々と小さくなっていった。

ふう、と一息つき、体を起こす。そしてまた、背中からバタンと倒れて天井のシミを数え始める。そうして心を落ち着かせた彼は、今後のことを考え始めた。

……滅茶苦茶に恥ずかしかった。あんな赤ちゃんみたいに抱き着いてしまい、あまつさえ勃起してしまうなど。姉さんに嫌われてなければいいんだけど……。いや、今はそれよりも今後のことを考えないと。

桃代姉さんはとても有用なキャラなのは間違いない、主人公である波羅は鍛えなければ大ボスたる凶妖に立ち向かえないが、彼女は時間制限付き病弱持ちというデメリット

があるものの鍛えずに凶妖撃破を出来る優れたユニットだ。

その彼女が役に立つのが、凶妖の一角を担う双子の鬼。双月の修羅とよばれる赤鬼の紅月、青鬼の蒼月だ。二人は兄弟で、力の赤鬼、術の青鬼と呼ばれているネームド凶妖である。鬼は基本的にカラフルだが一番多いのが赤鬼と青鬼だ。緑鬼はいるが、これは大陸のオーガがそれにあたり扶桑には存在しない。

紅月も蒼月も腰まで伸びた艶やかな金髪ロングだが、前者はボサボサのワイルドヘアで後者はきつちりとしたロングヘアとなっている。髪が表すように、顔も紅月は好戦的で、蒼月は眼鏡をかけたインテリ鬼となっており、しかもどちらもイケメンなために女性プレイヤーからの人気も高い。

二人はプリキュアとばかりの連携攻撃が得意で、基本的に凶妖は一体ずつ相手するのだが、この二人だけは同時に相手取るのでキャラ育成と連携の重要さがモノを言う戦闘になっている。

前衛の紅月の力に任せたパンチは最大の威力だとこちらの障壁を突破し相手を血煙に変える。後衛の蒼月の術に至っては、前衛への補助などもそうだが、全体攻撃の「鬼雷」「氷魔」「獄炎」と呼ばれる電撃、氷、炎属性攻撃を操ってきてこちらのライフを的確に削ってくる。大体の妖魔は属性攻撃は一つだけなのだが、蒼月は三種以上扱うので、ボス対策のために一つの耐属性防御だけを装備して対策する、というのがやりにく

いのだ。

それだけでなく、隙を見て幻惑や催眠術といったデバフまで使ってくるのだ。鬼は基本的に力任せで、術を扱うものはいるにはいるが少ない。いたとしても中級退魔師レベル程度しかない。ちまちま術を使うより、己の怪力でぶん殴るほうが早いからだ。そういう意味では紅月はわかりやすい。

だが、蒼月は鬼にしては珍しくインテリで、術は上級退魔師と遜色ないレベルのものを放ってくる。それだけでなく、鬼特有の怪力も有しているから厄介なのだ。最も純粋な力という意味では兄弟の紅月に劣るのだが。紅月を倒して、術師だから接近戦に弱いだろうと蒼月に殴りかかったら返り討ちにあった。というのはよくあるパターンだ。この場合、どれほどライフや霊力を維持して紅月を突破するかというのが問題となってくる。

そういう意味では結構な良ボスと言えるだろう。

こいつらは中盤から相手をするボスで、今まで一対多数だった大ボスが二対多数になるだけで非常に大変となる。そして、この双子を相手にした後は凶妖が一体ずつで来るのが稀になってくるほどだ。つまりプレイヤーに意識の切り替えを突き付けるのである。双子以前だと、思いっきり地道に鍛えて一対多数だから凶妖を楽々撃破ー！ と余裕かましているプレイヤーに冷水を浴びせる形となるので意識切り替えとしてはあり

がたいと言われているほどだ。

だがしかし、エロゲー故にエロに関してには妖魔は信用ならないと言える。

特に、鬼は人間に良く近づいて色々とお話をして友好的なイメージを作り出すシーンがあるが、普通に嘘だったり、あつさり裏切ったりするので油断ならないし信じないが退魔師の基本だと資料集に書いてあった。だが、プレイヤーはそういうのを真面目に受け取らず、最初辺りでも急に名前付きの双子の鬼が現れ、主人公に色々協力してくれるし、家事もしてくるし、妖魔退治にも付き合ってくれる。そんなことをするこの双子は味方なんじゃね？ と思って過ごしていたら実は主人公にじわじわと催眠をかけており、大事に守っていた処女は二人に美味しく頂かれた。

それだけでなく、主人公にそれぞれ子供を産ませて、自身を兄と呼ばせて一族の中にすんなりと入りこむ。外見は高等幻惑術を使っているのでイケメンの人間にしか見えなく、そして手当たり次第に一族の女どもを食い散らかしてたくさんの子供を産ませる。なんてルートがあるほどだ。

ただし、この双子は敵である凶妖なのに条件によっては味方ユニットとして最後まで裏切らずに使えるルートもある。最も、それをする場合主人公は彼らの妹となり性欲のはけ口兼、一族復興のための孕み袋になるのは確定となってしまうのだが……………。尚、妹になりたい女性プレイヤーからの評価は非常に高い模様。見方によってはイケメ

ンの双子の兄に求められて子供産んだ上に、今後も自分のことを妹として可愛がって来て妖魔退治も裏切らずに最後まで付き合ってくれるからわからないわけでもない。

話が逸れた。

で、この双子に対して桃代姉さんがなぜ有効かというと、単純に強すぎて二人の連携なんざぶつちぎりでぶつた切るからである。通常プレイならば、双子の高度な連携に対応するための装備や編成などを駆使しなければならぬ。特に、タンク役の紅月に蒼月がバフと結界をかけてるせいでこいつが暴れまくるのが非常に厄介なのだが、桃代姉さんは全てを断ち切る物理最強の剣聖様の技を使えるからいいのだ。

剣聖様の技は物理を極めた結果、刀を振ってたらいつのまにか斬撃が飛ぶわ、大地を割るわ、海や山を割るわ、更には妖魔の使う高度な結界術や障壁すらぶつた切るののである。なので、蒼月がタンク役の紅月にバフや結界術をかけても、問答無用とばかりに秘伝・空絶を使ってまとめて二人を切ってしまうのだ。ただ、この秘伝は負担が大きすぎて最強と言われる剣聖様もポンポン出せるわけではなく命を削ると言っていた。なので、病弱な桃代姉さんは文字通り命と引き換えにこの技を放って蒼月と紅月を倒すのである。この双子を倒すのが中盤の折り返しというか、ある意味基準点みたいになっている。

この双子を相手にした後、凶妖達も二体同時などが起きるが、ぶつちやけ連携なんて

一切しないので。片方の攻撃はがっちり守ってもう片方を集中して倒すという各個撃破をすればあっさり倒せるのだ。凶妖達の仲は基本的によくはない。というか、全員我が強いので連携？ なにそれ美味しいの？ 状態なのだ。

まあ、後半に出てくる以上厄介だし強し下手すると全滅するのは間違いないのだが、少しでも気が抜けない双月の修羅に比べれば余裕ある上に後半である以上装備とレベルも整っている所以对処しやすいのだ。

ちなみに、そんな凶妖達が軍隊レベルの高度な連携をしてきたのが一千年前に起きた『人妖大戦』である。

資料集によれば、人も妖魔も生存のために悍ましいことをしまくった。

浮浪者や貧民に爆弾を仕込んで妖魔に特攻させる、幻術で人間を操り人間を大量に生み出す人間牧場を作る、妖魔の頭を割って妖力を使った悍ましい電池の発明、水源汚染による地域一帯の人間を妖魔に変貌させる、妖魔の住処の環境を激変させ環境に適応できない妖魔を絶滅させる、人間を食って皮を被って成り済ます、妖魔同士を仲違いさせる、etc。

結果的に言えば、人間の底知れぬ悪意が勝利したと簡潔に書いており、そのおかげで人類と妖魔はパワーバランスが崩れ人類が優勢となっている。

黒き太陽『空亡』、白面金毛九尾の狐『玉藻』、変幻自在の妖怪『鶴』、双月の修羅『紅月』『蒼月』、他多数の凶妖が妖魔の世界にすべく手を取り合つて人類を管理しようとしてそれに徹底抗戦したという形だ。だが、人類側は時の帝とそれに従う『妖魔滅却八勇士』と呼ばれる八英雄によつて封印乃至撃退されたということになっている。特に決定的なのが、帝がその命を捧げて都の霊脈をも使つて扶桑国を丸々覆う呪術を使つて、それにより妖魔が大幅に弱体化。その呪いが今でも妖魔に残つてゐる、とかなんとかだつたつけな。薦めてくれた友人みたいに完璧に覚えていないのが悔やまれる。

何にせよ、厄介な双子の修羅に対する切り札となりえるのが桃代姉さんなのだ。

といつても、病を完治させてから出撃させると決めている。RTA走者ならば時間短縮が大正義だから、あの鬼畜技を使うんだらうけど僕は一切する気はない。というか現実だし、僕の嫁さんにそんな外道は出来ないし、せめて桃代姉さんはこの世界だけでもいいことが起きて欲しいと願つている。妹達同様に、姉さんのことは守りたいと思つてゐる。故に、彼女を戦闘に出すなら治療法を確立させてからになる。

——よし、色々難しいこと考えたからあそこに行こうかな。久しぶりに頭使つたし、最近では上洛の準備で忙しいし、そして桃代姉さんに抱きしめられて悶々してしまつたしで頭の中がぐちゃぐちゃになりかかつてる。こういう時は、天然の温泉に入つてり

ラックスするに限る。時間帯も、やや夕暮れとちようどよい。ちゃつちゃと入って戻ればいいだろう、そう決めた僕は、うちの領地の中にひっそりと作った秘湯へと向かった。

秘湯。

文字通り隠れた温泉である。この北部にあつて、日本の北海道や東北地方のような雪が当たり前の場所にも、日本をモチーフにしてるせいか温泉は掘れば湧き出るし、自噴してるところもある。僕は領地開発の中で、自分でこつそりとここに露天風呂を作つたのだ。理由は簡単、入りたいから。

ゲーム中だと、領地開発が進んで中盤以降に技術研究が進んでのタイミングで領地開発の再調査なるタブが生まれて、そこから領地内で新しい鉱脈やら何やらを見つけるイベントがある。最もこれは確定ではなく運が絡むし、攻略本にどこに何があるのかというマップもあるが、全部開発出来るわけではなく完全に運となつてゐる。わが綾絶家は鉄、銅、金、銀、翡翠、温泉、等々といったそれぞれゲームを進めるのに有効な資源がある。鉄、銅は武器防具開発で良質なものを作れるようになるし、金銀は財政が潤う、翡翠はそこから良質な勾玉やらブレスレットなどを作つて後衛の術師の能力が上がる装

備を作れることが出来る。

ぶつちやけ領地にここまでのブツが眠ってるってこと自体がかなり凄い案件で、全部掘れたら間違いなく大発展すると思うだろう。ただし、その再開発タブは二個しか出ないので、六個のうちどれが当たるのかは運なのだ。

そして僕は、どこに何があるのかというマップを……………一部しか覚えていなかった。非常に惜しい。

その中で、特徴的な場所に温泉があるポイントが数か所あって、その一つだけ覚えていた。領地の地図のなかでも、結構特徴的な場所にあつたなーという覚えだったがそこを見つけたのだ。

尚、領地内である故に当主一族である僕が開発しても誰も文句は言わない。それに、常日頃暇があつたら農作業やら工作やらをやっているので、領地内を好き勝手に移動しても咎められないのだ。結果で覆ってる領地から出たら襲われるかもしれないが、領地内なので安心安全なのも理由だ。で、僕は掘り当てる道具……………といつてもつるはしやスコップ、いや、この時代なら鋤と言うべきか。それらを持って掘り当てたのである。如何せん半信半疑だったが、出てきてよかった。

ちなみにだが、僕みたいな貧弱な小僧が掘るとなると普通に時間がかかりすぎる。しかし、この世界は靈力を体に張り巡らせて身体能力をアップする技法があるので、それ

を使えば僕でもサクサク掘れるのだ。そして、掘り当てた場所からチョロチョロお湯が沸き出たので大喜び。後は、その場所にえつちらおつちら岩を運んで、地面に置いて、周りを囲んでくという風に自作の温泉を作ったのである。作り方は、y o u t u b e の D I Y 動画で魚のための池を作る動画を見てたのでそれを参考にしました。簡単に言ってるけど、納得いく形になるのに実に一年以上かかったりしたのは秘密だ。まあ、誰にも言わず秘密にやってたからだし、ちよつとした小屋や温泉卵作る道具など凝ったものを作ったからだけでも。

ちなみに、ゲーム中の温泉は入浴シーン目的に利用され、それ以外は傷の治りが早くなるといった効果がある。エロシーン見終わったら終わりかと思いきや、傷の回復といたっちゃんと使えるところを用意しているので、先ほど挙げた資源の中でもハズレ扱いではないのだ。といっても温泉以外の資源の方が有効なので、明確なハズレではないが劣るといったところだ。

で、ひっそりと作った露天風呂をしばらくは自分だけが利用し、問題ないと判断したら公開しようかなと思ってる。これだけでも温泉地として収益可能だし、都からやってきた役人への応対にも使える。平民に解放は………無理だろうな流石に。あと一つ掘ればそつちを平民に渡せるだろうが、多分一族会議は認めないかもしれない。温泉はとても貴重なものだから、しょうがないね。現代日本みたいに進んでないからね。

基本的に傍に誰かいたりするから、一人でひっそりしたいときに温泉に入っている。なので、ウキウキ気分で秘密の露天風呂に向かっていた。その時、温泉地の方から妙に甘い匂いがした。何だか変な気分になるが………、ま、いいだろう。

「なんだあ？　こんなところに男がやってくるなんて、俺にもツキが廻ってきたなあ♡」

この匂いに危機感を抱いて引き返したなら、あんなことにはならなかっただろう。後年の頼は嫁にそうこぼしたという。

九話 序盤から強いボスって負けイベントですよね

手に桶や手ぬぐいに洗剤代わりの無患子、スポンジ代わりのへちま、それに卵といった、温泉道具一式を持ってルンルン気分温泉だーと向かっていったら、段々と甘い匂いがしてきた。

おかしいな………、こちら辺に甘い物なんてなかったはず。まだ雪が降る季節ではないものの、雪が良く降るこちら一帯では、甘味と呼ばれるものは柿とか林檎とかの果物と甜菜くらいしかない。その甜菜もこちらでは食用とされておらず、専ら家畜の飼料として育てられてた。僕は、料理研究してるなかで甜菜つぼいを見つけ、髭面のおじさん料理長にこれ食べれる？ と尋ねたら。

「そいつあ、甘味がしますが土臭くて食べにくいんですわ。うちの実家だと家畜の餌にしてやすがねえ？」

と教えてくれた。茹でて齧ると確かに土臭くて食べにくいのが、非常に甘かった。これでもしかして甜菜じゃないか？ と思った僕は、これを茹でてゆで汁をひたすら煮詰めてやったら甜菜糖が出来上がった。これも交易品の重要品目となり、僕は当主代行命令でこの製法を門外不出にした。嫌味を言う親戚一同も、砂糖が高級品なのは知って

いるのでそれを独占することは莫大な利益をもたらすのがわかりこれには満場一致で可決し、この時は清酒の時同様に全員大絶賛してくれた。

——話が逸れた。

だから、この先は本当に僕が作った温泉しかない。他は小川が流れてたまに釣りをしたり、野草を採ったりとやるくらいで、本当に山といった感じで開墾したところや開けた場所などないのだ。隠し田の可能性も考えたが、斜面が多すぎて立地も悪いので無理だ。というかここら辺は僕以外で来るものはいない、野草ポイントはこちら以外の場所の方がもつと採取できる。なので、こんな甘い匂いがするのはありえないはず。というか、甘い匂いだけでなく、なんだか頭がボーっとしてくる。酔っぱらったような、フラフラとした感じだ。流石に怪しいし、もしかしたら妖魔が侵入してきているかもしれない。口に手ぬぐいを巻き付けて防いだ、気休めかもしれないが直接よりかはマシだろう。

注意深く進むと、手ぬぐいマスク越しなのに、段々と匂いが強まってくる。それと同じに、こちらが風下なのか、向こうから温泉の湯気に乗ってこっちに流れてくる。温泉の湯気に何かマズイ成分でも抽出されたのか？ 最悪、せつかく掘った温泉をつぶさな

ければならない。それだけは勘弁願いたい、娯楽が少ないこの世界で結構苦勞をしているのだ。ゲームやアニメを遊んだり見れたりすることが出来なくなつた上に、人の上に立つて仕事をして、妖魔なんて人間を殺しに来る連中と命のやり取りをして、結構メンタルにダメージを食らっているのである。だから、温泉が潰されるのは本気で困る。やや焦つた気持ちを持ちながら温泉へ向かつた。すると――

~~~~~♪~~~~~♪

誰かが歌つてる………？ 鼻歌のような、そんなのが聞こえてくる。段々と近づいていくと、もうもうと沸き立つ温泉の湯気の中に人影が見える。誰がいるのかを、目を凝らして確認すると――

——それは、背中からしか見えていないが人間ではないのが一目でわかつた。

こちらに背を向けて岩風呂の温泉に入っているが、その人物は僕より背が高いのか上半身が見えていた。その背中は、立派な筋肉で出来ていた。大部分が伸ばした金髪に隠れているが、そこから見える首回りの盛り上がった僧帽筋と支える広背筋、それにつながる三角筋、棘下筋、大円筋、そして上腕三頭筋は盛り上がりを見せているので、見た目通りなら立派な力を持つてることが一目でわかる。

何より、その人は岩風呂の縁に両肘をかけて背を預けているが、その両腕と背中の間から見えるものは間違いなく胸なので女性であることがわかる。間から見えるだけでも巨乳なのが理解できる。何よりも、その人は女性ではあるが人ではない。その理由が、頭から伸びる角と、彼女の肌が赤色だったからだ。間違いなく赤鬼である。

これは拙い。

鬼は基本的に強者として君臨している。先日僕が戦った人狼と同様に厄介な存在だ。人型は得てして強者なのは共通しているが、鬼は妖魔の中でも悪辣な部類だ。それに、ここから彼女の妖力を感じるが、抑えているつもりなんだろうがそれでも僕より強いというのを理解した。これは、僕が行つても敵わないだろう。ここは撤収一択だ、そう思つてゆつくりと後退したら――

「おいおい、誰だか知らねえが帰るのかい？　ここは温泉は最高だぜえ？」

――バレてる?!

そう理解した瞬間、僕は手に持った荷物を捨ててそこから逃げ出した。だが――  
「逃げるなんて風情がねえ奴だな？」

温泉にいる鬼に向かつて背を向けたのに、僕の目の前にはその鬼が現れた。慌てて後ろを見ると、温泉の鬼が消えている!!　あの一瞬でここまで来たというのか?!

「つたくよお、俺が話しかけてやってるのに無視するなんざムカつく女郎じゃねえか」  
苛立った様子で妖気を放つ、その妖気の強さに足が竦む。後ろを見ていた状態から、恐怖に震えながらも錆びたブリキのようにギリギリと首を前に持つていった。先ほど一瞬でしか見なかつた鬼の全貌が、僕の視界に入ってくる。

仁王立ちしている鬼の背は高い、2 mを優に超えているだろう。桃代姉さんが2 mに匹敵すると思えば、彼女より20 cm以上は高いと思われる。その高い背を支えるように、脹脛と太腿は盛り上がった筋肉が見える。腹筋は見事なシックスパックで堅そうだ。腕を胸のところ組んでいるが、その腕も女性のボディビルのように筋肉で出来ておりながらも、細さを出しているので女性らしさもすっかり維持している。

顔立ちはとても美人だ。苛立って閉じてる口からは、鬼の牙が見えている。シュツとした釣り目は、僕を見下ろし睨みつけている。だが、怒っているような表情でも美人なので見ても飽きることはないだろう。事実、僕は今恐怖に震えているが美人だという感想しか出なかつた。

そして、先ほどまで温泉に入っていたからか、体のいたるところからお湯がしたり落ちていた。それが、夕暮れ時の光と反射し、筋肉の美しさを出している。

何よりも、彼女の胸がとても大きい。桃代姉さんも大きかったが、彼女も負けていないどころか少し勝っているだろう。その巨大な胸の先にある桃色の乳輪と乳首はとて

も大きくも、バランスがとれている。そして、股間には立派な金髪の陰毛が生えており、若干へそまで伸びているのが厭らしさを感じてしまう。その毛に覆われながらも若干見える秘所はぴっちり閉じているも盛り上がっている、柔らかさを感じることも出来る。

敵であるというのに、堂々と全裸を惜しげもなく出しているその姿に、僕は浅ましくも見惚れてしまい少し勃起してしまった。

「つまんねーことする奴だな、コソコソ隠れて覗き見し、勝てないと思ったら即逃げる。お前ら女共はどこまでも嫌な奴らだぜ」

口元を隠しているからか、僕のことを女と見ているようだ。まあ、顔立ちが良く姉さんと妹達から可愛いと言われているからそれで誤解しててもいいけど、平凡な顔なのに女と間違われることに若干の苦みを感じながらもじりじりと後退する。

だが、この後退してる行動で、鬼は怒ったようだ。こちらを睨む顔を更に強くした、漏れ出していた妖気も強まる。足が震えてそれ以上動けなくなってしまう。

「せつかく俺がこうして話してるつてのによお、会話して情報抜くとか勝てなくても立ち向かうとかそういうことしねえのか。臆病者の腰抜けが。もういい、腹が減ったことだしてめえを食ってやる」

そう言つて、こちらに向かおうとしたので身構えた。突風が吹いて背後から前へと向

かつて突き抜ける。すると、鬼は動かなくなった。それどころか、ヒクヒクと鼻を動かして驚愕の表情を浮かべた。何が起きているのか、僕もさっぱりわからなかったがそのままではいると鬼が口を開いた

「お前……………男か？」

先ほどまで勘違いしてたのに、急に言い当ててきた。しかも、もつと匂いを嗅ぐようにしてる。僕が温泉に向かったときは鬼は風上だったが、位置が入れ替わった今では風下だ。それで、吹き抜ける風に乗ってる匂いを嗅いでいるのはわかるが、それがどういう意味してるのかわからない。

すると、鬼は僕の方の一点を見つめ始めた。…………視線が僕の顔を見ていない？ どこを見ている、もつと下？

「なんだあ？ こんなところに男がやってくるなんて、俺にもツキが廻ってきたなあ♡」  
先ほどまで驚いた顔から、僕の下の方をみて、一転して喜んだ顔を始めた。先ほどまで見ていた場所、まさか――

「しかも、お前勃起してるのかよ。嬉しいぜえ、この俺の体でおっ立ってくれるなんてよお♡」

勃起してしまったことがバレてるー!!? 恥ずかしさを感じつつも、後退した。

「おいおい、逃げるなよ。俺と親睦を深めようぜえ？」

すると、スタスタとこちらに向かつて歩いてきた。顔は満面の笑みを張り付け、如何にも友好的な表情をしているように見える。堂々とする歩きは、惜しげもなく体を披露しているの、爆乳がブルンっブルンっとな擬音を立てながら揺れ、前から見える巨尻も揺れているのが見える。益々厭らしさを感じてしまい、勃起する力が強まってしまふ。だけど相手は妖魔だ、僕は指を二本立てて精神を集中し指先に霊力を込めて霊弾を打てるようにする。領内だからって一切武器を持つてこなかったのがここに響くが、武器がないからって戦えないわけではなく。術で抵抗位はできる。

「なんで俺を攻撃しようとするんだよおー？ 俺はお前に敵意なんかないぜえ〜？」  
優しい猫撫で声で語り掛けながらも歩いて距離を詰めてくる、確かに敵意は一切感じない。先ほどの恐ろしいまでの妖気が今では一切感じない。でも、相手は敵だ。だけど、美人であるし話も通じると思って思わず声を出してしまった。

「それ以上こちらに近づかないでください!! 攻撃しますよー！」  
だが、相手は怯むどころか一層喜びの声を出した。

「おほっ♡ようやく俺に話してくれたなあ？ それに、可愛らしい声だすじゃねえか。もっとお喋りしようぜえ？」

そして、歩くスピードを上げた。こちらの制止を聞かずに近づいてくるので、構えた二本指を相手に向けて風属性の霊弾を放つ。これは僕が撃てる術で最速の攻撃だ、緑の



閃光が指先から迸り、銃弾のように相手に向かって進むが――

「えっ!!」

「ふうくん、中々速い攻撃だな。悪くねえ」

――避けられた?!

体がブレたと思つたら、一瞬で横にずれて先ほどまで鬼がいた場所を霊弾が飛びぬける。そこから歩いて来ようとするので、もう一度狙つて放つも――

「くそつ、くそつ、くそつ!」

「はっはっは!! どうしたどうした? 頑張つて当ててみるよおくん?」

指先を相手に向けて狙つて放つ、僕がやるのはそれだけだ。だが、その向けて、放つ、という間に真横にずれて回避行動を差し込まれるので、撃つ前に回避されてるという因果関係が逆転した頭のおかしな状況が出てしまっている。すると、一瞬で距離を詰めて、僕の目の前に来た。

思わず見上げてしまう、そのとてつもなく大きくもマシユマロのような柔らかさの爆乳の間から、鬼の美人な顔が見える。その顔は、一切の敵意がなく歓喜の表情をしている。そして、大きく両手を広げ――

「おろつ?」

こちらを抱きしめようとしたところを、僕は足先に霊力を込めて一気にバク転回避し

た。危ない危ない、妖魔に抱き着かれたら何されるかわからない。それに、妖魔の体液は色々怪しい成分がてんこ盛りだ。シビれたり、毒だったりなどあるが、一番有名なのがエロゲー故の催淫効果である。特に、鬼の体臭は鬼が酒好きだからか吸うと酩酊状態になる上に性欲も感じてしまう。原作で主人公が双月の修羅のエッチにハマるのも、二人の体液やら体臭を飲んだり嗅いだりしたからだ。

なので、先ほどのは一髪だった。

普通に撃つても当たらないので、今度は力を込めてチャージ弾を作る。僕がまだ攻撃しようとしているのを見て、鬼は

「まだ立ち向かってくるか、いいぜ、来いよ」

と歩くのをやめ仁王立ちをした。顔はニヤニヤと笑っている、気に食わないがチャンスだ！ そのまま腕を三回振るってホーミングショットを放つ。これは、動きが素早い鳥型などの妖魔に対して使う誘導弾だし威力も通常より上だ。それはそのまま、鬼の無防備な体に突き刺さった。だが――

「なっ?!」

「ふうん？ まあまあだな、若干痛い按摩つてとこだな」

鬼には全くの無傷だった。顔と腹と胸の正中線上中下の三か所に間違いなく当たったのに、ダメージを与えた様子がない。当たった胸は衝撃でブルンと跳ねたが、傷一

つついていない。

風遁がダメなら火遁だ！そう考え、印を組み切り替えようとしたが、鬼の姿がブレて消えた。

次の瞬間、僕の目の前に現れて――

「ほい、捕まえた♡」

――僕は彼女にがっちりと抱きしめられた。

## 十話 ◆ エロい赤鬼

年齢を重ねて体が大きくなったら、自分より大きな女性に抱きしめられるなんて、想像出来ることは難しいだろう。何故なら、多くの人は自分が子供のころに母親から抱きしめられる以外考えられないからだ。

なのに、この世界に転生してからは、原作ゲームと違ってやたら大きい妹達に抱きしめられ、嫁の姉さんに抱きしめられ、そして今は敵である妖魔に抱きしめられている。

「むほほっ♡小つちやくて柔らげえな♡」

しかもその妖魔は、女の赤鬼で、僕より力が強くて、でかくて、おっぱいがとても大きい。

「男の尻を触るなんて五百年か千年振りかあ？ 女のと違って柔らかさと硬さが同居してるなあ♡」

妖魔は敵である。男は殺し、女は犯す、というのが原作ゲームだった。それと同じ世界だから彼女もそうだと思つて、死ぬかもしれないと思つた。だというのに、彼女からは殺意を一切感じない。感じるのはあふれんばかりの歓喜と発情だけだ。

そして、その発情が厄介だ。

鬼の発情した状態から出ている体臭や汗やらの匂いで、非常にエッチな気分になってしまいクラクラする。それだけでなく、お酒を飲んで酔っ払った気分にもなってしまう考えが中々まとまらない。しまいには、抱きしめている彼女の体がとても暖かいしなやかな柔らかさを感じて勃起が加速する。おまけに尻を揉まれるという、感じたことがない感触に戸惑いと快感を覚えてしまいさらに勃起してしまう。

桃代姉さんはふかふかの布団のような柔らかさだとするならば、この赤鬼は低反発マットレスのような、柔らかさと硬さを両立させてる感じがして気持ちがいい。何より、彼女の爆乳の谷間に顔が埋まり、左右からはおっぱいに挟まれる感触と、そして谷間から鼻腔に入る香りによって、悶々とした気分が高まり、ずっとここに居たい気分になる。

だがしかし、敵だ。

なので、もがいて暴れようとするもびくともしない。彼女は片腕で僕の上半身を、もう片腕で下半身を持つているのでがちりホールド状態だ。そして今でも尻を揉まれている。そしてもがいたのだが、僕が非力なせいか微動しか出来なかったが

「なんだあ？ 俺の胸が気持ちいいの？ ホレホレ、もつと味わっていいぞお？」

と、動いたのもつと感じたいと勘違いしたせいも、もつと抱きしめて胸を頭に挟んでくる。さらに強く赤鬼の淫猥な空気を吸ってしまい、頭が余計回らなくなってしまう

た。

「ん、どうだ？ 俺の胸は？ 気持ちよかったかあ？ ♡」

「ふあ……い……」

「んふふー♡そうかそうか、嬉しいもんだなあ！」

ボーっとした状態での受け答えは、素直に答える以外の考えが思いつかず肯定の返事をしたら、余計に喜んだ。そして、彼女の抱きしめる力が弱まったと思つたらおっぱいに埋まつていた視界が開いて、目の前に美人な赤鬼の笑顔が一杯に映り込み――

「あむっ、ちゅっ、むちゅっ♡」

「んあっ、はえっ、あっ」

――唇を防がれ、舌をねじ込んできた。本来なら抵抗するが、鬼の発情した淫気に当てられて碌に口を閉じれず半開き状態だったので、あつさりと舌が入りこむ。

「んまつ♡男の唾液うまつ♡もつと飲ませろっ♡♡」

「あっ、やあっ」

「抵抗すんなボケっ♡」

抵抗すらねじ伏せるような舌が侵入し、口の中を暴れまわる。彼女が僕の唾液を飲むように、僕も彼女の唾液を不本意ながら飲んでしまう。そして飲んでしまった結果、多幸感と発情が襲い掛かる。何より、彼女の唾液が甘く感じるので拒否できないのがさら

に厄介だった。何より、拒否できないということとは、余計に受け入れて頭が混乱してしまふことになる、そうなると非常に拙い。

「さあ、お前の名前を聞こうか」

予想通り尋問が始まった。発情と酩酊状態に陥れて情報を抜くのが妖魔のやり方だと、設定資料集に書いてあった。今、まさにそれをやられようとしている。

「だ、だめです……言えません」

頭がクラクラしながらも、精一杯拒否する。すると、彼女が目を合わせてきた。彼女の綺麗な瞳をずっと見つめていたい気分になってしまふ。これは、まさか――

「お前の名前を聞こうか？」

「あ、綾絶、ら、頼です」

「ライか、いい名前だなあ♡」

――迂闊だった。瞳術を仕掛けてくるとは。いや、催眠術の中にもそれがあるのは知っているが、力重視な鬼がこれを使うとは思ってもいなかった。簡単にかかってしまった僕自身に怒りを覚える。

「それに、綾絶って言ったところら一带を守護してる名家じゃねえか。もしかして、その男か？」

「はい……」

「へえ、立場はどんなんだ？」

「当主代行を、して、います……」

「おほっ！ いきなり大当たり引いたじゃねえか！」

拒否したくても、たどたどしくも口が勝手に動いてしまう。赤鬼は僕の立場を聞いて、即座に悪い笑顔をした。拙い、とても拙い。この次に考えられることは――

「よし、じゃあ今からお前に『お願い』するぜ？ よく聞いておけよ」

――妖魔は弱みを握るとそこを嫌らしく突いてくる。設定資料集に書いてあったことを、今まさに実践されようとしている。

「俺と一緒に温泉に入れ、そして俺の体を洗ってもらおうか？ その後俺に抱かれてもらおう」

「……嫌だ、と言ったら？」

「ん、拒否するんなら仕方ない。俺は今は諦めよう、だが――」

考えられる僕の弱点、それは――

「――お前に拒否された腹いせに、今からお前の領地を灰にしてやろうかねえ？ 領民を一人残らず皆殺しにしてなあ？」

――やはり、嫌な予感が当たった。そして、目の前の凶妖と思しき強さを持つ赤鬼は、それを実行に移す力があることが理解できる。故に、彼女が言っていることは決して



不可能ではない。

「そしてえ、灰にして皆殺しにした後にお前をぐちゃぐちゃに犯してやる。だが、お前が俺のお願いを聞くのなら、領地と領民には一切手を出さないぜ、どうだ？」

「わ、わかり……ました……」

領地と領民を消された後犯されるのと、彼女の言うことを聞いて犯されるのでは、後者を選ぶほかなかった。何より、領民を人質に取りられては断る選択肢などなく、僕は彼女のお願いを断ることなどできなかつた……。

「よし、じゃあ俺の目の前で脱いでもらおうか？」

「……」

温泉の縁の岩に腰掛け、足で温泉を味わいながらニヤニヤと僕に命令する。片手は丸太のような太腿の上に置いてるが、もう片方は彼女のおまんこにおいてオナニーしながら言っている。僕はというと、温泉の真ん中に立って、服をゆつくりと脱ぎ始めた。服は、麻の筒袖に括袴とシンプルなものだ。下を脱いで、上を脱いで、脱いだ服は温泉の外に放り投げて禪一丁になる。赤鬼は、僕が一枚、また一枚と脱ぐ度に顔に笑みを浮か

べ、そして僕の裸体を見てオナニーしながら

「うっへっへ、いい気分だなあ。さあ、下のそれも脱いでもらおうか?」

元より拒否はできないので、禪も脱ぎ始める。勃起しているからか、布が引つかかって脱ぎづらい。何より、彼女がオナニーをしてそれで出てくる愛液と淫猥な空気が出てるせいで、勃起が全然収まらない。それを赤鬼もわかつているのか、オナニーを見せつけながらニヤニヤしている。そして、禪を脱いで勃起した全裸を見ると、オナニーを激しく始めて

「ふんっ! ぐおっ!! はああ……、久しぶりに達したぜ。いい体してるなあオイ?

♡」

「僕の細い体なんて見ても、面白くないでしょうに……」

赤面しながらも言い返すが、相手はそれすらも楽しみながら

「そんなことないぜえ? 細いが筋肉が少しはあるしな。目の保養になる、特にお前の勃起したモノがなあ? ♡」

「……ッ!」

「おおっと、隠すなよ。もし隠したら、俺は不機嫌になっちゃうぞお?」

からかうような言い方に、益々恥ずかしくなり手でちんぽを隠すが、それをするなど言ってくる。彼女の言う不機嫌が何を意味するのか……、わかっているので隠すのをや

める。それを見て満足気に頷き

「さて、まずは俺の背中を洗ってもらおうか？」

ニヤニヤしながら命令する。拒否が出来ないので、座ってる彼女の背後に回り込み手にスポンジ代わりのヘチマを取って無患子で泡立たせて洗い始めた。

「では……失礼します」

「おう」

背中を洗うために、まずは邪魔になるキラキラと輝く金の長髪をまとめて彼女の肩から前に向けておくと、彼女の背中が目の前に現れる。僕より巨大な背中だ。そこから、背中を洗っていく。まずは、首回りの盛り上がった僧帽筋と支える広背筋をゴシゴシと洗っていく。彼女の筋肉は硬い。だが、鋼のような硬さだと思いきや、指で押すと芯のある柔らかさを感じる。筋肉の節目の溝まで力を入れてこする。後は、三角筋、棘下筋、大円筋、そして上腕三頭筋などもしっかりと洗っていく。ただ、洗っている中で不機嫌になったら困るので声をかける。

「大丈夫……でしようか？」

「んうっ、ふううううう、だ、大丈夫だ。そのまま洗え♡」

どうやら、不機嫌になっていないようでよかった。彼女の声が艶を帯びてるのが何故

かわからないが、それを聞くとこちらでも勃起してしまう。

粗方洗い終えたので、声をかける。

「背中、洗い終えました」

「そうか、じゃあ今度は前を洗ってもらおうか？」

「ええっ?! そ、それは……」

「嫌だなんて、言わないよなあ？」

「うう……、わ、わかりました……」

彼女の背中から前に向かうので、温泉に入って彼女と相對する。

改めてみると、鬼としての強さの風格というものを感じ取れる。勝気な表情もそうだが、全身の隅々にまで行き渡る筋肉は、殴るだけで退魔師をワンパンで殺せると設定資料集に書いてあったが間違いいではないだろう。そして、彼女の美しさを間近で見ている、更には全裸で巨大なおっぱいや隠していないおまんこなどが目に入って僕のちんぼはさらに勃起を強くした。勢いよく上向きになったちんぼを見て、彼女は笑みを深める。

「ふふふ、俺の体に欲情してくれるのは嬉しいが、さあ洗ってもらおうか」

「はい、わかり——」

「おっと、そのヘチマを使うな。お前の手で洗え」

「えっ?! わ、わかりました」

彼女は、座っている状態から両腕を広げて言ってくる。まるで、食虫植物が獲物を狙って開いているかのようなのだ。だが、それをわかっていても僕は逃げる事が出来ない。ので、フラフラしながらも彼女に近づく。まずは、首回りを洗った。首回りも筋肉がしなやかで厚く、そして太い。生半可な斬撃では、首を切ることにすら難しいだろうと思つた。

次に、両腕を洗い始める。両腕も、肩甲骨から下についてる上腕二頭筋三頭筋も盛り上がって硬い。それらの筋肉を溝まで洗い、たまにカリカリと溝に爪を若干立てるようにして洗う。爪を立てて洗うのは、溝まで汚れてて何か言われるの嫌だなーって感じでやってたのだがその度に熱い吐息が鬼から漏れてるのが非常にエッチで勃起してしまふ。

次は足だ。丸太のようなぶつとい太腿……………ぶつとももに手を這わせるようにして洗うと

「んんう……………♡ふうう……………♡」

「だ、大丈夫ですか?」

「気にするな、そのまま洗え♡」

熱い吐息を吐いて大丈夫と言つても不安しかない、猛獣の唸り声にビクビクするよう

なものだ。

太腿に手を這わせて洗うと、太さもそうだが筋肉の凄さを理解できる。大腿直筋の盛り上がり、それを左右に挟むようにしてある外側広筋と内側広筋の形の良さに見惚れる。そこを洗いながら膝、膝裏、膝下と洗って下に向かう。膝より下の腓腹筋こと脹脛を持つようにして洗う。そうなると、足を持つことになるのだがその足の重さがずつしりとした重みで持つのが辛い。この重さと筋肉の硬さなら、足の踏み込みだけで地面陥没など起こしたり、退魔師の胴体を真つ二つにするシーンなどもあつたが納得するほかない。最後は足先を洗っていき、足指と指の間まで手を這わせて隅々まで洗う。それがくすぐったいのか気持ちいいのかわからないが、先ほどより熱い吐息を吐いてきてこっちはビクビクしている。

片足が終わったので、もう片足も同じようにして洗う。両足が終わった次は足の付け根、股の部分だがここのおまんこには触れず、その周りの部分にだけ手を這わせて洗う。初めて見る女性のおまんこが目の前にあるという事実が勃起が隠せない、何より、先ほどから彼女の愛液がひっきりなしに出ているせいか、甘い匂いと淫猥な空気があるのでバキバキに勃起して痛い。

両足両腕が終わったら次は腹だ。

腹筋に手を這わせて洗う。腹直筋、所謂シックスパックスの部分だが、見事にくつきり

分かれており筋肉に疎い僕でも美しいと言わざるを得ない。その割れた部分に手と指を這わせて溝を洗い、へそ胡麻の部分まで指を入れて洗う。ただ、お腹を洗つてゐる場所の真上に爆乳があつて、そこには手を触れないようにしている。女性にとつて大事な部分だし、いきなり触つて不機嫌になつても困るからだ。

そして、今まで洗つた部分もそうだが、彼女の全身の筋肉の凄さに思わず——  
「凄いな」

——と漏らしてしまった。それを聞いた鬼は

「なんだあ？ 俺の体に興味あるのか？」

「ええ、凄い筋肉だなあつて」

単純な称賛を込めて言う。それに気をよくした鬼は

「どんな風に凄いと思つた？」

「単純に僕より力があつて、鍛えられていて凄いなと。見た目も良くて格好いいと思ひました」

正直に答えた。実際問題、僕の近くにいる女性達よりも筋肉があるのは言うまでもないが、見た目のバランスもいいのだ。ボディビルみたいに不自然に盛り上がつてゐるわけでもないし、貧相な体の僕からすれば、単純に格好いいとさえ思えた。満面の笑みを浮かべた鬼は

「嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。案外可愛い奴だなお前」

と、頭を撫でてきた。いきなりだったが、別に悪い気もしない。

これで、前を向いたところはほとんど洗った。

だが、意図的にある部分だけは洗ってなかった。

「あの、ほとんど洗ったんですが、もうよろしいでしょうか？」

「確かに、ほとんど洗ったが……。あと二か所、洗ってないところがあるよなあ？」

そう言つて、おっぱいとおまんこをそれぞれ指差す。

「ここをしっかりと洗ってもらうぜ、まずは下からだな。お前の口で洗ってもらおうか？  
？」

エロゲーみたいなことをやってきた。

いや、原作がエロゲーだからそうなんだけど、リアルでこれをやられるとは……………。  
しかも、相手女性だし。なんか、転生してから女性がやたら強いしデカいなどは思っていたが、もしかして僕はどこかで勘違いをしている可能性があるのではないか？ 前々から思ってた疑問がだんだんと膨れ上がってくる。綾絶つて苗字と波羅つて特徴的な名前からゲーム世界だとは思ってるが、根本的な世界観が……………なんといか貞操が違ふような——

「おい、早くしろよ」



赤鬼から強く言われたのではっとして、彼女の股間の前で跪く。その様子をニヤニヤしながら見る赤鬼に上目遣いで見るが、すぐに視線を目の前の陰毛が生い茂るおまんこに移す。毛は手入れをしておらず見事に生えており、若干へそまで伸びているところからしいと思つた。というのも、確か原作でも鬼は陰毛も腋毛も髭も生えていたので、それと似たようなものかなと思つただけだが。

だが、こうしてみるおまんこに動悸と興奮が止まらない。前世は全く女性と関わり合えないし、付き合うこともなければ風俗に行つたこともない趣味のみで生きてた人生だったので、初めて目にすることになる。なので、敵に領民と領地を人質に取られて命令されてるといふ屈辱的な現状に反して、僕は興奮しっぱなしだった。

ゆつくりと、おまんこに舌を伸ばして当てる。

「んひっ?!」

「だ、大丈夫ですか?」

「だ、大丈夫だ、そのまま続けろ♡」

いきなり跳ね上がるように体をのけぞらせたのでビックリして尋ねるも、大丈夫なようなのでそのまま続ける。大陰唇の周りまで毛が生えているが、舌を伸ばして当てると柔らかい感触がする。そこをなぞる様にして舐めると、愛液が流れてくるので、それも

舐める。すると、体が熱を帯びたように熱くなり勃起も強まる。そして、初めて舐めるので味や匂いがどんなものなのか不安だったのだが、苦くも不味くもない。味はしないはずなのに甘い匂いがあるのでそれで脳が誤解しているのか、甘く感じて舐めてしまいたいと思ひ、更に舐めとる。

その度に、赤鬼がビクンと体を震わせるが、奉仕しろと言われたので気にせず舐める。全体を舐めるようにしたら、今度は小陰唇に舌を伸ばして舐める。鬼は性欲が強く女を犯しまくるのでちんぽは赤黒い立派なものだ、とは原作ゲームの説明だ。なので、女性の赤鬼である彼女も男を犯しまくるからおまんこの色も黒いのかなって思ったら、全く使われていないようなサーモンピンクだった。といつても、僕は童貞だからそこらへんのことはよくわからないし、変色してないだけかもしれないと思つて舐める。

確かエロ本で舌で女性をイカせる男の絶技みたいなので、舌で女性の性器を円を描くように舐めるのがいいと描いてあつたっけな……。それを思い出しながら、見様見真似でやつてみる。一周するように舐めて、上下にこするように舐めて、漏れ出る愛液を音を立てて吸い取る。漫画のテクニシャン男の技をそのままやってるだけで、それが通用するとは思えないが、かと言って下手くそだと言われて不機嫌になつてしまつたら自分の命と領地領民が危ないので、とにかく奉仕した。

もつと鬼が仰け反るようになり、愛液が洪水のように溢れ出て「うおっ♡ほおっ♡」と

か「ぐおっ♡おうっ♡おほおっ♡」とか聞こえるが、愛液を舐めることで僕自身興奮してるので目の前の奉仕に夢中になっていた。

「ちよ、ちよつとやめ——おっほおっ♡」

相手が舐めて奉仕しろつて言ってるからその通りにしてるのに、腰がヘコヘコ動いてやりづらくてしょうがないので、彼女の足の付け根に手を置いて押さえつけて顔面を押し当てるようにして舐める。最後にクリトリスを舌で円を描くようにして舐めて、トドメとばかりに口で吸いついた。

「ぐおおおおおおおっ♡」

甲高くも野獣のような雄叫びに聞こえる嬌声を出しながら、おまんこから激しく愛液が飛び出して僕の顔全体に飛び散る。

汚いとは別に思わなかった、これが悪臭など出してたなら吐いてたかもしれないが、悪臭など一切なかったし甘い感じがしたので別に気にしなかった。

鬼は息も絶え絶えになりながら、こちらを見る。僕は、顔を手で拭いつつ口についた愛液をペロツと舐めとって

「おまんこの洗いが終わりました、満足しましたか？」

「あ、ああ……………。実に最高だったぞ♡」

どうやら満足したようであった。何分僕は素人で童貞だし、先ほどまでやった奉仕

もエロ本エロゲーの男優のやったことの見様見真似だったので、不安だった。だが、どうやら満足してくれたようでほっとしている。

「にしても、お前凄い上手いなあ。今まで何人の女を抱いたんだ？」

「どうやら、僕が何人も相手をしたことがあると勘違いしているようだ。だけど、僕は彼女が初めての相手なので

「いえ……………。今まで誰も抱いたことはありません」

「何っ?! じゃあ童貞か?!」

「は、はい……………。お恥ずかしながら……………」

前世の感覚もあり、女性から童貞と言われると恥ずかしい気持ちになる。だが、赤鬼はそんな僕に対して

「そうかそうかつ♡じゃあ、俺が初めての相手になるんだなっ?♡」

と、溢れんばかりの喜びを出してきた。

そして、鬼は息を整えると、僕の体を両手で掴んで彼女の太腿の上に載せるようにした。体勢的には、足を開いた彼女に抱き着いているような感じになる。鬼は、僕を抱きしめてその爆乳の間に挟みながら頭を撫で始める。

「んふふー、俺が初めての相手だなんていい拾い物したぜえ♡ にしても、お前は本当にスケベな野郎だなあ?♡」

「そ、そうでしょうか？」

「ああ、誰も抱いたことないのにあんなに奉仕する男がいるなんて聞いたことがねえ。それに、俺のアソコをおまんこって言うのも初耳だが中々語感が良くて気に入った。アソコがおまんこなら、お前の魔羅はなんて言ってるんだ？」

「えつと……、ちんぽとか……」

「そうかそうか、それらやさつき奉仕はお前が考えたのか？」

「い、いえ、その、艶本で……」

エロ本で学んだというのは嘘ではない。

「そういうので勉強してるなんて、特別にスケベな奴だなあ♡」

そう言うと、両手を僕の尻に当てて持ち上げるようにする。足を開いた彼女に抱き着いている状態では、尻を支えるものがないので抱き着かないとそのまま開いた足の間に落ちてしまうのだが、彼女の手が椅子代わりになっているので、抱き着いた足を緩めて彼女の手体重をかけることが出来て一息ついた。だが、一息ついてる間もなく――

「じゃあ、最後は俺の胸を洗ってもらおうか？」

――最後に洗ってない部分を指示される。腹筋を洗ったときから存在感のあった爆乳。大きいのにだらんとぶら下がってるのではなくしつかりと形を保つてることからクーパー韌帯も強韌なのだろう。片手を置いても溢れるくらいの大サイズの胸を洗う、

その胸を触れるという行為にドギマギする。だが手元に洗剤がないので――

「あの、無患子を……………」

「あ？　じゃあ、洗わなくていいわ。代わりに按摩しろ。さつきお前に攻撃されて痛かったからなあ？　♡」

――全くのノーダメだった癖に白々しい嘘をつく。だけど、拒否できないのでやるしかない。恐る恐るといった感じで、僕は赤鬼の爆乳に手を置いた。

むにゅううううううう♡

――うお……………つ、でつか……………、やわらかつ……………♡

それ以外の感想が思い浮かばなかった。

妹達や、桃代姉さんに押し付けられた胸とは違い、自分自身の手で触るという行為が、敵に脅迫されてやらされるといふ屈辱が。何より自分自身が性欲に負けて赤鬼の爆乳を触つてすることに、違和感も拒否感も感じないということが。それら全てが混ざり合って、勃起をより一層強くする。

「俺の胸、気に入ったようだなあ？　♡」

赤鬼はニヤニヤしながら、勃起したちんぽと僕がおっぱいを触るのを見ている。その

顔は、勝気で見下してるような表情をしてるが、口からは熱い吐息がひっきりなしに漏れていて、やせ我慢してるようにも見える。

「ほらほら、もつと按摩しろよ」

言われるがままに、おっぱいを触る。温泉で温まつてるのもあるだろうが、適温からやや暖かいくらいにまで温まつたお餅を触っているようだ。それでいて、指が沈むもすぐに反発して形は元に戻る。触っていて一向に飽きない。ずっと触っていられる。もにゆもにゆと触っていると、おっぱいの先端の乳首がだんだんと硬くなってきた。そこにも手を這わせて、円を描くようにゆっくりと回して揉む。

前世の童貞女性経験なしの感覚もあり、初めて触るおっぱいに僕は既に夢中になっていた。

「いい感じだ、それにそんなに夢中になってくれるなんて嬉しいぜえ♡」

「はい……、おっぱいがとても柔らかいです……………」

「ほう、艶本じゃ胸をおっぱいって言うのか。良い響きだなあ♡」

そう言うと、片手で僕の尻を持ちながら、僕の頭を撫でてきた。僕の体が彼女に比べて小さいのと、彼女が大きいのも相まって、片手で尻を持つことが出来るようだ。その彼女の優しい手つきと、愛液を飲んだことによる興奮、そして先ほどからのおっぱいのマッサージに、僕は我慢が出来ずに目の前の揉んでるおっぱいにしゃぶりついた。

「おっほっ♡」

いきなりしゃぶりついたことによる驚きと興奮で、赤鬼が艶声を出す。だが僕は、そんなお構いなしに吸い付いた。

じゅううううううううううう……♡

「ううう♡うーお……ううう♡……うっ！」

出るはずがないのに、ひたすらに音を立てて吸う。赤鬼から喘ぎ声が聞こえる。  
れるれるれる……♡

「お♡お♡っ……ふ……うう……っううう♡うっ！」

乳首の周りを円を描くように舌を這わせてマッサージュする。

じゅっ、じゅぶっ、じゅずっ、むぶっ♡

「ぐう♡ううーふう……♡ー！」

今度は頭を爆乳に前後に押し付けるようにしておっぱいを吸う。おっぱいは僕の頭みたいに大きいので、頭を押し付けるとそれでひしゃげて形を変えるのも厭らしかつた。

エロ本の男優がやってるような動きだが、頭の中は無我夢中でおっぱいにしゃぶりつくことしか考えてなかった。自分でもなんでこんな動きをしているのかわからなかったが、性欲に支配されてるからだとな得するほかない。



片胸をしゃぶったら、もう片方の胸も同じようにしゃぶる。

おっぱいを持つのだが、どろりと溶けるようなメロンを持つ感触でとても重い、だが柔らかい。その数キ口もあるようなおっぱいを、両手でよいしよと持ち上げながら下品に音を立てて吸いまくる。

赤鬼も感じているのか、吸い付いている僕を抱きしめて頭を胸に押し付けるようにした。それが大変気持ちよくて、僕も足を彼女の腰に回してがっしりとしがみついておっぱいを吸う。

じつくり吸い終わったら口を離して、彼女のおっぱいの谷間に顔を埋めて息を整えた。そして、整え終わったら両手で彼女のおっぱいを持つようにして、それを自分の頭に挟み込むように押し付けながら彼女の谷間に舌を這わせた。完全に自分本位の行動であったが、赤鬼は嫌がる素振りを見せないどころか、もつとがっしりと抱きしめるようにしてきたので、それが自分を受け入れてくれるのだと思って、こちらも抱きしめ返した。性欲に支配されてるのか、敵であるのに心を許してしまっていることに気づかなかった。

さつきから勃起しっぱなしだったちんぽの先からはカウパーが溢れ出てしまっている。それに匂いで気づいた鬼は、抱きしめるのをやめると僕の体を持ち上げそのまま上に挙げて――

——じゅずうううう♡ちゅうううううう♡

「はあああああつ!!」

——僕のちんぽに吸い付いた。持ち上げられた体は、彼女の腕を高く上げた状態でぶら下がる。すると、僕のちんぽが彼女の顔面に来ることになる。その状態から、彼女は吸い付いた。初めてされるフェラに、腰が震える。

「——はあつ♡勃起したちんぽ♡うまつ♡もつと液出せつ♡♡」

胴体を持ち上げているため身動きが取れない、その状態から彼女が僕の胴体を動かす彼女自身も舌を動かしてちんぽに刺激を与えるために射精感がこみあげてくる。そのこみあげてくる快樂に負けて、射精した。

びゆるるるるるるるるるッ!

「ほうあああああああ………」

情けない声を漏らしながら僕は射精する。今まで勃起して我慢してた分、ダムの決壊みたいに勢いよく彼女の口に流し込んだ。足をピンツ!! と伸ばし、射精の快樂で目の前が真っ白になる。

「んうむふううううううッ!!♡♡」

出した精液を残さず飲み込む赤鬼、そこからさらに吸い付いて、尿道の残り汁まで吸い尽くそうとしてきたので、その快樂に思わず彼女の頭を掴んで腰を押し付けた。

「ああ……ああ、出……………！　　る……………うう、！」

「じゅずう、ず……………う……………つ！　　う、つ！　　うまああ……………つ♡子種うまつ♡」

情けない喘ぎ声を出しながら射精し続ける。

彼女も、僕の腰を掴んで自分の口に押し当てるようにしているので、更に快樂が増す。しばらくそのまままで射精して、ようやく射精が終わると彼女がちんぽから口を離し。僕の体を太腿の上に置いて抱きしめた。

「はああっ♡お前の子種汁美味かったぞ♡あんなに射精してくれるなんて、女冥利に尽きるってもんだぜえ♡」

「ふあ……………♡……………」

彼女のおっぱいに抱きしめられ頭を撫でられてるので、僕はぼーっとしながらも抱き着き返す以外の考えがない。

「だが、口で飲んだのはもったいなかったなあ……………。せめて俺の胎の中に出してくれたのなら……………おっ？」

残念な口調をした彼女が、ハグから解放して僕の体を見た。もっと言うと、僕の股間を見た。

「おいおいおいおい……………、お前まだ勃起してくれるのかよ……………!!」

まだ勃起をしている僕に喜びの声を出す。どうやら、一回の射精で終わるものだと思う

てたみたいだ。鼻息を荒くして大喜びしている。すると、その状態から僕のちんぽを手に取り、自身のおまんこへと当てた。初めてするセックスに、心が否応にも高まる。

挿入される前に、赤鬼は僕に顔を向けて言った。

「今からお前の童貞を貫うが、覚悟はいいか？」

「は、初めてですので優しくお願いします………」

「善処するぜ……んおっ♡」

「はあああああつ!!」

言い終わると、彼女は挿入した。そして、そこからさらに僕の尻を掴んで奥に押し込むようにした。

初めてのセックスは、頭がどうにかなりそうだった、という感想しか出なかった。

お湯よりも熱く、自身の手でやるよりも気持ちが良い。にゆるにゆるとした感触で、

蕩けてしまいそうだ。何よりも――

「ふうっ おおっ! うう♡うっつ、ぐううふううっ♡♡♡」

「はあつ、あつ、うあつ!!」

——この、僕よりも大きな女性に抱かれているという感覚が、今まで経験したことのない快感をもたらしてくれている。赤鬼が、とても美人なのも本音を言うなら嬉しいところだった。彼女が僕のちんぽで喘ぎ声を出してくれている、という事実にも嬉しく



赤鬼が僕の尻を掴んで、自身のおまんこに深く刺さるように押さえつけた。それによりさらに射精し、彼女の胎の中を満たす。僕はというと、初めてのセックス、初めての射精、そして初めての中だしという快感に、目の前が真っ白になり頭がスパークした。とめどなく流れる精液、それを貪る妖魔の膣。赤鬼の膣は、力強くも密着して一滴も精液をこぼさぬようにとみっちりとしている。そして、ポンプのように脈動し始めた。

「ひいっ!! あひっ、や、やめて!! まだ、出てる!! 出てるから!!」

「うるせえっ!! っ 出せっ!! もっと出せっ!! っ 孕んでやるから出せっ!! っ っ」

そのポンプのような脈動による快感が、また違った未知の快感となり、あまりの快感に逆に恐怖を覚えてイヤイヤと暴れたが、それを力強く抱きしめおっぱいの谷間に押し付けて黙らせられる。下半身の快楽と、上半身と顔が感じる女性の体の柔らかさ。そして、淫蕩な空気に抱きしめることで僕自身を受け入れてくれるという錯覚で、より射精し始める。

その射精すらも、僕の尻を掴んで押し付けておまんこに蓋をするかのようにする。僕はまだ、赤鬼の体に全身を使って抱きしめて快楽を只々享受していた。

まるで、終わらないような射精が終わると。彼女もおまんこでそれを感じ取ったのか、抱きしめていたのを緩める。おっぱいから解放されて窒息しかかった僕は、解放されたことにより空気を求めて顔を上に向けて口を開いた。それをまた塞ぐように、彼

女は僕に舌を絡ませてキスをしてきた。

「ちゅっ♡うむっ♡るれるおっ♡♡ た、たくさん出したな……………」

「は、はひ……………」

目を合わせる。赤鬼の表情は、肌が赤いものにも関わらず頬を染めてるのがわかる。そして、顔は慈愛のような表情をしていた。そこからさらにまたキスをしてきた。

「はむっ♡うむっ♡むちゅっ♡♡ お前のこと気に入ったぜ……………」。男なのに二回も出せるなんてなあ？♡」

「そ、そうですか…………？」

「ああ、だから俺の男になれ。毎日抱いて子を産んでやる」

あまりにも熱烈なプロポーズ。もしこれが前世だったならば、二つ返事だっただろう。相手が美人だから猶更断る理由はない。

「だ、だめです……………。僕は、妖魔であるあなたの男になりません……………」

だが、この世界で妖魔は敵だ。その男になっちゃったらどうなるか……………。原作者主人公の波羅が孕み袋になったり、彼女に限らず他の女性キャラも孕み袋になったことを考えると、僕も種馬として地獄の日々が待つてるかもしれない。それに、妹達と嫁さんを守らないといけないので頷くわけにはいかなかった。なので、既に彼女に中出ししてしまって情けないことこの上ないが断った。

赤鬼は、少し考えたような表情をして上を見た。

「ん——………………。まあ、そうなるか。しゃあねえなあ、俺はあまり術が得意じゃねえんだけどよ——」

嫌な予感がある、上を見た赤鬼は下を向いて、僕の目を覗き込んだ。まさか——

「——オラッ！ 催眠!!」

「ふうふうふうふう………………。いい湯だなあ………………」

温泉の中にいる赤鬼は、極楽極楽と言った表情で温泉を堪能していた。

岩の縁に両腕を伸ばしておいて、頭は上に向けて空を見上げるようにしている。ただ、温泉に対して彼女の体が大きいせいも、温泉のお湯は全身を浸かるようにはなっ



おらず、伸ばした全身の内上半身は出て半身浴のようになっていた。夕暮れ時から今では若干暗くなり、紺色に染まりつつある空には、白い星々がまるで自分たちの番だというように段々とその存在を表し始めた。その様子だけ見るならば、温泉を楽しむ赤鬼というだけにしか見えないだろう。だが、その様子は少し違っていた。

「どうだあ？ 気持ちいいかあ？」

♡」

彼女は、顔を下に向ける。

その体には、少年が張り付いていた。赤鬼の体が大きいせいとか、張り付くというよりも乗っているというのが正しい。全身を使って、女性である赤鬼に張り付いており、腰を一定のリズムで振っていた。お湯が体に浸かりながら腰を振るので、温泉のお湯は波立が止まらない。

「あつ、ふつ、うつ、ふつ、き、気持ちいいです♡」

「そうかそうか、姉として嬉しいぞお？」

♡」

「あつ、あつ、ね、姉さん♡精液、で、出ちやう♡」

「いいぞいいぞ♡沢山出せ♡姉である俺を孕ませろっ♡」

「んんんんっひいいい！ いいい！ いいいっ♡」

「ぐおっ♡♡またこんなにくさん出しやがってっ♡♡愛らしい奴だなあ♡」

少年の射精を受け止めて、歓喜の声を赤鬼は上げた。

先ほどのセックスの場合、彼女は少年の尻を掴んで押し当てようにした。だが、今では両腕は完全に岩の縁に置いている。まるで、少年が絶対に外に出さないことを知っているかのようだ。そしてそれはその通りで理由があった。

「ああ〜〜〜マジで幸せだなあ〜〜〜、よさげな温泉見つけたと思つたら、こんないい男がやってきて、可愛い上に、性欲も強いとか♡おまけに——」

そう言うと、彼女の体に張り付いて射精した余韻で息を整えてる少年の頭を撫でる。その撫で方は、親愛の表現に他ならない。

「——こいつが、滅茶苦茶催眠に弱いなんてなあ？ ♡」

そして、哄笑した。事実、笑いが止まらなかつた。

赤鬼自身、自分は力は自慢できるが術は自慢できるわけではなかつた。使えないことはないが、天狗や狐の阿婆擦れ共に比べたら劣る。だというのに、自分に種を付けているこの少年はこれほどまでの優良物件なのに催眠に弱い。それが、まるで人間たちがやつてる富くじに当たっているかのような幸運を引き当てたようだと思つた。

退魔師達は、男を守る。それは、男が自分たち妖魔に捕まったら種馬として産ませる道具になってしまふからだ。こちらも、雄の妖魔で雌の退魔師共を孕ませることはできるが妖魔の大半は雌だから数は少ない上に効率が悪い。何よりも、退魔師共は最悪自爆するのだ。それも潔いと言わんばかりに。

遙か昔の『人妖大戦』の時の帝の呪いで自分達妖魔は敗北に追いやられ、その呪いが今でも尾を引いており、自分たち妖魔はこのままだと死滅するだろう。というのが赤鬼達の長老が言つてたことだった。特に、人類たちは徹底して妖魔に抵抗してくるばかりでなく、妖魔に捕まったら数を増やされるというのをしつかり教え込み、真つ先に自決の術を覚えさせているほどだ。

だが、自分に種を出してくれるこの少年は違つていた。

退魔師であることには間違いないが、捕まえたら自爆するかもしれないと冷や冷やしていたがその心配がなかった。それどころか、自分の体に欲情してくれるほどスケベだった。その上、当主代行という高い地位にいるせいも、脅したらあっさりと従つた。それから先ほどのように体を洗わせたが、まさに数百年以上生きていた中で、これほどまでの快楽を味わつたことがないと言えるほどの極楽だった。

退魔師共は、自分達妖魔を嫌う。まあ、自分たちが連中と殺し殺されをずっと繰り返していたのだからさもありなん。

だが、この少年は違つた。大抵の退魔師は自分達妖魔と会話しようとしないが、彼は会話してきた。こちらが脅してきたからというのもあるが、それでもその後も会話し、自身の命令に従い、あまつさえ自分の体に欲情しているなど思つてもみなかった。

そして、体を洗わせたなら、極楽が待つていた。

自分の自慢の筋肉を丁寧に洗い、溝までしつかりと洗ってくれるとは。更には、こちらに声をかけて大丈夫かどうかの確認までしてくる心配り。そして、洗っている最中でも存在感を表していた勃起ちんぼ。女として生まれて、自身の体に欲情してくれて喜ばない奴はいない。自分の筋肉まで褒めてくれることも、赤鬼からしたら高評価だった。

さらには、赤鬼は自身の秘所を舐めるように指示したこと。これ自体は賭けみたいなものだった。男は女より性欲が強くない、こういうことをするのを嫌う。何より少年は敵対する退魔師だった、故に自身の命令に従わない。従ったとしても、吐くくらいはするだろうと思っていた。まあ、吐いたら吐いたで置ききして催眠をかける予定だったが。

だが、この少年は従うどころか、赤鬼が今生で感じたことのない極楽を味わせてくれた。赤鬼自身、まさかあそこまで熱心に自分の秘所を舐めてくれるとは思ってもなかったのだ。まるで、初めて自慰を覚えた少女のように情けない声を上げて絶頂した。しかも、自身の潮吹きで少年の顔を汚した。

絶頂して息も絶え絶えになりながら少年をみると、少年は潮吹きで顔が汚れたにもかかわらず嫌な顔一つせず拭い、あまつさえ口についた液を舐めとる仕草までしてくれた。赤鬼はそれを見て、もう子宮が疼きつばなしだった。ここまでスケベな人間がいることにも驚いた。

その後も、少年に色々聞いたが、自身が艶本で学んだと言つてたことも更にスケベだと思ひ評価点だった。何より、おちんぼとおまんこという語感が大変に良い。そして、こんなにもスケベなのに童貞とは!!! この時ばかりは、赤鬼は嫌つてゐる神に感謝の祈りを捧げたほどだ。

そして、仕草も体もスケベなだけでなく、子種まで美味だった。何よりも、複数回出せるという事実。男は一日に何度も出せない、だというのに自身に種を出しているこの少年はもう五回以上は出している。ここまで出せる男など、聞いたこともない。その後も、少年の童貞を奪ひ、中に種を付けてもらひ、その後も何度も出してくれるなど。まるで、神から遣わされた神の使いのようだ。と、大陸の宗教のようなことを赤鬼は思つたほどだ。

その後、自身は術に疎いが駄目元で催眠をかけてみたらあつさりとかかった。最初に名前を聞いた時の瞳術は軽い物だったし、少年が自身の体臭を吸つて頭が酩酊状態だったからだと思つたが、どうも違うようだった。その後も、抱きながら尋問をして、この温泉を少年が作つたことやら、少年の今までの活動も全部とは言えないがある程度聞き出せた。終いには、自身の夢だった弟を持つことが、少年に自身を姉だと言わせるよう出来たことが赤鬼にとっては嬉しかった。

だが、気になる点はある。

「なあ？ 俺はお前の何だ？」

「ね、姉さんです」

「そうだ、じゃあ姉である俺と一緒にきてくれるな？」

「だ、駄目です。僕は行けません……………うつ、出るっ!!」

熱い放精を受け止め、優しく少年の体を撫でながら赤鬼は思う。

どうも、一定方向の催眠耐性はないに等しいが、逆方向の耐性はあるな、と。自身は術に疎いが、こんなことをしているのは誰かが手を入れたからだというのはわかる。手を入れないなら催眠自体に耐性がついてるはずなのだ。だというのに、この少年の耐性はちぐはぐだった。

「まあ、もつとも……………。持って帰りたいが今は手放すしかないんだよなあ……………」

そう独り言ちる。赤鬼の姉妹と長老が言っていたことだ、あまり目立つようなことはするな。自分自身があつちこつち行って面倒起こしてるからというのが理由だが、かなり釘を刺されたため、この少年を持ち帰って自身の、いや、一族の男として子供をたくさん作りたい。だが、少年が綾絶家の当主代行という高い地位にいたためそれが出来ない。下手すると、姉妹達がやろうとしてる計画がパーになる可能性がある。この少年がそこらの村の者だったならば遠慮なしに持ち帰ったのだが、彼の地位が高い位置にあつ

たのと、赤鬼が釘を刺されていたためにそれが上手くかみ合つて防がれた状態になつていた。

だが、持ち帰れないが仕込みはできる。故に、快樂で頭を溶かして催眠をした。自分が出るのはここまでだが、以降は姉妹にやつてもらおう。

そう決めた赤鬼は、少年の体を名残惜しそうに引きはがすと、少年の体を持つて両腕を温泉の岩縁に引つ掛けるようにした。この後起きたのなら、少年は温泉で寝落ちから起きたようになるだろう。記憶方面もいじる必要があつたが、その催眠も自身の稚拙な術でも出来るくらいに催眠抵抗がなかつたので出来たのも幸運だつた。

「じゃあな、ライ。また今度、お姉ちゃんと愛し合おうな♡」

赤鬼は服を着て、その場を立ち去る。

そして、立ち去つて山を二つ三つ超えた後、うっかりと思ひ出した。

「いっつけね、ライの名前は聞いたが、俺の名前をライに教えてなかつたな」

セックスに夢中になつていたのですっかり忘れていた、だが、よく考えたら催眠で記憶を消したのでそれで自分の名前を憶えていたらおかしいだろうということになるので、赤鬼は良しとした。

「——さあ、とつとと里に帰つて、俺の姉妹とババアに報告するかな♪」

この赤鬼は、頼が初めて見た時に感じたように確かな強者であつた。その赤鬼の名前

は、かつて『人妖大戦』で名を馳せた凶妖であり――

「――特に蒼月は喜ぶだろうなあ、俺らに弟が出来るってことによお♪」

――双月の修羅の片割れの『紅月』という。

「――んあ?」

――目が覚めた。どうやら寝落ちしていたようだ。温泉が気持ちよくて寝落ちするのは、転生しても変わらないんだなと思った。だが――

「あつれえ……? いつ温泉に入ったっけ?」

――どうも記憶が飛んでる。温泉に向かったまでは覚えているが、その後温泉に入ったところが抜け落ちてる? いや、温泉に入ったのは確かなんだが、入ってそのまま過ごしてただけだったか? と思った。

「うーん………。ま、いつか」

時間が予想よりも飛んで暗くなっているのは、自身が寝落ちしたからだろう。前世も



疲れて寝落ちしてすっぼり記憶抜けていたことがあったなと思いついて、それ以上考えてもしょうがないかなとおもい、温泉から上がって。山道を通って帰宅した。

帰宅したら、なんだか物々しい様子になっていた。僕の姿を確認した兵がやってくる。

「頼様！」

「うん？ 何があったんだ？ 状況を教えてくれ」

「はっ、先ほど野獣のような咆哮が山から聞こえたとの報告がありました。もしかしたら、妖魔ではないかと思って捜索隊を編制しようとしているところですよ」

そう言うて兵が指を差した方向は、僕が温泉に入っていた場所だった。

「そうなのか、僕はあっちから来たけどそのような声は聞こえなかったけどなあ……」

「そうですか……ところで、何をしてらっしゃったのです？」

「ああ、見回りだよ。最近収穫で忙しかったからね」

温泉のことをまだ教えるわけにはいかないので、とりあえず誤魔化す。実際僕は領内を見回っているのだから不自然ではない。兵士もそれを知ってるのですぐに信じた。

「そうでしたか、見回りありがとうございます」

「うん、とりあえず妖魔が出てくるかもしれないなら他人事じゃないから搜索隊を編制しようか、案内してくれるかい？」

「はっ、こちらです」

その後、兵士の案内に従って出陣の様子をしてみるとところに顔を出し、編成隊と共に一緒に搜索したが妖魔はいなかった。狼の遠吠えということにした。尚、搜索する際は僕の温泉の方には行かないようにし、僕が先頭に立つて行ったために誤魔化すことが出来た。

数日後、上洛の準備を整えた。これから一週間後に都に向けて出発するが、その前に桃代姉さんに呼ばれたので姉さんに会いに行った。

「頼君、あのね、貴方をお願いがあるの」

# 十一話 砂糖とか交易品作るのは転生モノのお約束ですよ ね

初秋に入つて領民総出での収穫も終わり、そしてそこから税の徴収やら領民の陳情、交易品の選定や都への上洛の準備などが終わり、もうそろそろ上洛が始まることで上洛に向かうメンバーの中にはソワソワしたりしてゐるものもいた。だが無理もないことだろう、都は扶桑国ふそうこくの中心であり、人、物、金が集まる場所であり、娯楽や文化の中心である。娯楽の少ないこの時代では貴重なもので、楽しみにしているのも当然なのだ。

妹達も初めての都ということで、訓練もそこそこにしながらも三人で何しようか何をしようかななどの話で盛り上がつてゐる。かくいう僕もちよつと楽しみにしており、三人の妹達もキラキラした目で言ってくる。

「兄様、都に行つたら歌舞伎なるものを是非とも見てみたいです」

「私もみたいです」

「でも、私は名物などを食べたいです」

「「「そのためにも——」」」

「わかつたわかつた、全部言わなくてもいいよ。僕もみたいから一緒に見に行くし、食べ

物も食べよう。そのための金は全部僕が用意するから安心をし」

僕がそう言うのと、三人は揃って頭を下げて礼を言う。

三人も金がないわけではない、妖魔討伐などで領地内の大きな町にある役所から報奨金などを貰うことで金銭を得ている。これはファンタジーなどの冒険者ギルドのようなものだ。仕事の斡旋などもしているし、冒険者ギルドお約束の化け物退治などの仕事を出したりしている。その仕事は基本的に退魔師に限らず、農民なども小妖などを狩ってその証を役所に持って行って行って金銭を貰ったりしている。だが、農民が小妖を狩るのは命懸けのため頻度は高くないし大体村に住んでたりするモグリやはぐれの退魔師が退治したり、町へ行って退魔師に金を払って依頼するというのが農民の妖魔対策だ。

モグリやはぐれの退魔師も、僕ら名家名門には圧倒的に劣るがそれでも対処できるらしいの力はあるので、それで金銭を得たり代わりに衣食住を提供してもらって定住するというのが普通らしい。場合によってはそのまま村長に収まる例もあれば、村長から娘を宛がわれて村の一員となる、ということもある。その退魔師の血を受け入れた村長一家は代を重ねるにつれて高い霊力を持つようになり、それが結果的に勢力も大きくなって名家となる。というのは、この世界の貴族や名家などに大体共通している歴史だそう。無論我が家も、過去は將軍の雑用だったが、気に入られて娘を頂き、そこから代を重ねて今に至るといふ風に歴史が出来ている。

名門や名家などの退魔師は、余程大きな事件や農民の手に余る事態が起きた時しか動かない。小妖を狩るのに自分達強者が出るのは割に合わないと思つてゐるし、事実そういう面もある。何より退魔師の数は平民に比べたら少ないのだ。武士や兵士は農民でも鍛えたら成れるが、退魔師は生まれ持った霊力がないと成れないという理由がある。あとは、小妖を狩るのははぐれやモグリの仕事という面もある。

彼ら彼女らは、名門より劣る卑しい存在だ。だがしかし、自分たちの代わりに小妖を狩つてくれるのでお目こぼししてゐる。というのが名門の認識らしい。

それはわが綾絶家でも同じ認識だ、だけど僕はそんなの関係ねえとばかりに出回つて片っ端から退治していつてる。理由は簡単で、領民が死ぬと労働力が減るし税も減るかという即物的なものだ。まあ、それだけではなく領地の見回りは重要だし、問題が起きたら対処するのも領主の仕事だ。畔が崩れたら土遁術で作り、風遁の刃で収穫を手伝い、火遁で火がない村々に火を起こして凍死しないようにする。揉め事が起きたら領主権限で裁いたりして一役買つてゐる。

分家の村々にもそれをやっているので、おかげで領内の治安はすこぶる高いし民心も安定してるし、飢えや凍死なども減らしていつてる。親戚一同もこれには嫌味も言わないし、何なら出向いたときに食料寢床を用意してくれてるくらいだ。まあ、彼らからすれば自分達の代わりに僕がやってくれるので面倒が省けるからという理由だろうけど。

小さいことからコツコツとやって、波羅が領主になった時にやりやすいようにやるだけだ。おかげで、領民たちからも感謝されてるんで悪くない。後は、裕福な時代に住んでいた前世のせいかな、日本からアフリカなどの貧国を見て飢えなどに苦しむのをテレビ越しに見ていたのが現実の目の前に現れたから、目の前に現れたのなら逃げずにどうにかしないといけないという理由もあるが。

最初は僕が見回るだけだったが、今では妹達もついてきている。おかげで仕事もやりやすくなったし、僕がやってる仕事を妹達に見せることで学ばせる意味もあるのでいい傾向だ。そして、小妖やたまに出てくる中妖などを妹達に退治させて小遣い稼ぎをさせている。

ちなみにだが、僕は交易品発明の利益がドン引きするくらい巨大になってしまったのでお金にはほとんど困ってないから、妖魔退治の賞金は妹達に全額与えてるし彼女達が受け取る様になっている。

だが、それでも日々の出費や妹達の家人への給料その他などで資金が潤沢にあるわけではない。故に、彼女達は僕に頭を下げているわけだ。

最も、僕としても兄として可愛い妹達にこれ世話焼きたいというのもあるんで基本的に断ったことはない。なので、都に上洛するときの娯楽資金は僕が全額ケツ持ちするようになっているし、それは妹達だけでなく、叔父上を含めたあらゆる人員、それこそ下

人に至るまでの資金はほとんど僕が持つと言ってある。下人が風俗に行く金まで出す、と言ったほどだ。

但し、少額ならばともかく、高額の場合はいくら使ったのか何につかつたのかの報告書の提出や領収書……はこの時代にならないだろうがいくら払ったかのメモを取れと言いつけてある。あまりにふざけた内容だったら罰するとまで言っておいた。こうでもないしアホなことを使うかもしれないからだ。あとは、そういう金の流れを掴むことで配下が何をしているのかの把握を出来るというのもあるが。

他家の上洛の場合は、下人のケツ持ちまですることはまずない。僕がそれを出来るのは、交易品の利益が本当にヤベーと引くくらいにまでに金が入ったからだ。

「砂糖は転生知識チートにて最強……覚えておけ！」とどこぞの白目の強い人みたいなことが転生小説で役に立つ知識一覧にあったが本当にその通りだった。

おかげで、金を使っているんなことが出来る。農民たちが働きやすいように治水、陰陽衆への物資拡充、理究衆への研究費、下人衆への修練及び補充費、などなど……。

ゲーム内でもそれぞれの集団がおり、それらは便利な連中なのだがやはり金がかかる。

陰陽衆と下人衆はゲームだと雑兵卒といったところだ。前者は下人より強い術が使えるが素質に左右されるので金がかかる、後者は霊力無しでも大丈夫な雑兵で安いしいくらでも補充可能が強みだが前者より弱い。まあ、下人でも全く霊力ないというわけ

じゃなくてある奴はあるし術も使えるが陰陽衆に入れるほどじゃないといったところだ。陰陽衆はコストの高い兵士なのでポンポン前に出さないが、下人衆は雑兵であると同時に忍者の役割もあるので結構消耗が激しいのだ。

それに、いくらでも補充可能といったってそれはゲームであって転生したこの世界だと現実だから簡単に補充しやすいわけじゃない。特に下人衆は下働きもそうだが肉壁としての雑兵でもあるし、場合によっては忍者のように情報収集させる役割もあるという、将棋の歩であるので非常に消耗が激しい部門だ。というかそんな簡単にポンポン死なれても困るので僕はちゃんと修練と人員充足をするように心がけてるので最近では死者は減っているし、なんなら彼女達の意見を聞いて働きやすいようにしている。

理究衆は研究開発する枠だ。姿が白頭巾を被った連中で、人に言えないような研究をしたりする。ゲーム中の彼らは研究開発なので、大体のことはここに任せれば明らかに門外漢のようなものでも開発出来たりする。が、やはり金がかかるのが欠点だが、研究開発はゲームの最初から最後まで大事なことで気を抜いてはならない。なので、僕はここに結構な金をつぎ込んだりする。おかげで、この連中は一部は都からやってきた優秀な者もいたりする。そういう人は、僕が金払いがいいのを聞きつけてやってきたりしたのでこちらとしてもありがたいし待遇も高めにしている。

ゲーム序盤から結構な資金持ちにすれば、波羅が当主になった時にやりやすいだろう



と思つて色々頑張つたが結果が実を結びそうで何よりである。やはり金……金は全てを解決する……!!

三人と自室で和気あいあいと色々と話していたのだが、部屋の外から声をかけられた。

「失礼します。頼様、紗和でございませう。入つても宜しいでしょうか？」

「ああ、紗和さんですか。どうぞ」

許可すると失礼します、の挨拶と共に襖が開けられそこには紗和さんが頭を下げていた。紗和さんは、桃代姉さんの家人だ。いつも身の回りを世話している人で、姉さんは劣るがそれでも美人の部類に入る。最も、この世界に転生してから明確なブスに出会つたことがないのだが……。エロゲー世界故に美人ばかりで目のやり場に困る。貞の僕には辛い。本当に赤面するくらい美人ばかりで目のやり場に困る。

「頼様、お嬢様が大事な話があると。つきましては、お嬢様の元へご足労願います」

そう言つて、紗和さんは頭を深々と下げる。本来ならば当主代行の僕の元に桃代姉さんが来るのが正しい礼儀というものだ。だが姉さんは病弱故にそれが出来ないで、こうして紗和さんが頭を下げて来るのである。

「わかりました。今から向かいます」

「ありがとうございます、頼様」

最も、僕は病弱な人にそんな鬼畜なこと出来ないし、何より嫁さんだし、前世の感覚もあつて足を運ぶことに不満も苦勞もしないので普通に了承する。

「すまん、桃代姉さんに呼ばれたから行つてくるよ」

「わかりました、桃代姉様には宜しくと言つておいてください」

「兄上、桃代姉上に私達からも」

「宜しくとお伝えお願ひします」

「うん、わかつたよ」

名残惜しいが、ここで切り上げて部屋を出る。そして、紗和さんについていき桃代姉さんの屋敷へと足を運ぶ。

余談だが、紗和さんは桃代姉さんほどではないがやはり僕より背は高いし尻も胸も大きい。胸は姉さんに劣るが尻は結構大きく、紗和さんの後ろについて行つてるが巨尻が和服の上からもわかるくらい揺れていて非常に目の毒だった。

案内されて桃代姉さんの部屋に入る。いつもは家人が傍に控えているのだが、今回は部屋には姉さんのみだ。それに、いつもは布団から半身を起こしてるような状態に対して、今回は布団は横に畳まれており、姉さんは部屋の中心にあるちゃぶ台の横に座っている。あと、お香を焚いていて珍しいなと思った。

僕は、姉さんに手招きされたので、ちゃぶ台を左にして姉さんの真正面に座る。姉さんはというと、僕が目の前に座るとちゃぶ台の方に向いて、上に置いてあつた急須に入つていたお茶を湯呑に入れていた。何から何まで珍しいな、起きてるのもそうだが、こうしてお茶を入れてくれるのも初めてみる気がする。

「姉さん、紗和さわさんから言われてやってきましたよ」

「ありがとう、わざわざごめんねさいね。本来ならば私が足を運ばなければならぬのに」

「気にしないでください、姉さんの体のことを知っているから無理をさせるわけにはいきませんよ」

お互いの挨拶をしあう。

姉さんは僕が薬を買つたり食事を色々工夫しているからか、原作より病状は良くなつていようだ。原作だと色白の美肌だがそれでも病気で危ないというくらいに体調宜しくないというのがわかったが、こうしてみると普通に顔も明るくて病弱には見えな。布団から起きてこうして座っていることから体調がいいのはわかる。

「もうそろそろ上洛ね、準備は出来た？」

「はい、叔父上の協力もあつて無事に整えました」

「そう、よかつたわ。はい、お茶をどうぞ」

「あ、どうもありがとうございます」

姉さんが会話しながら手ずから入れたお茶を頂く。口にすると、僕が買ってきた高級茶の味だ。だが、いつも飲んでる味なのに、なんだか微妙に違う味がした。ちよつと甘い……？

「頼君、あのね、貴方にお願ひがあるの」

「はい、なんでしようか？」

お茶を口に含み、その変わった味を味わいながら聞く。姉さんからお願ひがあるというのも珍しいな、大体は自身の病気を気にして控えめな事しか言わないのに。原作ゲームでも病気のせいで自分から強く言うことが出来ない人だった。なのに、こうして大事な話をするとは珍しいし、原作ゲームにもなかったことだ。

「貴方が男だということは言うまでもないわね？　なら、貴方の、いえ、名門としての男の役割はわかるかしら？」

「うーん、男ですから品のない話になって恐縮ですが、世継ぎを作ることでしようか？」

歴史はそこそこでしか知らないけど、徳川家は將軍家の跡取りを作るために大奥などでハーレム作って、將軍はそこに行つてひたすら子作りするのが大事な仕事だった。と聞いたからそれと同じかなと思つて、それっぽいことを言つてみる。姉さんはそれに頷き

「そう、わかっているのね。では、貴方に聞きづらいことを聞くわ。貴方は子を作る行為に拒否感はある？」

「いえ、特には」

いつになく真剣に聞いてくる姉さんに背筋が真つすぐになる。なんだが、眼差しもいつものほんわかしたのではなくキリつとした……、というよりも刀を握った時のような真剣なまなざしだ。馬鹿な僕でもわかる、冗談や茶化しなどなく本気で聞いているのだと。

「世の男の人達はとも奥手で、そういう行為はあまり積極的にやろうとしないの。貴方もそうなのかしら？」

「え？ うーん、いえそこまでは……恥ずかしいという思いはありますが……」

世の男が奥手ってマジ？ 本気と書いてマジ？ 思わず二回も考えてしまった。

だが、姉さんが冗談で言ってるわけじゃないのは雰囲気や表情でわかる。原作ゲームだと女主人公で僕の妹である波羅が凌辱されまくるゲームだから、基本が男性向けゲームなために男の性欲が強いし竿男優なんて当たり前前にいるものだ、だってエロゲー世界だから。

だというのに、姉さんが言っていたのは僕の考えていたのとは真逆だった。

衝撃的なことを聞かれて頭が混乱する。目の前が歪んでしまう。なんだか吐き気も

覚えてきた。

もしかして……いや、生まれてからはわからなかったが成長していつて少しずつ違和感を感じていた。だがそれを口にするのが怖かった。何より、女性達がやたらデカイし美人だし、周りの男達はいい女がたくさんいるのに下卑た視線を向けようとしらない。それどころか、逆に女性から男性に熱い視線を向けていた。それらは、領内の見回りで、町村を見ていた時にわかったのだ。そして、その熱い視線には僕に対して向けられていたことも気づいていた。

だが、それは僕が領主の息子だからというのが理由だろうと思っていた。最初はそう思っていたが、時が経つにつれて違和感は加速度的に膨らんでいった。でもそれを指摘するのが怖くて目を逸らしていた。

しかし、こうして姉さんに言われたら、もう目を逸らすことが出来なくなる。向き合う時が来たと言えばそれまでだが……。前から思っていた疑問、それは……。

まさか、この世界って原作ゲームそのものじゃなくて……。男女か貞操が逆転した世界なのでは……？

そう思ってしまった。答えを見つけてしまったかもしれない。自分が結構な勘違いをしていたのかもしれない。

一度気づいてしまったら、動悸が激しくなり、気分が悪くなる。根本的な間違いをしていた、そうなる则自分の今までの行動で何か間違ったことがあったのではないだろうか？ そうなると、不安が膨らんで押しつぶされそうになる。このまま過ごしていいものかと、原作ゲーム通りに行くのかと。

眩暈がしたので、思わず左手をちゃぶ台の上に置き、立ち眩みで倒れないようにする。僕の様子がおかしいことに気づいた姉さんが近寄り、左手に自分の手を重ねるようにして目を覗き込んだ。

「大丈夫？ 顔色悪いわよ？」

「い、いえ、大丈夫です。ちよつと考え事をしていましたもので……」

「そう……。気分が悪くなつたならお茶を飲んで、ね？」

「は、はい、頂きます」

お茶のおかわりを姉さんが入れてくれたのでそれを飲む。ちよつと微妙な味がするが、基本的には僕が買った高級茶なのでそのまま飲む。何か味を付け加えたのかな？ と思つた。

「まあ、いきなりこのようなことを聞いてごめんなさいね、貴方も男である以上女性と懇ろになるのに不安があるでしょう。でもね、貴方が男だからこれは大事なことのよ」  
「は、はい。存じております」

僕が男で、子作りできるかどうかを聞いて、不安な表情をしてみましたから姉さんを不安にさせてしまったことに反省する。跡取り息子が女と性行為出来ないってんならそりや不安になるよな、確か徳川家光が男色で世継ぎ作らないからやべえってなつたんだっけ？ もしかしたらそつち方面かと思わせたかもしれない、反省しなきゃ。まあ、先ほど答えのようなものを出したが、まだ確定したわけじゃない……はず。

そう思いながらお茶を口に含んだ。

「それでね？ 貴方が男として子作りが出来るかどうかが重要なのはわかるわよね？」  
「はい」

やたら念を押して聞いてくるな、と思いつながらもお茶を飲む。

「当主の息子である以上、伴侶が複数に増えるのは避けられないことはわかるわよね？」  
「それはまあ、はい」

父だって、妻を三人を持ってて、それぞれに僕、波羅、沙羅と由羅を産ませたわけだからわかる。こういう時代なら側室がいるのはそりやそうだろうと。そう思いながら、湯呑に残ったお茶を一気に口にして――



「なので、女性に慣れる必要があるので、今晚私と梅を共にして頂きます」

「ブ————ッ!!!」

——衝撃的なことを姉さんに聞かされて、目の前に座る姉さんに向けてお茶を思いつきり噴き出してしまった。

## 十二話 ◆ 真・童貞卒業

褥を共にする。

それを聞いて、子供が聞いたならば理解できないだろう。褥とは布団であり、布団を一緒にする、つまり添い寝をするとそのままの意味で受け取るからだ。

だが、大人ならば理解できるだろう。詰まるところまぐわい、交尾、性交、セックスの意味に他ならない。それを上品に言っているだけだ。

年上の女性からそれを言われることに、思いつきり赤面する。いや、転生した年齢を考えるとおっさんを既に超えているのだが、精神が体に引つ張られているせいか、魂は大人体は子供で精神もちよつと子供寄り！と、どこぞの少年探偵みたいになってしまっている。

僕の内心では、魂が既に大人なのに精神が子供のようになってるようになってしまふことに羞恥心が隠せない。なんで僕は凄く恥ずかしがっているのか、年甲斐もなく赤面してるのかと。この場合の年甲斐は魂の年齢に当たるのだがそう言ってもらえないくらい非常に真つ赤になってた。

僕が真つ赤になっているのを姉さんは理解しており、ニコリと微笑んでる。

というか、先ほど姉さんに向かって口からお茶をぶっかけるといふ非常に失礼な行為をしてしまったことに今更ながら思い出しわたわたと慌てた。

「ね、姉さんーっ、ごめんなさいー！」

立ち上がって何か拭くものを探すが、当の本人は至つて冷静。それどころか、顔に付いたお茶を赤い舌でペロリと舐めとり、取れなかつたところは普通に服で顔を拭いていた。心なしか、舐めとるのを喜んでやつてるように見える。

「別に構わないわ、だってこれからお互い裸になるんですからね」

「えっ」

そう言うや否や、スツと立ち上がり着物の帯を外す。そのまま、着物を脱いで肌襦袢が出てくるが、それと同時に帯で締められてた体が解放され、姉さんの爆乳が解放される。着物を着ていたところからもわかる爆乳は、肌襦袢になると余計に大きく見えた。そして、それすらも堂々と脱ぎ去ると、姉さんの美しい裸体が露わになる。

一日中ほぼ屋敷の中にいるからか、肌は白くシミ一つない。僕らの地域は北部だからよく雪が降るが、その雪のような滑らかな白さだ。その白い裸体からぶら下がってる爆乳の先端は、姉さんの髪の毛のように綺麗な桃色となっている。下の方も毛は生えているが綺麗に整えられてるから、おそらく手入れをしているのだと思われる。白い肌に乗ったピンク色の乳首と陰毛が彩りを出しており、まるで、雪景色の中に見える桜の花

のようなギャップのある美しさを感じた。

その美しい裸体が眼前に現れて、不覚にも勃起してしまった。ほんの少しだけ股間が盛り上がる。だが、僕は服を着こんでるからバレてないはず——

「あらあら、私の体を気に入ってくれたようね、うれしいわ」

——思いつきりバレてました。

「は、はてなんのことやら……」

「嘘は良くないわね？ 私、そういうの見抜けるって知ってるわよね？」

「……………めんなさい」

即座に謝罪する。

そういえば姉さんは武の達人だから相手の僅かな動きを見切れるんだっけか。にしても、着込んだ服から勃起を見抜くっていうのも凄いとすべきか恥ずかしいというべきか。ただ、勃起したのを隠してそれを怒られ謝罪するというのもなんだか変な気分だ。

にしても、女性の裸体を見ただけでこんなにも簡単に勃起したっけ？ と疑問に思った。なんだか体が妙に温かくなってるし、お茶が原因なのかなあ？

僕の疑問を見抜くように姉さんが言ってきた。

「段々と体が温かくなってきたでしょう？」

「は、はい」

「先ほどのお茶が原因よ」

「へっ?」

「大丈夫、媚薬と精力剤を混ぜただけだから」

衝撃的なことを言ってきた姉さんに僕はフリーズした。

僕も良く飲んでる高級お茶にしては、なんか変わった味するなーと思っていたがまさか媚薬入りだったとは……。いや、精力剤も混ぜられていることも考えるとそこまで念入りに仕込みをしているという事実には驚くしかない。

というか、毒薬ではないにしろ薬入りのお茶をホイホイ飲んでしまった僕が悪いのもあるんだけど。まあ、姉さんを信頼してるから毒見せず飲んだってだけなのだが、まさか信頼してる姉さんに媚薬精力剤盛られるとは……。この目をもつてしても見抜けな。と某軍師の台詞が頭をよぎった。

だが姉さんはそんな風に考えてる僕を背に、部屋の隅に畳んでおいてあった布団のセッティングをしている。全裸の状態で布団をセッティングしてるというのも、中々エッチな姿で勃起が加速する。何より、姉さんが美人だから見ていて飽きない。所作が美しいのもあるが、動くたびにプルプルと震える爆乳と尻と太腿がすばらしく、ずっと

勃起してられる。

「ボーツと見ていただけで布団のセッティングが終わってしまった、自分は何もやっていないことに気づいて慌てて

「ご、ごめんなさい、姉さんを動かしてしまって」

「いいのよ、こういうのは女の仕事ですから。種を出してくれる大事な男性にあれこれさせるわけにはいかないわ」

「で、でも、姉さんは病気が……」

「病弱な桃代姉さんを動かしてしまうということ自体が彼女に負担をかけてしまう、そう思っただけだ」

「最近なんだかとても調子がいいのよ、貴方が買ってくれた薬のおかげもあるんだけど」と返されて困惑する。いや、確かに顔色が大変いいし、大分記憶が薄れかかる原作ゲームの桃代姉さんのもっと顔色悪かった。それに比べたら非常にマシと言える。

そう考えていたら、姉さんは敷いた布団の上に正座して僕を真つすぐ見つめる。

全裸正座という背徳感ある格好ながらも、背筋は伸びて、それと同時に体からぶら下がっている爆乳が体の中心線から左右にまろびでるように分かれて谷間がはつきりと広がって見えており大変ちんぽに悪い。その爆乳は、ツンと乳首を上に向けており形も崩れず綺麗なままだ。

「頼君、病気持ちでお荷物な私が相手に不満かもしれない。けど、これから貴方は多くの女性の相手をするようになると思うわ。だから——」

そう言うのと、そのままゆっくりと上半身を前に倒して——

「今宵の夜伽、不肖の身でありますですが精一杯勤めさせて頂きます」

——三つ指をつけた正しい土下座をした。

まさかの全裸土下座である。これには僕も面食らった。

桃代姉さんの巨大な体が前に倒れ、こちらに頭頂部どころか後頭部を見せるほどの頭を擦り付けた見事なまでの土下座。全裸でそれをするという行いに、不覚にもエロチンズムを感じてしまう。体を前に倒すことで、姉さんの爆乳も布団の上に落ちてむにゆううううとつぶれている。ちよつと爆乳すぎて土下座しづらいんじゃないかと思わなくもない。だが、全裸土下座というエロゲーでしか見れないことをこの世界に転生して拝むことが出来るとは何たる感動。というかここエロゲー世界だったわ、と今更ながらに思ってしまうからこういうのもアリなのかなあと。

その美しいまでの土下座を目の当たりにした僕は、しばらく呆けていた。が、ハツとして慌てて姿勢を正し、僕も正座をして

「わ、わかりました。何分初めてですがよろしくお願いします」

と、こちらも返礼するように土下座をした。エンジンがかかるように羞恥心も高ま

り、顔も赤くなってそれを見られないために土下座しているようなものだが、姉さんに土下座までされた以上、拒否するなんて選択肢はなかった。それより、童貞で死んだ僕がついに童貞卒業。しかもゲームキャラの中でも上位に入る美人で都合上とはいえ嫁にした人との初夜という事実には、心臓がひたすら熱いビートを刻んでいた。

この時、二人は互いに土下座してお互い顔が見れない状態であったが、二人の表情は対照的であったと言っておこう。

頼の顔は羞恥心で赤くなっていた、まるで初心な少年そのものであった。これは精神が肉体に引つ張られているのもそうだが、彼の記憶上初の童貞卒業となるのでそれを迎えることができるという喜びの反面初めてだから上手くいくかの不安、そして目の前の美人な嫁の裸体に当てられたのが理由だ。

対して桃代は、歓喜と性欲が混じった表情をしており、溢れ出るよだれを垂らしそうになりそれを必死に飲み込んでいた。彼女が土下座をしたのは理由がある。優しい弟分は、こうまで頼み込んだら大抵断らないことを桃代は知っている。故に、彼から拒否



という選択肢を奪うための土下座であった。そして、自分の初めての相手が愛する男であり、可愛い弟分であり、その人と性交できるということで発情していた。何より、今まで親戚とはいえ姉と弟という関係で過ごしていた、その一線を越えるという事実には溜まらなく性的興奮を覚えていたのだ。

そのことから彼を部屋に呼ぶ前から股を湿らせており、その匂いを誤魔化すためと雰囲気のためのお香を炊いたがお香で余計に発情して精神が揺らいでいた。更には、彼からお茶をぶっかけられたこと。顔についたお茶を舌で舐めつつたが、その媚薬精力剤入りのお茶を少し飲んだため発情がさらに加速。極めつけは、土下座で頼み込んだら予想通り彼は拒否しなかったこと。

つまり、これから彼とまぐわえる。彼の精神の童貞を頂くという事実には、にやけ面を抑えることが出来なかった。土下座で彼に見せていない表情は、彼が見たら若干引くくらい性欲が溢れていたと説明しておこう。

今から顔を上げるため、その表情を出さないように必死の努力をしつつ顔を上げる。彼女が上げると同時に頼も上げていた。

「じゃあ、頼君。脱いでくれる？」

「あ、あ、あ」

桃代に言われるままにいそいそと脱ぐ頼、それを間近で見れることに桃代はさらに興

奮をしていた。

可愛い弟は、女達がよく話題にしているほどだ。血筋は主家故に悪くなく、本人は普通と言っているが私達から見れば十分顔も良い、さらには平民や農民だろうと優しく接するし、世の男達と違って女から見られることを恥ずかしくがっても嫌がってもいない。

過去に、治水工事から帰ってきて桃代にお土産を持ってきたとき、彼は禪一丁のままやってきた。そのあまりに刺激的な姿に桃代は鼻血を噴き出しそれを見た彼は咯血だと勘違いして心配させた事件があつたが、そのようなラフな感じで過ごすことに忌避しないことに桃代は驚いたものだ。

その時から、彼は世の男達と違って肌を見せることに、性的な行為にあまり忌避しないのでは？ と疑問に思っていた。そしてその疑問が解消したのが数日前のハグである。あれに嫌な顔せず赤面し勃起したことで、桃代は確信を得た。彼は赤面するが嫌がらない、と。

故に、こうして目の前で脱いでいることにも、恥ずかしさを感じても嫌がってはいい。嫌がらないのは桃代が嫁で身内だからというのもあるだろうが、拒否する奥手なのが世の男達である。桃代からしたら、まるで高級遊郭の花魁が目の前で脱いでるストリップショーを見ているようなものだ。女中や家人から聞く話では、花魁の嫌がることはできないというから、目の前で脱げなんて命令は普通に拒否するだろう。だが、頼は

恥ずかしがりながらもゆつくりと脱いでいる。一枚、また一枚、と脱いでいく様子がたまらない。たとえ花魁に万金を積んでも拜めることはないだろう。そして、とうとう禪一丁となった。

「さあ、そこも脱いで、ね？」

「は、はい」

桃代のお願いに、ゆつくりと、だが、確実に禪をほどいていく。そして、ゆつくりとほどかれ畳に落ちた。頼の生まれたままの姿が桃代の目の前に現れたという事実に、そして股間にある男の象徴が天に向かって立ち上がってるのを見て、先ほどからやっていたストリップショーで興奮が高まっていたのもあつて、桃代は軽く達していた。

「んっ♡ふう……」

「ね、姉さん？ 顔が赤いですけど大丈夫？」

「え、ええ、大丈夫よ♡」

そう答えながらも、頼に向かって手招きした。全裸の美女からの手招きということに、何の抵抗もなくフラフラと近寄る様は、誘蛾灯に誘われる虫を彷彿させる。頼が近づくと、ぴつちりと足を閉じていた正座から扇形に足を開く。そして両腕を大きく広げて

「おいで♡」

「は、はい」

彼女の声に誘われるように、頼は桃代の開いた体の中に入っていく、入ったら桃代は足を閉じて頼を自身の巨大な胸に挟み込み、その上から両腕でしっかりと抱きしめた。その様子を他者が見たら、まるで食虫植物にじつくりと捕食されるようだと言評することだろう。もはや、頼は逃げるといふ手段を封じられた哀れな虫であった。

捕食された頼の顔も、捕食者である桃代の顔も、双方ともに快楽に濡れていたと言つておこう。

姉さんに誘われたままに、彼女の体に入り込んだ。彼女の体が大きいので、必然的に爆乳の間に挟まれる形となり、そこから姉さんに強く抱きしめられた。甘くてとろりとしたような匂いが、谷間から発しており、その匂いを直に吸い込んで勃起が強まり姉さんの体に当たる。

「ウフフ、私の体を気に入ってくれたようで嬉しいわ」

「ね、ねえさん……」

彼女の優しい声を耳に受け、腕は自然と姉さんの背中に回していた。そして、強く抱

きしめる。姉さんが抱きしめて愛情を表現してくれるように、僕も返礼として抱きしめ返した。その状態から、姉さんは爆乳から少しはみ出た僕の頭を優しく撫でてくれる。そのことが、さらに頭を溶かしていく。

「あんっ♡」

気が付いたら、谷間をペロペロと舐めていた。何故かは自分でもわからないが、舌を出して舐めていた。そこから、左右を挟み込む爆乳を顔を少し動かして舐める。舌で舐めると反発するように戻ってそれが少し面白い。

「んっ、あんっ♡」

姉さんが感じてくれるというのも嬉しかった。僕は、抱きしめてくれる姉さんの腕を掴んで左右に引っ張る。姉さんも、僕が離して欲しいのに気付いたのか、力を緩める。谷間から顔を出した僕は、本能の赴くままにおっぱいの頂点にある乳首に吸い付いた。

「ああん♡」

いきなり吸い付いてきたことで嬌声を上げた。それを耳にした僕は、舌でじっくりと円を描くように乳首を舐める。おっぱいが大きい人は乳首や乳輪も大きくなる。姉さんもその例にもれず大きい、だが大きすぎるといってもない。そして、それに吸い付くと味はしないはずなのに甘い感じがした。そして、おっぱいに吸い付くという行為が溜まらなく安心感を与えてくれる。初めての相手が年上の嫁というのが殊更に脳に

快感を与え、胸を吸うのが子供のように戻る感覚だ。胸を吸うと女性に甘えたいとなるといわれているが、その意味を今全身で理解している。

胸を吸いながら視線を上に向けると姉さんと目が合った。僕の行為に嫌がる顔もせず、それどころか笑顔を向けてくれる。そして頭を優しく撫でてきた。姉さんの笑顔と、頭を撫でてくるという行為が、自身の行動を受け入れてくれるのだと理解し、もつと甘えたい気分になり胸を強く吸う。

ただ、がむしやらに吸うだけでなく、乳輪を円を描くようにして舐めたり、乳首を優しく甘噛みしたりして、姉さんが快樂を感じるように工夫をした。今まで見たエロ本などでも、吸うだけではなく相手が喜ぶことをしようとあつたので、独りよがりにならないように気を付けた。

幸いと言つていいかわからないが、姉さんも嬌声を上げているので感じているのだろうと信じてそのまま続ける。

しばらく吸っていたら、姉さんが頭をポンポンと優しく叩いてきて

「ら、頼君？ あのね、もういいから次に行きましよう？」

「ふはっ、あ、はい」

姉さんの顔は赤くなっており、心なしか蕩けたような表情をしている。おっぱいを吸い過ぎたのかな。気を付けていたつもりだが、独りよがりになってたかもしれない、反

省しなきや。

今からセックスを始める。僕にとって初の童貞卒業だ。人生一度目は女性と全く縁がない生活だったが、今生は妹達や姉さんといったゲームキャラの美人と縁があり、そして姉さんと結婚みたいなことになってる。

美人で、年上の女性で、体が僕より大きくて、そしておっぱいが大きい。男にとつてとても嬉しい体をした姉さんとセックスできる。童貞卒業出来るという事実が、僕のちんぽを更に硬くした。

「頼君、私が上に——」

「いえ、姉さんは下でお願いします。病弱な姉さんをあまり動かすわけには行きませんし」

「そ、そう？ わかったわ」

姉さんが上になろうとしたが、それを止めた。流石に病弱な姉さんを動かすわけには行かないからだ。お願いしてもらって、布団に横になってもらい、上から覆いかぶさるようにする。上手くいくかどうかわからないが、出来る限り頑張ろうと思った。

この時、頼は前世の感覚で考えて行動していたが、この世界の住人である桃代から見たらあまりに異質な彼に戸惑い、そして与えられる快楽で頭が沸騰していた。

世の女性は基本的に巨乳である。それは、女性達が素で体格が大きいからもあるが、彼女達かもつ性欲の強さを表していると言つてもいい。無論、貧乳はいるが貧乳だからといって性欲が弱いというわけでもなく基本的に性欲が強い。だが、この世界の一般的な認識では巨乳⇨性欲強いという式なので、奥手な男達からしたら恥ずかしがられて忌避される。いわば、我々の世界から見たら巨根の男を見て恥じらう乙女のようなものだ。

つまり、頼がおっぱいを積極的に吸つていたのは、フェラを積極的にやる女子みたいなものである。故に、桃代は自身の忌避される胸を積極的に吸う彼に愛情と性欲が急激に上り今にも襲い掛かりそうだった。

いや、実際襲おうとした。淑女として男をリードするという考えから上になって繋がるうとしたが、彼から待ったがかかり逆に彼が上になると言ってきた時は更に驚いたものだ。一体自分の旦那様はどこまで淫乱なのかと思つたほどだ。だが、このまま自身の上になると溢れ出る性欲の強さで彼をぐちゃぐちゃにしそうなのと、彼の優しい気づかさもあつてそれを受け入れた。



彼女の頭の中は、頼よりドピンクであったのを、頼は知る由もない。

横になった姉さんの開いた足の間に、膝立ち状態からゆつくりと近づく。

自身の目の前には、嫁さんの裸体がある。丸太のようなぶつとい、そして柔らかそうな太腿の間に、姉さんのおまんこがある。さっきからひっきりなしに愛液が出ており、整えられた薄いピンクの陰毛が見ているだけで射精しそうなくらいエッチだ。

視線を上にはずらすと、大きな体についてる爆乳が、重力に従って胴体の左右に分かれるように落ちていく。流石のエロゲー爆乳も、万有引力の法則の前には無力なのだと思解した。それでもクーパー靭帯に支えられているから形をそれなりに保っている。全くの無力というわけではないようだ。

その爆乳の双子山の間からはこちらを見る姉さんの顔が見える。笑顔でこちらを見ているので、それだけで気恥ずかしさを感じて赤面が冷めることはない。膝立ちから、姉さんの上に乗る様にして体を持ち上げ、そして片手でちんぽを持って姉さんのおまんこに宛がう。入口に触れただけでも熱さとぬめりを感じ射精しそうだが我慢する。当

てると、それだけで姉さんの愛液がたくさん出てきた。ちよつと驚いたので、姉さんを見るに恥ずかしそうに顔を手で覆っていた。その仕草がとても可愛い。

だが、このままでは進まないの意を決して突き進む。

「姉さん、入れますよ」

「ええ、お願いします♡」

許可を頂いたので、熱く滾るちんぽを押し進める。姉さんの体が大きいので、彼女の体に乗るような感じになる。おかげで、ちんぽだけでなく上半身も姉さんの腹などに触れているので、女性の体の柔らかさと姉さんの暖かさも相まって快楽を全身で味わう感触になる。

「んっ、ふうふううう……」

「あああああ……♡」

ゆつくりと、だが確実に姉さんの中へと侵入する。そして腰を進めていくも、ミミズのような膣壁の歓待と愛液のぬめり、中の暖かさを感じて射精感が増す。

「くううああああ……」

「んはあああああ……♡」

そのまま腰を前にゆつくりと出し、途中にあつた異物感を押し込むようにして突き抜け、そして互いの股間が接吻をした。

「うああああああ……」

「ふああああああ……♡」

人生初のセックス。童貞卒業。年上女性との、そしてゲームキャラの美人と性交。初めてのセックスは嫁さんで達成するという男の夢。

それらの事実が脳裏を駆け巡り、幸福感が心中を満たし、ちんぽで感じる快樂が脳内を走り廻った。童貞の僕が耐えられるはずもなく、三擦りどころか挿入して奥にたどり着いた時点で射精してしまった。

「ほおああああ……」

「~~~~~!!!♡」

情けない声を上げながら射精する。前世で温めたローションでオナホを使ったことがあったが、その記憶すら比較にならないほどの快樂。射精を促すかのように、姉さんの膣壁がうねり、動き、脈動する。それでいて姉さんの体が大きいので、こうして抱き着いていると暖かいお湯の中にいるような感覚でさらに射精が続く。更には、無意識に姉さんのずつしりと重く柔らかい巨尻に手を回して、自身の腰を押し付けていた。顔も横に向けて胴体に押し付けて、抱き枕に抱き着いて寝るような、それっぽい恰好しながら射精を続けていた。気が付いた時には、姉さんの中に思いつきり出したことに気づいて慌てた。その時、姉さんからの反応がないことに気づいて顔を上げて

「ね、姉さん?」

「……………あ♡……………はあ♡」

すごい、蕩けた顔をしていた。いつも僕たちを見ている優しい笑みが、崩れている。そのギャップがとても心に来た。

「すみません、入れたら出てしまいました……」

とりあえず謝罪する。男が碌に動かず挿入して即射精など、恥以外の何物でもない。蕩けた顔から復帰した姉さんは

「いいのよ、私の体で気持ちよくなってくれたんでしょ?」

「は、はい」

「ならうれしいわ、世の男性は恥ずかしくて気持ちよくなるなんて素直に言わないから。頼君が正直に言って射精してくれるなんて、女冥利に尽きるわよ」

そう言って、ニッコリとほほ笑んだ。その笑顔にまた惚れる。

「でも、射精したんだからもう今日は御仕舞……………あら?」

姉さんの優しい笑顔と気遣いに、愚息が元気を取り戻した。その結果、姉さんの中で堅くなり存在感を主張している。姉さんもそれに気づいたようだ。

「ね、姉さん、僕はまだ、ヤれます!!」

先ほどの話で、この世界がもしかしたら貞操が違うのかもしれない。姉さんの今の会

話でも何となく感じるように、複数回の射精がしづらいのかもしれない。だが、僕は前世の感覚があるのでまだまだ出せる。何より、挿入即射精なんて男が廃る。僕が尊敬するAV男優も

「男なら、抱いた女を喜ばせることが重要だ。最低でも即射精なんてやめよう。もしやってしまったのなら、汚名返上のためにもっと頑張ろう。それが紳士としての礼儀つてもんだ」

と言ってくれた。ならば、その言葉を胸に頑張るしかない！

「あらあらあらあら♡——ああん♡」

決意を胸にした顔を見た姉さんも、驚きながらも喜んでる。その喜んだ表情を曇らせないために、腰を動かし始めた。それにより、姉さんの口からも嬌声が出る。

「ふっふっふっ！」

「ああん！ ああ♡♡んん」

その声を聴くのが、とても嬉しくて、頑張つて腰を動かす速度がどんどん上がる。僕もさらに気持ち良くなって加速が止まらない。

「はっはっはっ！」

「ああんんんあっ！ んんああああ♡あっ！ ん♡♡♡♡♡あああ♡ああ！ んっん♡

ちよ、ぢよっとなつてお♡お♡おほおお♡おお♡♡♡



んからも野獣のような嬌声が上がって、更に抱きしめてくる。その抱きしめの気持ちよさが、まだ止まらぬ陸の蠢きが、僕の射精と止まらせることをしない。僕のちんぽを休ませてくれない。

びゅ~~~~~……っ♡♡

長く、長く、とても長く続いた射精がようやく止まりそうになっていく。前世で味わったオナニーでの射精なんか目じやない、目の前の巨大な雌を孕ませると言わんばかなり長い射精。まるで、自分のちんぽが別の生き物になったかのような、蛇口の栓を一口气に捻って発射したかのような射精をしたというのを今更ながらに理解した。

前世での射精なんか、ティッシュ一枚で終わるような射精量だったし、それが人間として普通だ。断じてエロゲーみたいな大量発射は無理だし、それを見た時もエロゲーだから仕方ないねって思ってた。

だが、その世界に転生したからか、そのアホみたいな射精を自分自身がした。そして一つの悟りを開き、魂で理解したことがあった。

なぜ、エロゲーの竿男優は頭を使って行動するのではなくちんぽで判断して行動するのか。エロゲーだからと言ってしまえばそれまでだし、エロゲー特有のご都合主義と言ってしまう返す言葉もない。だが、それでも性欲で判断して行動する理由が一つだけわかった。

それは、この射精時の快楽が凄まじいからに他ならない。

僕が住んでた前世世界のような、平均的な量の射精ならば快楽は一瞬だが、エロゲー世界のような大量発射ならば快楽がとても長く継続するのである。そんなに長い射精をして快楽が続くのならば、頭がピンク色に染まるのも無理はない。事実、僕の脳内はピンク色で支配されていた。もっと出したいと思うし、もっと気持ち良くなりたいと思っている。この考え方が、長い大量射精による快楽が、エロゲーの竿男優達が味わっているのならば、ちんぽで物事を考えるのも当然だと悟りを開いてしまった。

ようやく長い射精が終わって、快楽のスパークも収まったころ、ゆっくり深呼吸をして息を整えた。深呼吸も、愛する女性に抱き着いているから姉さんから放たれる淫猥な匂いを吸って中々興奮が収まらない。

それでもどうにかこうにか息を整えて、頭を上げて姉さんの顔を見た。

「あ、ふ……………え……………♡……………♡♡」

「ね、姉さん!？」

半開きになって目が上剥いて白目になりかかっているのを見て、慌ててちんぽを抜いて姉さんの頭の傍まで移動する。姉さんの体が大きいので、でかくて柔らかい布団の山をかきわけるように、だが姉さんに乗るかかって負担をかけないようにまたいで傍まで来た。姉さんの頭の横で正座して、体を揺する。全く反応がない。焦った。ちよつと強め



にするために、頬を優しくペチペチと叩く。

「うう〜……♡」

「姉さん、大丈夫ですか？」

「ああ……………頼君……………♡」

反応が返ってきた姉さんに、肩を揺すつて声をかける。すると、今度はちゃんと喋つて返してきた。

「姉さん姉さん、大丈夫？」

「ええ……………ちよつと気をやつてしまったわ……………。ごめんなさいね」

「いえ、僕が姉さんのことを考えずに、自分勝手にやったのが原因です。誠に申し訳ございません」

正座して横にいたので、そこから体を後ろにずらして土下座する。その僕の頭をポンポンと叩いて「顔を上げて」と言ってきたので頭を上げる。すると、目の前に姉さんの顔がドアップで来て、そのままキスをされた。

「んっ、むっ、んちゅっ、はむう♡」

「ね、ねえひゃっ、あむっ」

抵抗しようにも、後頭部を掴まれて激しいキスをされる。舌をねじこまれて、歯の裏まで舐められるような激しいキスをされ、僕のちんぽは再度勃起した。その勃起したち



「気にしないでもいいのよ、それだけ私の体で気持ち良くなってくれたってことだから、女としてとても嬉しいわ。でもねこんなにも力強いちんぽがこのままなのはもったいないわ。だから——」

そう言うと、姉さんは手コキを辞めて立ち上がり、ちやぶ台の上に置いてあつた鈴を鳴らす。すると、襖を開けてある人物が入ってきた。

「お嬢様、お呼びですか」

その人物は、家人の紗和さんだつた。綺麗な所作で頭を下げているのは様になつていゝる。だが、僕のこの姿が裸なのに気づいて、みつともない姿を見せないようにと傍にあつた布団を掴んで体を隠す。その僕の様子をちらと横目で見た紗和さんは、すぐに姉さんに視線を戻した。

「紗和、長年の貴方の献身と忠勤。私はひと時たりとも感謝を忘れたことはありません」

「はっ、勿体なきお言葉」

その様子は、まさしく主人と家臣であり、僕はそれを見るしかなかつた。だが——

「故に、忠勤な貴方に褒美を与えようと思ひます。頼君の相手をするを許可します」

「ははあつツツツ！！！！  
ありがたき幸せツツ！！！！」

いきなりの、姉さんの発言。そして、先ほどから穏やかな声を出してた紗和さんが、急に武士のような力強い掛け声を出して思わず体がビクツとした。

「というか、姉さん、紗和さんが僕の相手をすることを許可するってどういうことですか。そう尋ねると」

「貴方が男性にしてはとても珍しく沢山射精して、沢山勃起してくれるのは、女である私達からしたらとても慶事なの。でも、私は御覧の通りもう相手をする体力がないわ。だからと言って、今でも勃起してくれる貴方のちんぽをそのままにするのはあまりにも損失なの」

「だから、勃起してくれてる間に、他の女性の相手をさせる。と姉さんは締めくくった。でも、それで姉さんはいいんですか？」

まさかの堂々と他人に抱かせるようなことを言ってきたので、それはそれで問題だろうと思つて疑問を呈したのだが。

「一夫多妻は普通だし、妻である私が信頼できる家臣に夫を抱かせるというのも問題な

いわよ。他家との交流や関係強化のために、一夜夫を貸し渡すというのは昔からあることだし」

「ええ……初耳です」

「それはそうね、男である貴方からしたらあまりいい気分じゃないでしょうし」

もしかしたらと思ったが、やはりこの世界は僕の知ってるエロゲーと違って貞操が違おうのだろうか？ まさか、他人に妻を出して犯される姿を見る公認NTRの逆バージョンみたいなのが起きてしまうとは。そう思っていると、姉さんからでもね、と声をかけられ

「沢山出してくれる男は、それだけで重要なよ。だから、沢山の女性を抱かせて種をつけるのが男の役目であり、それを補助するのが妻の役目なの。貴方は私のことを思ってくれて言ってるのはわかる。確かに、私としても愛する頼君を自分のみで独占したいと思う気持ちはある。だけど、この世の女性からしたら許されないことなのよ」

姉さんはやや表情を曇らせながら言った。それを言われると、こちらとしてもいう言葉が無くなる。男女逆に置き換えるなら、男余りで女が少ない世界で、孕んでくれる女を独り占めするのは許されない。ってことになるのだろうか？

「だけどね、頼君。これはもちろん貴方の意思も重要よ、あまり男の気分に沿わないことをしてしまって、ちんぽが立たなくなってしまうたら本末転倒だから。なので、貴方に

聞くわ。紗和を抱ける?」

「えっ?は、はあ、大丈夫です……」

「だそうよ、良かったわね紗和」

「はいっ! 頼様、不束者ですが失礼します!!」

僕の返事を聞くや否や、紗和さんはずいといと前に出てきて僕のところにやってきて、僕が体を隠している布団を引きはがした。あまりにも急な行動と早業に頭の理解が全く追いつかない。それどころか、彼女の目が血走っており、とても理性を保っているとは思えないように見えた。

「あ、あの……紗和さ——んむっ?!」

「ちゅっ、あむっ、頼様の口、おいしっ♡」

いきなりキスをされ、舌までねじ込まれて、更には押し倒される。目の前には美人が僕の体を押さえつけており、姉さんより背は低いが、それでも波羅より少し高いくらいはあるので、僕の体は彼女の体に押さえつけられたら完全に包まれるような形となる。

更には、姉さんほどではないが波羅より大きめのおっぱいが強く押し当てられそれが僕の胸板でむにゅうううう♡ぐにゅうううう♡と形を変えながらも温かさを感じることさらに快楽を得る。そして、下半身は姉さんより大きめのお尻と、それを支える太くて柔らかい太腿が、僕の下半身を触手のように絡ませて動きを封じる。

その上で、紗和さんはキスをひたすらにしてくる

「うむうつ、ぢゆるるるるっ♡ うまつ♡ 頼様の唾液うまつ♡」

まるで、エロ漫画の竿男優みたいな台詞をいいながらも、激しく舌を絡めて唾液をすすつてくることに、「頭が快楽に犯されてうまく働かない。

姉さんとの情交でなんとなく感じていたが、女性の匂いや唾液を吸ったり感じたりすると、凄いぼわぼわしてくる。原作ゲームもエロゲーだから、舞台装置みたいなもんで精液やら汗やら体臭を飲んだり嗅いだりすると主人公と女性キアラや女性モブはそれで発情するシーンがしょっちゅうあったが、まさにそれだと今身をもって理解した。

とても激しいキスなのに、拒絶しようとしても体が快楽で喜んで動いてくれない。それどころか、もっと欲しいというように紗和さんの背中に手を回してしまう。更には激しく自己主張しているちんぽが紗和さんのお腹に当たる。それに気づいた紗和さんは「はあっ♡はあっ♡頼様、スケベすぎます♡お嬢様に二回も出したのにまだ硬くなってる♡」

と、息を荒げながら服をいそいそと脱ぎ始める。というか僕と姉さんのセックス覗いていたのかよ、恥ずかしくすぎる。そう思ってる間に、服を脱いだ。

上半身がはげると、ブルンツ！ という擬音が聞こえそうなくらいの巨乳が顔を出す。そして、そのまま下も脱ぎ始めて全裸になった。部屋に案内された時に後方から見

た震えていた巨尻が、正面から見ると股の内側からはみ出て見えている。その太い太腿も柔らかいだけでなく、薄っすらと筋肉が出ていた。姉さんは筋肉が見えない柔らかい太腿だとするなら、紗和さんは筋肉の見える健康的な太腿といった感じだ。

僕の視線に気づいたのか、ちよつと眉を下げて

「私の体、どこか不愉快でしょうか……？」

と不安げに聞いてきた。

だが、正直言つて童貞卒業したばかりで女性に対して経験が無い僕からしたら不満なところはあるはずもない。紗和さんはゲームに出ていないモブだが、十分美人である。その美人と肉体関係を持てるなんて、男冥利に尽きるし文句を言うなんて贅沢を言えるわけがないので

「いえ、姉さんと同じく紗和さんも美人ですよ。体のどこも素晴らしいです」

と正直に褒めた。すると、パツと花開いたような、それでいて情欲にあふれたような笑顔をしてこちらにしなだれかかってきて。

「頼様♡お世辞でも嬉しいですよ♡好き♡好き♡」

と、ついはむようなキスをしてきて、それをそのまま受け入れる。彼女の方が体が大きいので、しなだれかかってきたらそのまま重さに耐えきれず、起こしていた体を布団に預ける。その倒れた僕の両足を持って、上に覆いかぶさるようになってきた。姉さんと



のセックスで体が熱に驚かれて頭も上手く働かないので、流れるような動きでここまで  
のことをされてしまった。ちんぐり返しの状態になって顔から火が出そうなくらい恥  
ずかしい。そこから、僕のちんぽを手にとつて

「参ります——ふうふううん♡」

「うはああああ………！」

一言声をかけると、そのまま中に挿入してきた。心の準備など一切なしの即挿入。姉  
さんとのセックスがお互いを確かめ合うものだとするなら、紗和さんとのセックスは相  
手から一方的に攻められるようなものだ。先ほど正直に褒めたら急にこちらにズカズ  
カとやってきてキスをして押し倒してくるのだから、もしかしてこの世界の女性は押し  
が強いのだろうか？

そんな風に考えていたが、紗和さんとのセックスもまた気持ちよく考えが浮かんで  
即座に消える。姉さんとは似ているようで違う快楽に、僕の口から意識しなくても嬌声  
が出てしまう。

そこから、紗和さんは腰を動かしてきた。一定のリズムを刻んだ腰の運動。僕が姉さ  
んにやった時は、脱童貞というエッセンスがあったため快楽も一入だったが、女性から  
動かされるというのもまた素晴らしいという感想が脳内に浮かび上がる。

しかも、エロゲーやエロ漫画であるような、女性が男性に跨るごく普通の騎乗位では

なく、こちらの両足を持つてやるちんぐり騎乗位という体位だ。やられているこつちとしてはとも恥ずかしいが、その恥ずかしさすらも快樂のスパイスになってしまっている。そして、相手が動いてくれるので受け身になって楽だというのもある。

### AV男優が

「騎乗位はいいぞ、自分が腰を振らないですむから楽だ。男の腰運動は腰を痛めるが、女性の騎乗位は男と違って腰を痛めにくいから双方にとつても有益だ。何より、女性が自分の体を使って積極的に行動しているという姿がそそのるのだ」

と言っていたのが良く分かる。姉さんに向かって腰を振っていたのとは打って変わって非常に楽だ。そして、紗和さんが体を動かすたびに、ブルンツブルンツと擬音を立てながら揺れる巨乳がとても素晴らしく見ていて飽きない。頭が快樂でゆだっているせいか、おっぱい大好きな僕はその柔らかさそうに揺れている巨乳に手を伸ばして、揉み始めた。

「あつあつ♡頼様っ♡もつと、もつと揉んでくださいましっ♡」

そう喘ぎながらも腰を振る姿が美しく、腰を振るたびに僕にも快樂の波が襲ってきて、そして両手で揉むおっぱいの柔らかさが脳髄にじわじわと快樂を与えてきて、射精感がこみあげてきた。だが、姉さんに出すのはともかく、紗和さんに出すのは拙いだろう。そう思つて、声をかけたのだが――

「さ、紗和さん！ も、もうすぐ出ますから!! 抜いて——」  
「わかりましたっ！ しつかりと受け止めますっ♡」

——あろうことか、紗和さんはそのまま体を前に倒してきて、僕の体を全身を使って押さえつけた。男がやる種付けプレス。その逆バージョンの種絞りプレスだ。

僕は抜いてと言ったのだが、それを拒否したこの行動に、焦りを覚えた。肩をタツプし再度声をかける

「だ、駄目です！ 中につ、中に出ちやいますから!!」

「お出しく下さいっ！ お種を頂戴致しますっ!!」

「こ、こどもっ!! 子供がっ！ 出来ちやうからっ!! 抜いて——んむうっ?!」

「あむっ♡ちゅむっ♡んむちゅっ♡♡ぷはあっ♡ 孕ませてもらいますっ!! 出してく  
ださいっ！ 出せっ♡出せっ♡♡」

声をかけるも、キスで塞がれ、更に行動が激しくなる。上下運動が小刻みかつハイペースになり、もつとこちらの体を強く抱きしめるようになり、更には体格は紗和さんが大きいので、彼女の巨乳に顔を思いつきり防がれ両手で頭を抱えられて完全に身動きが取れなくなる。

熱烈なキスに、孕ませろという蕩ける言葉、そしてこちらの射精を受け止めるとい  
う全身で示した行動。

全てが僕の脳を見事に溶かして、我慢も虚しく紗和さんの中に大量に射精した。

びゅるるうう~~~~~~~~♡♡♡

「~~~~~~~~♡!」

「ほおおおあああああ………頼様の種……ぎもぢ……い……い……い……い……い……い……」

姉さんの時とは同じようで違う勢いのある射精に、僕は喘ぎ声をあげるも紗和さんの巨乳に挟まれた状態では谷間に声を吹きかけるだけで外に聞こえない。

紗和さんは、僕の中出しを受け止め、全身を震わせて歓喜と快楽に支配されて、普段の穏やかでありながらはつきりとした物言いとは裏腹な、性欲に濡れた声を出していた。

強くてなお気持ちのいい抱きしめが緩み、巨乳から挟まれた顔が解放され酸素の供給を口が開始する。おっぱいに挟まれるのは気持ちいいが、呼吸が出来なくなる欠点があり、危うく窒息しかかった。にもかかわらず快楽を感じたのはやはりおっぱいに挟まれるという行為があったからだろうか。己の性欲に負けた精神の不甲斐なさに情けなく思う。

紗和さんが僕の体へののしかかりを辞め、体を起こす。ようやく見れた彼女の顔は、熱に浮かされたような笑みを浮かべていた。

「頼様……………、卑しい私めに高貴なお種をお注ぎくださって、誠にありがとうございます♡」

言葉が丁寧で、それと同時に心底嬉しそうな風に言ってきた。

そんな風に言ってくれると恥ずかしさよりも嬉しさがやってくる。だがしかし、中に出してしまうと子供が出来てしまう。それについては拙いんじゃないかなと思つて、僕らの情交を横で見っていた姉さんに尋ねた。姉さんは、ちゃぶ台の上に置いてたお茶を飲みながらも、片手でオナニーをしていた。

「ね、姉さん……………あの……………その……………紗和さんの中に出してしまつたんですが……………」

「妻である私が許可します。貴方は頑張つて紗和の中に種を注いでくださいね♡」

「ええ……………でも……………あとつ——あひつ！」

跡継ぎ問題が、と言おうとしたら急に快楽がやってきて言葉が中断される。

その快楽は、紗和さんが上下運動を再開したからだった。抜かずにそのまま運動を再開したことで、先ほどの射精の余韻がまだ残つて感覚が敏感な状態なので、また射精しそうになる。

「さ、紗和さん、待つて！出したばかりでつ、また出るからつ！うはあつ♡」

「お嬢様から聞いた通りですね♡複数回出せるなんて素晴らしいです♡もつとお出しになつてくださいますし♡」

「あつ♡♡♡♡!ちいい♡♡よ♡♡♡♡♡♡つ♡♡♡♡♡♡つ!まつつ!てええ♡え♡」  
「もつ♡♡♡♡もつと出せつ♡♡孕むつ♡♡子供孕むつ♡♡♡♡」

紗和さんの激しい責め立てに、快楽に弱くなつてる僕は抵抗も出来ず、彼女に抑え込まれてひたすら喘ぐしかなかった。

この世界の女性つて、性欲強いのかな……そんなことを思いながら、意識が段々と白くなっていくのを理解していたが、それをどうすることも出来ずついには真つ白になった。

「あらあら、紗和も理性がトンでしまったわね」

先ほどの激しい情交で失った水分を補給するためにお茶を飲みながら桃代は嘆息した。だが、それを止めるという野暮な真似はしない。世の女性はあれくらい攻めるのが普通だからだ。流石に度が過ぎないように、こうして見張っているが、動く必要がないことを考えると許容範囲内なのだろう。

「それにしても、頼君は本当に素晴らしいわね」

そう言つて、愛する小さい旦那様への称賛を送る。

受け身な男がああして攻めることも予想外だし、こうして紗和に攻められてるのを見ても嫌がるどころか快楽に顔を蕩けさせている。前々から思っていたが、やはり彼は世の男と違って性欲が高く拒否感もないのだろうというのがわかった。付け加えて、複数回出せる精力も魅力的だ。

「ふうふううん♡♡出てるううう♡♡」  
「~~~~~♡」

紗和が嬌声を上げ体を震わせながら、頼の体を抑え込んでる。腰はカミソリ一枚入れる間もないという比喩表現が適用させるくらい密着させており、中出しを一滴もこぼさぬという力強い意志を感じる。彼女の谷間からうめき声が聞こえるが、頼も同様に嬌声を上げているのだろうが、紗和の巨乳に顔を挟まれてるので消音されている模様だ。

これで4回。桃代は冷静にカウントしていたが、その内心は穏やかではなかった。

改めて4回も出していることに、やはり驚きを隠せない。まるで、世の女性を孕ませるために生まれたような都合のいい存在だと。桃代は益体も無いことを思ってしまった。

かつて起きた人妖大戦、その時は単純に殺し殺されの生存戦争だったが。妖魔滅却八勇士の活躍以降、妖魔の活動が徐々に変わっていった。男は殺され女は犯されて行つたのが、時の帝がその命を捧げてこの扶桑国全体に妖魔に対する呪いをかけた後、妖魔が

著しく弱体化し大戦が終了した。その後、妖魔が女を殺し男を攫うようになるという逆になっていった。その呪いは妖魔にだけかと思いきや、人類側も影響があったのか、男女も価値観とあり方が逆になっていき、千年経った今では今の価値観が常識である。

桃代は、病に倒れてる自身の暇をつぶすために書物を読みふけており、その中でも人妖大戦のころの歴史書や、一族の書庫に保管されている歴史書に、行人がたまに持つてくる都で発行されてる歴史書などを読んで、それぞれの記述の違いや食い違いなどを見て、今の私達がこのような女尊男卑になっているのは、人妖大戦のころ、もつと言うなら時の帝が呪いをかけた頃から始まったのでは？と思いはじめていた。

それ以降、女性が強く男性は弱く、性欲も反転し、今では一夫多妻はかつてのころから変わらないが、それが貴族や名家までだったのが庶民まで普通となり。場合によっては村で共有したりもすると、様々な書物に書かれている。

だが、桃代はこれが実に危険なのではと思った。貴族や名家が一夫多妻なのはひとえに家を保つためである。だがそれが庶民にまでなったというのは、出生率もおかしくなってるのではと疑問が浮かび上がる。

最近では妖魔の活動も段々と激しくなり、男を攫われなかったためにも色々と工夫がされているが、中には搦め手を使って妖魔と共生しようとする人間も現れてくるくらいだ。

あの大戦から半妖の数が増えていったが、それと同時に妖魔のみの村や町といった存



在が堂々と現れて、交易活動を始めているほどだ。一度都から大軍が派遣されたが、他種族の妖魔が一致団結して跳ねのけたほどだから、渋々ながらもそれ以降軍の派遣は行われなくなつたどころか、裏では貴族などと取引しているらしい。人間では作り出せない道具の数々などを生み出して、それを人間が手に入れ都で売つて莫大な利益を上げる。といった流れが出来ているという噂を父から聞いた。たりした。

妖魔が真正面からやらずに、回りくどい行動をしてまで人間の男が欲しいのか、それともかつての人妖大戦に掲げたこの世の支配と人類の管理。それをやるために仕込みとしてやっているのか………。そこまではわからないが、もし妖魔が男を欲しているならば、自分の旦那様は危険であると桃代は考える。

私ですら、このように性に積極的で拒否感もない上に複数回出せる精力を持つ、このことが宝石以上に匹敵する素晴らしいことだとわかるほどだ。妖魔から見たら喉から手が出るどころか、殺してでも奪い取るほどだろう。

なので、彼の安全のためなら、そして彼が良いと言うならば、妻として多少の出来事にも目を瞑る。故に、妹達が頼に対してナニカをやっている、というのも業腹ではあるが許していた。彼の動きや所作が手慣れている、というのが桃代から見たら十分怪しく、仕込みをしなければこのようなスケベな行動は出来ないだろうと当たりをつけていた。桃代自身の予想ではあるが、間違つてはいないと自分自身の直感が囁いてた。

だが、妹達が彼にアレコレしていたとしても、病弱な自分が行動出来ないのが、自分は見ていることしかできないのに、旦那様が犯されている姿を見るのが、たまらない熱を与えて以降それはそれでいいと思うようになってしまい、自分自身も世の女性達同様に性欲の塊だなど桃代は自嘲する。そう思いながらも、紗和と頼のセックスを見ながらお茶を片手に飲み、片手で自慰をしようと、まるで悪徳貴族のような行動をしていると感じて、別方向からの快感が来るのでこれはこれでよいと思っていた。

今度妹達に問い詰めるが、これも事後確認のようなものだ。自分自身の直感が正しいという前提ではあるが、妹達は頼に催眠などでナニカをやっている、が、そこまでひどいことはしていないだろうという直感があつた。仮に違っていたら折檻するだけだし、その通りならばやるなどは言わないが注意くらいの釘は差す。桃代自身、弟分であり旦那様が可愛くて愛らしくて仕方がなく、病弱じゃないならば毎日元気に犯して子供も十人かそれ以上産んでいるだろう、という自覚があつたからだ。こんなにスケベで無防備な男がいるならば、兄妹と言えども犯すだろうと思つたほどだ。結論を言うならスケベな頼が悪いとなる。

「んううふううう♡またつ出てるううう♡♡♡」

そう色々思っていたところ、紗和の嬌声がまた上がる。そして、体を震わせながらも

頼の体を押さえつけて搾り取る。

桃代は出来なかつたが、紗和のその姿を見て、今度まぐわうするときは私もあの姿でやってみようと、紗和の種絞りプレスを見て思った。

ゆつくりと体を起こして押さえつけから解放すると、白目をむいてピクピクと震えている頼の姿が目に入る。そこから、ゆつくりと腰を上げて、ちゅぽんっ！と下品な音を立ててちんぽが抜けると、足を広げて白目をむいてるその姿は、まるでひっくり返った蛙のようだった。

紗和は、そこから桃代の前に座って平伏する。

「お嬢様、頼様の子種、たつぷりと頂戴いたしました。今後とも、お嬢様と頼様が変わらぬ忠誠を捧げます」

土下座をしながらも、股からたまにプピツ！と擬音を出して精液が零れ落ちる。その姿をみて桃代は鷹揚に頷き

「ええ、期待しているわ。あとわかっていると思うけど——」  
「はい、子が生まれても許可がない限り市井の子と扱います」

この世界では男はとにかく種を撒いて子孫を作らなければならぬが、跡継ぎ問題が当然ながら発生する。一族の女に産ませたならば問題ないが、家人や平民に産ませたとすると、基本的には認知をしないということになっている。際限なく認知したらそれこ

そお家騒動だからだ。

平民などに産ませた場合、一族の大多数が認めてようやく一族の子として扱われる。それまでは普通に平民の子として扱うし支援などもしない。あちらから何かしらのアクションがない限り、平民側は認知を迫るような行動をしてはならないという決まりがあった。何故ならば、母親やその子が認知を求める行動をした場合、跡継ぎ問題やお家騒動に発展するのだ。この場合、その場で殺されても文句は言えないくらいの重罪となる。

それを理解しているのです。紗和はすぐさま返事をした。自身の家人がそれを理解していることを再認識して、桃代も頷く。

「さてと、ではまわりの片付けと新しい布団をお願いね。私はこれから彼と一緒に寝ます」

「はい、お休みなさいませ」

紗和が新しい布団を敷き、汚れた布団を持って退出すると、桃代は頼を自身の体で抱きしめてそのまま寝た。愛する男に種を注がれ抱き枕にして寝るといふ至福。己の病のために避妊術をかけなければならないのが悔やまれるが、それも時間の問題だろう。

そう思いながら、気絶している彼を優しく抱きしめながら眠りについた。

余談だが、紗和はその汚れた布団を使って、布団に染みついた頼の精液などの匂いで激しく自慰をしたとだけ言っておく。

数日後、準備を整えた一団が、屋敷を出発する。

「では姉さん、行ってまいります」

「ええ、気を付けてね」

童貞卒業が予想以上のことになってしまったが、頼はそのことを表情に出さず見送る桃代に返事をして出立する。

二人が、あの晩なにかあったことを知る妹達も、その様子をニコニコと見ていた。頼は、配下と妹達を連れて、都へと上洛に向かった。

十三話 男子の時点で金の卵を産む鳥扱い unavoidable のに、発明品やバグってる貞操観念のせいで最早価値が付けられないレベルの存在になったでござるの巻

都とは、扶桑国の中心にある大都市である。

霊脈を中心に都を築き、遙か昔から要塞都市として築き上げられたそれは、人間の攻撃のみならず妖魔の攻撃をも堅牢に耐えてきた。

常に上級とも言える退魔師や武士が常駐してたまにやってくる妖魔に対処し、この時代の警察に当たる検非違使が巡回しているので治安も悪くない。兵士も精強で、雑兵だけでなく地方の兵士二人分くらいの働きはできる上に、南蛮から渡来した火縄銃を国産化し配備してる部隊を作っているほどに資金の余裕もある。噂では火縄銃より大型のものを開発していると囁かれているほどだ。

何より、霊脈は御所の真下にあるのだが、そこを中心に都全体を結界で覆っているの、生半可な妖魔の攻撃はシャットアウトする。各所に補助の為に要石を壊せば突破の目があるが、各地で結界の起点として扱われる要石は都では補助扱いとなってい

る。本来ならば逆だが、それだけ都の靈脈が扶桑国で最も強いということを示しているのだ。

その都市区画は平安京や平城京を思わせる碁盤目になっており、区画ではつきりと分かれているので、地方からやってきたおのぼりさんも目的地にたどり着きやすいという親切設計だ。

各所は商業区や工業区、居住区、歓楽街、農業区画、牧畜区画と分かれている他、公園もあるので平民も楽しめる場所を作っている。貴族の中には、自分の屋敷の庭園を一時的に開放し、その入場料を得たりする者もいるとか。

こうして説明すると、近代的な都市の中に緑地公園を作って平民対策をし、農作物を作って輸送コストを抑えるような、現代社会の街づくりに通じるところがある。だが、実は最初から機能重視の都市づくりだったのではなく、千年前の大戦が原因でこのような都市となった。

敵である妖魔が人類を干上がらせるために、農業や牧畜が出来る都の外壁から先の土地を破壊し兵糧攻めをした。それに対応するために、自給率維持も兼ねて都の外にあった農業と牧畜区画を中に作ったのだ。おかげで、ある種のアーコロジーとなって大戦時前より更に発展したのは皮肉としか言いようがない。仮に妖魔が同じ手段を用いて兵糧攻めをしたとしても耐えられる、同じ手は二度食わぬという人類の鉄の意思を表した

都市作りとなった。

そのおかげか。人口は百万を超えており、これに匹敵する大都市は大陸に行くしかない。島国でこれほどの規模の都市を持つことは驚嘆であり、大陸からやってくる商人達も黄金の国と呼んでたりした。

但し、百万越えの大都市と言えど、人口分布……有り体に言うなら階級社会がしつかりとあり、百万の人民の半分以上が平民だ。その上に兵士商人下級貴族などがおり、さらにその上に公家などの中級以上の貴族が君臨している。尤も、この階級自体は大陸の国家もそうだから扶桑だけが特別というわけではないが、強いて言うなら扶桑は平民の中に半妖も少し混じっているのが特徴だろうか。大陸のほうはほぼ人権がないが、こちらは少しだけある、程度の差ではあるが、大陸から来た商人はそれも珍しいことだと本国に報告したりしてる。

そして、都の上位に存在する貴族たちは和歌や茶会を嗜みながらも弓術や槍術といった武術や霊術も怠りなく鍛錬し、研鑽を積んでいる。平和だった頃は、武術よりも芸術に重きを置いて文化を成長させていたが、妖魔との争いが激化し始めると、天秤も武術に傾き、文字通りの文武両道を地で行く存在であるため、貴族を侮る平民は誰一人としていない。

奉公も関係しているが、妖魔が出てきたら対処するのが武士と貴族ら退魔師である。



故に強いし、彼女らのおかげで都が外敵から身を守るので猶更文句を言う平民はいなかった。文句を言うのはせいぜいが、その豪華な暮らしを羨む破落戸程度である。

そんな中、貴族たちが住まう上京区画。そこにある左大臣の屋敷に集まる貴族たちは会話に花を咲かせていた。

「そういえば、此度の上洛で北方守護の綾絶家が来るようですね」

綺麗な小桂に身を包んだ美しい女性が言う。それに呼応するかのように周りの女性貴族も話始める。

「そうですね、鷹が知る限りだとあそこは当主が倒れて上洛に猶予を与えられたと覚えておりますが」

「然様、当主乃至代行が決まるまでの猶予でしたな」

「あそこは北部に住まう鬼と対峙してるだけでなく、他の三方と違って迷い家やままはげといった厄介な妖魔もおります。それ故の、特例猶予でしたな。ですが、それらの妖魔に対抗すべく屈強な女子も数多く居ますからすぐに決まったのでは？」

「ところが、代行となったのは少年のようですよ」

「なんと?!」

基本的に女性が強いこの世界では裏から支える男が当主をやるのは珍しい。やる場

合は名誉職だったり、妻が夫を立てるために据え置いたりすることがほとんどだ。なので、男が当主をしたら次代は女なのが基本だが、綾絶家は代行とはいえ二代続けて男だというのが貴族達の興味を引いた。

「しかも、その少年は噂となつてゐる『北土の貴公子』だそうです」

「ほほう！ 最近都に流入してゐる清酒を開発した男子おのこですな？」

「しかも、物が育ちにくい北土で砂糖の生産も編み出したようですよ」

「他にも有用なものを開発したのとか」

「更には、とても健康的で美しくも愛らしいのとか。目敏い商人は浮世絵師を連れて商売に向かつて描かせて売つてかなりの利益を上げたそうです。某は市井で売られてゐる浮世絵を購入しました」

「麿も娘と共に大金を払つて清酒を飲みましたが、あの味は素晴らしい物でしたね……大金を払う価値は間違いなくあります」

話題の貴公子のネタを中心に会話が弾む。

今まで北土は寒い地方であるために、特産品も三方に比べれば大したものではなかつた。四方の護家の中では広大な土地を持つ綾絶家ではあるが、その実態は寒冷地な為に土地の旨味が少ないからである。

西方、南方、東方地方はそれぞれ旨味のある土地は朝廷の御料地があり、財源である

と同時に三方の護家に対してのいざという時の楔の為に對抗措置として置かれてある。だが、北方には御料地はほとんどない。

せいぜいが重要な港などだが、それすらも三方にある鎮守府にもなつてゐる重要な港に比べれば半分以下の規模でしかない。

これも、かつての人妖大戦の時に北土を根城にしてゐる鬼達に對抗し南下を防いだ実力があることもそうだが、一時期愚かな公家が約定を反故したら反旗を翻してその公家を滅ぼしたという歴史がある。その時の強さは、西方守護と東方守護が協力して漸く止めることが出来たというほどだ。南方守護はその当時手が離せない防衛があつたので、二家で止める形となつた。西方と東方という二家がそろつて漸く止めたという強さに、朝廷と公家達は北方守護の強さを知り恐怖した。流石に三方まとめて相手にするならば数の暴力で負ける。だがしかし、綾絶家の反旗は二対一という数の不利に拮抗できるレベルの強さを所持していた。

これも、大陸に伝わるノルドという種族と北土に住まう人間が似ているのだろう。冷たい北風、身を凍らせる雪、作物が育ちにくい土地。それらを子々孫々に至るまで理解し、必要とあらば古い先短い老人を殺して食い扶持を減らし、またはその逆の子を口減らしして親が生き延び子を再度産む……………。

土地が切り開かれ開発された三方と違って、過酷な環境で生き延びた北方に住まう人

間は強い。大陸のノルドの乙女達も精強だと聞く。綾絶家とそれに従う御家人達も、同様に強い。

本来ならば謀反をした家は廃絶させられる。だが、西方と東方を同時に相手取り拮抗出来るほどの強さを持ち、何より北土に住まう鬼を中心とした妖魔達に対抗できるのが綾絶家とそれを支える御家人達とあらば、廃絶という選択肢は取れなかった。元はといえば、その約定を反故した公家が悪いというのもあり、今回だけは情状酌量の余地ありとして無罪となり、その約定の反故を補填する名目で、御料地を必要な場所にしかおかず、北土の土地を綾絶家を中心とした各大名や御家人達に渡す。という式目を作つてひと段落した歴史がある。

その力が中央に牙を剥くと困ることになるので、北土のほぼ全てを北方守護の連中に渡したという歴史書は、北方守護の各大名や御家人達にとっては輝かしい勝利の歴史でもあり、朝廷や公家達にとっては恐怖と屈辱の歴史である。……………というのが、表面の説明だ。

土地をほとんど渡したというと聞こえはいいが、北土に旨味がないから御料地を置かなかつただけだし、大半を渡しても寒冷地であるため開発が難しい。故に、他の三方と違つて大半の支配を認めさせることで朝廷に恩を売らせ彼女らの怒りを鎮めるという思惑があつた。

だが、北土は有望な鉱脈が山師によってわかっており、開発すれば莫大な資産が出来る。これさえあれば、寒冷地であっても中央に劣らぬ発展が見込めるだろう……。

というのは北土の各大名や御家人達が思い浮かべる未来図だが、これは画餅だ。

仮に開発したら、多少は税を納めなければならぬとはいえ丸々がその御家人のモノになるが、寒さが厳しい北土では冬の備えを考えなければならぬので、開発が遅々として進まない。

冬の備えと領民の守護の為に開発の資金がないので、朝廷や公家から借りる。借りた金の返金は、高めの税を払うことで返済する。借金返済で首が回らなくなったら、開発した土地の権利を頂く。これにより、北土の有望な鉱山は朝廷や公家に潤いをもたらすことになる。

「北方の連中は強いが、政治に強いわけではなかった」

というのが、当時の北土に住む人間を知る貴族の言だ。事実、土地を手に入れたら開発しないと持ち腐れなので、それをさせるように仕向ける。そのための資金を安く貸付て首輪をつける。後は、借金返済をその土地の権利やら税金で徴収すれば、こちらは金を貸すだけで利益が転がり込む。という図式を当時の朝廷や公家が作り、事実その通り

になった。

各大名や御家人達はそうだったが本丸たる綾絶家はそれに気づいていたのか、自分達の手で開発するようにしている。だが、それでも冬の寒さで思うように開発が進んでいなかった。

そんな旨味の無い北土で、都の貴族をも唸らせる交易品がやってきたのだ。しかも、今までのどぶろくや寺社が作る僧坊酒とはひと味違う旨味を持った清酒。南方護家の極一部の特産品であり、もしくは南蛮や毛唐からのたまにくる交易品でしか手に入らない砂糖。黄金に値する交易品が突如として北土からやってきたのだ、話題にならぬわけがない。

その話題の中心である綾絶家の男子である頼は、既に注目の的であった。

「平民の為に率先して治水工事をし、更には妖魔退治も前に出て戦うのだとか」

「男子にしては珍しいですな。基本的には男巫だんぶは後方から我々乙女を援護するものですよ」

「妖魔退治が出来る力もあり、素晴らしい数々の交易品を開発し、見た目も美しい。天は二物を与えずと言いますが、どうやら嘘のようですよ」

最後の締めには笑い声が響き渡る。

「帝に献上品を奉じるとのことなので、我等もお顔を拝見しなくてはなりませんな」

「然り、健康的な男子ならば、縁談も考えなければ」

「もしかすると、帝が気に入って正室にするやもしれませんぞ？」

「あり得ますな。ですが、今まで帝が気に入った男子は御呼ばれして帝のお姿を見て逃げました。その結果、帝は人見知りが激しくなりもうした」

「綾絶家の男子も逃げるかもしれぬ、と？　ですが、逃げた男子は一部がその後の行方は知られておりません。中には下級貴族の男子もいたようですが、その後もやはり情報が出ておりません。帝が逃げた男子に報復をすることもあの家は北方守護、嘗ての謀反の再来になるのでは？」

今上帝は、姿を現さないことで知られている。

というのも、帝は基本的に御簾越しなのでお顔を拝謁出来たものは限られた者しかいない。今までの歴史でも、朝廷の重臣達は帝から御呼ばれして拝謁し直接褒美を頂く立場にある。これが一つ下の位置の役人ならば、名代が渡すという風になっている。この場にいる公家達は朝廷でも上位に位置する役人故に、帝のお顔を拝謁できる。そのはずだが、今上帝は左大臣や右大臣といった重臣にしか顔を見せない。他には傍仕えといった者しか見せず、更には貴族がどのような顔をしているかを聞くのも禁じている程だ。

昔はこうではなかった。

人妖大戦前も大戦後も、その時代を生きてきた帝は重臣達に直接顔を合わせて功を労

うことをやっていた。だが、時代が進むと段々と頻度が減っていき、三代前の幡麗帝からは今のように限られた者しか姿を知ることはない。伴侶となった者は流石に顔を知っているが、全員が全員口を閉ざし、今上帝に御呼ばれして拝謁した男子達も、軒並み口を閉ざした。

その逃げた男子に、興味本位で帝の顔について尋ねた下級貴族は処刑され、その男子も連座された。これ以降、帝の顔について聞くことも、見たものが話すことも禁句となった。

故に、もし北土の貴公子が帝の顔に泥を塗る行為をしたならば一波乱どころか嵐がやってくるのでは……。そういう危惧を彼女達貴族は抱いていた。

そんな彼女達の中に、一人の「男性」がやってきた。

「皆様、ご安心ください。彼はそのような人物ではないようです」

「おお、左大臣殿」

役職名を言われた人物は、この世界の男子にしては珍しい部類の長身であった。世の女性達に匹敵とまではいかぬともそれなりの背の高さを持つ。更には、眉目秀麗の優男であり、日頃美しい物に囲まれ目利きのある貴族の女性達も溜息を漏らすほどだ。手入れをせざすとも黒光りする長髪を揺らしながら彼は近づいて所定の位置に座る。

「話題となっている男子ですが、どうやら女性に対して人見知りしないようですよ」



「それは素晴らしい、今では平民ですら男子を困つて外に出そうとしませんからな」  
 「私達の間でも男は大事に共有しますが、人見知りが激しいと世継ぎを作るのに影響が出ますからな」

貴族の言うように、男の数が過去に比べて緩やかに減つていつてるこの世界では男は周囲で困む物である。それは、彼女達貴族も例外ではない。他家との繋がりや同盟のために、時には夫を、時には息子を差し出し棒姉妹となる。一人の男を貴族間で共有するなど、特段珍しいことでもない。一夫多妻が常識のようなものだ。

故に、彼女達貴族が綾絶家の男子である頼に近づこうとするのは特別珍しいことではない。家の存続を考えればこちらから手頃な娘を差し出して嫁か側室にしてみらい、そこから自分達と繋がりを作れば、あとは仲良く男子である頼を共有すればいいだけである。

そして、女であるが故に、持て余す性欲を発散したい。親と子で仲良くまぐわえば子も産まれる確率も単純に倍が増えて家の存続も安定するので言うことなしだ。親子丼は、乙女の夢。三代井は更なる夢。という歌が流行したほどである。

男は大事に困む物、上げ膳下げ膳全てにおいて負担を減らし女が甲斐甲斐しく世話をする、それこそが乙女淑女の役割である。とはこの世界の女が当たり前を考えることだ。……………という聞こえがいいが所有物であり種馬扱いなのは言わぬが花の常識

である。

上げ膳下げ膳全てにおいて負担を減らすという文言も大層耳に宜しいが、ようは余計な体力を使う暇があるなら種を撒け、ということだ。女の絶頂と違って、男の絶頂は回数制限があるので、無駄な労力を使わせるわけには行かない、男の数が減つて性力的にも大昔と違って草食動物みたいに減っているから、というこの世界でのつぴきならぬい事情も拍車をかけている。

そういう意味では、人見知りしないという情報だけでも値千金である。この場にいる貴族の女子達は、話題になつて頼とどう繋がりを持つかを考えていた。

「帝に御呼ばれする際は、私も彼に色々と助言をします。その時、皆様と顔合わせをする機会を作る様にしましょう」

「ありがたい。人見知りせぬと言つても、私達は女。それに大勢やってきたのならば萎縮してしまうかもしれません」

「そういう意味では、同じ男性である左大臣殿ならば、彼も会話しやすいでしょう」

男女という性別の違いで話のしやすさが違うのは世界共通である。何より、自分達も家の存続という名目で若い男を食いたいという性欲があるし、それを隠しているつもりだが、相手の男子も名門出身だ。自分たちの仮面の下の欲望くらい気づいてしまうかもしれない、そうなつたらお近づきになるという目標も達成できなくなる恐れがある。

そういう意味では、同性なら警戒心も薄れて話しやすくなるだろう。なので、左大臣の申し出は、彼女ら貴族達にとつては渡りに船だった。

「そういえば、今日は春寺殿でしたね？」

「ええ、お相手よろしくお願ひします」

左大臣に名前を呼ばれた公家の女性は、彼に向かって深々と頭を下げる。

彼も、この場にいる貴族達と肉体的な関わりがあり、彼女達にとつて共有の種馬であつた。尤も、彼の方が立場が上であるので、名門や公家はこうして頭を下げ、頼み込むのである。

それを理解しながらも、左大臣はにこやかな表情をして不満な態度をとったりはしない。彼女達も、相手をしてくれる男性が地位の高い美男子だから文句など出ようはずもなく、順番に相手をしていった。

だが、この場には彼のそのにこやかな表情だけを見て判断する女性しかいない。彼の瞳は、深淵のように暗いことに気づく者は誰一人としていなかった。

道中にある関所や馬借町などで補給をしつつ、脱落もなくなるとか都の正門にたどり着いた。現在は、都に入るための検問を順番待ちしているところだ。僕らの場合上洛だし、北方守護大名総代の綾絶家であるため順番をすつとばして割り込むことも権力で可能だ。でも僕はそれをせず順番にやるということにした。

前世でも、順番待ちしたところに割り込まれて嫌な気分をしたからわかる。今こうやって長蛇の列で平民が長い時間をかけて待つてる中、権力者が割り込んだら嫌な目で見られるだろう。いや、僕が嫌な目で見られるのはいいが、可愛い妹である波羅が嫌な目で見られるのは困る。何より、僕が割り込みをしたら、波羅が当主を引き継いだ時に僕の行いから嫌な目で見られる恐れがある。そう考えると、僕が今代行をやってるうちに公明正大な行動をしてポイントを稼いでおいた方がいいと判断したのだ。

全ては妹のためだ、ちよつとだけ大変だけどお兄ちゃん頑張るぞい。という気分ですり込みをせず肅々と順番を守ってる。ここまでの道のりがそこそ長かったので、休憩も兼ねて順番が来るまで各自休憩をさせている。

妹達は戦働きをしたので、我が家の牛車の中で休憩させている。あの牛車は特別製のゲームでもかなり使える代物だから休憩にはもってこいだろう。叔父上は品物の管理を任せているので、僕がやることは床几に座って待機しているだけだ。一応、護衛の下

人を背後に侍らせており、彼女らは傍にずっと立っているので疲れたら困るかなと思つて床几に座つていいと言つたが。

「頼様のお心遣いありがとうございます。ですが仕事ですのて」

と言われてそのままだ。体が大きい下人はその黒い忍者のような装束の上からでもおっぱいとお尻の自己主張が凄い。床几に座つてる状態から見上げると、おっぱいで顔が隠れてしまうほどだ。ていうか本当に巨乳しかいないな。大変エツチだから勃起しかかるので、なるべく見ないようにしている。

尚、順番待ちの際配下の一部からは不満の声が出掛かったが、妹達もそうだが僕らの補佐兼保護者みたいな役割をしてる叔父上が文句を言わないので、不満の声は引つ込んだ。四人には感謝しないといけない、僕だけじゃ舐められるだろうし。

まあ、考えたい時間があつたのでこうして順番を守つてるといふ意味もある。これまでの道程を思い出しながら考えに耽つていた。

途中厄介な妖魔が現れたりしたものの、叔父上を筆頭に僕の妹三姉妹が働いてくれたのもあり、怪我人は下人衆には出たものの重篤なものはおらず、治療術で回復しきれないくらいなのでよかつた。死人が出ないだけでも良かったし、治療のために片腕片足切断みたいな真似をしなくても良かった。

ちなみに、治療は専ら僕がやっている。

僕より腕がいい由羅にやってもらおうのがいいと思ったが、彼女達は前に出て襲い来る妖魔に対処するので治療が出来るのは同じく戦っている者たちだけだ。後方に下げられた怪我人を中心に術師に元に送られて治療している。

その怪我人も女性ばかりなせいかな、僕が治療すると凄く喜んでくれる。なんだろう、喜んでくれるのはいいと思うが、時折目つきが危なく感じるのでちよつと怖い。

桃代姉さんとの先日でのやり取りで思ったが、原作ゲームに比べてやはり女性が結構多いような気がする。

都に向かう道中に寄った関所や宿場街など、大多数が女性だった。僕の住んでた場所では男はちよつと少ないなと思うたが、遠く離れた場所だと段々と割合が違ってきている。やはり、僕が思ったような原作ゲームに似ていてそうじゃない、貞操やら何やらが違うパラレルワールドなのか……？

まあ、この疑問も都に入れば解決するだろう。何故なら都は重要イベントが良く起る場所だからだ。

段々と薄れかかっているゲームの記憶を辿るだけでも、大狸の鍛冶師、先代陰陽寮理究衆頭で終身教授の陰陽師であり研究者のドスケベジジイ、そして剣聖様。大雑把なこの三人がどうか頑張れば味方に出来る。フラグ管理を怠ると敵に回って主人公を犯

して孕ませることになってしまふから気をつけないといけないが。

後は、敵としても左大臣殿、色々難癖付けて主人公を犯すエロゲ竿男優のクソデブ貴族、そしてこれはグレー判定だが帝。こちら辺も気をつけないければならない。一応、僕と一緒に次期当主が内定してる波羅も一緒に連れて行って顔合わせをするのだが、彼らと妹の間に立って守らないようにしないと貞操が奪われてしまふ。

これからの活動のために吉と出るか凶と出るか。いや、鬼が出るか蛇が出るか………。まさに伏魔殿となつてゐる都にこれから入るのだ、若干恐怖が背筋を走るが妹達を守るために僕が何とか色々行動しなければならぬ。

そう心に決めて難しい顔をしながら、待っていると

「頼兄さま、難しい顔をしてどうなさいました？」

声をかけられた方に顔を向けると、僕より背が低い女の子が居た。

## 十四話 ロリ槍侍って母音のイが多いね

「頼兄さま、難しい顔をしてどうなさいました？」

声をかけられた方に顔を向けると、僕より背が低い女の子が居た。

その子は、燃えるような赤毛をしており、陽光に当たると反射光で明るいオレンジ色を発して輝いている。肩まで長く伸ばした髪は、波羅のポニーテールのように縛ったりせずそのままにしているので、ライオンの鬣を思わせるような伸び方だ。顔は、くりくりとしたお目目をしており少女特有のあどけなさがあり大層可愛い。

だが、手に持っている得物は彼女の背丈を優に超えてる長槍だ。僕が使う槍より長く、僕の身長をちよつと超える。十文字槍のそれは、鎬からけら首までうつすらと赤い色が走っており時たま淡く発光している。その柄にも幾何学模様が描かれており、専門家が見れば持ち手の霊力を利用する術式だというのがわかる。

石突も、普通の槍のものと違ってゴツゴツした真つ黒な岩の塊がついている。その岩石はひび割れており、割れてる部分からは赤い色が光って見えており熱も薄く発している。まるで、冷めた溶岩を思わせるようなものだ。

その名槍の名を「流紋玄武槍」という。扶桑国の天下名槍百本の中の一本であり、北



土の名門赤土家あかつちの当主が持つものだ。

そしてこの子は赤土焰あかつちほむら。赤土家の若き当主であり、僕の綾絶家の親戚にあたる子である。年は双子の妹より年下の十だ。ただ、双子は僕とほぼ同程度の背に対して、この子は年相応に背が低く目測ではあるが凡そ130〜140cmほどだ。

その彼女が心配そうな表情をしていたので、僕は不安にさせないように笑みを浮かべ「ああ、これから都入りするからちよつと不安だなんて思つたんだよ」

「そうでしたか、拙者は初めての都なのでとても楽しみでござるー!」  
「そうだね、僕も不安だけど同時に楽しみでもあるよ」

初めての都入りということで、期待に胸を膨らませフンスと鼻息荒くし胸を張つて答える少女、可愛い。

僕は彼女の疑問に答えつつ頭を撫でるとにへらく、として笑う。そして僕に抱き着いてきた。可愛い。こちらにも返答するように軽く腕を回して抱いてポンポンと頭を撫でると、嬉しかったのか顔を擦り付けてくる。なんだか赤い蠶をしたライオンが懐いて顔を擦りつけている感じだ。可愛い。

僕の周りは基本的に背が高い女性ばかりだったから、この子みたいな年相応に小さい子がとても新鮮に見える。僕の妹の三姉妹は上は僕より背が高いし、下の双子は僕と同

等だして兄なのに威厳が出せない。というか、三人に良く抱き着かれて頭を撫でられるのがちよつとくるのだ。兄としてのプライドが崩れ去つてしまうのである。

対して、この子は小さいので僕のプライドが崩れることがないし、こうやって抱き着かれても小さいから邪なことを考えることもないので非常に楽なのだ。妹達は背もデカイしおっぱいも大きいし太腿も尻もでかい癖に、僕にしよつちゆう抱き着いてくるから僕の精神がガリガリ削れてしまうから、懐いてくれるのは嬉しくはあるが辛いのだ。

だけど、焰に対してはそういうことを考えないし精神も削れないので。こうして甘やかしてしまう。僕自身妹達を甘やかしてる自覚は少しはあるが、親戚筋とはいえ小さい妹分のこの子をもつと甘やかしてしまつてると思う。

但し、綾絶家の親戚筋であり、名門である赤土家は武家としても有名で、現当主である赤土焰はゲームでもサブヒロインの一人として出てきたネームドキャラだ。

見た目は小さいが、手に持つてる名槍が自身の身長を軽く超える重い代物であるにも関わらず、軽々と扱うほどに見た目に反して怪力である。そして、僕の槍術の師匠役みたいな存在になつてる。厳密に師と弟子みたいな関係というより、僕と叔父上みたいな関係と言えがいいだろう。僕も槍を使うが彼女にははつきり劣るので、たまに彼女から

師事して技術を磨いている。

ゲームでの彼女は、元気のあるロリ槍侍ガールで得物である槍が火属性持ちで、彼女も燃えるような赤毛からイメージしやすい様に火属性の術が得意だ。

槍をブンブンぶん回して、火属性攻撃をバンバンまき散らし、炎の竜巻すら作って、バツタバツタと妖魔を燃やして蹴散らすその姿はまさに豪傑。見た目が小さい幼女なのに、怪力無双ロリという枠でプレイヤーからの人気も高い。

アタッカーとしても非常に優秀で、雑魚散らしに関しては術と物理両方の観点でも十指に入り、物理観点なら五指に入る程の蹴散らし力が高い。ボス戦でも火属性特化なので、火が弱点の敵ならば向かうところ敵なし状態であり、幼い体に秘められた怪力は鬼にも引けを取らない。

ただ、ボス戦と雑魚戦のどちらが専門かとするなら後者であり、ボス戦も使えるには使えるが彼女より優秀なキャラが波羅を筆頭に色々いるため、雑魚散らしは焔に任せてボス戦は別のキャラで、と役割分担すると大層効率がよいと設定資料集に書いてあったっけな。

一方で弱点は、百人中百人が見てもわかる様に火属性特化なキャラなので、水属性に

非常に弱い。

ポ○モンかな？

後は、幼い故にエツチに対する耐性がないので、そっち方面を攻められたらエツチに目覚めた子になってしまつて、怪力無双ロリ槍侍が、ちんぽ大好き槍侍へと変貌してしまふ。エツチ方面の開発が進まかつてしまつと、場合によつては町に寄つた時の歡樂街に入り浸りしたり、そこらの浮浪者に股を開いておねだりするようになってしまふほどだ。もしくは、敵のネームド妖魔からセックスを餌にしてあつさり寝取られて敵に回つてしまふこともあるくらいに色狂いになってしまふ。

水属性に弱いという文言に多くのプレイヤーがポ○モンかよと突つ込みを入れたが、エロゲー故にこっち方面だと気付かされて膝を打つた者は多い。かく言う僕もその一人だ。

ちなみに、水に弱いとあるが水属性攻撃を食らうとポ○モンのように効果は抜群だ！なダメメージを受けるわけではないし、某錬金術師の大佐のように濡れたら全くの無能になるわけでもない。単に流紋玄武槍の特性である火属性付与がなくなるというだけで、持ち前の力と得物の槍は健在なので、槍働きだけでも雑魚散らしには有用である。

ただ、技の大半が火属性攻撃と槍の攻撃を合わせた奴ばかりなので、大幅に火力が下がるから注意ということだ。

彼女の火属性攻撃は、弱点属性持ちに特効があるのもそうだが、相手を炎上状態にしてスリップダメージを与え続けるのが地味に重要なのである。

妖魔に対してのスリップダメージは、毒、酸、氷結、出血、炎上と、他にもあるが大別して五種類あり、その中で一番用意しやすく簡単なのが毒と炎上である。

理由は言わずもがな、毒は毒薬を調合すればいつでもどこでも作れるし、炎上は燃える油ぶっかけて火遁霊術を与えればいいだけだ。この二種は、道具での補助がしやすいのである。

残りの三種は、酸と氷は水属性を極めれば両方使うことが出来るがそこまで育成するのが大変で、道具での補助も特別な素材を作るので作成しにくい。出血は槍や刀などで普通に切れば出血値が溜まっていくが、出血値は武器の良しあしで決まるし接近戦故に反撃も当然くろうから他と違ってリスクがある。

そして、焰の攻撃は基本的に火属性且つ火炎蓄積値が高めなので、大抵の敵に二、三回ほど当てれば炎上状態になり敵に対して地味に使えるダメージソースになっているのだ。

どれほど高いかと言うと、例えば波羅の技の中に「火炎纏い切り」という火遁を武器

に纏わせた技がある。これは他のキャラもレベルが上がると使える属性攻撃だが、道具の補助なしでこれを4、5発ボスである大妖以上に当てると炎上するとする。

対して焰の場合は通常攻撃2、3発で炎上するのだ。対して違いがないように思えるが、波羅の場合は攻撃する前に火遁を用いて属性付与をしなければならぬ手間があるのに対して、焰の場合は得物の槍が最初から火遁を纏っているのですその手間をかける必要がない。それにプラスして、使い手である焰が火属性が得意というのもあり、属性攻撃にボーナスがつき只の通常攻撃が火遁纏切りと同等の属性且つ波羅の「火炎纏い切り」より蓄積値が高いという利点があるのだ。

ちなみに、「流紋玄武槍」みたいに火属性が付与されてる特殊武器が他にもあるが、それを焰に持たせても同様に敵を炎上させやすい効果があるので、火属性付与の特殊武器を複数所持してるなら場面によって武器チェンジさせることでさらに柔軟な対応が出来る。最も、初期の得物が槍で本人も槍の熟練度が高いので、他の武器の熟練度を上げないといけない手間があるので注意だ。

わざわざ手間をかけず、戦闘が始まったらさっさと攻撃するだけで炎上状態に出来るので、相手のライフ削りにとっても便利なアタッカーなのだ。もつと早めたかったら波羅の場合わざわざ油壺を投げつける必要があるが、それなしに炎上させることが出来るのは結構使えるし道具の節約にもなるのである。

特に、広範囲に薙ぎ払い尚且つ地面に火炎を走らせて焼け野原にする「火炎地走り」が雑魚散らしに有効且つ高確率で敵を炎上させるので、序盤から終盤まで使える攻撃キアラなのだ。

だが、先ほど挙げたような弱点により、火属性攻撃が使えなくなると一気に火力が下がるともあるが、それはきちんと克服できる。

しつかりと成長させると、そのわかり切った弱点を自分で克服するほどになる。火属性は水に濡れたら使えないというのは、世の理を知ってるならその通りだが、その常識をぶち破る必要がある。

賢明な読者諸兄も、水に濡れたら火がつかないというのはわかるだろう。だが、術師ならば、そんなこと知るか！と己の炎を燃やして火をつけるので、熟達の術師ならばその高い霊力によって『水にぬれても消えない火』を扱うことが出来る。これが出来るかどうかは熟達か未熟かを分けるようになってるのだ。この火は霊火といい青白い色をした炎だ。通常の術師は赤色なので、一目で見分けが付きやすい。ちなみに、妖魔が使う場合は鬼火、狐火などがある。

場合によっては、濡れたら自分自身を燃やして水気を蒸発させて復帰するという荒業すら使える。勿論、高レベルになるまで育成しないといけないのが欠点ではあるが、要は水に弱いという焰の弱点も、彼女が幼いからというのが理由だ。ゲーム中でも都に所

属してるベテランのお爺さんお婆さん退魔師は消えない霊火を当たり前のように扱う。そこまで精神と技術が成長してるから出来る技だが、数えて十の彼女は精神が未熟なのでまだ出来ない。故に、そこから成長させて使えるメンバーにするというのがゲームでの育成要素だ。

成長させ、水に対する弱点も克服させ、霊火を覚えると、たとえボス相手でも消えずに与え続けるようになってしまう。炎上スリップダメージが普通なら毒と同じで一定時間で消えるが、こうなったら重要な火力キャラとなり、文字通り最初から最後まで使える存在となる。

そんなサブヒロインで使えるキャラが、僕の親戚且つ妹分となってる。なので、僕も可愛がってるしこの子も懐いてくれている。まあ、仲良くしておけば波羅を手助けしてくれるだろうしって打算もあるけど。

そう思っていると、彼女が顔の擦り付けをやめて顔を上げた。

「そういえば兄さま、兄さまは都で何をするのが目的なのでござるか?」

「そうだね、まず帝や公家の皆様方に挨拶して、和歌などの茶会にも参加して、販売してる牛車の買い付けをして、持ってきた交易品を売りさばく……大体はこんなところかな」

後は、大狸の鍛冶師と、ドスケベジジイ教授や剣聖様に会うこととか、拳法道場に波



羅を連れていって門下生にすることとか、宗教団体への挨拶など色々あるが、それは別に言わなくてもいいので黙っておく。

「はえー、色々大変なのでござるなあ」

「そうだね、でも上に立つってのはこういうことだからね。焰もいずれ自分でこういうことをしないとイケないんだよ？」

「うっ、それを言われると辛いでござる……」

僕より若いこの子は、僕の当主代行と違って正式な当主である。なので、責任の度合いで言うならばつきり言つて僕より重い。年下のこの子が当主になってる理由は単純だ、当主であつた両親が妖魔との戦いに殉職したからである。なので、必然的に当主になつたわけだが、僕の家と違って分家みたいなもの且つ縁戚である故に責任は重いと云つたが、綾絶家と違って重要な行動をあまりしなくていい。

というのも、北土のまとめ役としての仕事は総代である綾絶家であり当主代行である僕がやるので、他の家は大体僕の指示に従うか支援するだけという気楽なものだ。当主が貧乏くじと僕は言つた理由はここにある。僕が会議で上洛云々について言つたときも反対しなかつたのもそれが理由だ。

ちなみに、今回の上洛は僕の家だけで十分なのだが、この子が参加してる理由は彼女

の家臣から「姫様を連れて行ってほしい」と言われ、焰からも一緒に土下座されて頼まれたからだ。

まだ幼い状態で両親が死んで当主になってしまったので、見聞を広めるために都に連れて行って見識を増やしてもらいたいと家臣共々土下座をされて頼み込まれた。僕としても可愛い妹分一人連れていくだけなら問題ないし、こういうのは家族旅行に親戚の子を預かるようなもんだろ、って考えもあつたので了承した。その時、家臣からは当座の旅費と僕への謝礼ということのでかなりの金子を積まれて渡されたのだが、これは丁重に断った。

上洛は基本的にかんりの金がかかるのだ。馬の世話をする下人や身の回りの世話の家人やらを沢山連れていくし、その道の世話や宿代もあるし、関所を通るときの通行料の問題等々……。道中でもこれだけあるのに、都にいったら各所への挨拶回りや和歌や茶会の参加と面倒臭い付き合いをしなければならぬのである。

上洛は何も知らない人なら憧れの都に行くということしか考えないだろうが、僕のようになら立つ人間からしたらたひたすら金がかかるし、公家の方々への挨拶やらも面倒だしでやりたがらない。だが、まとめ役で総代である綾絶家はそれから逃げる事が出来ない。言わば、他の連中の代わりにかなりの出費をして出張旅行に行く社長のようなも

のだ。

わかりやすい例を言うなら江戸時代の参勤交代、アレと同じだと思うといいだろう。ゲームの設定資料やゲーム内での語られる内容でも、四方を守護する総代に財政的負担をかけるために地方の状況を帝に上奏し説明させるといふ名目で上洛を義務とした、とある。この場合、財政負担をするのは総代となつてゐる護家のため、それを支える各大名や御家人は参加はしない。する場合もあるにはあるが、それはたまに都への遊行や重要な資材や道具の直接の買い付けなどをする際、総代と一緒に行って上洛を共にする場合もある。

御家人も退魔師であるため道中の護衛も自分で出来るし、滞在費などは自分持ちだが人数が多いと割引をしてくれるところもある。総代側から見ても、人数が増えても滞在費は御家人の分まで面倒見る必要はないから気にしないでもいいし、道中の護衛は彼らも参加するので数の正義ということで安全も高まるのだ。場合によっては、財力と権力の誇示の為に御家人一同を連れていく場合もあるらしい。その時はまさに一大イベントとなる。だが、最近でそれをする護家は我が家も含めていない。

上奏するための上洛を皆を代表して護家がやる代わりに、各大名や御家人は総代である四方護家の指示に従うようにという取り決めがある。最も、駄目な行動をしたら戦国時代の武田家の家臣や国人ばりに言うこと聞かない連中になつたりするから気をつけ

なければならぬ。ゲームでも忠誠が下がってのちの行動に影響が出るので、そこはプレイヤーの腕の見せ所となる。

それで、赤土家家臣と焰からは旅費やら謝礼などの意味を込めた金子を出されたのだが、これは赤土家のかんりの割合を占めた財産であつた。

上洛には多額の出費がかかる。一人増やすだけでもそれなりにかかるし、それが大名家の当主ならば下人や家人と同じ場所に寝させるわけにも行かないので、僕ら兄妹と同じ部屋を取るし食事や各種の世話もあるので高めの出費となる。本来なら焰の家人なども連れていくはずだが、それをすると余計に出費が増えるので、彼女一人だけを連れて行ってほしいと言われた。節約ではあるが、体力のない分家の悲哀がここにあつた。赤土家は両親が殉職して収入が途絶えて、幼い彼女がせつせと妖魔退治の報酬で稼いだり、家臣も内職を頑張つて家への収入にしたりと涙ぐましい努力をしている。

もちろん、僕は彼女が有力なキャラクターだとゲーム知識から知つてるので、色々援助して助けている。原作ゲームでも、家を維持するためにあれやこれやと働きづめで、桃代姉さんを助けるために働きづめの叔父上と同じになつているのだ。それを援助してるので、こうして兄さまと懐いてくれるのでこちらとしても目論見が通つているか

ら万々歳である。

あと、僕は交易品で稼いだ金があるし、彼女一人増えた程度で眉をひそめるほどの出費にならないし、先ほど説明したように親戚の子を預かるようなもので、謝礼を断りながらも同行には了承した。

おかげで、焰からは凄いい感謝され、焰の家臣も涙を流しながら土下座をして礼を言われた。

まあ、それ以前にも彼女の両親が死んでからは色々僕が世話を焼いているのもあるし、代行という立場を利用して後見人になったり、彼女自身が幼いからという理由で僕が彼女の領地の治水工事や治安活動をやったりしてるからなのもあるが。

こういうことをしておけば、困った時に僕をその火力で助けてくれるだろうし、妹が当主になった時も有用な戦力として活躍してくれるだろうという打算も込めた行動だ。ちよつとだけ利用してるようで気が引けるが、この子もサブヒロインである上に波羅と同等かそれ以上に凌辱シーンがあるキャラでもある。こうして懐いてくれてるから情が沸いたというのもあつて、この子も出来るだけ守ろうという気になってるのであれこれ世話を焼くことになった。

焰と談笑していると、正門の方から下人がやってきた。

隣には小奇麗な小袖を着た人もいて、僕の家の家人じゃないのはわかる。下人が僕の目の前で膝をついて報告する。その時に巨乳が揺れて目に悪かった。

「頼様、検問の順番になったようです」

「え？ でも僕たちはまだまだだだったんじゃないの？」

視線を正門に移すと、僕らの前にはまだまだ平民が列をなしている。が、段々と騒ぎが大きくなってきた。何かあったんだろうか？ そう思っていると下人がさらに報告をしてきた。

「はっ、実は左大臣殿が特別な計らいをしてくれましたようです。此方の方はその使いだと」  
そう言うと、一緒にやってきた顔立ちの整った家人が頭を下げ

「綾絶家当主代行の頼様でございますね。私、主人である左大臣の使いで参りました。頼様が検問を待ってるとのことですが、我が主人が大事な客人を待たせるわけにはいかぬと言いまして、先ほど門番に話を通した所存でございます」

そう言つて彼女は頭を下げる。

どうやら、僕が律義に待つていたのを左大臣殿は手を打つてくれたらしい。だが、あまり権力に物を言うのもなんだかなあという気もあつたので

「お心遣いありがとうございます。ですが、順番を守るのは大事。我が家が北方守護であろうとも、決まりを守らねば下々の民に示しが尽きませぬ」

そう言つて、感謝の意を込めて断りのノーサンキューと言つたのだが

「いいえ、此度の上洛は優先されることです。特に綾絶家は特例で猶予を与えられた身。こうして都に赴いた以上、決まりを守ること以上に猶予で遅れた上洛をすることが最優先でございます。故に、平民たちと同様に列を守る必要はありません」

伝令と同じでございます。そう締められて頭を再度下げる家人。

そう言われると、反論する術がなかつた。

式神やら、水晶玉による念話通信など和風ファンタジーみたいな通信方法はあるが、これは一部の者つまり退魔師みみたいな能力持ちにしか出来ぬことである。故に、伝令はいつの時代もあらゆる障害を跳ねのけて報告するのが仕事であり、道中の障害は特例によつて無視していい。情報の伝達は何より重要だからだ。

その例を用いられると、此方としても反論できなかつた。何より、彼女が言うように特例で上洛を遅らせた身分である故にそこを言われると弱い。他の三方はしつかり上洛してる中、こつちは当主関連で遅れてしまった。致し方ないとはいえマイナス点などには変わりないので、ここを反論して列を守ると言うのと、上洛を牛歩で遅らせていると見なされる恐れがある。

だが、権力に物を言わせて決まりを破るようで、あとで何か言われなかなあ………。ここで色々言われて、波羅が当主になった時に問題起きるんじゃないかなあ

……。そういう不安が胸中にあつたのだが

「ご安心を。門番や周辺の平民には『此度の割り込みは左大臣の命令によるもの』と説明しております。故に、綾絶家に不評は向きません」

主人がそれを見越して命令したことです。

そういつて頭を下げて来た。此方の不安を見透かされていたようだ。そこまでされたのなら此方としても反論もないし問題もない。

「わかりました、左大臣殿のお心遣いとご配慮、誠にありがとうございます」

「はい、どうか主人は頼様には是非ともお会いしたいとも申しました。ですので、どうかお時間を頂きましたら主人に直接お礼を申し上げてくださいませ」

「はい、お礼の品を持って是非ともお会いしたいとお伝えください」

わかりました、必ずお伝えします。と左大臣の家人は言つて都へと入つていった。

僕はその背を見ながら床几から立ち上がり下人に指示を飛ばす。

「よし、各自休憩終わり！検問の為に並ぶこと、手荷物をすぐ出せるようにして検査をしやすくするように命令を伝えておいてくれ」

「はっ！」

「焔は僕と一緒に、馬に乗るから僕の前あたりに座つて」

「はいでいがるー！」



既に門番に話を通つてゐるせい、前方のざわめきは、どうやら門番が列に並ぶ平民をどかすざわめきだったようだ。左大臣の家臣が正門に行つたあたりで前方がモーゼの海割りのように平民が左右にどく。

その間を堂々と僕は進んで、都入りをした。

「なんとか無事に入れたね」

「はい、左大臣殿の力に感謝ですね」

叔父上の言葉に僕はそう返す。

検問を受けたが、あまり居心地がいいものではなかった。平民からジロジロみられるのは未だに慣れない。特に女性が多いからか、どうも熱っぽい視線が送られてくるよう体がむず痒い。前世が唯の平凡な人間だから、多数の人間に注目されるというのがやはり慣れないのだ。

肝心の検問だが、予想よりスムーズに進んだ。

ゲームだとランダム要素でガラの悪い門番に絡まれて袖の下とか渡したりするイベントがあつたりしたが、そういうのはなかった。

というか原作ゲームだとガラの悪い門番はモブのおっさんで、運が悪いと性処理させられたりするものだが、門番は女性であつた。というか兵士のほとんどというか今のところ女性しか見当たらない。しかもモブ顔ではあるが整った顔だし筋肉もついて太腿も太いし、鎧の上からでもおっぱいが大きいのがわかるほどだ。

やはり、僕の知つてるゲームと何か違う。

と、どこかの小説タイトルみたいなのを思い浮かべたが。それを表情に出さずに大人しく検問を受ける。この何か違うというのも、都入りして色々見れば疑問も解決できるだろうし。

検査を受けるとき相手の兵士長がやたらベタベタ触ってきて、逆セクハラみたいなのとをされて、三人の妹達が怒り焰も「頼兄さまに対してうらやま……無礼な！」と槍を向けるひと悶着があつたが僕が間に入ってどうにか取り成して流れた。

その兵士長は、前方で荷物を検分していた退魔師にこっぴどく怒られてたので、妹達と焰もその姿を見て溜飲が下がる。そして、その退魔師は片目を眼帯で覆う女性だつた。ゲームの資料集であつたが、眼帯をつける退魔師はその目に魔瞳を持つのが多い。その魔瞳による瞳術で隠蔽を見破るのとか。

その退魔師は僕らに先ほどの兵士長について詫びを入れ頭を下げつつも注視して検分していった。もうすでに下人や家人などを見たので、最後に叔父上と妹達そして僕という風になった。妹達や焰を見るときはすぐに終わったのだが、叔父上や僕を見るときはガン見していた。男であるということがそんなに珍しいかはわからないが、僕は首を傾げたのに対して叔父上は苦笑するだけだった。妹達はこの検分役の退魔師がガン見してる理由がわかっているようで若干の殺気を放ち、それに気づいた退魔師は慌てて検分を終えて、ようやく都入りが出来た。なんで殺気を飛ばしてたんだろう？ 検分役だから、じっくり見るのは当然だと思おうし、僕自身禁制品などを持ってないから堂々としてるだけだから問題ないはず。強いて言うなら、股間回りをじっくり見てたことくらいか、僕だけじゃなく叔父上のも見てたしなあ。見たのは僕のほうが長かったけど、多分隠し物を体内に入れるとき、胃、耳の穴、尻の穴、といった場所にスパイは入れると映画や漫画などであった。だからそれでじっくり見ていたんだろうと思う。

そして、検分も無事終わり、僕ら一団はこうして正門前の広場で溜まっているわけである。

だが、既に周りから注目を浴びてるし、ここに居座るのも迷惑をかけるから移動しな

ければならない。そのために人生の先達に尋ねる。

「叔父上、これからどうしましょうか？」

「そうだね、とりあえず宿に入ろうか。荷物を置いて、旅の疲れを癒さないかね」「わかりました、では事前に話を通しておいた蓬莱亭に行きましょうか」

蓬莱亭とは都にある複数の宿でも上から数えた方が早いぐらいの一流宿である。

ゲームでも宿に泊まる時、ランク付けされた宿を選ぶのだが、値段が高いピンを選ぶと食事や睡眠に温泉果てはマッサージもとい按摩などがあるのでステータスにボーナスがついたりする。だが、べらぼうに金がかかる。

ゲーム内でも、主人公一人旅や仲間を入れた複数人での宿泊なら出費が高いのはそうだが複数人故に納得できる。だが、上洛みたいに一団を率いると下人や家人の分の宿代まで入っているので出費も倍増する。

逆にキリを選ぶと一団を率いてもかなり安く出費を抑えることができる。だが、キリ故に食事も不味いし睡眠の質も悪いし温泉など無くたらいにお湯入れて体をこするみたいな貧乏宿なのでステータスがマイナスになる。もつと酷いと、酔っぱらった破落戸が部屋を間違えて入って犯されたり、酷い宿を選んだことで恨んだ下人が夜這いにやってきたりして主人公が犯されるイベントが起きる。流石はエロゲーといったところ

だった。

僕はというと、交易品の発明で稼いだ金があるので一団含めて上等な宿を用意できた。

それに、この世界に転生して初めての都入りというのもあるし、妹達や焰も初めてなので彼女達にいい思いをさせたいという兄としての使命があった。

叔父上からは

「こんな宿を選んで（出費が凄いことになってるけど）大丈夫か？」  
と言われたので

「大丈夫です、問題ない。一番いい宿を選びます」  
そう返した。

なんとなくどこぞのゲーム主人公と相棒のやり取りみたいだなと思ったが気のせいだろう。

ゲームプレイだと、プレイヤー側のネームドや有能な部下の宿はピン、下人はキリ、みたいに振り分けることも可能だし、叔父上とのやり取りでもそうした方がいいと言われた。

だけど、僕はそれを拒否した。理由は、振り分けることで出費を抑えることが出来るが、そうすると忠誠度が下がって下人の裏切りや破壊工作が起きるかもしれないため

だ。

ゲームでの下人や家人はモブで雑兵扱いだ。ゲームだと後でいくらでも補充できるし、金さえあれば質の高い下人も用意できる。だが、忠誠度が低いと妖魔と通じて地味に嫌がらせなどが起きたりするのである。

最悪だと、不満を持った下人が妖魔と通じてその体を妖魔が乗っ取り、その下人がどんどん成長し有能なステータスとなり傍に置くようにすると、ある日突然裏切つて部隊壊滅からの主人公孕み袋エンドや、主人公が寝てるときに睡眠姦して知らないうちに妊娠、といったエロイベントが起きたりする。

僕はそれを恐れた。妹達をそうしないために、そしてゲーム世界と違ってこの世界に転生したらゲームのように簡単に補充など出来るわけじゃない。後、下人のほとんどが女性なので死ぬ姿をあまり見たくないという安い男のプライドもあって、なるべく忠誠維持を心がけてる。

まあ、これが出来るのも偏に金のおかげだ。

金がなかったのならゲームの効率プレイのようなことをしてたと間違いなく言える。お金は正義、はつきりわかんだね。

そうこう考えつつも蓬萊亭にたどり着き、宿の主人と従業員一同が一斉に並んでの歓待を受ける。宿は貸し切りだ。僕の一団が大人数なのもあるが、貸し切りにしても問題ない資金があることと、叔父上から他人がいるより我が家一団で占めた方が安全だと言われたのでその通りにした。

しかし、一斉に左右に並んで「いらっしやいませ!!」と歓待を受けると、物凄く喜んで浮足立つ僕がいた。前世の貧乏サラリーマン時代の時、こういうのに憧れを抱いたが所詮遠い夢だろうなと思っていた。それがまさか転生していいとこの坊ちゃんになって金持ちになってあの頃の憧れを叶えることが出来るとは。ちよつとした感動を覚えるとともに、人生どうなるかわからないものだなあという感想を抱く。

心の中でちよつと偉くなった感じのウキウキ気分を抑えつつ、顔には出さず下人や家人に簡単な指示を出し、叔父上とも連絡しあつて、しばらくは自由にすることにした。僕が波羅を連れて上奏するには色々ところらの準備もそうだが向こうの準備もある。大体1週間から2週間の間と連絡役の役人から言われたので、その間に歌舞伎や牛車の買い付けなどをする予定だ。下人や家人にも自由時間として、揉め事を起こさぬことなど色々取り決めに大勢の前でいい、一人一人にお小遣いとしての金子を渡す。ほとんど女性だが、全員が下人だろうが家人だろうが大喜びで両手を握って感謝を言ってくれた。ちよつと嬉しい。ここまでやれば、近隣で問題を起こすことはないはずだ。ゲーム

でも、たまに下人が破落戸と喧嘩して対応に追われるイベントがあつたが、それも忠誠心やこういうボーナスを渡す心遣いをしているなら抑えることが出来るので、それを実践しただけだ。お金渡して揉め事なくせるなら安いものである。

全員に渡し終えて解散した後僕は自身の一等部屋に入り、綺麗に敷かれてあつた布団にとりあえず豪快にダイブして大の字になつた。一等なだけあつて布団も柔らかくない匂いがする。このまま寝たい気分になつたが、部屋の外から声を掛けられた。

「兄様、波羅です。入つてもよろしいでしょうか。由羅と沙羅もいます」

「ああ、いいよ」

失礼します。

と言つて、僕の妹達が入ってきた。だが、それだけでなく焰もいる。四人とも、着ていた具足は外して楽な部屋着となつている。

「兄様の部屋に結界を張りに来ました」

「我が家のように」

「しっかりと張ります」

「うん、お願いするよ。ところで、焰がいるのはなんで？」

ゲームでもあつたように、宿に泊まるときに自身の部屋に結界を張る項目がある。こ



れを、することでスパイを防ぐのだが、それを怠らずにこっちでもやるように妹達にお願いをしたのでこうして三人がやってきた。

「ただ、焔は呼んでないし来る理由がわからない。」

首を傾げていると

「はい、我等姉妹は焔と共に旅の疲れを癒すためにこれから風呂に入ろうかと思ひまして」

「ああ、もうそんな時間か」

外に目をやると、既に夜の帳が下りてきていた。都の中にある塔、そのシルエツトが橙色の空に浮かび、塔の傍を飛ぶ鳥の姿が美しい。この夕焼けの美しさは、世界が変わっても変わらないなと一種の感動を覚える。晩御飯の前に風呂は珍しいけど彼女は戦働きをしたから癒そうとするのは当然か、そう思い

「で、三人と焔の四人でお風呂に入るわけだね、行つておいで」

「いえ、それだけでなく兄様も一緒に入ろうと思ひまして」

「そうです兄上、この宿は貸し切りです。兄上と我等姉妹に焔の五人で仲を深めましよう」

「それに、私達は妖魔と戦つたので疲れまして。ですので、兄上に按摩をしてほしいのです」

「えっ、それはちよつと……………」

妹達が小さいときは面倒を見るために一緒に風呂に入って体を洗ってあげたものだ。だが、段々と成長して今みたいな肉付きが凄いいことになってからは勃起してしまうのでめつきり入ってない。

それでも、彼女達は僕と一緒に入ろうと誘ってきてその度に断るのだが、その後の記憶があまりなかったりする。風呂に入ったことは覚えているのだが、いつ入ったのかは覚えてない。

ちなみに由羅の言う按摩はやったことはある。ゲームでも、風呂上りもしくは風呂の最中に三助の按摩を受けるとステータスが上がる効能があったので、それを思い出して風呂上りに彼女達に按摩をしたことがある。勿論僕は素人だから、按摩師から人間のツボ一覽みたいなのを買って、それを見ながらツボを押してるだけなのだが、痛い痛いと言いながらも熱っぽく息を吐いてその後ビクビクしてたから効いていた……………と信じていた。

話が逸れたが、彼女達に誘われたが一緒に入るのは拙いだろう。そう思いすぐに断る。

すると、

「頼兄さま、拙者は兄さまと一緒に入りたいでござる!!」

「わかった、あとで一緒に入ろうか」

この子は親戚だし、責任者として面倒を見る必要があるし、何より体が幼いままだから勃起することもない。仮にしそうになっても霊力をちんぽに当てれば抑えられる自信がある。見た目が小さいから、幼い時の妹達の背中や髪を洗ったようにやればいだろうと思つたので了承した。

すると、妹達が頬を膨らまして抗議する。

「兄様、ずるいです。焔はよくてなんで私達はダメなのですか」

「兄上、ずるいずるい」

「私達は、兄上のお体を洗いたいです。兄上からまた洗ってもらいたいです」

「いや、そうは言つても君たち十分大きくなつたじゃないか」

僕より体格のいい妹達と一緒に風呂なんて勃起不可避である。

妹達に欲情なんて、ただでさえ兄としての威厳がないのに嫌われてしまうわけにはいかないので拒否する。

「兄様、もしかして私達と一緒に入るのが恥ずかしいのですか？」

「えっ？そ、そりやあまあ……………」

「何故？教えてください」

「そ、それは言えないよ、恥ずかしい……………」

妹達の体がスケベに成熟して勃起してしまうから。

なんて馬鹿正直に言ったら終わりだ。なので、赤面しながらも回答を拒否する。

「そうですか、仕方ありませんね——」

波羅が溜息をつきながら頭を振る。どうやら諦めてくれたらしい、そう思っていたら顔を上げて——

「——恐縮ですが兄様、正直にお答えください」

————下手に出られたら凡人の悲しさか、中々断ることが出来ない。僕は漠然とそう考え

「妹達の体がスケベに成熟して勃起してしまうから、だから一緒に入るなんて出来ないよ。君たちの体に欲情してしまうなんて、兄として情けない限りだし」

正直に答えた

うん、何も問題はないな

「まあまあ」

「なんとということでしょう」

「い、これはどういうことぞいぎるか？」

双子は共に両手を頬に当てて体をくねらせて喜んでる。そして焰が戸惑ってる。おかしいな、どうしたんだろう？僕は下手に出られたから正直に対応しただけなのに。すると、僕の回答を聞いて満面の笑みを浮かべた我が妹は

「恐縮ですが兄様、これから私達と一緒に風呂に入りますよ」

「うん、いいよ」

「またもや下手に出られた。そうされたら、此方としても断りにくい。」

拒否していたのを翻して、僕は風呂に入ることを了承した。

# 十五話 催眠、お風呂、男女混浴。何も起きないはずがな

く

蓬萊亭の風呂は広い。

一等宿屋であることを示すように設備が充実している。

蒸し風呂や、釜風呂、足湯に寝湯などあり、季節に応じた果物を入れる風呂もある。今は柚子風呂のようだ。江戸から鎌倉など大雑把な中世日本をモデルにしたにしてはそれなりに種類がある。

勿論現代日本のスーパー銭湯は電気風呂やジェットバスなど科学技術を用いてのものであるのでそれに比べたら劣るのは否めないが、それでもこの時代設定でこうして複数用意しているというだけでも評価できる。

……: : : : : と思いきや、電気風呂やジェットバスが存在した。

こんな場違いなものなんであるねんや!! とツツコミ入れるほかないが、なんと、霊力を込めた札に雷遁や風遁の属性を付与し、それを風呂釜に張り付けて再現しているのだ。

「ご丁寧にデカイ壺風呂にそれぞれ、「電気」「水流」と札が張ってある。あまりの場違いなものに思わず二度見をし、そして風呂の中を見ると水流札はジェットバスみたい壺の壁から勢いよく出ている。電気札のほうは見ただけではわからないので手をつ突っ込むとビリビリと痺れる。」

驚愕したが、頭の記憶を探ると、そういや設定資料集に明らかに時代設定無視した奴などがあつたっけな……と臆げながらも思い出した。一部はオーパーツなど言われたりしており、中にはスライム………扶桑国からの呼び名だと粘魔と呼んでるようだが、これを利用して様々な物を作成してるようだ。

『現世の波羅姫』のゲームを作った会社が作った別作品のファンタジー凌辱エロゲーでも、スライムを使って様々な便利グッズを作成しており、その設定を同社ゲームなので流用している形だ。

そのファンタジーエロゲーではスライムは接着剤やゴム材、果ては動物の血液など特定の食材を与えてブラッドソーセージもどきにした食用スライムといった使い道があつた。中には鉱脈があるとところに放つと、その鉱石を吸い取ったスライムが出て鉱脈発見に役立つ鉱石スライムなどがある。

それと同様の設定をこちらでも流用しているので、大陸や南蛮から来た商人が商売目

的で持ち込み、それを扶桑の商人が買って養殖したが、一部が逃げてしまい勝手に繁殖してしまった。結果、粘液の妖魔として粘魔という名が付き、人民に被害を与えたりするものの、その南蛮商人からもたらされた利用法が広まったことで生活や道具の質が向上した。という設定らしい。

で、何が言いたいのかと言うと

「兄様、一等宿なだけあって、こちらの道具もあるようですよ」

「空気敷物がありました」

「潤滑液もありますよ。我が家にあるものより上質かもしれません」

妹達が持ってきたのは、ラブローションと風呂マットだ。

もう一度言う、ラブローションと風呂マットだ。

お風呂プレイで必須のアレである。誰がどう見ても時代設定ガン無視したブツである。だが、先ほど述べたようなスライムを利用して作ったという設定なのでゲームに無



理やりねじ込むことに成功した。

この強引すぎる設定に、多くのプレイヤーは苦笑をしながらも受け入れたが、一部はSNSを中心に

「エアーマットとローションとかナメてんの？」

「和風ファンタジーなのに近代技術は草生える」

「時代考証もへったくれもねえな」

と言った強い突っ込みが入ったのだが、当の開発スタッフはというと

「これエロゲーですよ？ 何言ってるんです？」

という一言で黙らせる。

それ以降の突っ込みも

「これエロゲーですよ？ 何言ってるんです？」

と、シンプル過ぎて清々しいほどの開き直ったコメントで威風堂々と反論する姿が慣例となってしまうほどのほどだ。その強烈すぎる一言と、堂々とした開き直りな開発スタッフにプレイヤー達も

「禁止カード」

「伝家の宝刀」

「ぐうの音も出せない反論」

「それを言っちゃあおしめえよ」

「そりやエロゲーでエロ求めてるわけだから野暮なのはわかるけど、もうちよつとこうなんというか手心というか……」

と反応するしかなかった。

その一言が強烈すぎたので、それ以降別メーカーもその台詞を真似て言うのがある種のお約束となった。無論、野暮なツツコミに対するカウンターでもあるが、ある種の開き直りでもあるので、それを受け入れる者もいればさらに反発した者もいた。中には、あからさまなバグに対してもこの台詞を利用して責任逃れをしようとしたメーカーも現れ、それらは当然炎上した。

話が逸れた。

なので、突っ込みどころ満載なのだが、そういうものがあると認めるしかない。

とりあえず、妹達がそれを持ってきているのを見て、………違和感を感じた。

なんで僕はこの子たちと一緒に風呂入っているんだ？

あれ？　　というか、僕は拒否しなかったっけ？　　いつの間に風呂場に来てたんだ。と  
いうか、既に僕も妹達も裸だし、僕は勃起しっぱなしだし、焔は僕の体を見て赤面しつ  
つもガン見してるし、段々と羞恥心が込みあがってきてとつきに両手で股間を隠した。

股間を隠した僕を見た波羅は

「むっ、おかしいな。切れかかってる」

と言った。その台詞に疑問を感じて、僕は問いたただそうと口を開き――

「ちよっと、僕はなんで風呂場に、というか切れかかるって――」

「催眠ツツツ!!」

「ふう、危なかった」

その場にポーッと突っ立つ兄を見て波羅はホッと一息ついた。だがそれと同時に、大  
好きな兄に対して掛けていた催眠が解けかかっていたのに驚いた。

今まで、実家で一緒に風呂に入って風呂でローションプレイを楽しんでいたから、それと同様に大丈夫だと思っていた。なのに、解けかかっていた。

わからない、何が原因なのか。

催眠は本人が違和感を感じたら解除されるというのは万国共通である。当然だ、催眠とは自分がやつてることに違和感を感じさせないことなのだから。

なので、実家の風呂で4Pを楽しんでいた時も、解けることはなかった。今回も遠出とはいえ解除されることはないだろうと思っていたが頼は違和感を感じて解けかかった。

施設や諸々が実家より豪華で充実してるから違和感を覚えたのかもしれない、そう結論付けた波羅はそれ以上考えるのをやめて、ローションプレイの準備をする。普通なら色々原因を探るところだが、愛する兄とのセックスが最優先でそれ以外考える気が起きないのもあり、さっさと思考を切り替えた。三大欲求に従う人間は他の事など深く考えないものだ。

そして、先ほどから熱心に兄の裸をガン見してる従妹に声を掛ける。

「焔、お前は兄様が好きだな?」

「は、はい。頼兄さまには多大な恩があるしお世話になっておりますゆえ、あと美形だし優しいしそして——」

視線を頼に移すと、無表情で突っ立っていないながらも、その股間の男性の象徴は天を示している。その雄々しい象徴を見て内股をこすりながらも

「と、とてもスケベ過ぎて、凄い体がポカポカするでござるうう……………」

自身の性欲がどんなものかをまだ理解してないのか、口でうまく表現できないながらも、好きな異性の裸を見て情欲を覚える少女。内股をこすっているのも、自身の下腹部の熱が何なのか理解してないが快楽を覚えているので否定していない。

「お前が体に熱を覚えているのは情欲だ。乳母から教わったか？」

「た、多少は……………」

「なら、これから色々と教えよう。だが、そのためにもお前がこれからやることを秘密に出来るかどうかの確認をしなければならない。出来るか？」

「で、ですがその、頼兄さまのこれは催眠でござる。拙いのではないでしようか？」

催眠術で相手を支配下に置くことは基本的に人道に反している。それを指摘するが「そうだな、だがこれは訓練であり我らの絆を強化するためだ。兄様は美形でスケベだ、故にスケベなことを沢山されるだろうし、家の仕事でやることもあるだろう。それに対する耐性をつけなければならぬ。故に、訓練と絆を深めるためにこうして私達は肌を重ねているのだ」

「な、なるほどでござる……………」

それっぽいことを言うとして納得してしまふ従妹。頼が「この子は強いし可愛いけどちよつとこう……深く考えない子かなあ」と言っていたがその通りだったなと波羅は思った。

波羅も双子も愛する兄が得体の知れない女に抱かれるのは好きではないし、認めもしない。だが、その個人的感情とは別に、家の繋がりや交渉事で男を使うというのは定番且つ大事な事だというのは理解している。彼女ら自身乳母からも教わったし、出立する前に兄の嫁である桃代からも諭された。何より、自分達がヤツてたことを桃代から指摘された時は、三人とも断頭台に立つような恐怖と背筋に氷柱がぶつ刺さるような感覚を覚えたものだ。

桃代は、綾絶家と周辺一族から見たら公然の秘密の頼の妾扱いではあるが、頼自身が妾とせず正妻扱いしてるから、波羅達三姉妹もそれに文句を言ったりしない。もし、桃代が何の能力もない無能であれば公然と罵倒したり頼に対して正妻扱いはやめろと言つたであろう。当然だ、大事な兄を守るために無能は必要ないからだ。更に桃代は病弱であり、その病を抑える薬がべらぼうに高い。その高い薬代は、頼の発明した交易品で賄っているのが現状だ。無能で病弱で薬代も高いとなつたら、公然と罵倒するだけでなく場合によっては強硬手段を用いていたかもしれない。

いや、最初辺りは公然と罵倒はしたものだ。

従妹の病弱な姉に甲斐甲斐しく世話をして薬代を買つてとやつてるのが理解できなかった。頼になぜそのようなことをするのかと言ひ、初めて会つた時も、兄様に迷惑をかけないでくださいと堂々と言つたりした。面と向かつて言われた本人は笑顔を崩さず怒つたりしなかつたのが癪に障るし、頼も苦笑を浮かべながら彼女はとても強いからと言つて波羅の苦言を聞かなかつた。ずつと寝たきりの病人が強いと何故知つてるのか？ 何故そう言い切れるのか？ と理解できなかつた。自分の兄は好きだし信用しているが、たまにわからないことをすると不思議に思つたものだ。だが、そのわからないことをやつて結果を出してきたから説得力があつたが、それでも寝たきりの病人が強いと理解していると言ひ切れるのは流石に理解の範疇を超えていた。

そして、頼の言つてることが真実だつたと表明されたのは稽古の時だ。

桃代は病弱であつたが無能ではなかつた。

武について天性の才能があり、三姉妹で一番強い長女の波羅が太刀打ちできない程である。体調が良かった時に彼女が稽古をつけてあげる、と言つたときは鼻で笑つたものだ。今まで寝ていた病人に何ができるのか、私は兄様をずつと守る様に戦つてきて強い自負があり負ける気は一切なかつた。そう思いながら試合をした。

だが、結果は五合打ち合つて敗北し、波羅のプライドは折られた。

そして、彼女は兄が言っていたことが真実だったと身をもつて理解した。

どうしても悔しくて、一度三姉妹全員でかかったことがあったが、大妖や凶妖にも効く双子の合体技の靈術を居合一閃で消し飛ばす相手は分が悪いどころではなかった。術は得意だが近接は苦手な双子は前衛を波羅に任せて後方から援護というオーソドックスなスタイルで攻めたのだが、波羅の横を縮地で抜け速攻で懐に入り込まれてやられ、波羅も十合打ち合つて敗北したほどだ。最初の中から成長したとはいえ、いまだに勝てない。

力が正義なのはいつの世の中も万理不変の黄金律である。故に、三姉妹は桃代に逆らえない。

その逆らえない正妻から兄を催眠逆レイプしてるでしょ？ と指摘された時は辞世の句を考えたほどだ。

だが、三姉妹は自分の思いを正直に語った。

「桃代姉様。全て、兄様がスケベ過ぎるのが悪いんです」

「そうです、兄上は無防備にスケベすぎます。こんなの抱けつて言ってるようなもの



じゃないですか」

「兄上のスケベな所業の数々を見て欲情しないのであれば、その者は袋無し玉無しの逆バージョンでしょう」

清々しいとまでに思える正直な告白と責任転嫁である。この告白にはたとえジーザスといえども渋面を作るであろう。

だが、桃代は三姉妹の告白に罵倒を浴びせたりしなかった。それどころか、深く同意するかのようの鷹揚に頷き

「そうね、それについては同意するわ。頼君、本当に無防備なんだもの。あんなの鴨が葱を背負って来るようなものじゃない」

と同意した。

そもそも、必要とあらば夫や息子を出して棒姉妹にして関係強化なんて貴族間のみならず平民の繋がりでてもやっつてることである。男の数が段々と減ってなおかつ男が草食動物みたいになつてしまった故の生存方法になつたからなのだが、それで近親相姦など頻繁には言わないがそれなりに起こるのだ。

何より、頼の行動が軒並み無防備でスケベすぎるのが悪い。あんなことしてたら、自分が頼の直接の姉だとしても犯すだろうと桃代は言う。

「貴方達から見て信用できる人に頼君を抱かせるのはいいわ、でももし彼に困ることが起きたら………わかるわね？」

威圧をにじませる言葉に、高速赤べこのように首を振る三姉妹。

その上で、催眠レイプしても構わないが「節度」を守れ、と釘を刺された。

その「節度」を曖昧にしてるのは、三姉妹を信頼しているからそうしている、と。

そしてダメ押しだが

「催眠かけて犯すのはいいけど、いずれちゃんと言明して謝罪しなさい。頼君は本当に貴方達のことを考えて行動しているんですからね？」

「はい、わかりました」

と言われてしまった。

彼女達は、黙っていれば兄にバレないから大丈夫やろ、と考えそのまましようと思っていたのだが、逆らえない相手からそう言われると反論できない。

兄に告白した時、嫌われたりしたらどうしようか………。と三姉妹は恐怖したが、自分たちがヤツたことがヤツたことなので、嫌われるかもしれないことも含めてしっかりと告白して謝罪しろ。実際問題自分達がやってることもいけないことだと理解していなながらも抱えているのだから尚悪い、とまで言われたらぐうの音も出ない。それに、兄の童貞を貰ったんだから乙女として正直に告白して反省する気概を見せなさい。と

まで言われてしまつては女が廢る。

ちなみに、三姉妹は頼の童貞を貰つてることについて優越感があつたが、出立前に頼を抱いたと桃代から聞かされた時、肉体の童貞は貰つても精神と記憶の童貞は桃代が貰つたということに三人は気づき唇を噛み締めた。

そして、自分達が認め兄を守る意思があるならば棒姉妹にしてもよいと、桃代から許可を得たので、こうして従妹に声を掛けたのだ。

この従妹も、頼が言つていたように、とても強くて頼りになるから色々世話をするよ、それにこんな小さくて当主なんて可哀想だしね。と言いつつ資金援助や領内の見回りをしていた。それを隣で見っていた三姉妹は、愛する兄がこうまで言うなら信用できるし、従妹の焰も兄に大変懐いている。

そして、たまに顔を擦り付け、体を擦り付けている。その行動を見て、兄に欲情しているのだと気付いた。まだ幼い故にわかつてないだろうが本能で行動しているのだろう。ならば、そこを利用して兄を中心に棒姉妹になれば、兄を守るのも盤石になるし、尊敬するが超えるべき壁でもある桃代に対抗できる。そう考え、こうして風呂に誘つてい

るのだ。  
だが、実はそれだけではない。

確かに、兄を守る駒として焔は有用だろう。だが、こうして催眠逆レイプを体験させることで、いずれ兄に対して告白と謝罪をするときに、数を増やして謝罪すれば兄は許してくれるだろうという腹黒い打算があった。

頼はとても優しく甘い、自分達姉妹が土下座すれば許してくれるだろうが、やってることがことなので流石に怒るかもしれない。

ならば、一人数を増やしたら？それが、兄が甲斐甲斐しく世話して可愛がつてる従妹ならば？従妹も、私達同様に兄のスケベな姿をみて我慢できなかつた。私達は同じ女故に従妹の気持ち痛いほどにわかつたので拒否できなかつた。と言って仲良く四人で謝れば許してくれるだろうという打算を込めて竿姉妹に引き入れたのであつた。仲間を増やせば大丈夫、赤信号みんなで渡れば怖くない理論である。

「焔、私達は兄様が好きだからこうして一緒に風呂に入ったたりしてる。だが、それ以上に絆を深めるのが重要だ。だから、お前が望むなら兄様と繋がるのも認めよう。受け入れる場合、兄様を守ること、そしてこのことを他言無用にすること、これを守ってほしい。できるか？」

「わ、わかつたでござる!!」

案の定、性欲に従う従妹は顔を真っ赤にしながらもすんなりと了承した。そして、股から汁を垂らしている。これから起こることに期待を抱いているのが良く分かる。ならば、初めては最高の気分させた方が良さだろうと波羅は考えた。

「沙羅、由羅、準備は出来たか？」

「はい、空気敷物はこのように」

「そして、兄様の体もぬめらせています」

エアーマットを風呂床に敷き、そして双子は両手と体を使って、ボーツと突っ立つ兄の体にローションをつけていた。

手は優しく胸や背中などに走らせ、下半身の方は双子の太腿を使ってローションをつけている。腕は自身の巨乳を使って挟んで濡らしていた。さながら、娼婦の如き動きであった。

その兄は、催眠で無意識に立っているが、体は正直に反応しているのでちんぽからカウパーがとくとくと漏れている。本来ならば射精しているところだが、そこも催眠で射精を許可があるまで禁止しているので、双子がいやらしく触っても射精はされない。だがその分、陰囊ではダイナモの如く精子が大量生産されて吐き出されるのを待っている。

準備が整ったのを理解した波羅は、それぞれに指示をした。

「よし、では焔。お前を私達の姉妹に迎え入れるための儀式をしよう。まずはその敷物にうつ伏せになって寝るんだ」

「は、はいでござる」

いそいそとエアーマットに寝転がる焔。それを見た波羅は今度は頼に指示をした。「では兄様、焔に『ドスケベ按摩』をお願いします」

## 十六話 ◆ エロゲーやAVのマツサージは普通のマツサージなわけないよねって話

『ドスケベ按摩』

平均IQ80以上の健全な人類ならこのような単語を思いついたりしない。平均IQ50のチンパンジーより酷い頭の悪い単語である。AVやエロゲーのようなノリと勢いでやってるのならわかるが、この浴場で年頃の少女が言うのは知性と品性を疑うだろう。だが、この単語は最初からこうだったわけではなかったのだ。

三姉妹が愛する兄に催眠をかけて定期的に犯していた時、いつもは部屋でやっていただけだが、新しい刺激が欲しくて風呂でやることにしたのだ。風呂ならば汚れてもすぐ洗えるし、最初から裸だから服を脱がす必要もないしで合理的である。

そうと決まれば善は急げ。三大欲求は生物に置いて最優先事項である。三姉妹は風呂に兄を連れ込んだ結果、思った通り部屋と違って汚れても大丈夫だしすぐに洗えるという合理的さが気に入り、度々風呂でセックスをすることに。

勿論その度に愛する兄に「催眠ツツツ!!」をし、終わった後は記憶もいじって色々元に戻して違和感もなくして締め、「催眠解除ツツツ!!」をしていることを忘れない。

そうしてしばらく日々を送っていると、ある時行商人がやってきて都の歓楽街で流行している物としてエアーマットとローションを持ってきたのだ。

これを出された時、三姉妹は天啓を得た。これを使えば、風呂プレイが捗るのではないかと。実際、行商人に使い方を聞いた時、その天啓が間違っていないかつたことを知り、三姉妹は金を出し合つて買った。

頼がこれを見た時、顔を引きつらせていたのが気になつたが、男からしたら女の相手をするという大変な作業があるからそれを理解して顔を引きつらせていたのだらうと、三姉妹は思つて深く考えなかつた。実態は彼の転生前の記憶から、この二点がどのようなものかを知つてゐるためと、和風ファンタジーなのに無視した未来技術ギャップやその他諸々が理由なのだがそれを知る由もない。

更に、頼が按摩師から按摩技術を学んでいたことも功を奏した。

頼が教わつた按摩技術を、自分達も知りたいたいから、戦働きの後の疲労回復のために教えて欲しいと頭を下げると、彼は疑うことなく了承した。彼自身、他人の体で勉強せねばならないので、そういう意味では可愛い妹達の頼みでもあるし、自分の技術で妹達の疲労を回復させることが出来るし、自分がいない場合は彼女達三人でそれぞれやりあうようにすれば便利で合理的だな、と思つたのだ。

そういう話がついていたので、彼にエアーマットとローションを買つた理由を聞かれ



た時、三姉妹で体を洗いあう時に、マッサージをしやすくするために買ったと言いついたが、彼はそっくりそのまま受け取ったので勘ぐられることはなく安堵した。彼自身の記憶でも、AVやエロゲーの内容ではあるがローションでマッサージしやすくするのは間違つてはいないし、三姉妹がお互いに按摩をしあつて練習で使うのだろうと思ひ深く考えなかつた。実際は、愛する兄に催眠掛けてローションプレイを楽しむためなのだ。だがそれを知る由はない。

そして、ツボの位置を記した書とにらめっこしながら彼にツボを押ししてもらい。その痛みと快楽を感じながらも覚えた。尚、頼が購入した書物には性に関するツボもあり彼もそれを知つてるが押そうとしなかつた。

当然、それは風呂プレイで押させることに成功したのだが、本番はここからだつた。行商人からも風呂での潤滑油奉仕もといローションプレイについて教わつたとき、それを使つて全身を洗うようにするのが都でのプレイだと教わつたがそれを更に捻つたものも教わつた。ある場所では按摩師が男性を按摩するときに、いやらしい按摩で性欲を刺激し食べる、という所謂マッサージプレイについて教わつた。そして、ローションプレイとマッサージプレイを合体させた所謂潤滑油按摩ローションマッサージというのもあると教わり、それを頼にやつてもらおうと三姉妹は考えた。

三姉妹は、催眠でマッサージプレイについて行商人から教わつたことを大体話して頼

に教え込む。そして、命令した

「では、兄様。兄様の記憶を元に、私達に潤滑油按摩ローションマッサージをお願いします」

そして、三姉妹は極楽へと昇った。

なぜならば、頼がやったローションマッサージは彼女達が教えた奴ではなかったからだ。

「お客さん、今からマッサージしますね」

「お、お客さん？まつさーじ？」

「焔、今からやる按摩はお前が客で、兄様が按摩師だ。そういう役で楽しむんだ。あと、兄様は按摩のことを何故かまつさーじと呼ぶらしい。恐らく南蛮の言葉だろうが、按摩という意味だろう。気にするな」

「は、はいでござる」

いきなり客と呼ばれたり聞いたことのない単語を聞かされて焔は混乱したが、波羅から説明を受けると納得する。それと同時に、頼兄さまは南蛮の言葉も知っているのか、と驚きと敬意に溢れていた。

すると、温かくもぬめりを持った手が、焔の肩に当たる。

「ひゃあっ?!」

ローションの感覚と、異性の男性に触られるという感覚に体が驚き声も漏れる。それを気にすることなく、頼は肩を揉んでいく。

「今から肩を揉みますからね、リラックスしてくださいね〜」

「り、りらつくす?」

「恐らく、力を抜けという意味だ」

またもや知らぬ単語を聞かされ混乱するが、即座に波羅から補足が入る。

言われた通りに力を抜くと、肩のマッサージが思いのほか気持ちよく、蕩けた顔をし始めた。

「ほあ〜〜……………」

トロンとした力の抜けた言葉が少女の口から漏れ出る。

的確にツボを押していき、筋肉を両手を使って揉みしだくので、長旅で溜まった疲労が流れ出るように感じていた。更には、マッサージに使っているローションも、お湯を

使って温めていたので、そのぬめりも気持ちよさを増幅させる。ローションは体につけると流れ落ちずに体についたままなので、お風呂に入っていないのに入っているような感覚を横になりながら感じていた。

「あ、あああ、くくく………」

「お客さん、肩凝ってますね〜」

気持ちいい声が漏れ、頼もそれ続けるように首や肩を揉んでいく。

首の上、髪の毛の生え際ラインにある風池とその横にある天柱、次に両肩にある肩井と肩中脛、そして背骨のそばの肩甲骨の上にある膏肓。それらのツボを的確に指圧していく。

そこから下に向かって沿ったようにツボを押ししていく。陶道、筋縮、中脛、脊中、懸樞、といった風に順繰りに押ししていった。

「んにゃああ、くくく〜」

「お客さん、痛くないですか?」

「大丈夫、気持ちいいでござるううくく………」

蕩けた顔で答える焰。都へ向かう道中で槍働きをしたのもあり、体には疲労が溜まっていたのだろう。それらの疲労がどんどんと抜けていく。風呂場という温かい場所とこのと、敬愛する従兄に揉まれているというのもあり、まるで遊び疲れて電池が切れ

たようにぐでーっと床に眠る子猫のようだ。最初に触られた時は驚きで体を固くしたもののだが、今ではすつかりと身を任せてリラックスしている。

マツサージの快楽に身を任せている中、焔は段々と期待していた。

上から順に押されていき、今では腰になつている。大腸愈当たりのツボを押され、その次は尻だ。段々と体の熱が溜まつているのもそうだが、大好きな異性に触れられている、それも嫌がるような素振りもなく、しつかりと触つているということもあり、下腹部にも熱が溜まり秘所からは段々と汗が溢れていった。

そして、遂に尻に来る、焔は期待に胸をドキドキと膨らませたが――

「は〜い、次はココを揉みますね〜」

——と思いきや来なかった。来たのは脹脛だ。

「えっ?」

「大丈夫だ焔、兄様流のやり方だ。そのまま按摩に身を任せるんだ」

期待外れで困惑の声を上げたが、それを安心させるかのように波羅が言う。それと澁々と残念がりながらもそのままになる。

だが、脹脛のマツサージもまた気持ち良かった。ギュツギュツとリズムカルに揉んでいき、強張っていた筋肉が解れていく。大層気持ちがいい。そして、足先を持って、それを脹脛と太腿が接触するまで折り曲げギュツギュツとする。交互にやった後、足指も

一本一本丁寧に揉んでいた。

気持ちいい、だが、もどかしい。股間のムズつきを抑えられず、身悶えする。それを理解してるかのように頼は答える。

「お客さん、僕は大事な下半身は触らないようにしてるんですよ」

「そ、そんなあ!?!ここまでやって酷いでござるっ!!生殺しでござるうっ!!」

「だって、そこを触ったらセクハラじゃないですか。そこから訴えられたりしたら裁判で負けますからね」

「せ、せくはら?裁判?」

あまりの生殺しに悲鳴を上げたら、その次は何を言ってるのかわからないことをスケベな兄は言ってきた。そのわからないことを尋ねるかのように波羅に目をやると

「せくはらという単語は、おそらくだが性的な嫌がらせの事だろう。兄さまは私達女の体に軽々しく触れるのは罪ではないかと考えてるようだ。そこから訴えられるのは困るみたいだ」

「ええっ?!拙者達が男性の体に軽々しく触れるのは良くないことはわかりますが、逆で怒ったり訴えるような女性はいるのでござるか?寧ろ羨ましいことでは?」

男にセクハラもとい性的な嫌がらせなどはこの世界では普通に起こるが、それ故に度が過ぎると裁判に持ち込み裁かれる事例も存在する。だが、逆に男が女に性的な嫌が

せをするなどこの世界では創作物でしか存在しないだろう。寧ろ、この世界の女からすればバッチコイどころか合意と見て宜しいですね？と解釈して即座に犯されること間違いないだ。

「その通りだが、何故か兄様はそう思ってるんだ。だから焔、お前が許可を出すんだ。そうすれば触つてくれるぞ」

「な、成程……………。で、では頼兄さま、どうか下の方のまつさーじをお願いするでござる」

「はい、わかりました。ではお客さん、今度は体を逆向きにしてください」  
「はい(ごう)げん」

指示通りにうつ伏せから仰向けになる。

少女特有の薄い体だ、胸は小さいし筋肉も少ない。焔自身、自分の体は世の女性と比べてまだまだ小さいことを理解している。従姉の三姉妹なんか背も高いおっぱいも大きい尻も大きいと平均的な女性の体付きになってるのに対して、まだまだな体付きだ。

なので、自分の体に魅力はないのか…………？そう思い、大好きな頼にこの体を見せることに不安があった。だが、体勢を仰向けにしたことで頭を上げて彼の体を見ると、彼の愚息は天を突いていた。自分の体に欲情しているというのが一目でわかる証拠だ。そのいきり立つ愚息を見て、焔の秘所から愛液が溢れ出る。

そんな焔の内心を知らず、催眠にかかった頼はマッサージをする。

「今から触りますね〜」

焔からの許可を得た頼は、焔の太腿に優しく両手を置き、ゆっくりとさするようなマッサージを始めた。

「んっんんっっ」

脹脛と違って太腿は性的な快感を得られる。股間の秘所に近いのもあるが、焔にとって敬愛する従兄が、いやらしい手つきで触ってくれるからというのも理由だ。

チラリと頼の顔を見る。催眠で虚ろな目をしながらも表情は張り付いた笑顔をしている。催眠で操っているの、仮初の笑顔だろうというのは焔自身もわかっている。だが、それでも好きな異性からこうして嫌な顔せず触ってくれるというだけで嬉しさが胸の中に溢れてくる。

すると、太腿をさすっていた手が、段々と上へと昇っていき、秘所の近くにまできた。ついに、あそこを触られる……! !

愛する兄が自身の汚い場所を触ってくれろという背徳感に、今でも快楽を感じているのにそこを触られたらどのような快感を得られるのかという若干の恐怖が緋い交ぜになつた期待が心中でいっぱいになる。だが、その思いに反して彼は触らなかつた。

「えっ? ……ふあっ?!」





「お客さん、次へと行きますね。ほーら、さささしますよ」

「はっあっつあああっつ！あ♡っ！っ♡♡っ！」

ギュツギュツと押ししていたのをやめると、次は手のひらで大きくお腹全体を撫でまわす。優しい手つきだ。

「はい、次はトントンしますね」

「おおっつっほっ♡♡！うっおおっ！っ♡♡♡♡♡」

「お客さん、わかりますか？今トントンしてる場所は女性にとつて大事な場所なんですよ」

「ふ……う！おっ♡♡♡っお……っ♡ほおっ！」

優しい触りから、今度は親指を立てて、左卵巢、子宮、右卵巢といった順にトントンと上から小突いてくる。的確に子宮と卵巢を狙い撃ちにした親指突きに痺れるような快楽が脳を走り回り、口からは少女の声でありながら野太いような喘ぎ声が漏れる。

異性から触れられてるといっただけで快感が来る、敬愛する兄なら猶更だ。触ってくれただけでも快感なのに、男の腕枕という女の夢をしてもらい、更には耳元で優しい言葉を掛けてくる。性知識が少ない焔にとつて、何から何まで初めての快感であった。

「焔どうだ？兄様のドスケベ按摩は？」

「しゅっ、しゅっいっ！♡すゅっいっでっじやるうううううー！♡♡」

「フッフ、凄いだらう？兄様の按摩はな、私達が仕込んだものではないんだ」

三姉妹が行商人から教わった都の歓楽街のマッサージプレイは、現代日本のマッサージプレイよりもはるかに簡略化と効率化しており、ローションに媚薬を混ぜて性感を高めて食べるというのが普通だ。この世界では媚薬が当然のように存在しているのもあるが、男が昔と比べて大分草食動物になり、勃起も中々してくれないので薬で補助するというのも理由の一つだ。ちなみに、媚薬入りローションは行商人が普通に持っていたのだが、流石に三姉妹はこれを買うことはしなかった。明らかにあからさますぎるし、こうまでわかりやすいのを使うとせつかく長い時間を掛けて仕込んだ催眠がおじやんになる可能性があったからだ。

何より、兄である頼は当主代行故に密輸は厳しく禁じているので、行商人は包み隠さず販売品目を出していることで彼自身が媚薬入りローションの存在を知っているのだ。下人や家人が買うならともかく、自分達姉妹が買うとなると明らかに疑惑の目を向けられる。そういう理由でそれを買うのはやめ、単なるぬるぬるローションマッサージプレイを楽しもうと考えた。

そして、媚薬無しだが歓楽街のローションマッサージを教え込み

「では、兄様。兄様の記憶を元に、私達に潤滑油按摩ローションマッサージをお願いします」

と言ったことが、今の焔に対するマッサージになっっている。

つまり、三姉妹からしたら自分たちが教え込んだマッサージをするようにと言ったのだが、その命令文は転生者である彼に対しては意味が変わってくる。彼からすれば、自分自身の記憶という命令は三姉妹から教わったマッサージプレイにプラスして、転生する前のエロゲーやマッサージAVなどを見た記憶を元に、という風に解釈してしまったのだ。

なので、三姉妹はマッサージプレイで極楽を味わうだけでなく、ただでさえスケベな兄が、自分たちが教え込んでいないエロマッサージを施術したことで、兄様はスケベを越えたドスケベであると勘違いするに至る。故に、『潤滑油按摩』ローションマッサージを『ドスケベ按摩』と呼ぶようになったのだ。

それをやられている焰は、初めての異性との性的行為がこれなので、三姉妹以上に極楽を味わっていた。自慰はまだしたことがなかったこともあり、受けている衝撃は凄まじいものとなっている。

頼がやっているドスケベ按摩により下腹部の熱が収まることなく、それでいて順調に熱が溜まっていつている。丁寧なそのマッサージは、例えるならば竈に一つずつ薪をくべて火を少しずつ強めていくようなものだ。

賢明な読者ならば、竈の火に薪をくべるだけで火が一気に強まるわけではないことにご存じであろう。薪をくべた後に火を強くするならば、次は息を吹いてもつと燃やすこ

とである。

「ではお客さん、大事なところに触りますね〜」

頼が、焰の秘所に手を触れた。

といつても大陰唇に触れただけだ、だが、その快樂に焰の腰が跳ねる。目の前に火花が飛び散る感覚を覚え、これ以上の快樂はないと思つてしまったほどだ。

だがそれは、まだまだ序の口であつた。

「お客さん、大分感じてますね〜。でも、まだまだですよ〜」

「はえ?」

腰が跳ねるほどの快樂に、呂律が廻らない受け答えをしてしまうが、それをしてる暇もなく次の快感がやってくる。頼が大陰唇を優しくやらしく上下にスツスツと触つてきたからだ。

「はっ、あ♡!っ♡あああっああっあっ♡」

「お客さん〜、気持ちいいですか〜?」

「きもち♡ついい♡♡でっつごおっぎ!るうっ!」

「それはよかつた、じゃあ次行きますね〜」

ただでさえ気持ちいいのに、まだ次があるのか?!

と、内心驚愕している焰をよそに、頼は次は大陰唇を開いて小陰唇に指を触れ始めた。

親指人差し指、薬指と小指で器用に小陰唇を開いて小陰唇に中指を入れてきたからだ。既に愛液で溢れているため触れても痛みが来ることはない。代わりに来たのは触れられたことによる快感だった。今まで乳母や家臣から性知識についてあれこれ教わつても、そういうのはまだ年齢が早い、あと2年待ちましようと言われてその通りにしてきた。その触つたことがない場所に初めて触れたのは、自身の手ではなく敬愛する兄だった。

「ほ♡♡♡、おお！あつ♡あつ♡！あゝ！」

自分で触れたことはない場所に、敬愛する兄が触る。それだけで脳みそが蕩ける快感となる。我慢できない喘ぎ声漏れる。更にそこから上下にさするため、体も正直に反応した。生きのいい魚のようにビクンッ！ビクンッ！と体が暴れる。

「ゆくつくり上下に触りますよ、ほーらいーちに、いーちに」

「あつ♡あつ♡！ううっ♡あああつあゝ♡ん♡んひいいい♡っ♡！いい♡っ♡！あつ♡あゝ♡あゝ♡♡」

口に出したテンポと同時に触り、そのテンポに従った快楽がやってきて、体もその通りにビクビク反応し、喘ぎ声も出る。目の前に火花が飛び散って、もう何も考えられない状態だった。秘所からは洪水のように愛液が溢れ出て、潮も同時に吹いている。まるで、全身の水が全て抜けて脱水症状になりそうなくらいの水が下半身と全身から出てい

た。

「沢山汗が出ましたね、ちよつと水分補給しましょうか」

そういうと、頼は妹が傍で用意してた冷水の入った器を受け取り、それをぐつと煽る。その様子を見た焰は、自分も飲みたいと思つたが、体が快樂で痺れて上手く動かない。口は多少は動くので、口を開いて要求したところ

「ら、りゃいにいしやま、せ、拙者もお水が欲しいで——んむつ?!」

それを理解してるかのように、頼は焰に口移しで冷水を飲ませた。

突然の事に驚くも、体は水を欲して止まないのもそれを受け取りコクコクを飲む。そして、飲み終わつた後、兄から接吻されたということに顔が赤くなる。初めての接吻は、とても甘くて美味しいものだった。水分がなかつたので、乾いた喉を通る水が潤いをもたらす。だが、その水は愛する兄がわざわざ口移しで飲ませたものだ。今まで、兄からたまに名水などをお裾分けされたこともあり、それらを飲んだ時も普通の水とは違つたおいしさがあつた。だが、この口移しで飲ませてくれた水は、よくある普通の水なのに、今までもそしてこれから飲むほどの名水よりも勝る極上の物だと理解した。

口移しで飲ませると言つても一回では足りないもので、複数回に口移しで飲ませる。飲ませ終わつた後、優しく頭を撫でた。添い寝していた頼が立ち上がり、焰の下半身に移動する。そして、顔を焰の秘所へと近づけた。一体何をするのか?という疑問は、即座

に來た快樂によつて答えが出た。

「ちゅっ、ちゅっ、レロレロ」

「ほおっ♡ ああああああ！ ああ♡ ああ♡ つああ!! に、にいしやま!! しよこはっ、きたにやいでごじやるうううう!!」

「大丈夫大丈夫、お客さんに汚いところなんかありませんよ」

「ん♡ん♡ つひーいーい♡♡♡ ついーいーい♡♡♡ いーい♡♡♡ ああ♡♡♡」

手マンさせられただけでも凄い快樂だったのに、クンニもしてもらい目の前に火花が飛び散ることが終わらない。何より、美形で敬愛する兄がこのような汚いことを率先してやっているというギャップが焔の心に快樂を与える。舌で優しく舐められ、陰核にやらしくキスをしているその頼の姿を見るだけでも、いやらしさにより快樂という竈の火が激しく燃えていた。彼がクンニをするたびに、未知の快感で焔の腰が生きのいい魚のようにビクンツ！と跳ねるのだが、それをしたらクンニしづらいからか、頼が焔の腰を両手で強く抑えて更に舐め始めた。その頼の更なるいやらしい姿を見て、激しくクンニをさせられているのもあり、もう彼女の頭は快樂でぐちゃぐちゃになっていた。

クンニを一通り終えた彼は、頭を上げ自身の下半身を焔の下半身に近づけた。彼の愚息の竿が焔の秘所と接触する。そして、彼はゆる〜つくりと腰を動かし上下に擦ってきた。所謂素股である。



焔の感じやすい秘所に、彼の愚息の竿が当てられた時、焔は新たな快感を味わいまた腰が跳ねた。

まだ入っていないのに、入っているような感覚になる。擦っているだけなのに、彼の熱い愚息を感じているためか、それを冷却せんとばかりに自身の秘所からとめどなく愛液が溢れる。だが、その愛液も熱を持つているため一向に冷めず寧ろもつと熱くなっているように思えた。

「お客さん、これからもつと気持ちよくするために特別マッサージをしますが宜しいでしょうか？」

「お願いするでござるうっ!!」

彼の言っていることは、既に本能で理解していた。これから繋がることに、何の不満が、拒否する理由があるうか。即座に了承し、期待に胸を膨らませる。

頼が、自身の愚息を持ち、入り口に当てた。これから入っていく、そう思っていた。だが――

「焔……………、だ、だめ……………、このままじゃ入ってしまう……………」

「むっ?何故兄様の催眠が解けかかっているのだ?」

いざ挿入という時に、頼が体を止めた。どうやら、自分がこれから焔の処女を奪うということに違和感を感じ、催眠が解けかかったようだ。

傍に控えていた三姉妹は、即座に催眠をかけなおす。

「兄上、これから焔の処女を散らすのは大事なことですよ」

「そうですよ兄上、何故止める必要があるのですか?」

「焔は兄様のことを好いております。好いているのならばためらう必要が何故あるのでしょうか」

言霊を駆使して早く挿入させるようにするも、一向に動かない。瞳術を使おうと波羅は彼の顔を持って目を見ようとしますが、対策するかの如く目を閉じてる。

「だ、駄目だよ……僕が彼女を抱くのなんて……僕より美形のいい男がいるし……従妹を抱くなんて出来ないよ……」

「何を言っているのですか兄様」

たまに頼は自分のことを卑下する。焔を抱くことに抵抗しているのも、彼が常日頃言うように自分より美形ないい男は星の数ほどいると言っているからそれが理由だろう。北土の貴公子とまで言われているのにこうまで自身を低評価するのが三姉妹にはいまだに理解が出来ない。謙遜なのだろうが、度が過ぎるにもほどがある。

だが、ここまで来て止めるとは生殺しが過ぎる。同じ女として、三姉妹はここで止められてる焔の心情を考えて繋がるよう仕向けるもまだ動こうとしない。すると、挿入されるのを待っていた焔が頬をぷくーつと膨らませて体を起こし、頼に抱き着いた。そこ

から、見事な体術でぐるんと回転させ、頼をエアーマットのの上に倒し、自身は彼の体に乗っかる。そして、彼の愚息を掴んで自身の秘所に当てた。性知識についてまだ知らないところはあつたが、彼の愚息を自身の秘所に入れること、というのは先ほどの素股で理解した。

「頼兄さま、一度ならず二度までも生殺し!!いくら愛する兄さまといえど許せないでござるうっ!!ふんっ!!」

「うああっ!」

二回も生殺しにされて、流石の焰も怒り柔術の一環で体勢を逆転させ、そのまま逆レイプする。彼の愚息を入れた焰に多少の痛みがやってくるも、それ以上に多幸感と快樂が脳髓を痺れさせた。

「がっ♡♡!!はあっっ!?!♡♡ほあ、ああ、……………♡」

大口を開けて仰け反り、口から舌を出して放心してしまう。今までの潤滑油按摩は前菜、まさに主菜はこれだと本能と溢れ出る快感で焰は理解した。そのまま微動だにしないかったが、少しだけ腰を動かした。すると、その度に膣壁が擦れまた快感がやってくる。その快感が気持ちよくて、もう少し動かすとまた快感がやってくる。更に動かすと動かす分だけ快感がやってくる。

気付いたら、一定のリズムで腰を動かしている焰がそこにいた。三姉妹はそれをニコ

ニコシながら見守っている。思えば、自分達も愛する兄で処女を散らしたときもこんな感じで、イキ顔を盛大に晒しておまんこからは潮を吹きまくっていたよな………と初めての性交の時を思い出し、可愛い従妹が自分達と同じようなことをして同じ女だなど見ていてほっこりしていた。寧ろ、処女を散らすという意味では焔の方が贅沢であろう。何故ならば、三姉妹は催眠を掛けて強引に犯したのに対して、焔の場合はこうやって潤滑油按摩ロションマッサージで丁寧に快感を与えて散らしたからだ。

体を仰け反り大口明けてイキ顔を晒しながらも、腰を動かしていた焔は、仰け反った体を前に急に持つてきた。そのまま激しく倒れこむかと思いきや、両腕でしっかりとマットに手を置き、急に倒れて頼にダメージを与えないようにしている。ここにきて焔はようやく頼の顔を見た、彼の顔も焔ほどではないが快感に染まっていた。その顔を見たことで、自身のおまんこがしっかりと彼に快感を与えていることの証明であると理解し、更に喜び腰を振る速度を上げる。

「頼兄さまっ!!しゅきっ!!しゅきでござるっ!!♡」

「ほ、ほむらっ、だ、だめだよっ!僕らは、従兄妹なんだからっ!♡」

流れで好きだと告白するも、頼は拒否する。だが、自身の腰振りで快感の声を上げているので説得力がない。そう思った焔は自身が快楽を得るために、そして拒否する兄をわからせるために更に動く。

「こんなにおちんぼを硬くしてっ!!♡拙者の中に入れてっ!!♡喘いでいてんだからっ!!♡説得力がないでござるっ!!♡」

「だ!だっ♡、て!キツすぎてっ!!気持ち良すぎるからっ!!♡」

「また嬉しいことを言ってくださるっ、どれだけ兄さまはスケベなんでござるかっ!ほらっ!ちゅうううう♡」

体格差があるため、体を倒しても焰の顔は頼の顔に届かない。だが、彼の胸には届く。焰の目の前には、彼の白くてきめ細かな美しい肌と、それに浮き出るようなピンクの乳首があった。それが目に入った焰は、体を倒してそれに吸い付く。まだ拒否する兄にわからせてやるために、本能で彼に快楽を与えようと行動していた。

男性が女性の乳首を舐めると女性は快感を得るが、それは逆も同じだ。焰は、彼の乳首に吸い付き、乳輪を丁寧な舐め、さらに舌で上下にチロチロと舐めて刺激を与える。しゃぶっていない乳首は片手の指先で優しくコリコリと刺激を与える。口で刺激を与えたら、与えてない乳首も同じようにし、彼の両乳首は少女の口によって激しく舐められていた。さらには、乳首を舐め終えたと思ったら腰振り再開し、彼の胸板に頭を下に大きく動かし舌を這わせて激しく舐める。舐めている時に度々顔を見上げて彼の顔を確認していたが、その度に喘ぎ声を出し、イヤイヤと顔を振る様があまりにも可愛くて愛おしくて、更に激しく口で愛撫していた。味なんてしないはずなのに、兄の胸を

吸うだけで何故か落ち着き、そして美味しいという表現が脳に浮かぶから尚やめられなかった。我々の世界で男が女性の胸に色々と口で愛撫するが、それと同じかそれ以上の激しきで焔は彼の胸を口で愛撫していた。

「はっ♡はあっ!!ちゅっ♡れろおっ♡!兄さまの乳首、おいひっ♡おいひいでござるっ♡♡!」

「んひっ!♡いいっ♡♡や、やめてえっ♡♡!!」

我々の世界では、女性が男性の乳首を吸うなどプレイだけで積極的にやろうとしない。だが、この世界の女性は男を抱く時の一環で刺激を与えるために吸ったりする。これも偏に、草食化してしまった男を射精に導くための行動となってしまうのだが、それでいて男の乳首を吸うという行為自体が親愛表現であり、異性の乳を吸うという行為に性的快感を得るようになってしまったからというのもある。焔も、この世界の女性故に、自身の得る快樂の為に、もはや本能で最適解を導き出していた。

対する頼も、催眠が解けかかっている状態ではあるが、彼の脳内もぐちやぐちやになっっていた。

いつの間にか、可愛い従妹と裸でマッサージしていて挿入する直前までなってしまうばかりか、それを止めようと踏ん張っていたら、急に焔に柔術の応用で体勢逆転され逆レイプされるなど理解の範疇を越えていた。さらにそこから、激しく腰を振られ、好

きだと告白され、さらには自身の胸を激しく舐められている。

可愛い妹分に腰を振られているというだけでも、桃代や紗和と違ったキツキツロリまらんで快樂が凄まじいのに、焰はこちらを見上げながら反応を伺ってくるのだ。異性に胸を吸われるというだけでも未知の快樂なのに、それを可愛い少女が積極的にやってくるのである。暖かな、それでいてザラついた感触が乳首を這うだけでもビクビクと震え、焰がゆつくりと乳輪を舐めただけでも感じたことのない快感に思わず抵抗するかのようには頭を振ってしまふ。それを見たせいとか、彼女は一向にやめない。それどころか、もつと激しく愛撫してきた。さらには、乳首を吸うだけでなく、胸板も大きく上下に舐めるようなことまでしてきた。怪力ロリ美少女が、目をハートにしてこちらを見上げながらそれをやるのである。頼自身、いけないことと理解しながらも正直に言っすさまじく興奮していた。

エロゲーでもロリものはやったことはあるが、彼自身はおっぱいが大きい女性が好きだったのでロリは抜けるがメインではない。だが、ロリコンでない彼をロリコンに転向してもいいかな………と思えるほど、焰とのセックスは衝撃であった。ロリものでは大体が男性が幼女を攻めるのが普通だ。だが、彼の目の前の少女は全くの真逆である。ロリビッチという単語が思い浮かんでしまうほどの、激しい腰振りと舌の愛撫。彼自身、体を動かして妹分とのセックスをやめさせようとしていた。だが、原作ゲームでも

あったようにこの子は怪力ロリ。貧相な彼は見事に抑え込まれて身動きが取れない。抵抗しようと両腕で引きはがそうにも柔術を応用した動きで防がれてしまう。下半身は騎乗位ではあるが、足を彼の太腿に絡ませているためにガツチリつかまれてこちらも引きはがすことができない。何より、自身を慕っていた妹分が、こんなにも激しく乱れて腰を振るといふギャップもあり、それを生且つ間近で見ていた頼は下手なAVより凄まじい衝撃を受けて、もはや限界に近かった。

「ほ、ほむらっ!!♥ぬ、ぬいてっ!♥でるっ、でちゃうからっ!!♥」

体格差はあるも、両腕は動くので引きはがそうとする。流石に中出しはマズイ!そう思っ、激しく抵抗した。だが、それを抑え込んだのは、彼が信頼している三姉妹だった。

片腕をそれぞれ沙羅と由羅が持ち、自身の胸に当て揉ませる。残った波羅は、顔を両手でがっちりつかんで彼の口に舌をねじ込みディープキスをした。

「んむっ♡ちゅっ♡れるお♡兄様、ここまでやって外に出すなんて失礼ですよ♡(嘘)」

「そうですね、兄上、女の処女を奪ったら、中に出すのが男の礼儀というものです(嘘)」  
「男である以上、女を孕ませるのは義務ですよ♡焔にはまだ早いです、経験を積ませる為にも中にたっぷり出して下さい♡(半分嘘)」



嘘である。

この世界の男は長年の弱体化と草食化に並行し女性の強大化と肉食化に伴い、お互いの価値観が多変に變化したのもあり、女に犯される存在だというのが認知されている。それ故に、女に物のように扱われる種馬存在だというのを理解しているため、女性から激しく求められることを厭らしく下品だと男達の間価値観でそうなっている。我々の世界と貞操が逆転しているのしょうがない部分があるが、それでも男が女を孕ませる存在だという認識は重要だというのを理解していかないわけではない。子孫を作らなければ滅びるといふのは流石に理解しているが、それに感情が追い付かないに近いだろう。

だが、今のこの嘘は、彼に対する催眠に対して有効であった。

催眠が解けかかっていることが理解できない三姉妹であったが、焔とのセックスを見て、彼が自分達とヤツてるときと同等かそれ以上に感じていたのを見て、若干の嫉妬を覚えるもチャンスだと判断した。快楽で頭が蕩けているなら催眠を掛けやすいからだ。

故に、タイミングを見計らって今こうやって言霊を駆使して掛けなおしている。両手をそれぞれ胸を揉ませて、顔は激しいデープキスで、下半身はロリな従妹が責め立てて、と見事な5P連携で彼に快楽を与えていた。そして、それが今成功している。

「ちゅっ♥あむっ♥うあっ♥そ、そうなのかな?」

「そうですよ兄様、男が女に種をつけるのは正しいことなのです。彼女を我等の棒姉妹とするためにも」

「中にたっぷり出してください、兄上」

「気持ちよくびゆる〜〜♡と出してください、兄上」

「出して♡出して♡」

「イけ♡イけ♡」

「うはあゝあ♡ゝつあ♡ゝ！あ♡ゝ♡ゝつあゝあ♡あゝ♡！♡ゝ♡!!!」

言霊を駆使した巧みな言葉攻めもあり、彼は今まで我慢していた分盛大に射精した。

びゆるる〜〜〜♡♡♡♡♡

「ん♡おお♡♡♡つっゝゝ！ほお♡♡ゝおっ♡♡ゝ」

射精音が聞こえるほどの激しい射精。

毛も生えていない年下のキツキツぷに穴ロリまんこに、制限なしの大量射精。従妹とセックスをしていることが、桃代や紗和と違った初めてのロリまんこに出していることが、そしてこんな小さな少女に逆レイプされ成す術なく犯されているということが、彼の射精の制限を取っ払った。口を大きく開け舌が出るほどの気持ちよさを味わって、失神するほどであった。

対する焔は、まさに天に昇っていた。

初めての性行為。乳母から色々教わっているがまだ完全とはいかず、自慰もまだ覚えていない。そんな純真無垢な少女は、いつも親切に世話をしてくれる従兄の頼が大好きだった。

両親が殉職して困った時も手助けし、小さいながらも持つ領地の見回りも手が足りない時率先してやってくれて、開発資金も全くの無利子というわけではないが有り得ないほどの低金利で貸して領民を救ってくれた。

周りも認める美形で、自分を含めた女性に対して嫌な顔も拒否感も出さず接してくれた。村民や町民の男子は女性とあまり関わろうとしないが、彼は当主代行という肩書のせいもあるだろうが普通に接してくれた。

そんな彼に対して、家族としての好きが、異性に対しての好きに変わることはなんら不思議なことではない。焔自身、言葉に言い表せないが、彼に良く抱き着いて愛情表現をしていた。世の男子ならば嫌がるだろうが、彼は嫌な顔せず受け入れ、頭を撫でてくれるのがまた嬉しかった。

そんな、尊敬し、優しく、美形な兄とのセックス。

前菜である潤滑油按摩で竈の火に薪をくべていき、主菜であるセックスで激しく燃えている状態だ。そこから、トドメとばかりの大量射精。この中出しで、激しく燃えてい

る火が、まるで核融合したかのような熱さになっていた。

自身の大切で快感を与えている子宮に、大量の子種が発射され叩きつけられた時、焰は再度体がエビぞりになり顔を天に向けアへ顔を晒した。今までの快樂でも、目の前に火花が飛び散ったり、真つ白になることが多々あった。だが、この中出しは全く違う。今までの快樂が全て出来損ないに思えるほどのモノであり、焰は、天国にいる両親の顔が見えてしまったほどだ。

胎の中に出された子種。とても重く、甘く、そして熱い。

焰は赤土家に連なる者故に、火属性の術が得意だ。

その炎は、迫りくる妖魔の数々を燃やし尽くし、先祖代々伝わる流紋玄武槍を使えば、辺り一面焼け野原にすることすら可能だ。それほどの面制圧効果を持つ攻撃をするので、自身の扱う炎の熱さがどれほど熱く強い物かを、幼い故に言語化は無理だが本能で理解している。

だが、この胎に出された熱はなんだ？

愛する兄からもたらされた前戯での熱さ、セックスをした時の熱さ、どちらも忘れられないほどの快感を与えてくれた。

しかし、どちらの熱さよりも熱く、焔が操る火遁の術よりも熱いモノが、自身の胎の中に出された。

全くの未知の熱さを経験し、脳髓が痺れる。

この熱さは、ただ熱いだけではない。妖魔を燃やすような滅却の炎でもなく、例えるならばそう、優しいお日様だ。

両親が生きている時に焔に教えてくれたが、火遁術師は、極めるとお日様を操れると言っていた。幼い彼女にはほとんど理解できなかつたが、今この瞬間彼女にとってお日様はコレなのではないか？と答えを出していた。

いつも変わらずお日様は上り、自分たちに平等に陽の光を与えてくれる。まるで、優しい頼兄さまみたいだなと焔は思っていた。

その、暖かな熱さを持ったお日様が、今彼女の胎の中に出された。これが、子供を作ることだと本能で理解した。

家臣と乳母が、上洛から帰ったら教える予定だった性知識の先を、このセックスで学ぶこととなった。彼女は今回のセックスでたくさんのことを学んだ。

父上、母上、拙者は色々と賢くなつたでござる!!と、天国に行つてる両親に向かつて嬉しく報告しに行った。

死んだ両親に報告できるほど、彼女は白目を向いて失神していた。

「あらあら、姉上、焰は失神したようです」

「まあ、失神するほど気持ちよかったなんて羨ましいですね」

「うむ、同じ女として嫉妬してしまうな」

失神した新たな棒姉妹の妹分を、三人で優しく抱き抱えて、予備としてあったエアーマットに寝かせる。白目を向いてアへ顔をしているも、幸せな表情であった。

「それにしても、兄上の催眠が解ける条件がわからなくなりますね」

「私達は無理やり奪ったのに対して、焰に対しては自身から処女を散らすことに違和感を感じたからでは？」

「それもあるが、風呂場に入った時も解けたりしたからな。たまに変わった時に解けることがある、だから対処するために複数人であることが重要だと思う」

波羅の締めくくりに双子は頷く。

愛する兄にかけた催眠が、たまにおかしいタイミングで解けることがあっても、複数人でかければよいという判断だ。一人だと抵抗されるだろうが、二人がかり、もしくは三人がかりならばかけなおせる。数は正義である。

焰への射精がとてめ気持ちよかったせいかな、そのの快楽を感じてる時に漬け込み、再

度催眠をかけなおした。術師も言っていたが、人間は恐怖や絶望の他、快樂などの精神に左右される状況になると催眠をかけやすい。なので、仮に催眠が解けかかっていたとしても、快樂にクソザコでドスケベな兄ならば簡単にかけなおせるだろうと三姉妹は結論付けた。

そして、その頼は気絶している。気絶するほど焔の中は気持ちよかったのか、そう考えると同じ女として嫉妬した。

なにより、まだ一発しか出していない。ならばまだ大丈夫だろう、そう思った三姉妹は優しく頼を起こす。

「んあ?」

「兄様、お疲れのところ申し訳ないですが、まだ私達へのドスケベ按摩が終わっていませんよ?」

そういうと、三姉妹はそれぞれ用意したマットに寝そべり、股を開く。

頼の目の前には、大きくて可愛い妹達が、自身を誘うように股を広げている光景が広がっており、そのいやらしさに体は正直に反応した。

「ウフフ、さあ兄様」

「私達へのお相手」

「どうかお願いしますね?」

「うん、わかったよ」

催眠をかけられた彼は、疑問を持たずに彼女達に近づき、その秘所に自身の愚息を躊躇いなく入れた。

三姉妹に満遍なく種付けしたのは間違いないということだけははっきりとしていた。

性欲とは三大欲求であるため、これを制限するのは大層厳しい。

精神が成熟した大人ならば我慢できるが、年頃の娘ならば我慢できるはずもない。催眠をかけていつでも抱ける兄がいるならば猶更である。

そして、生物は一つのこと集中すると周りが見えなくなるのは常識だ。それは、風呂場で彼とセックスを楽しんでいる三姉妹も例外ではない。

更には、北土の貴公子と呼ばれ注目の的になってる男子である頼の動向を知ろうとする者も当然いる。美形で、女性に対して人見知りせず、数々の交易品を発明したのだからさもありなん。ましてや、宿屋を貸し切りなど、そこにいと公言するようなものだ。

故に、催眠をかけられた頼が気づかないのは当然であるが、愛する兄とのセックスに夢中になってる三姉妹が、風呂場にいた式神の存在を最後まで気づかなかったのも、三



大欲求に従っている故に仕方ないことであつた。

## 十七話 町に着いたら市場に行つて商品確認するのはゲームのお約束ですよ

どうも、綾絶頼です。

昨日は、妹達に押されて一緒にお風呂に入りました。その時、当然ながら妹達は全裸で来たので、せめてタオルもとい手ぬぐいで前を隠してと言つたらあつさり了承したのは意外でした。流石にでかいおっぱいとお尻に太ももを直視するのは股間に悪い。

ただ、先に入っていた焰がエアーマットで寝ていたのが気がかりでした。まるで、失神したかのように眠っていて『なんでここで寝てるんだ?』と思つたら、僕が来る前に妹達が焰に三人がかりで按摩を施したとのこと。『その気持ち良ささこう眠ってしまった。道中の戦働きでも彼女が一番頑張つたからそのままにしておいて欲しい。』と言われたので、心配しましたが納得しました。

妹達も僕の背中を洗つたら、後は一緒に入つてそれで終わりだったので、とりあえずエッチなことが起きなかつたのは良かったです。一緒に風呂に入つたにしては、宿の部屋に入つてから風呂を上がるまでの時間が結構かかっていたのが気になりましたが、お風呂に入つたら時間飛ぶからそれと同じだろうと思つて疑問に思いませんでした。

そして、一緒に風呂に入った時、一番背の高い波羅が僕の背もたれになり、左右を双子が挟んで来たときは何事かと思いましたが。おっぱいヘッドレストは大変気持ちよかったですけど恥ずかしいので抵抗したら。

「兄様の体を揉むための姿勢です、だから問題ないのです」

と言われて、急に抵抗する気が失せた。それでも、流石に恥ずかしいので止めるように言ったのだが、

「兄様はいつも働いておりますが、働きづめとも言えます。故に、私達三人で話し合って癒すことを考えたのがこれです」

「兄上から教わった按摩技術を披露するので、是非とも味わってください」

「私達はお世話になってる兄上に多少なりとも恩返ししたいのです。ですので、どうか受け取ってください」

そう強く言われたら拒否できなかった。ていうか、可愛い妹の強い頼みは余程のことがない限り断つたこと一度もねえな、と僕は思う。だけどまあ、妹達が按摩技術を披露すると言うのであれば、それがモノになってるかどうかの確認もしなければならぬ。教えた者の勤めという奴だ。

結果を言うと、按摩技術は確かにしつかりしていました。

おっぱいは柔らかかったし、波羅が僕の体や太腿を触るマッサージは気持ちよかった

し、左右を挟む双子はひたすら僕の腕を撫でたり揉んだりして疲れが取れました。後は風呂から上がった、豪華な料理食べて寝て終わり。良かった、妹達とエッチなことが起きなくて。

謁見まで一週間ちよつとほどの準備がいるから、それまで各自英気を養うようにと指示を出した後、僕は市場へ焰も入れた妹達と共に向かった。財政管理をする叔父上は後日ある場所に一緒に向かうが、今回向かうのは市場偵察という名目の観光である。

扶桑国の中心都市として栄えているだけあって、市場の活気も凄まじい。もうすぐ冬になるので、外気温は肌寒さを感じるが、市場の熱気は寒さを吹き飛ばすほどだ。

「さあさあ、獲れたて新鮮な魚だよ！ 近海で獲れた物もあれば、遠海で獲れた珍しい物もあるよ！」

「野菜はいらんかね〜！ 霊脈の恩恵に与った美味しい野菜だよ〜！」

「お茶を一杯飲みませんかー！ 茶畑でとれた一等茶が飲めますよー！ お茶請けの美味しいお菓子もありますよー！」

前世の日本ならばバカデカイビルに取り付けられた大型テレビやスマホの宣伝などで広告をしていたが、この時代はそんなものはないので昔ながらの呼び込みである。どこもかしこも元気に呼び込みをしており、それが熱を産んでいる。商売人が元気なのはいいことだ、平和の証であり、経済も良好であるとも言える。

設定資料集だと、各都市や町などで呼び込みが元気な内は妖魔の襲撃もほとんどなく平和であるが、襲撃が激しくなり経済が冷え込むと呼び込みも減っていき、最悪疎開も起きて商品の質も悪くなるのだとか。

疎開も疎開先が襲撃されて全滅ということもあり得るので命がけである。その中でも都は安全度が他と比べてダンチなので、疎開や避難先として最初に選ばれるほどだ。最も、それ故に人間に妖魔が成り済まして破壊工作をしようとは画策するから、それを防ぐための検問が厳しくなる。

千年前の人妖大戦の時、その成り済ます方法は多種多様だった。

中には、人間の中身を全て食べて皮だけ被るといふ悍ましい手法をして成功したこともある。それからもつと検問が厳しくなるわけだが、疎開目的で都に大量の人間が集まる、検問を厳しくしているため長蛇の列となる、その列になったところを妖魔が食い散らかし都はそれを守ろうとせず見殺しにする。といった悲しい事案も起きた。

都からすれば、検問をしなければ破壊工作をされるため、たとえ目の前で人民が頭か

ら食われようとも心を鬼にして肅々と検問しなければ、今度やられるのは自分達である。故に、目の前で大量に食われようとも、女子供が泣きわめき犯されようとも、門を開けて救うことはできなかつた。

それを見越した妖魔側はというと

「これ以上人民を食われなくなかつたら、今すぐ門を開けて入れろ」

「開けないのか、ならば全て食べよう」

「人間達よ、お前たちは我らに食われるが、それは都が入れないのが悪いからだ。恨むなら、お前たちを入れず高みの見物に洒落こんでいる人間達を恨むがいい」

と言つて、宣言通り全て食い散らかす。

その時、最後の台詞を真に受けた人民は呪詛や怨嗟を出しながら食われていくのだが、それが向くのは都に住まう人類のため、妖魔はその呪詛や怨嗟を利用した呪術を使い更に人類へ攻撃をする。といった、実に無駄のない合理的な行動をして人類を苦しめた。と、資料集にあつたつくな。

そんなことを思い出しながらも、僕は色んな商品を見て回り、良さげなのをそれぞれ買っていく。都なだけあつて、そこらの寂れた店にも中々な代物がありしかも値段も安

いのでそれぞれ買っていく。

原作ゲームでよその村や町に行くときは大事なお買い物チャンスである。

だが、滞在時間は有限だ。故に、用のない店には行かない。これはほかのゲームも同様だろう、なぜなら時間の無駄だからだ。だが、『現世の波羅姫』の開発者はそれを見越しているのか、都の滞在時間を減らす手段としての鬼畜手段を編み出した。

その鬼畜手段とは

『なんてことないそこらの寂れた個人商店に、かなり低確率で激レアアイテムを出す。運が良ければ通常の販売価格より安く売られ最大半額』

という方法である。

大通りから外れてる小さい寂れた店に、たまにSRやSSRな激レアがポツンと置かれ、しかも店主が価値をよくわかってないのか低価格で売られていることがしばしばある。本当に運がいいと、極超低確率だがURも出てきたりするのだ。もちろん、足元見て高い値段ふっかけてるところもあるのだが、そういった激レアアイテム入手のために、プレイヤーはあらゆる店に行くハメになるのだ。単に激レアアイテムを置くだけならまだしも、その激レアアイテムが超強力な敵を倒さないと手に入らないはずなのに、なぜか寂れた個人商店にちよつとしたお土産に色付けた程度の値段しか付けられてない、ということがあったりするのが実に厭らしい。

ゲームバランスが崩壊するかと思いきや、かなりの低確率に設定されてるので本当に宝くじ感覚なので、リセマラするには少し労力かかる上に、仮に店に出されたとしても運が良ければ最大半額と銘打っているが逆を言うと運が悪いと倍の値段で売られるのだ。なので、リセマラしてさらに低価格を狙うとなると本当に何度もする羽目になるので、諦めて次の店に行ったほうが良いとなり、そこでバランスをとっているようである。頑張つて探せば今後のゲーム展開が楽になるアイテムがポンと手に入ったりするので、プレイヤーはまだ見ぬ激レアアイテムを低価格で買うためにひたすら都を歩いて店に入つて販売アイテム探しをする。

だが、滞在時間は有限だ。それに都はお買い物だけでなく、多種多様なイベントが目白押しな中心都市である。故に、プレイヤーはひたすらお買い物をして激レア探索をするか、無視してイベントを進めるか、といった選択肢を選ばなければならない。やりたいたことが沢山あるのに、そのための時間を削減する手法を編み出した開発者は鬼だ、とプレイヤーは口をそろえて言う。

そんなゲーム世界に転生した僕だが、交易品のおかげで懐の財布にはかなりの金が入っており、はつきり言つてゲーム序盤で持っている金額ではない。ぶっちゃけゲーム中盤、下手すると終盤レベルの金を持ってしまっている。なので、そこらの店に顔を出



して、掘り出し物や店主が価値のわかってないレアアイテムを片っ端から購入していった。ゲーム序盤なのに、中盤や終盤レベルのアイテムがたまに見つかり大喜びでホクホクである。そして、それを片っ端から買える金を持つてるのも大きい。お金は正義、はつきりわかんだね。

やはり流通がしつかりしているといい商品が流れ着く、ならば、波羅が領主になった時にやりやすくするために、僕の計画を移行に移すべきだな、と頭の中で算盤を弾いて行った。荷物は最初は僕が持っていたのだが、流石に量が多くなってフラフラしてきたら、妹達が全て取り上げた。

「僕が買った奴だから、僕が持つよ」

前世でも女の買物に付き合う男は相手の物を持ってあげる、自分の買ったものは自分で持つのは紳士として当然の事。そう教わったし思っていたので、荷物を取られた時にそう言ったのだが。

「兄様、か弱い男に重い物を持たせるなど女が廃るといふものです」

「そうです、先ほどから兄上を黙って見ていけば、私達に頼らず自分で抱え込もうとするのはよくありません」

「女は男を支えるものです。兄上より私達のほうが体が強いので、兄上も遠慮せず頼つ

てくださいいな」

「頼兄さま、拙者は頼兄さまのためならばいくらでも重い物をもつてござるー!」

そう言われたので、男として立つ瀬が無くなるも四対一だと勝ち目がないので大人しく引き下がって荷物持ちをお願いすることになった。

うーん、やはりというか貞操が逆転してるのかな……。と、前々から疑問に思っていたのが少しずつ氷解していく。それこそ、特徴的な名称などでゲームの世界だったつてのは間違っていないのだろうが、こうも性差があると嫌でも認めざるを得ない。

だが、貞操が逆転して立場も逆転してるかもしれないが、それでもまだどこかで変わっていないのではないかと。と淡い期待を抱いている僕がいた。姉さんとの初夜でもそうだったのだが、認めるとすべての前提が覆されてしまいそうで、吐き気を催すからだ。そうなった場合、今までの自分の行動が全て間違ってしまったのではないか? という疑問が出てくるのがいやだから現実逃避をしているのを、理解しながらも見ぬふりをしていた。だが、いずれ向き合わなければならぬし、そうなった時僕は僕を維持できるのか? という恐怖があつて、その恐怖を味わいたくないから見て見ぬふりを――

と、頭の中で雁字搦めになってたのを、止めてくれたのは最愛の妹だった。

「兄様兄様、紙芝居をやっておりますよ」

くいくいと袖を引つ張つて教えてくれたので、思考の渦から這い出た僕は、妹が指差す方向に目を向ける。そこには、多くの子供たちが手に水飴の棒を持ち座つて紙芝居が始まるのを待つていた。

「紙芝居!どんなものか是非とも見たいでござる!!」

「兄様、まだ時間はあることですし見ましよう。私も見たいです」

「兄上、私も」

「都の紙芝居、是非とも見たいです」

うちの領地にはたまに芸人などがやってきて、その中に紙芝居をやる人もいるからどんなものか妹たちは知っている。だが、焰の領地は小さいし領民も少ないので芸人が来たことがないので、彼女からしたら初めての紙芝居となる。

「うん、僕も見たいから皆で見ようか。お姉さん、水飴を五つお願いします」

「美形なお兄さん毎度あり!是非とも見て行つておくれ!」

なので、妹たちの言う通り、気分転換にいいかなと思ひ紙芝居を見ることにした。

# 十八話 童話はちびっこ向けにやわらかい表現なのは当然ですよ

「さあさあ、ちびっ子達寄つてらっしやい見てらっしやい！愛に生きた帝のお話、この扶桑国が今日まで発展できたのは大昔のこのお方のおかげだよ！紙芝居を見たかったら、どうかお菓子を買っておくれ！」

演じ手の女性が呼び込みをしていた。興味があつたので、僕は妹達の分を含めて五人分の水飴棒を買つてそれぞれに渡す。三姉妹は喜んで口に入れ、焰は大喜びであつという間に食べてしまった。僕の妹達と違って、焰の家が両親が殉職してゴタゴタしたせいで財産が余りないので、甘い物はまさに御馳走である。もつとも、僕がちよくちよく与えていたり、砂糖から作った手作り菓子を食べさせたりしてるのだが、逆に言えば僕が来た時だけだ。来ないときはひたすら質素な食事で我慢している。故に、僕がお菓子を持つて来ると高速で振る尻尾を幻視してしまうほどに喜んで迎えに来てくれる。

あつという間に舐めつくしてただの棒になったのを見て涙目を浮かべた焰が、可哀想で可愛いだったので苦笑しつつもう一本買って上げた。今度はゆつくり舐めるように

と言うとコクコク頷いてチロチロと舐め始める。

「やあやあ、これは美形なお兄さんだねえ！妹さんが食べつくしてもまた買ひ与えるなんて粋だねえ!!そんなお兄さんは最前列で見させてあげよう、周りのちびつ子達場所を空けておくれ！」

演じ手がそう言うのと、集まっていたちびつ子は言われた通り場所を空ける。ちよつと申し訳がないので、どうもどうもとペコペコ頭を下げながら空いた場所に座る。ちびつ子達は女の子が大半だった。男の子もいるにはいるのだが割合的に少ないし、その男の子にはすでに数人の女の子が周りを囲んでる。こんな小さい子でもすでに恋愛をしていて見えてほっこりする。そして最前列に移動する際ちびつ子の、強いて言うなら女の子達が僕の顔を見て顔を赤くポーっとしてるのがちよつと気になったが、とりあえず空いた場所に座る。

尚、座るとき一番でかい波羅が地べたに胡坐で座り、僕がその中に更に胡坐で座り、そして僕の胡坐の中に一番小さい焰が入り、とマトリョーシカ見たいな風に座った。服は余所行きの汚れてもいいような安い小袖なので大丈夫である。そして左右は沙羅と由羅が固める。どうやら、僕のそばに女の子が来るのを防いでいるようだ。周りのちびつ子たちも、妹達を恐れて近寄らないようにしている。こらこら威嚇しないの。ただ、僕も僕で波羅が背もたれになってくれるのはいいが、でかいおっぱいが当たっているし、

波羅は僕の頭に顎を載せてさらには両腕を僕の体の前に持つてきて交差する、所謂後ろ抱きをするからとても恥ずかしくて顔が真っ赤になる。

演技手の女性は苦笑しつつも、声を上げて始まりの合図を始める。

「美形なお兄さんを守る妹達が美しいねえ！さてさてちびっ子達、そのお兄さんに見惚れるのはいいけどどうか紙芝居に注目しておくれ！さあさあ、今から始まるは愛に生きて愛のためにその身を捧げた天子様のお話！このお方のおかげで、我が国は平和になつたんだよ！それでは始まり始まり！！」

「とても面白かったですね、兄様」

「そうだね」

「拙者、また紙芝居を見たいでござる！」

「なら、次は別のお話を見たいですね」

「そうですね、今度はどんなお話なのか楽しみですね」

鑑賞した結果を言うならば、とても面白かったと感想をだす。紙芝居の内容はこう

だ。

「むかしむかし、人と妖魔が争っている中、あるところに一人に男の子が生まれました。その人は、六番目の子となる皇子様でした」

千年前の人妖大戦。人も妖魔も互いに争い、終わりが一向に見えないどころか激しさを増すばかり。そんな中、ある人が生まれた。

その者は、何を隠そう皇子である。帝にいる三人の娘と三人の息子、六人兄弟の末っ子の第三皇子として生まれた。正室ではなく側室であるし、末っ子故に皇位継承も遠い。本人の力も凡庸なので、派閥争いに巻き込まれず本人も関わりとうせず気ままに暮らしていた。

「皇子様は、兄姉と違って力はありませんでしたが、頑張つて勉強をして人々の役に立つと奮起していました」

気ままに、といつても遊び惚けてるわけではない。今は妖魔との戦争中、人との争いならば落としどころがあるが、妖魔側からの落としどころとは我ら人類が妖魔に家畜と

して飼われること。故に、落としどころなんてないようなもので、貴族だろうが皇族の末っ子だろうが関係なしに戦わなければならぬ。

そんな中、第三皇子は学と術を学び極めようとした。

術は本人の霊力が凡庸とはいえ、皇族ゆえに木つ端貴族より高いので戦力として数えられる。そして学は、万人が受けられるものだ。例え皇族だろうが、農民だろうが、学を修めれば学者になれる。学とは学べば学ぶほど本人の力になる。そこに身分の貴賤はない。それを第三皇子は理解したので、ひたすらに本を読み、術を学び、学者へと道を歩んでいった。

月日と年月が過ぎていき、争いも比例して激しくなる。

「ですが、二人の兄と姉が妖魔との戦いで死んでしまいました。死ぬ直前に、自身の霊力を用いて自爆し妖魔に傷を与えました。残された皇子様は、仲の良かった兄弟が死んで大層嘆きました」

妖魔との争いで、第一皇子と第二皇子が殉職した。子孫を残す前に戦死してしまつた。

更に、第一皇女と第二皇女が妖魔に捕まった。紙芝居故に、捕まって食べられる前に



自爆して妖魔を巻き込んだという表現だった。尚、設定資料集だとバチクソに犯されたが、そのまま孕み袋になる前に自爆して打撃を与えたとある。そして、帝も一気に子供を四人も失った心労で崩御した。

残った第三皇女は、当初はどこか有力な公家に輿入れする予定だったが、その有力な公家も次々に殉職してしまった。残った貴族にもあるにはあるが家格も霊力も低い、下手をすると生まれる子が弱まってしまう。ならばと皇族の血と力を絶やさぬために、第三皇子と結ばれることになった。そして、皇位継承から一番遠かった第三皇子は帝となり、姉の第三皇女は皇后となった。

「残った姉である皇女様は、『皇族の血を絶やしてはならない』とし、皇子様と結婚しました。皇子様は最初は自分は相応しくないからと断りましたが、姉の皇女様は皇子様を説得して何とか首を縦に振らせました」

母違いとはいえ実の姉と弟である。だが、血を絶やすよりかはマシだ。何より皇族は力もあるということを示すためにも、高い霊力を持つものと結ばなければならぬ。それらの打算と外面的問題もあり、そうして二人は結ばれ子も作った。

設定資料集だと、内気で押し弱い第三皇子に対して第三皇女は気が強く押しも強い

ので、ひたすらに引いて断る弟と、ひたすら押してどうか首を縦に振らせようとする姉とのやり取りがあり、弟が首を縦に振らなかつたら一服盛つて逆レイプする予定だったとあった。かなりのブラコンな姉だったらしい。

「とても仲睦まじい夫婦で、帝も皇后も子供が生まれて幸せでした。ですが、鶴という恐ろしい妖魔が、二人の仲を引き裂きました。この妖魔は様々な姿に形を変え、人々を簡単に騙す恐ろしい妖魔でした」

二人の仲はというと、姉弟故の仲の良さもあり悪くはなかった。子も産まれたため、後はそのまま過ごすだけかと思いきや、とても恐ろしい鶴という凶妖がやってきた。

その鶴は、多種多様な存在に化けることができる。数多の変化で敵である人類を惑わせる強力な凶妖であり、空亡の右腕であった。鶴は僧侶に化けて活動を開始する。数多の妖魔を屠り貧弱な村々に結界を施すなどの活躍し、その活躍ぶりから帝の目に留まり謁見を許される。

「その鶴は道明という僧を名乗り、帝に謁見をし己の力を披露して、術者の学校である陰陽寮で働くことになりました。その後、大層な働きぶりにより陰陽寮の中でも学者が集

まる理究衆、そのの教授となるほどでした」

陰陽寮は、退魔師を中心とした陰陽衆、占星術を中心とし未来を占う占星衆、そしてこの世の原『理』を『究』明する学者が集まる理究衆の三つで構成されており。この三つの構成は四方の守護家のみならずそれなりの大きい大名でも効率がよいということであらう。

陰陽衆は退魔師なので言わずもがな、占星衆は占星術で不幸な未来などを予想し回避するのが仕事、そして理究衆は言わば科学者集団である。

科学者集団というと、僕らの世界の科学者を思い浮かべるだろうがそれで間違っていない。ただ理究衆は学者集団といわれるように、退魔師の側面を持ちながら科学を研究する集団だ。簡単に言うなら、僕らの世界の科学者が科学を追求しながらも呪術霊術を使い、更に科学や技術、霊術を磨くというものである。

例えば僕らの世界での火は、赤い火と青い火は科学知識のない素人なら前者が見た目が綺麗だからこつちが熱いと思うだろう。だが、知識があるなら後者が熱いと理解できる。その科学的見地をもとに、霊術などを開発し、青い火を使う火遁などの術式を編み出し広める。という風に科学とオカルトを両方とも認めて考えるのが彼らなのだ。

「教授となった道明は、帝に提言できるほどとなり、様々な術を生み出しました。その中には、この都を守る結果もありました。ですが、その裏で道明は恐ろしいことをやっていたのです。それが、皇后を奪うことでした」

そして、そのトップに登り詰めた鶴は、表向きは有能な教授として働きつつも、密に都を陥落させるために色々と暗躍をした。そして、様々な中の一手が皇后に近づくとだった。

「皇后は戦う女性でもあったので、有能な退魔師の援護はとても役に立つものでした。故に、二人は行く先々の戦場で共に戦いました。ですが、皇后は道明から治療という名目で催眠をかけられてしまいました」

道明こと鶴は、変幻自在の妖魔と言われるように多種多様な姿に変えることができる。男も女もどちらにもなれるのだ。それを利用して女性の望む姿に変身できる。そして、変身した姿はどれもこれもがイケメンであった。詰まるところサキュバスでありインキュバスでもある。エロゲーは男性向け故に、ヒロイン含めた女性陣を犯すために男性形態がほとんどだ。そして、鶴は有力な公家に貴族、そして皇后に近づきその魔性の

外見で誑かして、女性達は次々と魔の手にかかっていった。

余談だが、たまに余興として女性形態になって男を誑かす悪女として活躍したりするから油断できない。その女性形態も非常にエッチな上に、上手い具合に勝利すればエロシーンもしっかり用意している開発スタッフに感謝をささげるプレイヤーは多数いた。

皇后も、最初は治療名目で按摩などをされて気を許したらそこから催眠をかけられ、次第に性的なことをされて、そして犯された。最初は抵抗していたものの、鶴は数々の女性を犯してきた性技、そして妖魔の体液は淫猥な効果があることや、帝以外に体を許したことによる後ろめたさなどを利用し、ついに墮とした。

度々コンビで戦場に行くのが少し気になったものの、それでも戦場で功績を上げる二人だったので帝は功を上げるなら黙るしかないので、応援していた。

「そして、催眠をかけられた皇后は、正体を現した鶴により攫われてしまいました。帝はひどく嘆き悲しみました」

その後、二人が率いる精鋭は凶妖が複数いる妖魔の大集団に襲われ全滅。全滅の報を受け取った帝は嘆くも、せめて遺体だけでも回収しようとしたが、配下の遺体はあつて

も皇后と道明の遺体は一向に見つからなかった。

それからしばらくした後、帝の元にある式神がやってきた。その式神は記録水晶を持っていった。記録水晶とは文字通り、ビデオのように録画できるものである。式神に持たせて妖魔の集団を撮影する偵察目的などに使われるほか、貴族から貴族へのビデオメッセージのように使ったりもする。

それで使われたのが、皇后のNTRハメ撮りだったのだから酷いものである。催眠をかけられ、感度上昇やら性欲増進などの術をかけられ、妖魔の公衆肉便器兼孕み袋となった姉の姿がそこにあった。

紙芝居故に泣いたと言っているが、設定資料集だと文字通りの血涙を流し、奥歯を割り、あらんかぎりの呪詛を天に向けて叫んだ。

道明もとい鶴の目的は内部崩壊であり、他の妖魔達からの協力もつけて、自作自演をしていたのだ。道明として討伐した妖魔は、妖魔側から見ても鼻つまみ者でそれでいて力も持っているから処分しにくい存在だった。故に、鶴の内部工作のために利用したのである。鶴からすれば力のある妖魔を討伐することで昇進してさらに内部に食い込むことができるし、妖魔側から見たら鼻つまみ者を合法的に処分できる上に何も知らない下っ端に人類に強い奴がいるから注意しろと、慢心しやすい妖魔を引き締めるのに役に立つし鶴の内部工作に利用できるからお互いwin-winであった。そしてそれは

見事に実を結んだのが皇后NTRである。

帝は死んだ兄妹と違って凡庸という評価があるが、腐っても鯛。扶桑国のトップの心を壊すことで、人類の結束を破壊する。何より、帝となった者は龍脈を管理するのだが、その管理には管理者となった者の心身が関係する。帝の心を壊せば、都を守る結界に綻びが出て都を今度こそ攻め落とすことが出来る。そう考えた上での鶴の内部工作だったし、多数の妖魔から協力を取り付けたので、鶴だけというより妖魔全体が団結して行った工作と言えよう。

「嘆いた帝は涙をぬぐうと、姉であり妻である皇后の仇を取るために、今まで学んだ知識をもとに自身の命を捧げてこの扶桑国全体に妖魔に対しての呪いを掛けました。その結果、妖魔達は力が出せなくなって多くの強い妖魔が討伐され、この国に平和が訪れました。なので皆さん、この都の中心にいる帝に感謝しましょう。これにておしまいいまい〜」

演じ手の女性が締めを言うことで、僕らを含めたちびっ子から拍手が起きる。

紙芝居故に優しい表現になっているが、設定資料集の一部を知ってる僕からしたらその裏で起きたことを思い出してあまり笑えない。

確か、妖魔が子孫を残しにくくする呪いを掛けて死んだんだっけな。とうろ覚えだが思い出していた。主人公である波羅を含めた女性陣がひたすら犯され孕ませられるのも、偏に呪いで種の存続が出来なくなったので人間を犯すという風になっている。

人間は妖魔に比べると弱いがその分？殖力が高い。妖魔は強いが繁殖しにくい。そういう差があったのだが、帝の呪いで女性型の妖魔が子をほぼ産まなくなった。だから、男性型の妖魔が主体となり人間の雌を捕まえ孕み袋にする。だが、そこらの平民を犯しても生まれる子は母体に影響されてしまうのか弱い子になる。弱い子を産むと、退魔師に討伐されやすくなり、ただでさえ数が少ないのが殊更に減ってしまう。何より、妖魔を産んだ母体の平民は妖魔の出産に耐えられる者はいないし、耐えたとしても発狂して母体としての機能を損なう。だから、強い退魔師の女を捕まえて犯して孕ませる。

人妖大戦の時は、人間を支配し管理するという目的だがそれには理由があった。妖魔という存在はうつろわざるものとして不変に近い存在だが非常に曖昧なものであった。その存在とは、人の認識によるものによって左右されている。

僕が住んでいた世界では、幽霊や神などはいったという伝承がある。江戸時代の浮世絵などでも、各種の宗教でも神はいるなどの伝承で作られている。

だが、伝承は伝承だ。確定的に確認されたわけではない。人が認識しなかったら、その存在を知らなかったら存在しないのである。要は童謡の「おぼけなんてないさ」とい



う奴だ。神も仏も幽霊も、その人がいるんじゃないかな……と思つたらその人の中にいる。だが、思わなかつたら、知らなかつたら認知されないから存在すら生まれえない。そういう曖昧な存在故に、下手をすれば自然消滅することもあり得た。

つまり、自分達妖魔の存続の確定のために、人類に自分たちの存在を強く認識してもらわなければならない。そのために人類を管理することは、自分達が生き延びることになる。それによる種の存続が、妖魔の目的であつた。

だが、人類側は妖魔に管理されるなど人間牧場をされるようなもので到底受け入れられない。だから、お互い自分たちの存続のために争う。

そうした中で生まれた策が、鶴の皇后NTRであつた。だが、マジギレした帝によつて扶桑国に住む妖魔全ては呪いを浴び、ただでさえ子が出来づらくなつてたのが殊更に出来なくなつてしまい、女性型の妖魔は子を産むということがほぼ出来なくなつたので存在意義を失つた。女性型の妖魔は役立たずの烙印を押されて、男性型にDVもとい憂さ晴らしの道具になつてしまつた。耐えきれなくなつた女性型は発狂して死ぬか、性転換の術を使って男になり種の存続のために人間の雌を捕まえ犯す。という裏事情が設定資料集にあつたつけな。

だから一部の敵なら性転換した妖魔なので、主人公の波羅を犯すことは精神的百合で

すね、とは開発スタッフの言である。僕は百合は好みじゃないけど、ゲームでヒロインが犯されるのはとてもエッチだったしそういう設定があるうちよつとしたスパイスになつてたくさん出たな。と下世話なことを思い出していた。

紙芝居が終わつてちびっ子達もそれぞれの帰路についていった。一部の女の子達が、僕に話しかけようとしたのだが

「下民共、兄様に軽々しく近寄るな！」

と波羅が威嚇したことで蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「ちよつと大人気ないんじゃない？あんなに驚かさなくても……」

「兄様、女は野獣なのです。何より、兄様は大事な男故に軽々しく他の女に触れるべきではありません。何かされてからでは遅いのです」

そう強く言われて、守る様にムギユツと抱かれると何も言えない。というか、守る様に抱かれることで妹の巨乳に顔が埋まって物理的に喋れなくなったのだ。タップして引きはがすようにしてもらおう。

その様子を見ていた演じ手の人が

「お兄さん、妹さんに愛されているねえ。大事にしなよ？」

と茶化された。恥ずかしいので、とりあえず感想を言う。

「愛する妹ですので、大事にします。あと、紙芝居面白かったです」

「どういたしまして、私らがこころで芸をやる時、これをやるのが条件と言われてねえ。仕方なくやってるのよ」

「条件、ですか？」

「ああ、朝廷の式目の一つみたいなものさ。学のない平民に、天正帝の偉大さを教えること。そのためこの紙芝居はやれ、と言われてねえ。まあ、やるだけで許可貰えるから安いもんだだけどさ。いやはや、朝廷の教育は徹底してるねえ」

初耳だ。

そんなの設定資料集になかった、はず……。気になったので更に聞いてみた。

「あの、朝廷の教育とはどういうものでしょうか？」

「おや、お兄さんいいところの坊ちゃんみたいなのに知らないのかい？ 朝廷は天正帝の代から寺子屋を作り、教育典範を作り、今に至るまでそれこそ平民から貴族まで教えてることがあるじゃないか。妖魔は滅ぼせ、捕まった男は潔く自決せよ。ってね」

男は自決せよとは、かなり強い言い方だ。だが、帝が典範を作ってまで徹底してるのが気になった。

「自決せよ、とは？」

「ああ、お兄さんは男だったね。すまないねえ、私の口からは言いにくいんだが……」

「構いません、どうか教えてください」

「……わかったよ。天正帝の呪いは妖魔に効いたが、こつち側も無傷とは行かなかったみたいだね。どうやら、こつちも男の数が段々と減って来たんだよ。そして、妖魔の男型は種なしになっちまって、こいつらは消滅したけど女型の妖魔は残ってね？そいつらが繁殖するために人間の男を攫っちまうのさ」

頭を殴られた衝撃を受けた。

「み、帝の呪いは女性型の妖魔が妊娠できなくなるものだったのでは？」

「え？お兄さん、どこからそんな間違った情報教わったんだい？逆だよ逆、紙芝居はちびっこ向けだから話さなかったけどさ、男型の妖魔が種無しになったんだよ。だから妖魔は女しかいないし、男が捕まったら種馬になっちまう。男が種馬になったら沢山の妖魔を孕ませてしまうからね。だから、男は捕まったら種馬になる前に自決しろってのが天正帝の教えだよ」

沢山生まれた妖魔が私達の敵になるんだからそりや自決しろっていうのもしようがないよ。と、演じ手の女性が言ったが、ほとんど耳に入らなかった。

目の前が明滅した。

呼吸が段々と激しくなる。頭痛がして、吐き気もしてくる。そして、僕が見て見ぬふりをしてたのを突き付けられた事実を教えられたようで、足元が覚束なくなる。

「兄様、どうしました？」

異変に気付いた波羅に支えてもらえなかつたらその場に倒れていたかもしれない。演じ手の女性は、男に酷い内容を聞かせて済まないねと謝りながらそそくさと退散していった。

僕が、このエロゲーの世界に転生して、ゲームの内容に近かつたから、それに介入すればいいと思っていた。事実、いくつかの事象では回避できたことがあるから正しいと思つてた。だけど、ずっと違和感を感じていた。男の数が少なく、女の数が多く、それでいて体格も男が小さく女が大きくなっていることに。

桃代姉さんを見ればわかつていたはずなのに、沙羅と由羅はゲームだと沙悟、由悟と男だったはずなのに、ずっと些細な事だと意図的に無視していた。……………否、自分自身に暗示を掛けていた。そうしないと、全て間違つていたと思い知らされそうで、その事実には弱い自分は耐えられそうにないと思つたから。

だけど、全く関係ない人からこうもはつきりと言われると、もはや言い逃れが出来ない。この世界は、僕の知ってるゲーム世界と微妙に……………いや、結構違っていることに。まさかと思つて確定じゃないからと無視していたが、この世界は僕の知ってるエロゲーと貞操や諸々が違うのではないかと。

動悸が激しくなり、吐き気を催し冷や汗がひつきりなしに出て、足に力が入らなくな

る。今まで自分のやってきたことは全て裏目に出たのではないかと不安が襲ってくる。とんでもない間違いをしてしまったのではないかと、ひたすらにマイナス思考がやってきて、目の前が真っ暗になり、そのまま倒れるように崩れ落ちる。

妹達が何か言うが、それすらも聞こえなくなってきた、瞼が落ちてそのまま意識が闇に――

「むぐつ?!」

闇に落ちる直前に、口の中に液体が流し込まれた。それを飲むと、先ほどまでの倦怠感や吐き気に冷や汗が?のように無くなり、活力がみなぎってくる。口に入れられているのは小瓶だということに気づいた。

「これでいいのか?」

「そうや、そのまま流し込むんや。この活力剤を飲めば一発やで」

「見知らぬ商人、貴殿に感謝を」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「拙者も礼を申すでござる!」

「かまへんかまへん、同じ男として、男が倒れてるのを見て見ぬふりはできへんからな」

妹の声と、男の声が聞こえる。話の内容から察するに、どうやら妹はこの男性と思しき人から薬か何かを貰い、それを僕に飲ませたようだ。落ちていた瞼を開けると――

「おっ、目が覚めたみたいやな。どや？気分は？」

「うひゃああああ?!」

僕の目の前に、筋肉モリモリマッチョマンの顔面ドアップが写り、あまりの衝撃に素っ頓狂な悲鳴を上げてしまった。

## 十九話 作品を跨いで登場するキャラっていいよね、ゲーム会社のある種の看板キャラって感じで

「いやあびつくらこいたで、紙芝居見ていた兄ちゃんが見終わった後急に倒れるからなあ」

暑苦しい笑顔をして眼前の行商人は話す。こうしてみると、陽気な関西弁商人にしか見えない。その姿は筋骨隆々であるので見るだけでとても暑苦しい。

僕たち一行は、市場から少し離れたところにある高級茶屋に身を寄せていた。そして、中に入り上等な座敷部屋を貸し切りにする。行商人一人に対して相対するように机を挟んで僕らは座る。僕は茶屋の高級茶菓子を注文し、それぞれに渡していた。妹達は今もきゅもきゅ食べてるが、相手の行商人はお茶のみで良いと言われたのでそうしてる。

まず、僕は頭を下げ感謝を述べることにした。

「その節はどうもご迷惑をおかけしました。あと、特別な活力剤も飲ませていただいて感謝します。御代を払いたいのですが、いくらでしようか？」

「んー、あの活力剤やったらこれくらいやなあ」



懐から算盤を取り出し、机の上に置いてパチパチと弾く。

その金額は、薬屋で売られる活力剤より高い、横で見っていた三姉妹は足元を見ていると感じ眉を顰める。焔は懸命に目の前のお茶とお菓子を食べることに夢中で算盤を見てもいい。見てもまだ理解できないだろうが。

波羅が何か口を開く前に僕は懐から巾着袋を出し、中にある砂金を出す。本当は銭を出す予定だったのだが、銭は市場巡りで大体使ってしまったて手持ちが少ない。今出した砂金は両替商で両替する予定だったのだが、これを出しても相手は商人故に価値を理解できるだろう。

出した砂金の量を見て、行商人は笑顔を崩さず

「おいおい、兄ちゃん。出してる量が多いで？この代金より多く出すつちゅーことは、釣りが欲しいんか？」

そう言いながら、行商人は錢袋から釣銭を出そうとするが僕はそれを手で制する。

「いえ、これは活力剤の代金と、あの場で助けていただいたことへのお礼です。あの場で、即座に薬を飲ませて対処したその行動に対してお礼が言いたい」

「足元を見てると思わなかったんか？」

「それならば、その提示した代金のみを払ってます。ですが、示した金額はあの活力剤の質を考えれば妥当なものかと。故に、足元を見ていないと判断したので、その誠実な態

度にも感謝を込めてこの金額です」

「兄様、あの薬はそれほど上等なのですか？」

「うん、飲んだからわかるけど、あれは並みの薬師が用意できるものじゃない。かなりの上等な奴だよ」

当主代行という立場にいたので、薬方向にも多少は知識をつけねばならない。うちが雇ってる薬師は並の力量でそれで作られる最高の奴の効果は味見したりして理解していた。それと比べるとはるかに質がよかった。

その質の高い奴を、惜しげもなく飲ませ、更には提示した金額は足元を見らず妥当なものだった。故に、僕はそれらの返礼として高めに払った。ただ、あの活力剤。あれはただの活力剤じゃないことを飲んで理解した。だが、それを説明するのも難しいので敢えて活力剤と言っている。相手もどうやらそれを理解しているようだ。

僕がそう言つて礼の為に再度頭を下げると、行商人はおどけたように両手を上げて。

「参つた、降参や。そこまで見てるんならこつちとしても何も言えへんわ。じゃあ、ありがたく頂くでえ」

そう言つて、砂金を銭袋に入れる。

「さて、自己紹介が遅れたな。ワイは行商人万<sup>まん</sup>太様や。以後、お見知り置きを頼むでえ」

お互い初顔合わせなのに、自分のことを様とつける尊大な態度。妹達は凶々しいなどいう雰囲気を出しているが、僕は彼の存在を転生する前のゲーム知識で知っている。はつきり言つて、こうして出会えたことに神に感謝しているくらいだ。

行商人万太<sup>まんた</sup>

『現世の波羅姫』のゲーム会社の出すゲームのほぼ全てに出てくる行商人である。同名のキャラを別作品に出すスターシステムみたいなものだ。その特徴的な外見と、売つてくれる品々のものが有益すぎて、自身が自称しているのもあるがプレイヤーからも開発者からも敬意と畏怖を込めて「行商人万太『様』」と様付けで呼ばれている。

キャラクターデザインはすべての登場作品において一貫しており、一言で表すなら『常に暑苦しい笑顔をした筋肉モリモリモリマッチョマンの大黒天』

と言うとわかりやすいだろう。

大黒天の恰好ながらも、2 mに匹敵する巨漢であり、その帽子の下は見事なスキンヘッドだ。元のデザインとなった太った姿など全くなく、ボディビルダーのような見事な筋肉の鎧を纏い浅黒い肌が光輝いていてある種の美しさを感じる。それでいて、大黒天様のニコニコ笑顔をしているのだから、見事な筋肉と相まって気温上昇間違いない

な暑苦しい笑顔をしている。実際ゲームキャラが万太と出会うと気温低い筈なのに暑く感じるとか、部屋の温度が急上昇した、みたいなことを言ったりする。屋号までしっかり用意しており、丸の中に万太の万の字を入れたものだ。シンプルだが非常にわかりやすい。

そして、筋肉モリモリマッチョマンとわざわざ付けているが、これはキャラクターをわかりやすく説明するだけだとプレイヤー達は思っていた。だがなんと中の人はハリウッドスターから「今後百年僕の吹き替えを担当してほしい」と公認されたベテラン大物声優なのだから驚嘆するほかない。開発スタッフは

「わざとわざとこの文言を入れるなら中の人も妥当な人にしないと不作法というもの」

と言って、その声優に直接指名を入れたのだとか。尚、エロゲー声優は大体がエロゲー用の名前を使ってわかりづらくしているものだが、中の人の名演技も相まってバレバレである。最も、最初は全年齢版として出してその時は表の名義であったため偽名の意味ねーじやんとプレイヤー達から突っ込まれているが野暮というものだろう。

そして、手にそれぞれ持っている打ち出の小槌と福袋は大黒天の象徴するブツだが、これは単なる飾りなどではなく掛け値なしの伝説のアイテムだ。

「さて、ここでお出会ったのも何かの縁や。それに兄ちゃん達は金を沢山持つてる良いと

ころの家の連中と見たで。ワイの商品買っていかんか？お安くするでえ」

そういうと、持っていた福袋に手を突っ込み、中から様々な物を出して机の上に広げる。どこぞの青タヌキを思い出させるように、見た目通りの袋ながらも中身は明らかに質量保存の法則を無視したブツがたくさん出てくる。

妹達は驚きながら

「なんと面妖な……」

「万太さん、袋の大きさと商品の大きさが合っていないんですが」

「実に不思議な袋ですね。どういう作りなんですか？」

「よくわからないけどすごいでござる！」

「細かいことは言いつこなしや！さあ、目当ての物があるなら買うたってや」

とツツコミを入れるも軽くないです。

この四次元ポケットのような福袋の設定を生かした万太の紹介文は

「あらゆるブツを何でも用意してくれる世界最強の商人」

という一文のみの説明だ。これだけ聞くと、フワッフワすぎてよくわからない人がいることだろう。だが、このゲームを生み出した会社の作品をプレイした経験のある人なら、その一文には頷くほかない。

「あらゆるブツ」とは文字通りだ。

万太に話しかけた時に決まった口上がある。それは

「へいらつしやい!!ワイは行人万太様や! 爪楊枝から〇〇まで、ゼニさえ出せば用意してやるで〜!」

である。

この時、爪楊枝までの口上はすべての作品で共通だ。だが、後半の〇〇部分では、作品ごとに内容が違う。

あるファンタジーエロゲーの場合は『大陸焦土魔法』で、あるSFエロゲーの場合は『高密度熱核ナパームミサイル』となっている。大規模破壊ができるという部分が共通しており、非常に物騒だ。

だがその物騒なブツを出す口上を、初見のプレイヤーはまたまた御冗談をと笑って流し、商品一覧を見ると本当にそれが売られているのを見て度肝を抜くのがある種のお約束である。

商品を見ると文字通りの『あらゆるブツ』が売られており、それこそゲーム終盤どころか、ウルトラレア極超低確率でゲームクリア後の隠しボス撃破したときにもらえるU R<sup>レジェンドレア</sup>どころかL R<sup>レジェンドレア</sup>まで出されるほどだ。もちろん、それ相応の高い金を払わなければならないのだ

が。大抵のゲームでは商店ごとにアイテム設定が施されているし、寂れた店に宝くじ感

覚でおかれるURも出ないアイテムはきちんと設定されているが、それを知ったことか  
とばかりにぶち壊す存在が行商人万太なのである。

だが、全てを出すのが、全部揃っているわけではない。出会える確率が低い上に、出会っ  
たとしても目当ての商品がないことなんてザラにある。買い物をやめる時

「目当ての物はあつたんか？なかつたら堪忍やで。ワイは行商人やからな、仕入れてる  
時もあれば売り切れの時もあるんや、すまんの」

と一言謝罪を述べているのが憎めない。

そこは都の商店に激レアアイテムを出すのと設定は似通っているが、運が良ければ本  
当にいいものを用意しているのだ。

そして、机の上に広げられた物を見ていく。刀、数珠、札、具足などなど、四人の妹  
達を見てそれに見合う物を即座に出すところを見ると、流石は伝説の行商人と頷く他な  
い。妹達も、出されたブツがいい物だと理解しているのか、顔を明るくしている。

そして、提示された金額を見て、手持ちの財布を開いて四人は同時に肩を落とす。お  
金が足りないようなので、僕が出すことにする。すると、わかりやすく大喜びしていた。  
「兄ちゃん優しいなあ、妹達の為に代わりに代金払うなんての」

「兄ですから」

「せやけど、ほんまに金持ちやなあ、それなりの金額だったのに払えるなんて驚きやで」  
交易品で滅茶苦茶稼いだからなあ。

「さて、妹達は買うたけど、肝心の兄ちゃんも買うとらん。何か欲しい物はあるか？」  
そういうと、先ほど妹達向けに出したものは別の品物を出していく。高級緑茶、紅茶、南蛮食器、葡萄酒、硝子製品等々。どれもこれもが交易品だ、値段もそれほど高くない。仮に、ここにあるものを全て買って、都の交易所に持っていけばプラスになるほどだ。

「どうやら、僕が砂糖と清酒で稼いでいることを知っているのだろう。だから妹達と違って、交易品を出した。なるほど、確かに商人だ。欲しい物を理解して即座に出すのは作品の垣根を越えて登場する伝説の行商人だと言えよう。」

だが、僕が本当に欲しいのはこれではない。

「残念ですが、ここに出されてあるものに僕が欲しい物はありませんね」

「ほう？兄ちゃんが色々と交易品を作って売ってるからこういうのが欲しいと思っただけ違うたんか。そりや意外やでえ」

「いいえ、違ってはいません。万太さんの仰る通り、出された交易品の数々は全て買って交易所に持ち込んで売りたいほどです。ですが、違う。欲しい物ではありませんが、『本当に欲しい物』ではありません」



相手が唯の行商人ならば、出されたブツは全部買って転売して利益を出している。だが、目の前の人物はエンカウント率が非常に低いレアキャラだ。そして、なんでも用意する伝説の行商人。ならば、是が非でも頼みたいことが、取り寄せて欲しい商品があった。

「万太さん、僕は貴方のことは多少ながら存じております。神出鬼没の行商人、その手に持ちし福袋はあらゆるものをだし望みの物売る、と」

「ほほう、ワイの噂か。まあ間違っておらん」

「ただし、あらゆる物売ると言いますが、いつでも商品が手元にあるわけではない」「まあな、行商人やから仕入れてる時もあれば売り切れの時もあるんや」

「ですが、そんな貴方に代金を前払いすれば、手に入れるのが困難な物も取り寄せてくれる。とも聞いております」

行商人万太のみ他の商人と違ってゲームシステムで優遇されているものがある。それは、目当ての物が無い時、設定された価格より割増料金を払うと取り寄せ依頼ができるのだ。その取り寄せ依頼は全て出来ると言ってもいい。秘境にあるものから、中には妖魔が所持しているものもあってそれも依頼できるほどだ。

取り寄せた品物が入荷したら、どこからともなく彼の騎乗動物に乗ってやってきて渡してくれるのである。

なお、彼の騎乗動物は彼同様に統一されており、「これがワイのペットやでえ、ワイの名前と同じ動物やから気に入ってるんや」と言いながらオニトマキエイに乗ってやってくる。それを見たプレイヤー達は「それマンタじゃなくてエイじゃねーか!!」とツツコミを入れるのもある種のお約束だがそれは脇に置いておこう。

ただ、取り寄せ依頼はデメリットがある

これを利用するプレイヤー達の大半はレアアイテムの取り寄せを依頼するのだからそりゃ金額が高くなる。更には、取り寄せ依頼は確実に達成してくれるわけではない。秘境に到達できなかつたり、それを持つてる妖魔が倒せなかつたり、倒して手に入れても運搬途中で壊れたり保存に失敗し腐ってしまった、と言ったりリスクがある。しかもそのリスクは、レア度が高ければ高いほど高めに設定されているのだ。

ちなみに倒すと言っているが、この場合討伐したという意味ではなくボコってアイテムを奪ったという意味なので、彼に依頼したからと言って妖魔討伐を代行してくれるわけではないし、妖魔が弱体化したりもしない。無論、強化もされるわけじゃない。だがその妖魔の持つレアアイテムを万太に依頼して運よく手に入れたら、その妖魔を倒すとレアドロップでもう一つ手に入れることも可能なのである。本来ならば一周一個なのに万太の取り寄せ依頼を利用すれば一周で二個手に入れることができることも可能だ。

高めの金を払う上に、その依頼が達成されない可能性もあるし、その時払った代金は

戻ってこない、かなりの博打となっているわけだ。だが、その博打に勝ったときのリターンは果てしなく大きいので、取り寄せ依頼をするプレイヤーは後を絶たない。

そして、僕もそれを利用する。失敗すると、かなりの額を失うかもしれないが、そもそも僕が稼いだ金だし、この時の為に貯めたと言ってもいいほどだ。

そう、桃代姉さんの為に。

「ほう、ワイのことを良く知ってるな。だが、その依頼は受けるが失敗することもあるぞ？それでもいいんか？」

「もちろんです」

「代金は全額前払いの上に、失敗してもワイは返金せんで？」

「構いません」

「はっはっはっは!! 剛毅な男の子やなあ! 何が欲しいんや?」

「『建木の雫』です」

「はっはっはっは!! 『建木の雫』かあ!! ——それをどこで知った?」

腰につけている打ち出の小槌がパチパチと放電し始める。その雰囲気の変わりよう

と強敵のような重圧が目の前の漢から発せられ、妹達は思わず立ち上がり警戒する。  
先ほどまでの陽気な関西弁商人の姿はなく、世界最強の商人としての姿がそこにあつ  
た。

## 二十話 商人が強いのは某ゲームの影響

強いッツ!! とてつもなくッツツ!!!

目の前の男から出された圧力は、私達にそう感じさせるのに充分であった。

兄様を守るために思わず立ち上がり、得物に手を伸ばそうとしたところ兄様が片手を挙げて制した。

「お前たち座りなさい」

「ですが兄様ッ! この男は危険です!」

「座りなさい、この人が敵に回ったら僕たちは絶対に勝てないから。抵抗するだけ無駄だよ」

兄様はというと、警戒する私達と違って堂々と座ったままだ。そして、お茶とお菓子を食べながらも私達に語り掛ける。その胆力には驚くしかない。

そして……………、悔しいが兄様の言う通りだ。私達では、この男に勝てない。この圧力は大妖どころか凶妖か桃代姉様と同等……………、否、桃代姉様すら超えるだろう。それほどまでに圧倒的な強者としての貫禄があった。

その男、行商人万太はというと微笑を浮かべ

「ほう、中々の胆力だな」

「いいえ、？せ我慢ですよ」

「だとしてもだ、お前のその剛胆さに敬意を表そう」

そう言うのと、行商人万太は机の上で両手を組み、それを自分の顔の前に持つていく。先ほど見せた微笑は組まれた両手で隠れ表情がわかりづらくなる。

「さて、もう一度聞こう。どこでそれを知った？」

「教えても構いませんが、知った後どうするのです？」

「内容による、とだけ言おう」

言い終わるとゴウツ！ と圧力が増した。その鋭い眼光は、まるで嘘を言わせないという風に強い。私達はその圧力にビリビリと肌を震わせる。抵抗しようにも、相手の存在が強大過ぎてこうして意識を保っているだけでやつとだ。だがいざとなれば、私は自分の身を呈して兄様を守る気である。左右に目配せすると、妹達も理解したようだ。

兄様は、そんな相手にも臆せず堂々としている。

私達より弱いはずの兄様が、この時はとても強く見えた。

お茶とお菓子を食べ終えた兄様は口を拭うと話始める。

「万太さん、まず初めに僕の嫁について話しましょう。僕の嫁は、子継病こつぎびょうに罹かかっていま

す

「ほう、あれか」

行商人も、桃代姉様の病について知っているようだ。

子継病。

この病に罹つた者は、労咳に似たような酷い症状に悩まされ、そしてその病名の通り子に受け継がれる。実に安直な命名ではあるが、他人に感染せず女性のみに感染し、それが子に受け継がれるという非常に特異な病のため、これ以上の表現方法がないということである。

男性に罹つたことはなく、子継病の女性を抱いても男性に感染しないことは今までの記録で判明している。だが、その子継病は生まれてくる子に業を背負わせるようなものなので、子継病の女性を抱こうとする人はいない。当然だ、子が生まれたらその子は必ず子継病を患うことになるからだ。

生まれてすぐというわけではないが、ある程度体が出来た幼児頃に必ず発病するのが今までの記録で確認されてるほどだ。ならばいつそのことを子を作らない方がある種の救いなのだ。子供の時からこれに罹る人は桃代姉様のようにお腹の中にいた時に母体がそれに罹つて伝染する、ということがほとんどらしい。一部はそれでもやはり子が欲しくて病の体を押して作る人もいたが、やはり幸福にはならなかつたと伝聞で聞かされ

た。

女としての立場が失われてしまいう上に、治す方法は存在せず高価な薬である程度抑えることしかできない。故に、子継病になった女性には迷惑をかける前に自害する人が多い。桃代姉様も、兄様がいなければ自害していたとは本人の言だ。

そこから兄は経緯を説明した。不治の病に罹った従姉の姉。誰も引き取り手がおらず子も作れないので、自分が嫁にしたと。その姉であり嫁であるその人を救う手段を探していた時に、伝承で見たのだと。

「まあ、伝承というところへはいいですがようは御伽噺です」

ある御伽噺で大陸の皇帝は、不老不死のために財を惜しまずあらゆる伝説の物を取り寄せようとした。その御伽噺にある、あらゆる病を治す薬として『建木の雫』があると。

「それで知ったわけか」

「はい」

「だが、お前は自分がやってることがわかってるのか?」

「何をでしょう?」

「御伽噺の代物を頼むという行為だ。空想上の存在かもしれないものを頼むなど、馬鹿らしいと思わないのか?」



行商人のいう言葉に、私は心中で同意した。

確かにそうだ、言われてみれば御伽噺の代物を求めるなど愚かな行為だ。その御伽噺の皇帝は、伝説の物を取り寄せようとして結局失敗した。それと同じ行為を兄様はやろうとしている。

そう思っていると、兄様はくつくつと笑い始めた。

「何が可笑しい？」

「失礼。貴方がそれを言うのかと思ひましてね」

「どういう意味だ？」

「言葉通りの意味ですよ。先ほど僕達の目の前で奇怪な事をして道具を取り出した。道具の大きさと袋の大きさが合わないことを、不思議で済ませられるわけがないでしょう。迷い家の力を利用した牛車と似てますが、貴方のそれはどう見ても違う。それに――」

「――」  
そう言うとき喉が渴いたのか、お茶を一口飲み

「僕からすればこの世界そのものが御伽噺みたいなものですよ。色々と説明がつかないしつきにくいことが多い。そして万太さん、貴方のような人が……いや、貴方ほどの御方の口から空想上という単語が出るのが実に可笑しくて溜まりません。ご自身の存在を棚に上げるようなその言い方が、ね？」

行商人は眉をピクリと動かす。

兄様の言ってる意味がさっぱりわからない。相手はとても強いのはわかる、だが行商人だ。身分で言えば私達より下だ。だというのに兄様は、まるで目上の人のように接する。これは単に相手が年上だから、という理由ではない。まるで、自分より身分や存在が上のように接している。それをするのが理解できない。もしかすると、兄様の言うようにこの男はただの行商人ではないのでは？

そう思っていた矢先に相手が口を開く。

「最後に一つだけ聞こう」

「なんででしょうか？」

「御伽噺の代物を求める愚かな行為。それをするにお前からは何の後悔も疑問も感じない。そこまで駆り立てる理由はなんだ？」

「愛しているからです」

即答だった。その相手が誰なのかは言うまでもない。少し私の胸が痛くなる。

「愛でそこまで動くのか？」

「はい。それに僕は、自分の幸せを求めています」

「何故だ？」

「幸せになるのは、女子供だけでいい。偉大な先人からそう教わりました。ならば、愛す

る女性が病に侵されてるならば、それを救うためにありとあらゆる手段を講じること  
何の躊躇いがありましようや。例え御伽噺の代物であろうとそれを求め、結果財を無く  
し後ろ指を指されて笑われようとも、恥もしなければ後悔もしません。故に——  
言う途中で兄様は座布団から降りてそれを脇に置き、改めて正座をし——

「——『建木の雫』の取り寄せ依頼、伏してお願い申し上げます」

——見事なまでの土下座をした。

美しさすら感じる微塵も隙の無い土下座。兄様は当主代行として動くとき、中々動か  
ない連中にこうして頭を下げる。改めてみると、無駄のない所作でありながらもこちら  
に拒否することをさせぬほどだ。だが、相手は得体の知れないがとて強い行商人だ。  
そいつに兄様の土下座が通用するかどうかはわからない。何より、行商人の強い圧力の  
前でここまで堂々とした土下座を敢行する兄様の覚悟が眩しい。それと同時に、私の胸  
が痛くなる。そこまで兄様の愛を貫っている桃代姉様に激しく嫉妬をする。今晚激し  
く抱きたいなと思ってしまうほどだ。

この二人の間に挟むことも声を出すことも出来ず、しばらく待っていると——

「は——っはっはっはっはっはっは!!」

——突如、大声を上げて笑い始めた。あまりの突然の哄笑にビクツと震えてしまう。

その呵呵大笑が終わると、おどけたように両手を挙げて。

「いや〜まいった参った! ワイの事を知りながらそこまで言ってくる奴はアイツを入れて二人目や!!」

心底可笑しいという風に笑いながらも、先ほどから発していた強者の威圧は雲散霧消していた。ピリピリしていた雰囲気是和らぎ、私もだが妹達もホツとしている。

「ふう……………ええで、気に入った! 頭を上げえや」

緊張していたのか、顔を上げた兄様はたくさん汗をかいていた。それもそうだろう。私達ですら、意識を保つだけでやつとだったのだ。私達より弱い兄様は、真正面から受けてたわけだからその圧は凄まじいだろう。寧ろ、今までまともに受け答えしてたのに

驚くくらいだ。だが、その汗をかいた姿が大変スケベだったので、桃代姉様への嫉妬もあり、今晚激しく舐めて綺麗にしようと思った。

そして、どうやら兄様のことを行商人は気に入ってくれたようだ。最初に出会ったときのような暑苦しい笑みをして話始める。

「久々に漢を見たわ。お前の覚悟しかと受け取ったで!! 取り寄せ依頼受けてやるわ  
!」

「ありがとうございます」

「さて、前払いやが注文する品物はかなりの貴重なブツやからな、銭はいらんが別の物を貰うで」

「なんででしょう?」

「それはな——」

だが、行商人が言った内容に、私達は石のように固まった。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
!!!!!!

まるでギャグマンガのような絶叫を内心で叫んでいた。もしこの絶叫を実際に出していたならば、都から我が家へ届かせるほどの声量になると思う。それくらいに怖い。ちよつと禪が湿ってしまったよ……。それでも妹達に兄として堂々と振舞わないといけないんだからお兄ちゃんは辛いわ。

しかし、『建木の雫』の話を出した途端に雰囲気が変わったのは本当に焦ったし怖かった。このアイテムは神の庭にあると言われ現世にまず出てこないと言われるほどの<sup>レジェンドレア</sup>L R アイテムである。ただ、これの情報がほとんどないし、先ほど話したような御伽噺にちよつと出てくるだけなので、これを覚えてるプレイヤーはあまりいない。何故なら御伽噺の物だから流石にないだろうって思う人がほとんどだからだ。だが、万太との商売で極まれにアイテムとして入荷することがある。そしてこれこそが、桃代姉さんの病気を治す手段の一つなのだ。

桃代姉さんという公式チートな武力キャラを、運が良ければ万太と出会ってこれを即ゲットして治して戦線加入することができるほどなので、冗談抜きなマジモンのレアである。それだけでなく、他にも難病と称するものを必ず治すと言われるくらいのブツだ。桃代姉さんに限らず、難病に侵されてる有能キャラを復帰させるのにも重宝するし、戦闘中に使うとHPやMPが完全回復し防御結界やオート回復、ALLステータスUPなど考えられるバフが全てかかってある種の無敵モードになるブツ。所謂ラスト

エリクサーとも言えるものが『建木の雫』なのである。

だが、先ほど言ったように伝説の品物。だからこれの名前を出して、万太が警戒するのにも無理はないだろう。

なんてつたつて、相手はまさに神の化身ともいうべき存在だ。万太の説明の世界最強の商人というのは伊達や誇張ではない。そしてその強さは、人として練り上げられた物でも、ましてや妖魔として作り上げられたものでもない。

なぜならば、万太の格好は大黒天様とクリソツではあるが、これはコスプレではない。本当に大黒天様なのだ。

神の庭にあるものを、何故知ってるのかというだけで警戒に値する。場合によっては世界の調和を乱すと見なされて文字通り破壊させられる恐れもあるのだ。なので、大黒天もとい万太がああやって本気モードになったのは僕のことを値踏みする必要がある。内容による、と言ったのも、下手なことを言うと言文字通り滅せられるから小便ちびりました。

もともと大黒天とはマハーカーラという、ヒンズー教のシヴァ神の異名である。日本では紆余曲折あつて七福神として受け入れられてるが、本質は破壊の神だ。

万太がゲーム会社のすべての作品に出るといいうのも、スターシステムを思わせるが実

際はマハーカーラとしてシヴァ神として存在し、時間、幻力、創造と破壊、力を持つているからこそ、時を越えて作品を越えて現れる。というのが設定資料集に書いてある。

実はこの設定資料集が出るまでは、神の設定は後付けであった。最初期のころは社長とかプロデューサーを擬人化してゲームに登場させるといったオマケのようなものだった。だが、作品が増え設定が練られると上記のような神設定が追加されたというわけだ。まあ、社長もプロデューサーもゲーム作品では神みたいなものだから間違っではない。

この設定資料集が出るまでは、それまでのゲームで出た資料集には万太の存在は最強の商人としか書かれておらず、現状最新作のこのゲームの設定資料集でようやくこの設定になったようだ。

実は万太の存在が、神じゃね？ って考察したプレイヤーはそこそこいるのだ。

ゲーム中の技や魔法などは、敵専用の技とか味方専用の技がある。だが、万太の使う技はそのどちらにも当てはまらない彼専用の技なのだ。しかも、別作品でもその技を当然のように使うしべらぼうに強い。敵味方双方とも関係しない第三者の技を使うし大黒天な恰好だし、作品を越えて参上するし、こいつ大黒天なんじゃね？ って考察をしたプレイヤーがいて、笑い話だったのが本当であったというオチである。

大黒天様が持つ福袋もそうだが、もう一つの打ち出の小槌はこちらも振れば様々なも



のが出てくる伝説通りの代物となっている。

この小槌は様々な伝説や歴史家の解釈をふんだんに含んだものになっている。一寸法師のように対象物を大きくさせたり小さくさせたりするほか、美味な料理を出す、金銀財宝が出る。と言ったものだ。

だが、その解釈の中には説明文である世界最強の商人という文が絡んでくる。

ある学者の解釈では、大黒天がガネーシャと習合して出来るうち本来ガネーシャが持っている武器が言い伝えによつて変わったのではないかという説を出した。ガネーシャは斧を持っていたが、古代の斧は石器時代の石斧だが、見立てによつては石斧は槌にも見える。その槌とは、雷神トールの「ミヨルニル」ではないか？ と。それを採用したスタッフが、この打ち出の小槌を単なるアイテム等を出すだけの代物にせず、万太の武器として設定したのだ。

結果、福袋の説明は

「あらゆるブツを、文字通り無限に出す伝説のアイテム。どこぞの青タヌキを思わせる」とギャグ調になっているのに対して、打ち出の小槌は。

「金銀財宝や料理などを出す伝説のアイテム。それだけでなく、万太を象徴する武器である。敵対したり泥棒したりすると、雷を纏う槌と化し相手を消し炭にする」

とギャグ調から一転して真面目な説明になっている。

そして、泥棒をしたり、彼の持つブツを目当てに襲って返り討ちにあうのが一種の様式美となっているほどだ。かなり強く設定しているのは開発スタッフ曰く

「スーフアミの伝説的ローグライク、あれをそれぞれ参考にしました」

とのこと。

話が逸れたがとりあえず、神の化身としてべらぼうに強いのが行商人万太なのである。なので、妹達が先ほど立ち上がって得物に手をかけようとしたときは本気で焦った。

木曜洋画劇場の主人公のような理不尽且つ最強の存在に対して勝てるビジョンが浮かばない。なんとか僕が抑えることができたからよかったが、あの場で戦っていたら………まず消し炭になってたことだろう。そう考えると本当に震えるし怖かった。

とりあえずハツタリで押し切ったが、なんとか受け入れられたようでよかった。ただ、桃代姉さんを救うことについては嘘じゃない。格好をつけたが本心だ。今でも妹達みたいな女子供が幸せになつてのを見るだけでも嬉しいし守りたいと思ってる。だから桃代姉さんも救いたい。無論、姉さんが強くてゲームで有用キャラだったという理由もなくはない。だが、初めての嫁だからというほうが強かった。その格好をつけた本心も、どうやら理解してくれたようで何よりである。

ただ、僕を入れて二人目というのが気になるが――

「さて、前払いやが注文する品物はかなりの貴重なブツやからな、銭はいらんが別の物を貰うで」

「なんでしよう?」

――考えてる最中にそう言われて慌てて返事をした。今それを考えても仕方がないだろう。だが、銭はいらんと言われると困惑する。一体何を請求されるのか?

「それはな――お前さんの体で払って貰おうかのう?」

「――えっ?」

言われて体が固まる。

僕の体で何をするというのか、もしかして……………アッチの方なのか?!?!  
そう思った瞬間、冷や汗がドツと出てきた。

そういうえはここはエロゲーの世界だった、ならこういうことも考えてしかるべきだ。

思わぬ提示に思いつきり焦ったせいかな顔に出してしまつたようで、相手は僕の顔を見て手を振り

「ああ、安心しい。ワイは男色の趣味はないけえの」

「そ、そうですか、よ、よかつたあゝ……」

ホツとした。いや本当に。

妹達からも安心したのか溜息が出たようだ。よかつた、こつちの処女散らすことにならなくて。

「実はな、お前さんにこの中に入れてる紙に書いた複数の人物と関係を持つて欲しいんや。但し、会う時は一人で会いに行くんやで。じゃないと依頼はナシや」

そう言つてちよつとした小包を渡された。視線で中を開けると言われたので、開けて中を見る。その中には、お守りのようなものと紙があり、そこに書かれた内容と名前一覧に驚く。

だが、関係を持つという言い方が気になる。

「あの、関係を持つというのはどういう意味でしょうか？」

「そのままの意味や、まあそいつらにあつて話をすればええで。それにお前さんも、そいつらに用があるみたいやしなあ？」

ニヤリと笑いながら言う彼に、内心を見透かされてドキツとする。戸惑っていると、

相手は立ち上がり

「まあ、お前さんはこれから大変なことになるやろうからな。それに関して、ワイも他人事じゃないからのう。じゃ、ここらで失礼するでえ！ バイナラ!!」

そう言つて万太は指を鳴らすと、その場で旋風が起こり彼の姿が一瞬で消えた。

「い、今のは?」

「恐らくだけど、移動術かな?」

「なんと、あの一瞬で」

「やはり只者ではなかったですね」

波羅の疑問に僕が答えると、双子が納得したようだ。術に明るい二人からしたら、あの一瞬で転移することがどれほどの上位の術式かわかるらしい。

「頼兄さまああ!! 怖かったでござるうううう!!」

「おーよしよし、怖かったね。ほら、おいで」

「うゝゝゝえゝゝゝえゝゝゝえええん!!」

焔が僕の体に泣きべそかきながら抱き着いてきた。その頭を撫でて優しく抱いて慰める。

うん、そりや怖いよ。だってあの人マジモンの神だし。今まで相手をした妖魔なんかクソ雑魚ナメクジみたいに見えるほどに絶対に強いし敵に回してはいけない存在だも

ん。

だが、設定資料的に考えるとホンマモンの神だから勝てないんじゃないか？　と思いがちだが、ゲーム的にはびつくりすることに勝ちの目がほんの少しだけあるのである。これは、ゲーム会社のポリシーのようなもので、倒せない敵はないと宣言しているほどだ。

但し、行商人万太は裏ボス中の裏ボスとも言える存在。それこそ、一周一個の激レアアイテムを二桁は用意し、全てのキャラをほぼ上限まで成長させ、出し惜しみはなしとばかりに思いっきりレアアイテムを使いまくってようやく、と言う位のレベルである。正直言ってキツイ。

だが、万太を倒すと

「参ったー！ 降参やー！ 褒美にこれをやるでー！」

と言って打ち出の小槌と福袋をくれるのだが、これは本当に公式チートとも言うべきもので、これを手に入れたら所持金とアイテムが無限表記になるのだ。

さらには打ち出の小槌は槌分類ではあるが誰でも装備できる上に使える技が全体攻撃の「神の雷」という技なので、はつきり言って一振りするだけで大妖も凶妖も等しく消し炭にする。

「神の雷」を防げるのは鶴や九尾のような術に特化したボスだ。だががしかし、武器として振るうだけでも普通に火力が高い上に、投げるとブーメランのように戻る唯一無二の特

性があるのだが、それがまた極悪なのである。

全ての武器は投げたら拾わなければならない。当然だ、万物の理である。だが、打出の小槌は所有者の手に必ず戻るといふ特性がある。これを利用し、相手に向けて投げたらどのタイミングでも手に戻すことが出来、これで火力の高い小槌を何度も投げれば防御の硬い敵もあつという間に倒してしまふ。

酷いのは、例えば避けたとしても小槌を手元に呼び戻せるアクションをすると、それに巻き込んでダメージを与えることが出来る。この時、完全な背後から且つ不意打ち属性となるので多めのダメージとなるのだ。ちなみにこれは万太と戦う時相手がしよつちゆう投げては戻すをしてくるので、万太と戦ったプレイヤーはこれの恐ろしさを良く知っている。

そんな理不尽な存在が威圧を掛けてきたのだから、まだ凶妖と出会ってない焰からしたら恐怖そのものだろう。こうして泣きじやくるのも無理はない。

涙と鼻水を垂らして顔を擦り付ける従妹をひたすらあやして慰める。すると、妹達も僕に抱き着いてきた。

「兄様が無事でよかったです………………。正直言つて勝ちの目が見えませんでした」

「ええ本当に」

「あの人、桃代姉上より強いと思います」

「うん、そうだね」

妹達も怖かったのか、体がわずかに震えていた。それを宥めるように落ち着くまでそれぞれ頭を撫でる。妹達からしても、凶妖どころか桃代姉さんを超える存在に当たったわけだからそりゃ怖いだろう。

ようやく落ち着いたところに引き?がし、茶屋を出て次の目的地へと向かった。

店を出ると、意を決したように波羅が話しかけてきた。

「兄様、先ほどの行商人は兄様の依頼を受けましたが、あれは信頼できるのですか? 何せ、兄様の依頼の品物は伝説の物。兄様を騙している可能性があるのでは?」

なるほど、妹の疑問は実に最もだ。だが、その心配はいらないだろう。何故ならば、彼が神の化身というだけでなく、彼の言動そのものにあつた。

「その心配はないかな。万太さんの言った事そのものが実在してるってことの証明だし」

「? 頼兄さま、よくわからないでござる?」

「騙すつもりなら、金だけ取って終わってるよ。御伽噺の皇帝だって、大金を払っても結果が出なかつたでしょ?」

「それはまあ……………」



「後、万太さんは他の人と違つて僕の依頼を決して馬鹿にしなかつたからね。これが他の商人なら視線で小馬鹿にしてたよ。でも、あの人の視線や威圧、あれが馬鹿にしてるよように思えたかい？」

「……いいえ」

あれほどの圧を掛けて馬鹿にしてるといふのはあり得ない。さつきも言つたが、騙すだけなら金を貰つてとんずらすればいいだけだ。

しかし、万太はそれをしなかつたし存在を否定すらしなかつた。だから、彼の言動がそのブツがあると言つてゐることの裏返しである。

イマイチ納得していない妹だったがこれ以上は理解しにくいのか、話を変えてきた。

「兄様、あの行商人が渡したものは何だつたんです？　紙のほかにお守りなどもありましたが」

「ああ、それはまあ………秘密だよ」

波羅から尋ねられたがはぐらかした。あの紙に書いてあつた名前は、これから会う人物達だったからだ。しかもわざわざ一人で会いに行くのが条件と来たのだから、ここから先は妹達とは別行動である。

「じゃあ、僕はこれから万太さんをお願いのために人に会いに行くから。悪いけど宿に

帰ってくれないか?」

「むう………。仕方ないですね。兄様を出来れば一人にしたいのですが」

「何かあったら式神を飛ばしてくださいね?」

「もし、お泊りになるのでしたら連絡をくださいいね?」

「危なくなったら拙者が駆け付けるでござる!」

「ありがとう。じゃあ行ってくるよ」

やや寂しく思いながらも、僕が持っていた手荷物を手に次の目的地の一つへと向かう。

次の場所は、商業区画から少し離れた所。具体的には鍛冶場である。そこにいる、人間に鞍替えした大狸の鍛冶師に用があった。

この世界が貞操逆転していると気付くと、男一人は結構危険だが、万太からはそれを対策するかのような物も渡してくれたから猶更にあの人怖いつてなる。

これからどうなるかの不安を胸に、僕はゲームで波羅を犯して孕ませて嫁にするエロシーンが用意されてる大狸の鍛冶師の下へと歩いて行った。

## 二十一話 たんたん狸の（以下略）

市場から少し進んだところに次の区画の工業区がある。目的地の鍛冶場はその境界線上付近にできている。理由は配達コストを抑えるためだ。できたものをすぐに市場に持っていつて売ることができるといふのは強い。そこは現代になつても変わらない。高速道路の I C インターチェンジ 近くに工場が出来るのと同じ理屈だ。もちろん、この時代は鍛冶屋がそのまま店頭販売もしたりしてるので、工業区画の境界線上は鍛冶屋に限らず木工所など店頭販売をするのがメインの店がよく並んでいた。

カーン……カーン……

ガンガン……ガンガン……

ドーン……ドーン……

工業区画という場所の特性上、この打ち鳴らす音が昼間に消えることはない。夜の営業終了時間まで鳴り響く当たり前の音だ。そしてこれらの音はモノを生み出す尊い音だ。これが現代日本ならば騒音苦情とかのクレームを入れる無粋な奴がいるよな〜と、前世のことを思い出しながら歩いていた。

そこに向かっていている僕なのだが、顔は頭巾で隠して、胸には詰め物をしてる。これら

の装備は、万太がくれた桐箱の綺麗な小包に入っていたものだ。小包には手紙やらお守りやらのほかに、こういう簡易変装装備も入っていた。小さい小包なのに中身はびつくり箱みたいに入る。中にある手紙には

「お前さんはどうやら価値観が違ふみたいやからな、女に成り済ませるちよつとした変装装備を入れておくで。これらを装備しお守りを身に着ければ、大体の奴はお前さんを女だと認識するはずや。この世の女はマジモンのケダモノやからな、犯されたくなかつたら素直につけておくんやで」

と書かれてあるのが入っていた。さらには追伸として

「ワイの福袋に劣るが、その桐箱をやるで。お前さんの持ち物も結構入るはずやしこれから有用な道具になってくれるはずや。大事に使いや」とあった。

万太がくれた桐箱は、あの福袋の劣化版だと思えばいい。見た目に反して色んなものが入る、実際これはかなりのいい物である。実は原作ゲームで福袋のような容量を無視できるようなものは、ごく一部のSSRやURな袋系アイテムで、後は特殊な牛車しかない。市場巡りで運が良ければレア袋系アイテムが出てくるので、これを狙うプレイヤーは多い。僕は先ほどの市場巡りで手に入らなかったこともあり、それがほぼタダで手に入ったので、思わぬお宝がゲットできてホクホクである。

だが、ホクホクしてる場合ではなかった。自分自身に掛けていた暗示が解けたのもあるが、やはりこうやって価値観が違うことを言われると衝撃が未だに頭に鳴り響く。そう考えると、女と男の立場が逆なものもあるが、もしかしたら原作ゲームのキャラも逆転の可能性もある。双子の妹が、沙羅と由羅はゲームだと沙悟、由悟と男だったことを考えると可能性が高い。

だが、全てというわけではない。何故かと言うと叔父上だ。

叔父上は原作ゲームも、この世界も全くの一緒だった。というか、全部が逆転しているのなら叔父上が伯母上になるだけではなく、桃代姉さんや主人公の波羅もどちらも男になっていないとおかしい。親戚一同の場合、こちらは原作だと音声無しの文字のみだったので男とも女とも取れる。基本的に男だったと思うが、女の親戚もいないわけじゃないから微妙なところだ。……………と言っても、集まりを見る限り女性ばかりだったからこちらは逆転してるんだろうが。

双子のように変わっているのもいれば、波羅や桃代姉さんに叔父上のようにそのままの場合もある。なので、世界が逆転しているのはわかったが、後はキャラクターがどれほど変わっているかも考え、確認しなければならぬ。それによって対処も変わってくるからだ。

ただ、そうになると。都のデブ貴族とか種付けおじさんみたいな油ギツシユな人達がど

うなっているのやら………。そのままだったのなら、妹達を守るために行動するだけだが、もし双子のように性別逆転してたらどうなるんだろう………。

もしかして、僕が犯されるのか……？ いやいやまさか………。と頭の中で否定しようにも、世界がそうなっているとゼロではない。何より、桃代姉さんとセックスした後、家人の紗和さんに激しく抱かれたことを考えると………。

ブルリと全身が震える。

激しく犯されるかもしれない恐怖だ、だがそれと同時に股間に血流量が増えてくる。あの激しいセックスはとても気持ちが良いと忘れてられそうになかったからだ。女性とあまり関わりのない前世だったし、女性に対しての恐怖があったから、あそこまで求められると悪い気はしない。寧ろ嬉しかった。

そう考えると、もしかしたら僕がこの世界の主人公ポジになるのか………？

そうなったとしたら、僕が妹達の代わりに抱かれるのか………？

そういう疑問が浮かぶが、バカな話だと否定はできない。寧ろ、考えた方がいいだろう。だが、僕はそうなったとしても妹達を守るという使命は変わらない。

僕が犯されるのは別にいいが、妹達が犯されるのは防ぎたい。そういう決意があった。あの原作ゲームのような酷い凌辱シーンを再現したくない。そのためなら………、体を張ることも考えないといけないのかな………。

そう色々考えながらも足を運ぶ。万太がくれたお守りと簡易変装のおかげで周囲の人達は僕のことを少女と見てくれるらしい。後、あまり言いたくないが僕の顔がいいことも変装に作用してよう。地図を見て、住民に尋ねたりしてようやく目的地についた。

中々立派な店構えの前に僕は立つ。店頭の商品は置かれているが、店番の人はいないようだ。多分、奥に引っ込んでいるのだろう。

店の看板には「刑部の鍛冶場」と立派な字が書かれてあり、店舗の大きさは結構大きく、ここらの工業区画では上から数えたくらいの立派な敷地面積がある。だがこの大きさは、鍛冶場としての大きさではない。ここは、鍛冶場兼孤児院としての役割があるのだ。敷地面積も広いのだ。半妖はいつの時代でも差別の対象だ。それは、千年前の大戦時からそうだが、そこから時代が進んでもなお変わらない。だが、流石に千年前と比べると緩和はされているようだ。

だが、緩和されると言って所詮は妖魔との混じり物。当然ながら平民に素直に受け入れられるわけもなく、追いやられる存在だ。かと言って朝廷が音頭を取って半妖を排除するというのも面倒である。何より、人妖大戦時から半妖が増えた結果、完全な排除は

難しくなった。中には、有能な半妖もおり人類に平伏し貢献しているものもいるので、有能ならば利用しようという考えもあった。故に、朝廷もだが各大名も半妖の存在は認めているし取り立てたりもしている。中には、重臣の地位を与えている家もあるようだ。

しかし、利用すると言ってもそれは登用された半妖であって、それ以外の半妖は不穏分子扱いされている。だが、都の各所にバラバラに存在されても困る。なので、朝廷は戸籍を作ると同時に孤児院を作り上げ管理する方向にした。

その孤児院はほとんどが人間用であるが、半妖のみを扱う孤児院がここである。このみにしているのも、一か所にまとめ監視しやすくしているというのがよくわかる。工業区画という、低層住居専用地域なものも差別の表れだ。

そしてこの店の主は数百年も変わっていない。原作ゲームでも有名な鍛冶師。「伊予の刑部」こと隠神刑部。この都では半妖の鍛冶師として偽って生活しており、名は雄太郎という。「隠神刑部の鍛冶師」や「刑部の雄太郎」といった名前と呼ばれている。

三大狸の一匹を元ネタにしており、本人もこのゲームでは凶妖として名を馳せている。狸の妖魔としての強さを持ちながらも鍛冶師としての力もあるので時には前に出て戦うが、大半は武器防具を作成する妖魔聯合の後方支援を担う重要人物であった。人



類は、彼の作る武器とそれを扱う妖魔に何度も煮え湯を飲まされた。唯でさえ肉体面でも人より強い妖魔が、素手や妖力のみで戦っていただけでも厄介なのに、武器防具を装備するのである。多くの武士が強化された妖魔に倒され屍を築き上げていった。

だが、天正帝の呪いにより大幅に妖魔は弱体化した。そして、彼の作る武器防具も効果を発揮できなくなった。これは、呪いが武器防具に対して影響を及ぼしたというわけではない。彼の作る道具は、使い手の能力で左右される仕組みになっている。つまり、使い手の能力が高いならばそれ相応の力を発揮するが、呪いによつて弱体化してしまうと上手く発揮出来なくなってしまうのだ。

これは、原作ゲームでもそうだが帝の呪いはある意味ゲームシステムを利用した形になつてゐる。武器防具や各種道具は、誰でも扱える奴と、限られた奴とに大別することができる。例えば、一番ランクが下のコモンクラスの刀は能力設定が無いので、剣士以外の雑刀士だろうが弓使いだろうが、銃士、陰陽師、退魔師等々すべての職業が持てる。農民すら普通に持てて扱えるほどだ。

そこからランクが上がっていくと、必要技能などが設定されるようになる。レアクラスになると、剣士熟練度や筋力値、技能値、といった設定されたステータスを越えないと武器の性能を発揮できないようになる。農民が持つても振りはしてもダメージが減るし、特殊効果がついていても発揮されないなどだ。

帝の呪いはこれを利用した形になってるのだ。妖魔のステータスが大幅にダウンした以上、刑部の雄太郎が作った各種道具に武器防具は軒並み性能を発揮出来なくなってしまうのである。必要ステータスが設定されてたので、それをいつも上回っていたのが急に下回ったのだからさもありなん。

唯でさえ妖魔のステータスが下がってるのに、頼みの綱である武器防具の性能が発揮できなくなった以上、以前ほどの強さを出せなくなるのは当然だ。これにより、数多くの名前付きの凶妖が討ち取られた。帝は、己の命を使って妖魔にダブルパンチを食らわせたのである。

妖魔の旗色が悪くなった後、それでも数多くの妖魔は抵抗した。刑部の雄太郎はとうとう帝の呪いを受け以前のような作成が出来なくなった。全く作れないわけではないが、本人の力が下がったので以前のような強い武器防具が作成出来なくなったのである。妖魔とは基本利己的な存在である、捕らえた人間を道具のように利用し、降伏したとしてもボロ雑巾になるまで使い潰す。そしてそれは同胞たる妖魔に対しても同じだ。雄太郎は自身の作成能力が呪いによって落ちてしまった事で自分のみならず一族に危機が訪れると判断した。そして、一族全てを守ることは出来ぬが狸という種を守るために最も身近な部下と、最愛の正妻と息子を引き連れてあつさりと降伏した。そればかりか、己の特技を利用し同胞の妖魔に数多くの武器防具を作り上げたのと同様に、信頼の

証として人類に道具を作った。これにより、更に妖魔の討伐が加速したのは言うまでもない。

刑部の雄太郎が、弱体化した妖魔でも扱える道具を開発してたのなら妖魔達はまだ抵抗出来たし勝ちの目も幾分かはあった。だがそれが無くなってしまったので一気に戦況がひっくり返ってしまったのである。当然の事ながら、他の妖魔達からは裏切り者扱いされ妖魔の中で最上級指名手配扱いされ、最優先での始末対象となった。だが、朝廷もそれを理解しているし有能な妖魔であるため優先保護対象とし、これからも人類に貢献するならば嚴重な警備で雄太郎と引き離れた家族を守ることを確約した。

尚、裏切り者扱いされたのは当人ではあるが、それ以外の一族や近縁はどうなったかという点と見事に排除の対象となり、多くの狸達は同胞たる妖魔に追われ殺され数が減っていった。

それだけでなく、狸一族や村に住む者も捕まえ、村に残した配下に妻や息子も捕まえ朝廷に雄太郎の身柄の交換要求をしたほどだ。村に残していたのは、単純に引き連れる時間がなかった上に、これから降伏しに行くのに大勢を引き連れていったら妖魔達にバレてしまうからだ。故に、雄太郎が引き連れて行ったのは彼にとつて最愛とも言える存在のみを厳選し、残りは断腸の思いで後ろ髪を引かれながらも黙って置いて行ったというわけである。

朝廷はその要求を当然拒否。妖魔聯合はその裏切り者の雄太郎に対して、捕らえた一族を都の防壁の上から見えるような位置で公開処刑した。雄太郎は都の防壁の上から腹心の配下に妻や息子達が処刑されたのを見て、滂沱の涙を流しはしたが彼らを救おうとはしなかった。それだけでなく

「これからも狸の妖魔を殺しつくしてやろう！ 一族が繁栄しないようにしてやろう！」

と宣言する妖魔聯合に対して

「一族など、ここから幾らでも作ってやるわ!!」

と、自身の立派なイチモツと金玉を見せつけて反論したほどだ。

実際問題、雄太郎の性欲は凄まじく、狸一族は狐や鬼、烏天狗といった有力一族の中で数が最も多かった。その多い理由が彼がせっせと子作りしていたからである。たんたん狸の金玉はくと歌うほどの、信楽焼の狸のような立派なふぐりがついており、そこから生成される精液の量も凄まじい。

あるイベントシーンスチル画では、精液風呂なんてバカエロゲーを思わせるシーンがあるが、それを作るのが雄太郎である。これに入れられた女性の退魔師は耐えられるはずもなく発情し、雄太郎に抱かれて子を産まされる。当然ながら、原作ゲーム主人公たる波羅も孕まされるシーンがあるほどだ。

朝廷に降伏した後も武器防具作成という貢献をし、他にも理究衆の要求する道具作成にも応えて研究開発を促進し、朝廷からの信頼を勝ち取った。その結果、工業区画の一等地とも言える場所を与えられ、時には鍛冶師筆頭として役職を与えられて朝廷に参内すら許されたほどだ。だが、全てがよかったわけではない。

武器防具作成をしたのは確かだが、本人も帝の呪いを受けているので強力な武器の作成が出来なくなったのである。尤も、それでも人類側の鍛冶師で筆頭を務めることが出来たほどだから最優秀だったのは間違いないし、妖魔の鍛冶師として働いていたことに比べればこちらに寝返っただけでも儲けものである。都の平民にも受け入れられたし、酒や食事もしっかり貰い、土地を貰って店を構えることすら許可された。都には雄太郎以外にも半妖や降伏して寝返った妖魔はいた、だがここまで優遇されたのは本人の働きが優秀だったからに他ならない。だがそれほどの貢献をしても、子作りに関しては許されなかった。

まだ天正帝の治世であり、天正帝が妻を寝取られて妖魔絶対殺すマンとなりつつも、有能ならば降伏した妖魔を受け入れて利用する強かさを発揮した。だが、その利用は非常に苛烈でありミスがほとんど許されぬほどだ。使えぬと判断すると容赦なく研究材料として利用した。天正帝自ら、妖魔の頭蓋を開き脳を弄くり実験する様を見せられて、恐怖しなかった者はいない。それは、臣下だけでなく雄太郎を含めた朝廷の軍門に

下った妖魔全てに言えることであった。

特に雄太郎は、性欲が我慢できず歓楽街で大金を出して遊女を買いその精力で避妊に失敗し孕ませた。その後、それを隠して出産した子を育てていたのだが天正帝の「黒き瞳」によって見破られ、彼の目の前で実験材料にされた。出産した遊女も公開処刑にしたほどだ。

天正帝は、妖魔は全て残さず滅却すると言いつつも、有能ならば取り立てて重用した。雄太郎の能力を認めていたし、その鍛冶能力を褒め参内すら許した。だが、子を作ることだけは許さなかった。

……否、正確には子を作ることは許可はしている、だがその許可とは今手元にいる子を全て失ったのなら、という但し書きがつく。

理由は単純だ、子が全ていなくなつたのなら一族の存続が出来ないのでそれを防ぐためだ。だが、数を増やすことは許さない。これには理由があり、妖魔は人間の男より性欲が強いが種が付きづらい。しかし、数うちや当たる戦法で沢山の女を抱けば孕ませることが出来る。そしてそれをそのまま許すと、都の人口比が半妖に圧倒され支配がひっくり返るからだ。天正帝はそれを理解していたために、一族の存続は許すし子を作ってもいいが一人までと決めた。これは雄太郎に限らず他の妖魔達にもそう決めた。

雄太郎が引き連れた一族は配下も含めてそれなりにいるし、子も妖魔との戦闘で失わ

れたものの数人残っている。子を作りたかつたら今残っている子を全て失つたらと、条件を付けた。それでも作りたいのならば今いる子をその手で全て殺せ、さすれば一人は許可してやる。天正帝にそう言われたものの、それは流石に出来ないので条件を受け入れた。

だが、ムラムラしていたので我慢できずに抱いて避妊に失敗して作ってしまったのである。その結果が公開実験であった。それを見せつけられた雄太郎は、目を閉じ耳をふさぎ拒否したものの、それらを全て開かれ聞かされ最後の最後まで見せつけられた。

妖魔の中でも凶妖の一角であり、時には自ら作った武器を振るって敵対する妖魔を滅ぼし、人類と戦った勇ましい雄太郎であったが、これには完全に心が折れた。天正帝は雄太郎にとって恐怖の対象であり絶対に逆らえないと上下関係を正しく叩き込まれた。

……いやあ、目の前で子供の頭蓋を麻酔無しで開かされ、脳クチュであったあつあつされてるのを見せつけられて、心折れない人もとい親はいないでしょって僕を含めたプレイヤーは思ったものだ。天正帝が生きていたころは、妖魔にとって暗黒の時代であったとある凶妖が言っていたがそりやそうだろうって答えしか出てこない。色々とエグい方法で妖魔の七、八割を滅ぼしたのが天正帝なのである。そりや怖いよ。

でも仕方ないよね、だって妖魔が虎の尾を踏み竜の逆鱗を引き剥がし地雷原でタツプダンスを踊ったんだから。穏やかな人ほど怒らせてはならないとはよく言うがそれが

天正帝だったわけで、見事に修羅と化したのだ。しかも、天正帝はその名の通り扶桑国の皇帝である。故に、ありとあらゆることを決めることが出来るし命令も出来るし法律典範などの作成も出来る。触れちゃいけないタブー中のタブーに触れて滅びかかったんだから自業自得だ。

その結果、妖魔の数が減ったから増やすのが命題なのだが女性型妖魔が呪いで子供作れなくなつた上に、弱い平民捕まえて孕ませても妖力が劣る上に智能すら獣程度にまでしか上がらない子が生まれるという悪循環。ある凶妖は

「生まれる子は段々と小さく馬鹿になつていく始末、このままだと我らは遠からず文字通りの獣と化し知識の継承も出来なくなつて滅ぶであろう」

と本気で危機感を抱き、それを妖魔全体で共有している。言うなれば、僕が生きていた前世世界のようにヒグマのような強い害獣程度にまで落ちぶれてしまうのだ。

だから、強い退魔師の女を捕まえなければならぬのだが、弱体化は天正帝が崩御しても解除されないので孕み袋と見ていた女退魔師からも下手すればボコボコにされる始末。どうしようかって所で原作ゲームの主人公たる波羅の登場というわけである。で、ゲームが女主人公が犯される凌辱エロゲーだから、エロを求めるプレイヤーにもゲーム内の妖魔達からしても犯され孕ませられる波羅はありがたい存在なのである。ある意味ゲーム内のキャラクターの目的とプレイヤーの目的が合致したと言えるだろ



う。

そして、原作ゲームだとこの有能な鍛冶師が作る武器防具で妖魔戦で活躍できる他、孤児院にいる半妖の子供たちを引き取って戦力として育成も出来る。孤児院の半妖は都の寺子屋に通っている他雄太郎からある程度の教育を受けているので、そこらの半妖を拾うよりかマシなのだ。但し、孤児院の半妖を引き取ることは特に拒否されないが、武器防具の作成は普通ならば拒否される。拒否される理由は、既に都の役職を半ば追放される形で辞職したし、もう大戦が終わって疲れたこともあるし、何より妖魔は段々と数が減っていく上に生まれる子も小さく馬鹿になっていつてしまっているのを知っているので、嘗て裏切った身なれどせめてもの情けとして討伐を加速させる真似はしたくないというのが理由だ。

既に人類側がほぼ勝利しているから、放っておけば自然に妖魔は滅ぶ。ならこれ以上積極的にやる必要もないだろうし自分達狸は一定の勢力を保てるので余計な行動をする必要がない。何より、子供たちが弱体化し馬鹿になっていくのならば、それを防ぐために教育をしつかりしたい。そういう裏事情があるのだが、これは設定資料集で書かれた奴でゲーム内では親しくなった時のみ判明する。要は、面倒だからやりたくないのだからある。

そこで、大金を払って作ってもらおうか、エロゲーらしく体で払うか、といった選択肢

が複数あるのだ。

貞操守ってハッピーエンドを迎えたいのなら前者、RTA宜しく効率プレイやエロシーン回収したいのなら後者である。当然、エロゲー故に多くのプレイヤーが後者を選ぶ。

あれ？ 子作り制限はあるんじゃないの？

と思うプレイヤーはいるだろう、僕もそう思った。だが、天正帝が崩御し、当時の重臣達も数百年も経てば普通に墓の下。何より、大戦から大分時間が経ちその間も今まで通りに鍛冶師として都に貢献し平民にも貢献しているので、未だに差別はされるもの大分受けいられている。何より、もう数百年も貢献しているので監視も形骸化しているのだ。

都に住まう妖魔や半妖も協力してくれるので、嘗てのように子作りしても隠し通せるほどになっているのである。

なので、子作り出来るのだ。まあ、偏にエロゲーだからって理由で監視やら何やらが緩んでいると思って良い。

そして、ここまでが原作ゲームの設定である。僕も幾分か忘れてたりしてるところもあるが大筋はこうだった……ハズ。

だが、貞操が逆転したとわかってしまった以上、これがどう変わっているのか………それを知るのが非常に怖い。

怖い、妹達の為に有用な道具を作ってもらわなければならない。そう考え、声を出した。

「ごめんくださいーい！」

店の奥に向かって声を出す。すると、ドタドタと軽めの音が聞こえてくる。

「はーい！　なんででしょうかー？」

そう言いながらやって来たのはちっこい幼女小狸だった。茶髪のショートヘアでくりくりした目が可愛い。頭には狸耳がちよこんと出ている。

「すいません、こちらの店主に用があるんですが」

「おきやくさんですわね？　ちよつとまっててくださいーい！」

元気よく声を出して、小さい狸の尻尾を振りながら店の奥に引つ込む。恐らく呼びに行つたのだろう。そして、先ほどの軽めの音とは違ったドタドタとやや重めの音が聞こえてくる。音で大体わかるが恐らく大人だろう。

「はいはい、刑部の鍛冶場にらっしやい！　番頭のあつしが対応しますよー」

そう言つて店奥の暖簾から潜り抜けてきた人物は………、大きかった。

先ほどの幼女みたいな茶髪だが、幼女が赤みがかつた明るい茶色に対して此方は濃い

色をしている。そして、肩に届くくらいの長さまで髪を伸ばしており頭には狸耳がちよこんと出ている。

そして、彼女は色々大きかった。服装は小袖なのだが、それは上半身だけしか着ておらず、下半身はなんと禪一丁である。

背は僕より大きいのは当然だが、波羅の背を若干超えている。最愛の妹が目測だが180cm以上だとすると、2mに届くか届かないくらいかだろう。

そして、それを支える両足が太い。太腿がとても太く、僕の腕どころか胴体くらいの太さがある。足を閉じてても前から尻肉が見えるほどだ。それでいて筋肉が少し見えているのだから鍛えているのもわかる。尤も妖魔は鍛えなくても筋肉がつくからこれが普通かもしれないが。

足は太くて腰も細い、だが胸はとても大きい。一般的な小袖を着ているだけなのに、胸が盛り上がりつつ谷間が見えている。本人がラフな格好をしているのもそうだが、ノーブラなので胸の先端が盛り上がりつつ乳首の輪郭が丸見えだ。そんな爆乳がゆさゆさ揺れながらやって来て股間に血が集まってくる。

それらがとてもスケベ過ぎたので、思わずまじまじと見てしまう。すると、見られた女性はややしかめ面をしながら

「お客さん、あつしは女に見られて喜ぶ趣味はないでやんす。冷やかしならお帰りな

せえ」

と言つてきたので慌てて要件を告げる。そう言えば僕は女装してゐるんだつた。

「ええと、高名な鍛冶師である刑部の雄太郎さんに要件がありまして、お取次ぎ願ひませんか？」

そう言うと、相手は首を傾げ

「刑部の雄太郎？　誰でやんすか？　うちの母ちゃんの名前は伊予でやんすよ？」

「えっ？」

「まあ、いいや。母ちゃんに用があるでやんすね。ちよつくら呼びに行つてくるでやんす！」

そう言うと、奥に引つ込んでいった。その際、巨尻を振りながら入つていったので、まともや股間に血が集まつてくる。

だが、その血も一気に冷めてきた。

設定資料だと、この鍛冶場は孤児院も兼ねてるが半分以上が狸一族で経営している。一族というと聞こえはいいが寿命を迎えたり流行り病で無くなつたりして狸の数は減つていつており、千年前のような数はない。

なので、家族経営をしているようなもののだが先ほどの番頭は母ちゃんと言つた。だから番頭と隠神刑部は推測だが血縁なのだろう。尤も、孤児院も兼ねてるからそれで

引き取って母と呼ばせているのかもしれないが。

だが、それよりも重要なことがある。隠神刑部の雄太郎の名を出したのだが、そんな人物はいないと言った。そして、母と言った。ならば、これらから導き出される答えは

番頭がやって来た音より、さらに重めの音が響く。そして、その人物は暖簾を潜ってきたのだが、番頭より背が頭一つは高い人物であり、もう少ししたら天井に頭が届きそうであった。

「あらあら、小さいお客さんね」

その人物は、番頭の女性を一回り大きくした人物であった。服装は作務衣だが、番頭と同じく上半身のみで下半身は禪である。先ほどまで作業していたのか、汗をかいている。

桃代姉さんが2 mを越えているが、その桃代姉さんよりも少し背が高い。そして、それを支える足はぶつとく丸太のような太さである。それでいて、番頭よりも筋肉がはつきりとしており、やや見える腹は腹筋が少し割れつつも柔らかい肉が乗っている。そして、禪の下からやや陰毛がはみ出しており、これが大変目に悪い。番頭よりも尻が大きいのか、前から見える尻肉が腰当たりからも少し見える。禪で縛っているせいか、肉の食い込みが非常にエッチすぎる。

目に悪いと思つて視線を上げると、これもまた暴力の化身だ。

胸が非常に巨大で番頭よりも大きい、人の頭ほどの爆乳が作務衣の下に収まっているがほとんど丸見えだ。その爆乳を支えるために晒しを巻いているが、それで出来ている谷間が非常に深い。肌が火に焼けているのもあり赤い山の谷間のようだ。晒しを撒いても乳首が大きく盛り上がっているのもあり、これもまた目に悪い。

それで視線をさらに上げると、美人顔がそこにある。

糸目であるが、整つた顔立ちなので見ていて飽きは来ない。唇はやや太く、鼻もすつきりとしている。髪の毛は番頭より長くポニーテールにしている。もし解いたのなら、腰当たりまで伸びるだろう。髪の毛の色も番頭より濃い色でこげ茶だ。頭には幼女と番頭と同じく狸耳でちょこんと出ている。

他にも、肩や腕も盛り上がっており、筋肉がついているのがよくわかる。尤も鍛冶師という力仕事をする故に筋肉がつくのは当然だろう。

まるで、性の化身みたいなエロスの塊がそこにある。股間に血が否応なしに集まってくる。だが、それと同時に嫌な予感がする。

店主と思しき長身美女の鍛冶師は、髪をかき揚げながらやや前かがみにして僕に視線を合わせるようにして語り掛ける。その際胸がブルンと動いたので思わずそれを追つてしまった。

「初めまして、ここの鍛冶師をしている伊予と申します。小さいお客さん、私に何の用かしら。」

嫌な予感を振り払うように、質問をする

「あの、ここに雄太郎という名前の鍛冶師がいると聞いたんですが」

原作ゲームでは男だった、この世界ではどうなっているか。ほとんど答えがあるようなものだが、それでも聞かずにはいられない。

伊予と名乗った鍛冶師は、ほんの少しだけ片目の糸目を開き、眉をピクリと動かす。もしかして何か知っているのか？ そう思ったが、返って来た答えは無常であった。

「雄太郎なんて存在しないわ、ここ『刑部の鍛冶場』の鍛冶師は私がずっとやっているわよ？」

たんたん狸の以下略な巨大金玉がなく、その代わりに立派な爆乳を揺らす長身美女からそう聞かされて、その場に崩れ落ちそうな衝撃が体全体を襲う。

その無常なる答えを聞いて僕は

「ははっ、マジかよ……………」

そう小声でつぶやくのに精いっぱいだった。



## 二十二話 うオつ、でつか、ふつと、エツ口すぎ……違法建築物でしょ

「単なる買物じゃなくて、お話があるなんて珍しいことだわ」

伊予さんはそう言いながら、番頭さんと並んで僕の目の前を歩く。その度に二人の巨尻がブルンツブルンツと擬音を立てながら震えている。禪で食い込んだ尻の肉が凄いのだ。僕も禪は履くのだが、尻肉が薄いから尻の間は禪の布が見える。だというのに、この二人は尻肉が大きいので、禪の布が思いつきり隠れているのである。こんなに溢れるほどの巨尻なら擬音を立てて揺れるのもむべなるかな。

更には、背中越しからも爆乳が左右に揺れているのが見える。本来なら両腕に遮られて見えるものではないのだが、とても巨大なおっぱいなのでややはみ出るように見えるので非常に……、それはもう非常に目とちんちんに悪い。ていうか禪なのに恥ずかしいって思わないのか……。

そう考えたが、この世界は原作ゲームと違って貞操逆転しているのかと思いついた。理解はしていても、頭の中に原作ゲームのことがあるからどうしてもそっち方面を思い出してしまふ。つまり二人が禪なもの、原作ゲームだと店主の雄太郎と番頭がどちらも

男だったことを考えると男が禪一丁でいても恥ずかしくないことと同じだと理解した。そして、そういうえば領地を見回りする時、農作業は禪の女性がやたら多かつたなあと今頃思い出した。

理解はしたが、納得しづらい。ていうか本当に形が良く大変大きなお尻なので冗談抜きで勃起してる。必死に靈力をちんぽに送って勃起しないようにしてるが生理的反応を防ぐのは中々難しく前かがみになってしまっている。辛えわ……。ていうか凄くいい匂いが伊予さんから漂っているし……。

「大体の妖魔の体液は人間にとつては媚薬みたいなもん。何故かって？ これエロゲイですよ？ これ以上の理由いりますか？」

つていう開発スタッフの説明を思い出してしまった。くそう、本当に媚薬みたいに興奮してしまうなんて。せめて冗談であつて欲しかったが現実是非情である。視覚と嗅覚で攻められて勃起が一向に収まらぬ。武将めいた風に思つて靈力で我慢をしても辛いでござるに候。

大事な話をするならここじゃなくてちゃんとした客間で、そう言われて今僕は店内に

上がって二人の後をついて行っている。僕の後方には豆狸の幼女がちよこちよことついてきている。ただ豆狸の子は僕が心なしか若干の前かがみになつてゐるのに疑問を抱いているようだ。頼む、バレませんように。

長い廊下を歩いて行くと、鍛冶場とは違う場所へと繋がる。その中で、客間に向かう途中に大きく襖があいてる場所があつた。そこは大部屋で、中にはたくさんの子供達がいた。だが、その子供達の中に人間の子は一人もいなかった。番頭さんと伊予さんと同じく狸の子が半分だが、残りは狐だったり猫だったり鴉と思しき黒い翼が生えていたり多種多様だ。子供達は客間に向かう大人の女性二人を見ると、まるで子犬や子猫のうに走って寄ってくる。

「おかあさん、もじがかけるようになったよ！」

「みてみてー！」

「だっこしてー！」

「おねえちゃんもだっこー！」

「はいはい、いい子いい子」

伊予さんと番頭さんに気づいた子供達は群がってくる。それらを優しい手つきで頭を撫でて抱き上げる。傍から見ると、体格差がありすぎて巨人と子供だった。二人の膝、よくて太腿あたりまでしか身長がない。それらのちびっ子達を筋肉があるからか、

肩と片腕に二人も一気に抱き上げる。伊予さんもそうだが姉と呼ばれた番頭も力があり四人の子を抱き上げてても平然としている。

「あれ？ このおねえちゃんはだれー？」

「びじんなひと〜」

「でも、なんかかわつてる〜」

「こんにちわ、宜しくね」

ちびつ子達がこつちにトコトコやつて来たので、それらに視線を合わせるように屈んで挨拶をする。変装がちゃんと効いてるからか、僕を女と認識してくれている。だが変わつてるといふのが少しわからないが、まあ大丈夫だろう。伊予さんが困つたような顔をして僕に声を掛ける。

「お客さん、騒がしくてごめんなさいね」

「いいえ、気にしていません。それに子供が元気なのはいいことですから」

「おやあ、あんたは人間なのに珍しいでヤンスね。人間にとつちや、半妖の子なんて嫌いでしょように」

「僕は別に嫌いではないですよ。最も、害を成すなら話は別ですが」

番頭さんの言葉に返答する。

この世界に住んでる人達ならば、嘗ての大戦で文字通りの生存を賭けた争いだったか

ら恨みつらみもそうだが不信感も汚泥のようにたまっていることだろう。まあ千年もかけたらその汚泥も減っていつてはいるが完全に消えたわけではない。

一方、転生者である僕はなんとも思っていない。

ぶつちやけ、害があるかないかの判断でしかない。そこは半妖だからってことじゃなくあらゆることについてはこう考えてる。

人間、半妖、妖魔、獣、全てにおいて害があるなら対処する、害を成さないなら放置する。シンプルイズベスト、この考えが一番わかりやすいからこうやってるってだけだ。元にいた前世日本でも、熊とか猪が人間の里に降りてきて人を襲ったり作物を荒らすなら排除、そうじゃなく大人しく山に籠っているなら何もしない。たったそれだけのシンプルな答えである。

後はまあ俗物的かつ性的な考えになってしまいが、ここにいる半妖の子達はとにかく可愛い。エロゲーに一部を除きブスが存在しない理論が働いてるせいかな、大体美男美女である。わかりやすい悪党なら醜悪なツラだがそれは大体男だし、女の場合はあまりない。原作ゲームならば。

なので、可愛い子や美人を殺すとかそういうことはしたくない。まあ、害を成すなら別だがそうじゃないなら命を奪うようなことはしたくないと考えてしまう。最も、僕の領地を荒らしてたあの人狼みたいなのだったら討伐するけども。流石に被害が出る

時に美人がどうのこうのなんて言つてられないし、そこまで甘つたれたことを言うつもりはない。

「ほらほら、あつしと母ちゃんはお客さんと大事な話があるから、お前たちはここでおとなしくしておくでヤンス」

「えーやだー」

「おねえちゃん、あそんでー」

「おかあさんだっこしてー」

「こらこら、あつしらを困らせないで欲しいでヤンス」

「何だつたら一緒にいても構いませんよ、お話はこの子達にも関わりあることですし」

廊下を歩いている時に子供達に捕まった体なので、ここから子供達を置いて行こうとするもぐずつて拒否しまとわりつき始めた。それを困つたようにする二人に対し僕はこう言つた。

「本当？ ごめんなさいね、お客さんに騒がしい思いをさせてしまつて」

「いえいえ」

「ならこのまま客間に向かうでヤンス」

伊予さんがこう言うが、単にこのままだと時間を取られるからさつさとやつた方がいいかなと思つて言つただけである。ちびつ子達は僕らと一緒に向かうことになつた。

「粗茶でヤンス」

「あ、どうも」

番頭さんが入れてくれたお茶を飲む。………ちよつと美味しくない。そう思つてしまうのは、交易品で高級茶買つて飲み続けていた弊害だろうか。前世は庶民でお茶の味なんてわからなかったものだが、転生したこの世界だと美味しいお茶を飲み続けてた味の違いがわかつてしまつて驚きです。ステータスやら何やらのゲーム的なものが関わつてるせいかな？　と思わなくもない。

「お口に合わなかつたらすまねえでヤンス。御覧の通りのむさくるしい場所です  
ねえ」

「いえいえ、そんなことないですよ。ちよつと喉が渴いていたのでありがたいです」  
「お茶請けを頂いてごめんなさいね？　本来ならこちらが出さないといけないのに」

「わー、これすごくおいしい！」

「おねえちゃんありがとー！」

「気にしないでください、孤児院だと聞いたので元から差し上げるために買ってきたも

のです」

だが、美味しくないとしても決して表情に出さないし、出すわけにはいかない。顔は頭巾で隠しているおかげで誤魔化せるし、目元を笑うようにして対応する。周りにいるちびっ子達は、僕が持ってきた饅頭や金平糖を食べて喜んでおり、伊予さんがそれについてお礼を言うが先ほど言った通り孤児院の子達から敵意を持たれないように買ってきたものだ。

「さてと、お嬢さん。貴方のお名前を教えてくださいなかつたわね。良ければ教えてくださいなにかしら？」

「はい、えっと、僕は綾絶頼子よりこと言います」

「そういえば僕は女装しているんだっ！ と今更ながらに思い出してしまふ。なので、とっさに思いついた名前がこれだ。実に安直。」

「おやあ？ 綾絶家と言えば数日前にここに来た北方守護総代じゃないでヤンスか？」

「お嬢さん、その関係者だったりするでヤンス？」

「ええ、当主代行をさせていただけます」

「あらあらまあまあ、四方守護の一角の当主代行がこのようなむさくるしいあばら家に自ら足を運んでいただけなんて、恐縮至極でございます」

番頭さんはあまり理解していないようだが、伊予さんは四方守護の頭とも言うべき人



間がわざわざやって来たことに背筋を正し綺麗な土下座で挨拶をする。その姿をみて、番頭さんもこりや拙いと気付いたのか、伊予さんの横に並んで慌てて正座をする。ちびっ子達はあまり理解しておらず首を傾げている。

「頭をお上げください。本来ならば面会の予約を入れるべきなのでしょうが、こちらが急に押しかけて来たのですから、寧ろ頭を下げるのはこちらです」

そう言つて、僕も返礼するように土下座で挨拶をする。このままだとお互い謝罪合戦になるのだが、伊予さんは理解してくれたようですぐに頭を上げてくれた。

「では失礼して……………して、何用で……………」

「はい、二つほどお願いしたいことが……………」

そう言つて、僕は内容を話し始めた。

一つは、孤児院の子を労働力として引き取ること。もう一つは、武器防具を中心とした道具作成の依頼である。

前者は単純に人材募集である。原作ゲームでは、この孤児院で育つた子はある程度教育が施されているのでそれなりに使える労働力や戦力として期待できるのだ。まあ、戦力のほうはすぐ使えるわけではないが、簡単な労働力なら勘定に入れることが出来る。

では孤児院から引き取る際、なぜ人間の方ではなく半妖のほうを引き取るのかという

と、スペックの差があるからだ。人間は強くないが補充しやすく、半妖は強いが補充しにくい。この中世和風ファンタジーな扶桑国では貧しい村で口減らしの為に売られる人がそこそこいる。だが、半妖の場合は口減らしで追い出されることは余りない。これは単純に半妖の力に利用価値があるのもあるが、差別対象である故に村や町での鬱憤晴らしなどとして利用されることがあるからだ。

人間とは、自分より下の存在がいると安心する生き物である。それは人間に限らず動物でも群れのボスとその取り巻きという風にランク付けされているから別段不思議なことではない。だが人間の場合は動物と違って知恵がある。何か問題が起きたり、大変な事があったとしてもその被差別階級のモノに押し付ければ自分達は楽が出来る。不平不満があつたら押し付けられ、上に向かうはずの矛先を逸らすことが出来るので、地味に有効なのだ。故に大事なサンドバッグとしてどこも大体は手放そうとしないのだ。

後は半妖のもつ妖力も関係している。

人間の場合は霊力持ちは僕の家みたいなわかりやすい貴族や武家は持っているが、村や町での平民が持つということはあまりない。持ってたとしても妖魔退治にすらならないような微力なものだったりして不安定だ。まあ、だからモグリモグリの平民退魔師が消えないわけだが。

そんな不安定かつわかりにくい人間と違い半妖は何かしらの力を確実に持っている

ので、いちいち検査する手間が省けるのである。雑多な平民よりも確実に力があるというのがわかるので、それを利用して村に利益を与えるようにしているのだ。

ここまで書くと馬車馬の如くこき使つてる人間にメリットしかないように思えるが、しつかりとデメリットがある。それは、サンドバッグにしてたら半妖がキレて覚醒し村や町が滅ぶ、つていう事件もそこそこ起きるのだ。半妖と言えど人間みたいに知恵を持っていて。故に、理不尽な扱いで恨みつらみを溜めて爆発ということが起きるので人間にとってメリットばかりではない。

そこら辺は村長など上の存在の匙加減がモノを言うのだが………。成功してる方を数えるほうが早いくらいに成功例は少ない。まあ、その場合上は完璧に制御してたけど、下の連中が勝手にやらかしてドカン。下の連中が色々やりくりしてたのを、上の連中が考えなしに押し付けたりしてドカン、等々だ。要はバランスがとれていなかったのが原因だ。

なので、僕が引き取つて世話をするというのは、言わば孤児院を巣立つた後の就職先を斡旋するようなものである。原作ゲームでもそうだったが、これは相手にとってほとんどデメリットがない。僕のような名家以外にも商家や武家などがその妖力を欲するために、こういう孤児院や市井にいる半妖をヘッドハンティングすることがあるが、こういう時名家であるほど信用が高い。名家は利用すれども長期的視野を持っているの

がほとんどで、半妖が不自由しないように色々世話を焼くのだ。

世話をするという飴を与えて、その後に鞭もとい馬車馬の如くこき使う。だが、村のような憂さ晴らしに使うようなことはしない。単純に勿体ないからだ。その半妖の妖力は退魔師の補助として有用なので、そっち方面でこき使うのであつて村のような憂さ晴らしにすることはあまりない。

名家の憂さ晴らし要員は補充しやすい人間の下人で、村の場合は半妖、という風に別れている。なので、これが村長などだったら断られるが僕みたいな名家や武家だと違うのを知っているので、奉公先としても安心なのである。最も、一応はという但し書きがつくが。補充しやすい下人より、壊れにくい半妖をサンドバッグにする名家や武家もあるっちゃある。だが、僕はそういうことはしないし、下人相手にも憂さ晴らしするようなことはしたことがない。人材が勿体ないからだ。

それらの奉公先として、こちらは受け入れる準備がありますという旨の説明をする。伊予さんが、僕の説明を聞いて口を開く。

「お話はわかりました。娘達が巣立つた後の勤め先になつてくれるのなら、こちらとしても拒否はしません。ですが、半妖の子の扱いについての不安がありますし、二点目のことがあるのでいきなり了承というわけにも行きません」

まあ、そうだろうな。いきなり来て了承が取れるわけもないだろう。何より、先ほど

挙げたように半妖はその存在故に使い潰され、体のいい鬱憤晴らしに使われるかもしれない。一応僕が名家の者だから、という肩書のおかげでこう話が出来ると感じる。これが地位の低い家だったらもっと大変だろうというのは想像に難くない。寒村の村長ならば速攻で拒否されている。

「はい、伊予さんの仰る通りです。ですが、その信用は二点目の依頼で確保できると思っ  
ています」

「……………一点目は娘達のことに関わるので多少の心配はあれど断る要素はありません。ですが、二点目に関してはあまりやりたくないというのが本音です。特に武器防具については」

二点目はまあ難色を示した。これも当然だろう。原作ゲームでも難色を示した理由が、もう大戦は終結したし、妖魔の数が減って人間の勝利が確定してるもんだし、自分は朝廷に数百年規模で貢献してきたからこれ以上やる理由はない。という表向きの三点の理由を説明した。

どれもが一理あるが、裏の理由は鶴を中心とした妖魔が再起を凶っているのだがその計画に雄太郎が一枚噛んでる。だが、雄太郎がこれ以上強い武器を作ってしまうところらの出血がひどいことになる。なので、そういう依頼が来たら拒否してほしいと言われるのだ。

何故、裏切り者扱いされた雄太郎が一枚噛んでるのかというと、自分達狸一族もこのままだと順調に数が減って滅ぶ可能性が否定できないからだ。都の外では裏切った当初から迫害されて大分数が減っている。流石に時間が経ってしまったら一族とはいえ関係ない連中だして恨みが減ってるが、下の階級扱いにされてこき使われてしまっている。言うなれば、人間の村にいる半妖みたいなものだ。

更には、自分自身もそうだが一族も帝の呪いがあるので数を増やすのが非常に難しい。その上に作る子供は一匹だけなので、バックアップがないのである。なので存続と繁栄のために鶴の計画に参加しているというわけだ。

ちなみに、裏切り者扱いされた雄太郎ではあるが、原作ゲームが始まる当たりかちよつと前あたりになると、逆に他の妖魔一族から頼られてる状況になっている。これは、彼が経営している孤児院が理由だ。妖魔を半妖と偽って匿えば最低でも一族の血の者が生き残ることになる、雄太郎の孤児院はそれが出来るしそれを見破る天正帝も既に死んでいるので、裏切り者から一転して駆け込み寺扱いになってしまったのだ。

そして今までも受け入れて、育て、立派に成長させるまで面倒を見て来た実績があるので、下の連中は知らないので裏切り者扱いだが、上の連中は知ってるのでもう既に許している状況であり、逆に頼ってる面もあるほどだ。最も、許しているのも本当に私たちの存続危機になってる中唯一のオアシスみたいになってしまったという背景が理

由だが。これがなかったら今でも裏切り者扱いなのは間違いない。

この裏事情は原作ゲームを知ってるならわかっていることだ。僕は友人程ではないとはいえ覚えてるし、今の難色を示した会話もゲーム通りの内容だった。なので、原作ゲーム通りの展開になるだろうということは予想できる。男と女が逆転していることに目を瞑れば、だが。

そして、ここからが話の肝なのだが、エロゲー故にここから協力させる選択肢が二択しかない。それは、体を使って協力するか、大金を払って協力するかである。

だが、僕はそこから更に選択肢を用意する。

「二点目を拒否する理由はわかりました。ですが、武器防具はたまにいいのです。それよりも、道具関係を中心にやって欲しいのです。そして、それらを作るためにも貴方をわが領地に招待したい。無論、客人扱いとしますので不自由なく過ごせることをお約束します」

武器防具は作ってもらったら楽になるのは間違いないのだが、それらをいきなり押し付ける気はない。それよりも、有用な道具を作ってもらった方が遥かに役に立つ。農具から始まり、水車やら旋盤やらとにかく作ってもらいたいものがあるのだ。

そして、道具を作ってもらって領地の生産力を上げて経済を良くして金の巡りを良くするのが僕の目的である。武器防具は作ってもらわなくても、それまでの奴や妹達への

育成でどうにかなるし、金が溜まれば都合のいい時に大金で依頼すればいいだけだ。

更には、たまに領地にやって来てもらい、領内にいる引き取った孤児達を見てもらえばいい。そうすれば、理不尽な扱いをしてるかどうかの確認を自分の目で行えるからだ。これならば、伊予さんが心配する半妖の扱いに関してクリアできると思う。もし理不尽な扱いをしてると思つたのなら、その時にそちらに戻せばいいし、その時の迷惑をかけた慰謝料も払う気がある。

こうすれば、半妖の子の扱いについてや、道具の作成依頼の両方をクリアできる。そう算盤を弾いたので、それらを説明した。

僕の説明を受けると、伊予さんも番頭さんもしばし考え始めた。その後

「母ちゃん、この話受けた方がいいと思うでヤンス。母ちゃんが武器を作りたくないっていうのも理解してくれてるし、妹達が奉公先で無事かどうかの確認も出来るし、他の話を持ってきた連中に比べたらかなり利点があるでヤンス」

番頭さんは理解してくれたようだ。そして、伊予さんも溜息を一つつき

「お話は理解しました。娘達のことを思えばこれ以上の条件はないでしょう、謹んでお請けいたします」

そう言うのと、番頭さんと並んで深々と頭を下げる。

「いえいえ、こちらとしても受け入れてくれたようで何よりです。後、武器防具に関して



ですが、こちらは伊予さんの気分が乗った時で構いません」

「そうですか、私としてもあまりやりたくないのので押し付けないだけでもありがたいですわ」

「後、他の話に関しては——」

「ちよつと！ それわたしのだよ！」

「ちがうよ！ これはわたしの！」

話し合いを遮るように、ちびっ子達が喧嘩を始めた。どうやら、あげたお菓子の取り合いをしているようだ。それがそのままどつたんばつたん大騒ぎをして、もみ合いの喧嘩になる。大人二人が止めようとすると、喧嘩が激しさを増し妖力を持つようになり、それらの波動が部屋内に無差別に放たれるようになってしまった結果——

バシヤツ!!

「うわっ！」

「「「あつ！」」」

暴れた余波で湯呑が吹っ飛び、中のお茶が僕の体にぶちまけられた。服がびしょぬれになる。

「「「、、、、これはご無礼をしましたっ!! どうか平にご容赦を!!」

「コリア!! お前たちも謝るでヤンス!!」

伊予さんと番頭さんが二人揃って慌てて土下座し、騒動の発端となったちびっ子達の首根っこを文字通り掴んで頭を無理やり下げさせる。

「頭を上げてください、この程度のことなど些事です」

僕はいえ服が濡れただけなので、これ以上の謝罪は不要と言う。

というか、この程度のことなんて妹達がたまにやる喧嘩に比べれば軽いものだ。妹達が何かを言い争って喧嘩をした時は、この時なんか目じやないくらいの靈力の波動がくる。それに比べればさざ波である。ただ、その喧嘩をした後度々記憶が飛ぶが、それは恐らく僕が靈力の波動に当てられて気絶したからだろう。やだ………この程度で気絶するなんて長男弱すぎ？ って度々思ってしまうが。

そう思っていると、大人二人は頭を上げ、そして原因のちびっ子達にそれぞれ拳骨をお見舞いする。威力が凄かったのか、それを喰らってその場で倒れるちびっ子。余りにいい音がしたのでつい

「あの、だ、大丈夫ですか？ 強く殴りすぎたのでは？」

「いえいえ、滅相もございません。名家の方にご無礼を働いた身、この程度の拳骨など安い物です。本来なら切り捨てられても私は文句を言える立場にありません」

いきなりス〇ーキの如く物騒なことを言うが、良く考えたらそりや無礼討ちするようなことだったと理解した。だが、そんな血生臭いを見る趣味はないのでやめさせるの

も含めて言う。

「元はと言えば、僕が一緒に連れて行っていいと言ったのが発端です。ですので、その拳骨を見たことで仕打ちはこれで終了とします」

上から目線の物言いは余りしたくないが、立场上名家の僕と半妖の彼女とでは前者のほうが上になる。その僕がこれ以上は不要と言った以上、彼女がさらに罰を与えることをするのは僕に対する無礼となる。それを理解したのか、番頭さんと共に深く頭を下げた。

「寛大な処置に感謝いたします。この子供にはきつくいをつけておきますので」

「はい、それで結構です。ではそろそろお暇させてもらいますね。詳しい話は後日また」  
話は途中であつたが、そろそろいい時間になるのでお開きにして帰ろうとした。だがそれを番頭さんが止めた。

「いやいや、お嬢さんの服を濡らしたままじゃマズイでヤンス。そろそろ冬に差し掛かるし、濡れたままだと風邪をひくでヤンス」

番頭さんの言う通り、そろそろ寒くなる時期なので流石にこのまま出ると風邪をひくかもしれない。だが、替えの服を貰うなりなんなりすればいいし、近くに平民用の着物屋があつたのでそこで買えばいいかなと思つていた。

そう思つて近くの着物屋で安い服を買うということを言うつもりだったが、伊予さん

がそれを聞いて閃いたような顔をし

「そうね、このままだとお体に触ります。お嬢様、狭い場所ですが我が家の風呂で体を温めてください」

そう言うのと、僕の手を掴んで立ち上がり。そのまま行こうとした。

拙い!!! 僕が男だとバレる!!!

先ほどまでとは打って変わって急に積極的な行動をする彼女の突然の行動に驚く。

「あ、あの! よそ様の風呂を借りるなんて失礼なので結構——うわっ!」

そう思つて抵抗するが、それを防ぐかのように僕をお姫様抱っこした。顔に、腹に、膝に、伊予さんの巨大な体と爆乳が当たつて勃起しそうになる。というか、いきなりで急展開すぎて頭が回らなくなる。何より抱っこされたことで彼女のいい匂いのする体臭を直で嗅いでしまつて余計にボーっとしてしまふ。

番頭さんに視線を送るが、彼女は僕が女だと思つているからか、抱き上げることを訝しんだりせず頷き

「確かに、多少は濡れたので体を温めた方がいいでヤンス」

「私はこのままお嬢様の体を洗います。貴方は新しい服を用意してきて頂戴」

「合点でヤンス!」

そう言うのと、番頭さんは拳骨をお見舞いしたちびつ子を抱きかかえ、残りの子達を引

き連れて出ていった。大部屋に残ったのは僕と伊予さんだけとなる。

その伊予さんがニンマリとした顔で僕の顔を覗き込む。

「うふふ、じゃあこれから一緒にお風呂に入りましょうね」

「あ、あの、その、本当にお風呂はいいんで」

「体が濡れてしまったからだめよ。それにこれから私の娘達の世話を焼いてくれるんだから、お互い裸の付き合いで親身になりましょう？　そうすれば、貴方の依頼で拒否した武具の作成をしてもいいわよ？」

急に話し方がなれなれしくなってきた戸惑うも、話す内容は捨てがたい。だが、やはりこの状況はマズイ。万太さんの手紙でも書いてあったが貞操逆転したこの世界だと、このままお風呂で喰われてしまう。

「ですが、その、僕は女ですし。女同士に興味は——」

「嘘おつしやい、貴方男でしよう？」

逃げるための嘘を言うも速攻で黙らされた。即バレしたことに戸惑う。

「い、いや僕は女——」

「あの程度の変装と術式で女と偽るなんて、大したことするわねえ？　私の目は誤魔化せないわよ？」

ニツコリと笑いながらも薄目を開ける。そこから見えた目は捕食者の目だった。

ガツンと殴られた衝撃を受ける。今まで変装で上手く行つてたと思つてたのに、それはバレてたのか。

頭巾で隠れていても、僕の目に動揺が走つたのを見逃さなかつた彼女はさらに畳みかけた。

「胸辺りから術式の反応がするから恐らくお守りか何かでしょうね。娘達は騙せても、私はこの程度最初から見破れるわよ？」

目は口程に物を言うとはこのことだろう。僕の考えたことに返答をする。それらが全て見透かされたような答えなので、動揺が走り動悸が激しくなる。

ま、まさかと思うがこの後は――

そう思つた矢先、彼女は両手で抱えていた僕を片手で抱え直し、空いた手で僕の頭巾をはぎ取り――

「んぢゆううううっ ♡」

「ん ん ん ん ♡!!」

僕の顔を掴んで熱烈なキスをしてきた。美人で大人の女性に急にキスされたことで、頭が真っ白になる。

その熱いキスで一気に腰砕けになつた僕を両手で抱えなおし

「さあて、お互い未来のためにお風呂で親身になりましょうね？」

♡」

僕を抱きかかえたまま、お風呂へと向かっていく。

僕は逃げたくても体が完全に弛緩してしまつて動かない。

頭に思い描いた危惧が形になり、これからどうなるんだろうという不安と同時に、股間のちんぽは期待を表すかのように天を突いていた。

その股間の象徴を見て、伊予さんは益々笑みを浮かべ軽やかな足取りで巨尻を震わせながら目的地へと向かつていった。

## 二十三話 ◆逆転すると、美少女を手籠めにする狸の汚っさんみたいなもんでござるの巻

「うふふ、すべすべしてて柔らかいわね♡」

そう言つて、エアーマットの上で僕は正座させられ彼女に背中を洗われている。

僕は彼女にキスされてからというものの、そのまま風呂場に運び込まれ、あれよあれよと服を脱がされ裸にされここに連れてこられた。その間にも、僕は力を出して抵抗しようとしたが仮にも相手は凶妖。更には鍛冶師という力仕事をする妖魔。故に、僕の力は全く通用しなかった。最初にキスされたことで、相手の唾液を飲んだのがまずかったかもしれない、あとキスの快感が凄くて腰砕けになってしまったのも原因だ。妖魔のエツチ攻撃は大変強いっていうのはゲーム演出かと思つたら全然違つてたでござるの巻。身をもつて体感するとは思わなかった、こんなに強いのならエロゲーでヒロインが腰砕けになるのも嫌でも理解できる。こんな逆レイプまがいなことでも理解したくなかつたけれども。

ていうか、思いつきり背中やら腕やらをバシバシ叩いたんだが全く効いてない。威力



のある術を組んで抵抗しようにも、キスで唾液を飲まされたことで発情状態になってしまい、頭が興奮して碌な術が結べない。

肩とか腕とかを抵抗するために叩いた時なんか

「それで抵抗してるつもりなの？ 可愛いわね♡」

って言われてがっかりする。

本来ならば、相手の顔をぶんぐつてでも抵抗するべきなのだろうが、美人な女性に手を上げるのに抵抗があるし、相手がこちらの命を狙ってくるのなら本当に殴るがそうじゃなく性的なことをしてくるだけなので、そういう暴力を振るうことに踏ん切りがつかなかった。

その踏ん切りがつかなかった結果が、今こうして体を洗われていることである。

腰砕けになつて僕らは正座をさせられ、後ろから所謂あすなる抱きという奴で抱かれています。

ローションと洗剤を混ぜた奴を使って、僕の体を優しくそして厭らしく洗っているのが快楽が凄まじい。頭ではここから逃げないといけないのに、伊予さんの巨大な胸が頭と背中押しつぶされるように当たり、伊予さんの力強くも柔らかい腕と僕の胴体並みに太くて柔らかい太腿にがちり挟まれ、そこからくる快感に脳が痺れて動けない。

おっぱいで顔を挟まれるのは波羅や桃代姉さんからよくされていたからどういふも

のかの経験があるが、全くの赤の他人にいきなり風呂に連れてこられ正体もバレこうして貞操の危機に陥っているというのに、体と心はひどく興奮していた。

だが、エアーマットを買っているのが準備が良すぎてるように見えて思わず質問してしまふ。

「ここ、この空気敷物はなんで置いてるんですか?」

「娘達がお風呂で遊ぶ時、滑って転んで大けがをするのよ。これが世に出てからはそれが無くなって助かってるわ」

意外と切実な理由だった。子供の為を思うならそりや買っているのも理解できる。だが、ローションまで用意しているのは謎だった。

「ここ、この潤滑油は?」

「いつか私が男を抱く時に使えるかもしれないと思って買ったの。尤も、私を相手にしてくれる男なんて誰一人いないし、専ら子供達がお風呂で遊ぶために使っていたわ。でも、こうやって貴方に使えることになったわけよ」

どうやら、ぬるぬるするのが子供達には面白いらしくそれで遊ぶのに使っているんだとか。子供達の玩具で本来の役割から外れたのがこうして本来の役割になっただけだ。

だが、そんな感心している暇もなく、彼女の体洗いは進行している。

体をがっちりつかまれてることに気持ちよさと、ここから何をされるのかという若干の恐怖があったが、最初は僕の頭を洗剤でワシワシと洗って水を流した。ここまでは別に問題なかった。

だが、次に体を洗うことになることになるとひたすらに快樂がくる。首筋は舌で舐めてきて、頭どころか背中や上半身は爆乳を上下にぐにゅんぐにゅん♡と擬音がつくくらい激しく動かされる。おっぱいで体を洗われるなんて初めての体験に、僕はすっかり虜になっていた。そこから体の前面は、彼女の優しい手つきがさすって洗ってくる。その動きが大変厭らしく、特に胸を執拗に触って来たばかりでなく乳首を指で上下に弾いたりコリコリと掴んできた時は、あまりの快感に腰がビクン♡と跳ねてしまった。僕が感じているのを吐息や先ほどの跳ねた動きで理解しているのか、彼女は笑みを深めて

「ウフフ、気持ちいいみたいね？」

「ひゃ、ひゃい」

「じゃあ次へと行きましょうか」

「へ、な、何を——」

そういうと、彼女は体を段々と前に倒してきた。背中から抱きしめられてるので、そのまま巨体に押されるようにしてエアーマットに倒れこむ。一瞬、そのまま正座して倒れこんで無理な体勢で抵抗しようとしたが、それすらも目敏く見つけすぐに足に手を

やって動かし寝そべる体勢にされてしまった。つまりこの形は、エアーマットに寝そべり、その上に伊予さんが僕の体を覆いかぶさるような形になっている。

「ほくら、動かすわよ〜♡」

「ほあああああ……………♡」

そのまま巨大なおっぱいで全身を上下に洗ってくる。それだけでなく、太腿などもスリスリと撫でつけてきてお腹のやや硬いながらも柔らかい肉も当たって柔らかか天国、まさにローションプレイ。しかもそのローションプレイをする女性が飛び切りの美人且つ2mを超える巨体にそれを支えるムチムチボディのために、その全身を使って僕の体を洗ってくるのもう極楽としか言いようがなかった。前世では童貞且つ風俗にも行かなかった人生で、いつかこういうプレイをしたいなーと思いつつも女性が怖くて行動できずそのまま死んで転生したわけだが、そのちよつとした願いがこう叶えられるとは人生わからないものである。

だが、喜んでいる場合ではない。フルボツキ状態でこのままだと射精してしまう。それだけは避けたいので、逃れるように身悶えすると

「さ〜て、背中はしっかり洗ったから別の場所を洗いましょうか。そこの木の出っ張りに手を当てて立って立ってくれる?」

「あ、あの、もうこれ以上は」

「いいからいいから、それとも貴方の依頼を拒否されたい？」  
「うう……………わかりました……………」

それを言われると弱い。ここで依頼を拒否されると後々困るかもしれない、そう思つてしまったので渋々と従う。

今更だが、ここの風呂は孤児院だから個人の家より大きく銭湯より小さいといった感じだ。なので、四角く作られた風呂がある。広さ的には山奥の小さな銭湯みたいな感じだ。膝から腰くらいのところの高さは木の壁で、そこから上は漆喰という風に区切られているので伊予さんの言つた出っ張りはこの部分にあたる。だが、年季が入っているからか、壁の漆喰はところどころひび割れや穴が開いているし、空気も通っているようだ。

「ここの壁、穴と罅がありますけど……………」

「ああ、そこはだいたい前からそうなの。直そうと思つても後回しにしてるのよ」

「は、はあそうですか」

「さてと、じゃあここを洗いましょうかね〜♡」

「な、なにを——うひゃあ?!」

尻を掴まれたと思つたら、尻肉を広げられて、尻穴に生暖かいものにゆるんと入つて来た。初めての感覚に素つ頓狂な声を上げてしまう。

「あ、あのおっ！　そ、そこは!!　きたにや——んひい♥」

「可愛くて綺麗な貴方に汚いところなんてないわよ、ほらおちんぼを私のおっぱいで挟みましようね〜♥」

尻穴を思いっきり舐められ、更には舌で穴をほじくられて初めての快感に腰砕けになる。その僕を更に砕くかのように、そしてガクガクと震えて立つてられない僕を支えるかのように伊予さんは爆乳で僕のちんぼを挟んできた。

つまり、尻穴を舐められながらパイズリさせられている格好になる。アナル舐めパイズリなんてエロゲー内で見られないプレイだと思っていたが、まさか自分が体験することになるとは全く思わなかった。

「レロレロレロレロオ♥んまつ♥美男子のお尻うまつ♥」

「あひついい♥あつ、んいつ、まつ、やめっ♥」

余りの快楽に膝がガクガクして立つてられなくなる。だが、それはなんと伊予さんの爆乳で支えられてる感じだ。伊予さんがパイズリしてるのだが、おっぱいを下から持ち上げるようにしているので僕の体ごと支えているので、僕は彼女の爆乳に腰を載せてるような状態になってる。いくら僕の体が細いとはいえ、女性のおっぱいに載るほどに彼女の体とおっぱいが大きいわけだが、そう疑問に思うことすら流れるほどにパイズリとアナル舐めの快楽が凄まじく、僕は呆けなく射精してしまった。

——びゅう~~~~つつつ……♡♡♡

「あはあつ♡あつつうい……♡私のおっぱいが火傷しそうだわあ♡」

「ほっおっ♡うおっ♡♡」

——むにゅんむにゅんぐにゅんぐにゅん……♡♡♡

その射精したちんぽを更に絞るかのようになり、おっぱいを上下左右にこねくり回して残りの射精を促してくる。その動きに、情けない喘ぎ声を漏らしながらもびゅっびゅっ♡と射精してしまう。アナル舐めパイズリから解放されると、既に膝が震えて立ってられなくなりその場で膝をつく。息も絶え絶えに後ろを振り向くと、爆乳の谷間に発射された僕の大量の精子を伊予さんは丁寧な、それはもうへうでこするかのようになり両手で丁寧に挿って口に入れる。

「ずずず♡ずずずずずううっ♡♡はああ……♡うつまあ……♡♡これが子種の味……♡♡♡」

両手で頬を抑えて恍惚の表情を浮かべる爆乳長身美女。ペロリと唇を舐める姿が大変厭らしく、更にはその柔らかい爆乳に太腿、そして巨尻で僕は更に勃起が継続される。その僕の勃起を目敏く見つけた伊予さんは、僕に近づき肩を抱いて両腕でがっちりとし真面から抱きしめる。お互い正座状態からの抱きしめだが、相手が頭一つ以上は大きい僕の頭がちょうど爆乳に挟まれる形なので完全にホールドされ逃げられない。

お風呂で温まっているのと、蒸気と混ざった彼女の雌の体臭を嗅いで勃起は収まるところを知らない。その僕の勃起ちんぽを優しく握った彼女は自身の秘所へと誘導する。

それに抵抗するように身じろぎをし、爆乳の谷間から顔を出して

「あ、あの！ こ、これ以上はやめてください！ 戻れなく——」

「ここまで来て、止まるなんて出来ないわ♡貴方の子種貰うわね♡♡」

言うや否や、腰を動かしそのまま挿入した。

「はあああああ………♡♡♡」

「ほおおあああああ………♡♡♡」

互いに快樂の声を漏らす。

僕はというと、桃代姉さんとは違う感觸で目の前を火花がパチパチしていた。姉さんと同じく巨体に包まれながらも、筋肉のある弾力さで抱きしめられていて気持ちがいい。そして、膣内も熱々に煮えたぎるようだ。鍛冶師は熱を扱うが、ここの熱さも一品。なんて変な感觸が頭に浮かんでしまう。

そんな変な感觸を吹き飛ばすような快樂がやってきた。伊予さんが動き始めたのだ。

「ほおおっつ、お！ つつ♡♡♡ぶう、う♡、つ、すごい♡♡美少年ちんぽおっ

♡♡♡」

「だ、つめえ……え、っ！ え♡中つに………っ！ で……えええ、る、……っ



！  
♥♥

「出してっ♡出してっ♡子供っ♡産むからあっ♡」

ゆつくりと上下に動かすだけなのだが、全身が柔らかい肉に包まれているのでそれだけでも十分な快樂がくる。伊予さんの雌の体臭も直で嗅いでいるのでそこから更に高まり、僕の頭は沸騰して彼女を引きはがすどころか、腕を背中に回してもっと感じたいと言わんばかりにきつく抱きしめた。その反応を感じた伊予さんは更にスピードアップをする。一定のリズムが段々と早くなり、それに伴って快樂のボルテージも上昇し、僕は呆けなく二発目を発射した。

——どびゅうくくくっっ……♡♡びゅうくくくっっ……♡♡♡♡

「うう……♡♡、っお……っ♡ほ……！お……っ♡……♡っ！お、おっ……は、孕むうう……♡」

僕の頭は爆乳にがちり挟まれわからないが、伊予さんは頭を仰げ反らせ口から舌を出して中出しの快感にトンでいたようだ。その喘ぎ声を彼女の体越しに聞いて、駄目なのに本能で喜んでしまっている僕がいる。中に出しては駄目なのに、美人の女性からこゝうも積極的に求められ、愛撫され、腰を振られて喜ばない男はいないだろう。子供が出来る危険性があるというのに、伊予さんに中出ししてしまうという感覚が溜まらなく気

持ちが良い。寧ろ、このような美人女性を孕ませてしまうことに優越感すら覚えてしまふ。こんなこと考えてはいけけないのに、男の、雄としての本能で喜んでしまつてゐる。悲しいけど僕も男なんだなつて思つた。

既に出してしまつて後の祭りではあるが、避妊術を掛ければまだ防げる。そう思つて、口に出すも――

「あ、あのつ、ひ、避妊！ 避妊をして――んひいつ?! ♡」  
「もう中に出したんだから、一回出そうが二回出そうが同じことよ♡ほら、お互いの子供を作りましょうね♡♡」

――抗議と避妊の提案は、彼女の動きで防がれる。そのまま僕は対面座位から押し倒され、逆正常位とも言うべき形になり豊満な体に押しつぶされる。彼女自身が腕や足の筋肉を使つて僕が重すぎないように気を使つてゐるから、押しつぶされると言つても余り苦しくはない。だが、そんなことを考える暇もなく僕は抵抗をしても彼女の動きを止めることが出来ず、そのまましばらく犯されることになり、またもや彼女の中に避妊無しの中出しで敗北した。

快樂で頭がゆだつてしまつた僕は、結局は快樂に負けてしまつた。

最終的には彼女の爆乳を吸つて自分から腰を振つていたことだけは、臍氣ながら覚え

ていた。

「ふんふんふん、これとこれとこれと……」

番頭こと翠は適當な服を見繕っていた。手持ちにある中でも上等で綺麗な服……、正直言つて名家の女性に着せるには粗末な服だが手持ちの中ではこれが一番いい奴なのでこれで許してもらうしかない。

「さうて、風呂場を持つていくでヤンス。まあ、あのお嬢さんは優しいみたいだから理由を言えば怒らないはずでヤンス」

妹達が粗相をした時、翠は本気で焦った。名家の者に無礼を働いたらその場で打ち首されても文句は言えない。ましてや自分達は忌み嫌われる半妖、仮に彼女が妹を殺し自分達が検非違使や朝廷に彼女の非道について訴えたとしても、こちらの訴えより名家の彼女のほうが優先されるのは誰が見ても明らかだからだ。

だが、そんな彼女は怒らないどころか許してくれた。あちらがこちらに依頼をする立

場揉め事を起こしたくないという理由もあるだろうが、あのような粗相をしたら母が拒否してた武具作成依頼を無礼に対する対価として要求しても不思議じゃなかった。だが、それをしなかった。妹達に気前よく高い菓子配ったり、視線を合わせて喋ってくれたりしたところもあり、それらを見て翠は彼女はとてもやさしい人物だとすぐに理解した。

気になるのは、彼女は女性のはずなのに何故か自分に熱っぽい視線をしてたのが気になったが……。自分は女だし同性愛に興味はない、妖魔に近い半妖ではあるが、いい男を捕まえて子供をたくさん産みたい。そういう欲求があるので、同じ女である彼女から熱っぽい視線を向けられて困惑した。だが、一番困惑したのは彼女を見たり熱っぽい視線を向けられたりすると自分の子宮が疼いてしまったことだ。男から熱い視線を向けられて発情するなら女として当然だが、自分がそのように発情してしまうのがわからない。もしかして、意識してないだけで自分はそういう趣味があったのか？ と本気で困惑したほどだ。

「はあ……、男が欲しいでヤンス……。ん？」

服を手を持ち、風呂場に向かう途中で妹達が壁にたむろしていた。あの壁は風呂場と仕切ってる場所だ。確か、罅と穴が開いているのでそこから風呂場が覗けるのである。直そうとしても別に風呂場の熱が逃げるわけじゃなく困るところもないので放置して

いたのだ、その壁の罅と穴が外の壁だったのならば外から風が入り込んで風呂場が寒くなるので絶対に塞ぐが家屋の廊下の壁で内側だから別段問題になってないのである。最も、その穴と罅も風呂場からこちらは見えない、逆にこちらの廊下側から風呂場は見れる、みたいな感じになっている。

そんな壁に妹達が押し合いへし合いで顔を張り付けていた。一応ひび割れと穴がポツポツしているので妹達が見れる位に数がある。だが、もう一つ気になっていたのは妹達が発情していたのだった。

「ねえ、あれ……………」

「うわあ、すごい……………」

「はうう……………むねがどきどきするよお……………」

「うう、おまたがせつないよお……………」

「お前たち、何してるでヤンスか？」

「あつ、おねえちゃん……………」

声を掛けたらようやく妹達が自分に気づいた。妹達は軒並み目が潤んでおり、息を荒くしている。そして性臭がしていることから、股から汗をこぼしている。事実、妹達の足元に水たまりが出来ていた。

「全く、何を盛っているでヤンスか……………」。女の姿を見て盛るなんて、妹達がそういう

趣味があるとは知らなかったでヤンス」

呆れ顔で叱る。盛るのは女だから仕方がない、それは誰でもそうだ。女は獣だから性の目覚めも早い。まあ、男の数が減っているから早いうちから子供を作りたいという生存本能があるからだ、それにしても妹達は女の体を見て発情してるほどだとは思わなかった。

なので、呆れて言ったのだがその妹達から出た言葉は予想外のものだった。

「で、でもお……♡あのひとがとてますけべすぎるのお……♡♡」

「おねえさんがおねえさんじゃないみたいなのお……♡」

「ん？ どういうことでヤンス？」

今風呂場は母とあの名家のお嬢さんが入ってるはず。母が女なのは言うまでもない、だがお嬢さんがお嬢さんじゃないというのはどういうことだ？

気になった自分も、手に持っていた服を邪魔にならない場所に置いて妹達同様に壁の穴と罅割れに目をやった。ここの穴と罅割れは背の低い妹達が見れる位置にあるだけでなく、天井の付近の上の方にも出来ている。なので、母程ではないが背の高い自分は妹達をどかすことなく、壁の上のほうから覗けるのだ。

「一体何があつたんで——は？」

そして、覗いた先には目を疑う光景があつた。

母が体を洗っていた相手が男の子だったのだ。

「い、これは一体……うほっ♡」

今まで女性だと思っていた人が男性だったことに疑問に抱いたが、その疑問の答えを探る間にスケベな体が目に入り思わず唸り声を出す。自分達のような柔らかい肉付きではなく、シユツとした細い体。その白くて薄い胸に乗ってる小さな桃色の乳首がとても愛らしい。その乳首を母は指ではじくようにして洗い、それにビクン♡と彼は反応しているのが溜まらなく胎に来る。覆面からはわからなかったが、素顔が露わになった今ではその顔がとても美形なものもたまらない。そして、その股間には男だと示す象徴が天を衝いていた。その象徴を見ただけで、自分の胎が子供を欲している動きをし始め股間から勝手に汗が溢れ出てくる。

「あのおねえちゃんとてもすげだよ……♡」

「お前たち、あれは女じゃなくて男って言うんでヤンス。お兄ちゃんてヤンスよ」

「ふええ……あれがおとこのひとなんだあ……♡おにいちゃんなんだあ……♡」

初めて見た男に対して、その存在を知らないからお姉ちゃんと言ったのでそれを修正してやる。だが無理もない、男は基本的に人間の女の子が囲っている。それに妹達は半妖だ。被差別対象が外に出たら何をされるかわからないので安全のために遊ぶのも基

本的に敷地内で遊んでいるので、男を見たことがないのだ。

自分は妹達とは違い外に出て仕事をしたりするので男を見たことがある。だが、彼は今まで見た男の中でもダントツの美形だ。それに、男は自分が半妖だからか、それともこの巨大な胸があるからかこっちが視線を向けてるのに気づくと嫌そうな顔をしてくる。その顔を見るとひどく心が傷つくが、半妖だからそしてこの巨大な胸が性の象徴だから仕方ないと思っていた。

だが、今母に体を洗われている少年はどうだ？ 嫌そうな顔をするどころか、自分よりも大きい母の爆乳に挟まれて蕩けた顔をしている。その仕草、その顔、その体、全てがとてもスケベ過ぎて、そして初めて見た男の裸を見て、既に自分の体は鍛冶場の炉のように熱くなっていた。

「はあっ♡はあっ♡」

「すごいっ、すごいよおっ♡」

自分が興奮しているのと同様に、妹達は熱い吐息を出しながら股間に手をやって動かしていた。だが、それを咎めることはしない。何故なら自分も手は股間にやっていたからだ。だが、妹達と違って大人な自分は声が大きくなるといけないので、服の裾を噛んで声を我慢する。その自分の涙ぐましい我慢をあざ笑うかのような行動が目に入ってきた。



母が壁に手をやる様に指示し、少年が拒否するも依頼をチラつかせて渋々言うことを聞かせると、なんと母が少年の尻穴に舌を入れて味わっているではないか！　なんと羨ましい！

そこから、腰がガクついてる少年を支えるかのように母は自身の爆乳で支え、更には支えながらも少年の魔羅を挟んで動かしている。

少年はその母の愛撫に耐え切れず喘ぎ声を出し、顔を蕩けさせた。少年の顔は母からは見えないだろうが、壁の穴や罅から覗いている自分達には尻穴とちんぽを舐られて少年の快樂にとろけた顔が目に入る。その顔が溜まらなくスケベで、妹達もその顔をマジマジと覗き穴から見て目に焼き付けていた。当然自分も目に焼き付けている。そして、自分の手の動かす速度が速まった。妹達も同様に速まっている。

そして少年の腰が大きく震えたのを見た。それが絶頂だと理解したと同時に、自分と妹達もくぐもつた声を出した。壁一枚越しで覗いているだけだが、ほぼ同じ瞬間で自分達も絶頂したことに満足感を覚えてしまう。

その後、母が胸の谷間についた白くべたつく何かを丁寧に、それはもう丁寧に手で拵って舐めとっていた。あれが子種だというのはすぐに理解した。美味しそうに飲む母を見て激しく嫉妬する、自分も飲みたい。少年の魔羅を自分の口でしごいて舐めて残さず飲み干したい。

そう思っていると、母と目が合った。覗いているのがわかったようで、母は自分の視線にゆっくりと頷く。すると、母は少年の肩を掴んで抱き寄せ、なんとそこから性交を始めた。女ではなく男だったのにも驚いたが、その名家の者に対してまさか性交まで持つていけるとは思わなかった。しかも相手は名家の者である。それを自分達のような半妖に抱かれるなんて、彼からすれば絶対に拒否したいことだろう。だというのに、視界に入る彼は嫌がるどころか母に逆に抱き着いていた。それを見て、彼も感じているのだというのが理解できた。

そして、しばらく動いていると二人の体が大きく震え母は顔を仰け反らせ舌を出して喘いでいる。見るだけでわかる、中に出されたのだと。

なんと………、なんと素晴らしい！　そして羨ましい……!!

母ではなく自分が彼の子種を受け止め孕みたい。そう思うほど、目の前の光景に無我夢中になっていた。

そしてその後は、母が上からのしかかって腰を振ってまた子種を出される。既にこれで三回は出していることになる。ここまで出せる男なんているのだろうか？　男は女に忌避感を抱いてて発射できる数も一回、多くて二回くらいだと聞いた。だというのに三回は素晴らしい。しかも三回目には彼は母の体に足を絡ませているほどだ。自分から足を絡ませ、相手にしっっかり種付けをしようとする男など聞いたことも見たこともな

い。艶本の出来事かと思つたほどだ。

それで終わりかと思いきや、母は彼の体を抱きしめ繋がつたまま風呂に入った。彼は蕩けた顔をしながらも、母に抱き着きそして巨大な胸をちゆうちゆうと吸っている。その姿が溜まらなく愛らしい。そして、女の象徴である胸にあんなに積極的に吸う男がいるとは………。歓楽街で働いている半妖の同胞から聞いたことがあるが、男は女の胸を吸う人は少ないそうだ。理由は、それで女が興奮して男を激しく抱くからそれに耐えきれないしそれを回避するために淡泊な性交で済ますという。過去に、男娼が女性の胸を吸つて激しく求められて不能になりかかったことがあることも響いているそうだ。

だというのに、あの少年は自分から吸っている。母も吸っている彼を優しく撫で息子を見るかのような優しいまなざしで見ている。その光景が溜まらなくスケベで羨ましい。自分より大きな母の胸を吸うなら、自分の胸も吸つて欲しいと思つたのは不思議なことではない。

その後、母は風呂に入りながらも繋がつて子種を出された。これで四回。そこからは流石に終わりか、出ようとしたら、母が腰を砕いたようで空気敷物に倒れこむようになった。

無理もない、三回も中に出されたのだ。母の性欲は非常に強く、防音結界をたまに張つて激しく自慰をしているのを知っている。その母の性欲を受け止めただけでなく、

あろうことか三回も種付けをしたのだ。流石の母も腰が砕けようというもの。

その四つん這いになった母を見た少年は、なんと魔羅がゆつくりと立ち上がり始めた。四回も出して、尚立ち上がるその不屈の如き魔羅に、自分は目に映るものが信じられなかった。

さらに信じられないことに、四つん這いになって腰が砕けている母の腰を掴むと、彼は自分から腰を振り始めた！ 女から求められて拒否をせず受け入れるどころか、あるうことか自分から腰を振るなんて！ 覗き穴の先に見えるものが、まるで艶本や歌舞伎のような作り話の出来事だと錯覚してしまうほどだ。だが、この体の発情と胎が子種を求める動きは紛れもなく現実であり、覗き穴の先に見える光景も現実である。

「ふうっ♡♡ふうっ♡♡」

「~~~~~っ♡♡」

「すっいっ♡すっいっいっ♡」

自分もそうだが妹達も服を噛みながら激しく自慰をしている。もう目の前の光景を瞬き一つすらせず焼き付けている。自分から腰を振る彼が溜まらなくスケベ過ぎて、もう何が何だかわからないほどだ。

そして腰を激しく押し付けて震えた。これで五回も発射したことになる。信じられない。しかも自分から腰を振るほど且つ五回も出すとは、どれほどこの少年はスケベな

のだろうか。

その後、両者ともに息も絶え絶えになり、少年は風呂の縁に腰を掛けた。母の愛液と少年の子種が混じった汁が、少年の魔羅から滴り落ちてゐる。勿体ない、今すぐ口に入れて掃除したい。事後の魔羅の掃除は乙女の嗜みである。母もそれを理解してゐるようである。腰砕けになりながらもなんとか立ち上がり、風呂の縁に腰掛けた少年に恭しく跪いてその魔羅を口に入れて掃除し始めた。少年は嫌がる素振りを見せないどころか、母に任せてゐる。両手は風呂の縁に置いて腰掛けてゐるので、母の頭を引きはがそうともしないのがわかる。

その姿はとても厭らしくもどこか神秘的で、まるで宗教画のように見えた。

そして、母が自分を含めた妹達に教え込んでもらうこと。男は我等を孕ませてくれる貴重で大事な存在、数が段々と減つていく中皆で仲良く共有し大事に世話をすること。そのため、女は男に全て捧げるようにすること。そうすれば、男も女に捧げるようになる。

自分も女だから母の教えは大事なのはわかる。だが、男は人間の女にもいい顔はしない。男自身が孕ませる存在ではあるが、種馬であるためにそういう扱いをされるというのを理解しているからだ。故に、男は女に忌避感がある。

同族である人間の女にすらい顔をしなのだ、半妖という混ざりものである自分達

にはもつといい顔はしない。だから、母の教えは大事だと思っていたがそこまで男に捧げる必要はあるのか？ と疑問に思った事が多々あった。

だがしかし、目の前の光景を見たなら本能以理解できた。母が彼に捧げたように、彼も母に捧げた。これこそが愛なのだ。そして、妖魔である母に嫌な顔せず発情し腰を振るほどの性欲を持つあの少年こそが、私達の夫となる男なのだ。自分自身も既に、彼に身も心も全て捧げて、そして彼の肉棒を全身で味わい彼の全てを味わい子を孕みたいと魂で理解してしまった。何故ならば、この体の熱と胎の疼きは嘘ではないからだ。

掃除し終わったのか、二人は一言二言話した後、脱衣所に戻っていった。  
いけない！ 替えの服を持って行かないと!!

自慰と覗きに夢中になっていた自分は大急ぎで脱衣所に向かった。

やってしまった………………。まさか自分から腰を振ってしまうとは………………。

「ウフフ、あんなに激しくされたの初めてよ♡頼君つてとつてもスケベだったのねえ？

「うう……………」

そう言いながら、伊予さんは僕の体を手ぬぐいで拭いている。その際にも、柔らかい爆乳を普通に押し当てながら頭や体を拭くので、普通に勃起してしまう。

僕は彼女に抱きしめられながら風呂に一緒に入りそのまま風呂の中で彼女の爆乳を吸いながらまた中出ししてしまった。もう三回も中出し且つあの美しく豊満な肉体でぎっちり抱きしめられたら完全に発情してエッチなことで頭がいっぱいになってしまった。

それで終わればいいのだが、伊予さんが腰砕けになったように、風呂から出ようとしたときにエアーマットに四つん這いになってしまったのだ。その立派で大きい尻を見て、尻の割れ目にある二つの穴に彼女の厭らしい陰毛や割れ目からこぼれる精液などを見て、僕は再度勃起しただけでなく彼女の腰を挿んで自分から挿入してしまったのだ。

原作ゲームでも、エロ度が高まると主人公含めた女性達が自ら腰を振るようになる。その時はゲームだからしょうがないねと思っていた、だが妖魔の体液は媚薬みたいなものという説明を体で理解してしまった僕は本能が抑えきれずに自分からヤツてしまったのである。

もう無我夢中で、とても気持ちが良いので、そして自分より体の大きく強い女性を組み伏せてるといふ感覚が支配欲を感じてしまって止まらなかった。その結果がこれだ。

その後、流石に疲れて風呂の縁に座ったら復活した伊予さんはお掃除フェラまでしてくれた。それ自体は、桃代姉さんとの初夜でもやってもらったし乙女の嗜みと教わったからわかるが、そのお掃除フェラを僕は両手を縁に置いたままでされるがままになっていた。それどころか、それをされるのが当然と思ってしまった。

今はゆだつた頭が冷えてきたので冷静になっているが、あのお掃除フェラに関してされるのが当然とも思える態度が今思い返すととても怖くなってきた。

原作ゲームでもエッチの開発が進むとエロが当然のような行動をとり始める。その後、段々とプレイヤーの操作を受け付けずエッチな行動が止まらなくなるのだ。もしかして、僕も止まらなくなるんだろうか……。そうなったら、僕は女性に対して誰にでも腰を振る猿みたいになってしまうのだろうか……。そういう漠然とした恐怖がやってくる。

正体が男なのがバレ、五回も射精し四回も中出した挙句、名前までバレてしまった。エッチ度が高まると、あっさりと秘密もバラしてしまうのはゲームでそうだったが、僕も本名を思わず言ってしまった。悔しい、でも感じてしまった。

そんな難しい顔をした僕を、ふわりとした肉が頭に乘って来た。おっぱいを頭に載せられる感触に再度勃起しかかる。

「んもう、そんなに難しい顔をしちゃだめよ。出したのは仕方ないんだから」



「ですが、あんなに中に出してしまつて……………」

どうやら僕が中出ししてしまつた事で顔が曇つたと思つたらしい。伊予さんはそう言つてきたが、まあそつちも間違ひじゃないので訂正せずに返答する。

実際あんなに出してしまつて子供が出来ないか不安だ。それに今からでも遅くはない。避妊術を掛ければ防げる。

「あ、あの、避妊術を掛けたいのですが」

「駄目よ、依頼を拒否するわよ？ ウチの子も貴方のところにあげませうん」

可愛らしく言いながら頬をぷくーつと膨らましてプイツとそむけた。その度に立派なおっぱいが揺れる。実際可愛いのだが、彼女の言うように依頼だけでなく孤児院の子も引き取れないとなるのは痛い。有能な人材はいくらいても構わないからだ。

「わ、わかりました……………」

「うん、それでよろしい♡」

そう言いながら頭を撫でてくる。なんか抱かれてから一気に馴れ馴れしくなつた。でも不快じゃないから別にいいのだがTPOは弁えて欲しいと思つた。そう思つていると、扉が開く。そこには番頭さんと、ちびつ子達がたくさんいた。全員が顔を赤くしているし、何より僕はまだ裸で体を拭いている途中だ。しかも半勃起してる。

思わず、伊予さんから手ぬぐいをひつたくつて体を隠すが時すでに遅し。

「あんた、男の人だったんでヤンスね……………♡」

熱を孕んだ目で僕を見る番頭さん。その乳首は最初見た時と違ってはつきりと浮かび上がり、禪はもうびしよびしよであった。番頭さんだけでなく、ちびっ子達も同じような表情で尚且つ股間を濡らしている。幼女たちが股間を濡らすという非常に危ない光景を見て、僕は顔を青ざめた。

「あらあら、貴方の正体がばれてしまったわねえ？」

クスクスと笑いながら伊予さんは言うが笑いごとじゃない。番頭さんにちびっ子達も、段々とにじり寄ってきている。こ、このまま僕は襲われてしまうのか?!

そう思っていた矢先、ドタドタとした足音が聞こえてきた。

「おかあさん！ おねえちゃん!! おくすり!! あのこたちが！ はやく!!」

ちびっ子が慌てて、尚且つ簡潔すぎる内容で話すと、伊予さんと番頭さんは即座に表情を引き締め、番頭さんは手に持っていた着替えを傍の子に押し付け走っていった。伊予さんも、先ほどのゆったりした動作ではなくキビキビした動きで即座に服を着ると「申し訳ありません、火急の要件が出来ました。失礼ですが、貴方に知ってもらうためにもついてきてもらえませんか？」

「えっ？ わ、わかりました」

「(ちらへ)」

僕が頷くと、スタスタと歩いてちびっ子達を引き連れて行った。その後を僕も服を着て慌ててついて行く。一体何があるんだらうか？ そう思っついてきた先で見た者達に、僕は衝撃を隠せなかつた。

二十四話 大昔の不治の病は金があると解決できること  
とってあるよね。ない場合は……

病気とは読んで字のごとく、体に異変が起きることである。

多くの者は風邪なら一度は罹ったことがあるだろう。日頃の生活の不摂生などによる免疫低下はもとより、獣に噛まれるケガをして傷口から病原菌が入るといった外的要因。空気中のウイルスを吸って発病等々。様々な原因から人も獣も病気に罹る。

だが、この世界はゲームの世界。

僕が前世で生活していたような科学で解明できるようなものばかりでなく、オカルトなどのファンタジー要素で全く解明できないのが普通にある世界だ。更には子継病のように僕の世界にはない病気の存在がある。

そのような世界では、病気に罹る原因は先ほど挙げたような理由以外に更に追加されるものがある。それは呪いといったもので、呪いによる身体能力低下はもとより免疫力も下がるのを、今日の前に寝ている少女たちの姿を見て初めて知った。

ヒュー……ヒュー……

げほっげほっ……

うう……あああ………

苦しい……苦しいよお……

部屋の中は、異臭と呻き声が充満しており、その中で寝ているのは少女たちであった。視覚のみならず嗅覚でも異常を知らせる光景に、僕は思わず吐き気を覚える。少女たちの全身は、ほぼくまなく包帯が巻かれており、その包帯も血と膿が混じったもので汚れている。

思わず袖で口元を抑えたが、これは異臭を鼻に入れるのを防ぐだけではない。思わずこみ上げる吐き気も抑えるためでもあった。不快感と吐き気を抑えながら、僕は伊予さんに尋ねた。

「あの、この子達は……？」

「この子達は、私の友人から預かった子達なの………。呪いに侵されて、こんなにひどいことになってるのよ」

ゲームをプレイしてた時、呪いは単に弱体化としか表現されなかった。呪いで死んだ妖魔も、単純に妖力や身体能力が弱まって病に罹って死んだと表現されていた。だがナレーションなどでそうサラッと流すだけだし、設定資料でも妖魔も人間のように病に

罹って死にやすくなったとしか書いておらずどのような病気になるのかすら書いてなかった。ゲーム中でも、このようなシーンはおろか表現もなかったから猶更目の前の光景が衝撃的すぎて、僕はその場に立ち尽くすしかなかった。

案山子のように棒立ちになってる僕とは対照的に、伊予さんと番頭さんはキビキビとした動きで包帯を新しく清潔なものに巻き直し、寝ている子に薬やくのみき吞器のみきを使って薬を飲ませている。

包帯を巻きなおす際、少女たちの肌が見えたが。血だらけで罅が入ったような傷が走っており、肉もほとんどなくガリガリにやせ細っている。顔も見えたが、目が落ちくぼみ頬もこけて栄養失調の子供みたいだ。年頃の女の子の裸の肌を見てしまったが、その痛ましさを見てしまつて欲情なんてするはずも出来るはずもない。そこまで倒錯した性癖もないからそうだが、可哀想なのは抜けないだけだ。

苦しく咳き込む子も、薬を飲んだ事で多少は呼吸が落ち着いたようだ。だが、僕にはわかる。飲ませた薬は根本的に治す奴ではなく、対症療法にしか過ぎないものだ。

僕の視線に気づいたのか、伊予さんは説明する。

「この子達はこれ以上は治らないの。飲ませた薬も、一時的に抑えて苦しみを無くすだけではない。治療薬はあるけど、私達半妖には手が届かないし売ってもくれない。そうしている間に、もう境界線を越えてしまったのよ……………」

彼女の言う境界線の意味はわかる。桃代姉さんの病と同じなのだ。あの子継病も、ゲーム中でも一定以上のラインを下回らないようにしないと完治しないというシステムになっていた。僕が交易品で大金を稼いでそれで薬をせつせと欠かさず買って投薬してるから姉さんは大丈夫だ。だが、この子達は金が足りない状態で投薬が出来ず、結果としてラインを下回ってしまったのだろう。桃代姉さんも、ラインを下回ってしまうと後はもう完治を諦めデバフを抑える薬を買って長持ちさせるしかなくなるが、ここで寝ている子達もそれと同じだ。

ある程度処置をし終わった二人は一息付き、番頭さんは汚れた包帯を抱えて部屋を退出する。包帯を洗って再利用するのだろう。僕の前世の現代社会でも、包帯の再利用は行つてるところはあるがそういう場所は貧しいところだ。日本でも使い捨てと洗濯可能な奴とあつたが、洗濯可能とあつても汚れてると不衛生だし素人の洗濯で完全除菌出来たかわからないから基本的には洗濯可能とあつても使い捨てが良いとされていた。だが、この孤児院は朝廷からの支援はあるとはいえ完全ではない。なので再利用できるものはしつかりやるのだろう。

退出した番頭さんを見送った伊予さんは、最後の子の処置が終わると、僕を引き連れて部屋を退出する。僕は衝撃の余り突っ立っていただけなので、彼女に腕を引っ張られる形で部屋を出た。部屋の外では大勢の孤児が心配そうな顔をして待っていた。その

中から、大人二人を呼びに来た子の頭を伊予さんは優しく撫でて褒める。

「それにしても良く気付いたわね、偉いわ」

「うん、おとがなつたから」

伊予さんはそう言つて、真つ先に呼びに来た孤児を褒める。孤児はというと、音が鳴つたから知らせに来たという。

先ほど入つた隔離部屋は襖で区切られてる所は他の部屋と変わらない。だが、襖は境界を張る札が張られており明確に簡単に入りが出来ないようになってる。そして、その部屋の中に入れる者は呪いや病に対する耐性があるもの、つまりは大人である伊予さんと番頭さんだった。この二人が、ここに居る病気の子供達の世話をしており、他の孤児達は近寄らないようにしているそう。その孤児達が異変に気付いたのは、部屋の各所に音を鳴らす音札が張られており、その音札は病気の子供達の枕元にある札とリンクされており、外の人を呼ぶときにそれを鳴らすという所謂ナーズコールである。それにより、先ほど孤児が異変に気付いて伊予さん達を呼んだというわけだ。

孤児達を大部屋に戻るよう促すと伊予さんは僕に向き合い、客間で話しましょうと言つて歩き、僕もそれについて行く。



客間でちやぶ台を挟んでサシで話し合った。特に聞きたかったのはあの子達の呪いや病気についてだ。伊予さんがお茶で口を湿らせながら口を開く。

「貴方も名家の者だから、天正帝の呪いについて知っているでしょう？」

「はい、教育として教えられるほどです」

「ええ、そうね。教育典範に義務として明記させられるほどですもの。貴方達人間にとつては憎き妖魔を弱体化させたものだけど、私達半妖からしたら忌まわしいものではない」

「ですがそれは——」

「ええ、私の意見は被支配者の哀れな戯言に過ぎない。貴方達人間がこの扶桑国の支配者である以上、恨みを言うだけしか権利はない。行動しても、その時は狩られるだけ。呪いで弱体化してるから、嘗ての大戦みたいな激しいことはほとんど出来なくなつたわ」

伊予さんのやや恨みがましい言い分は非常にわかる。彼女達からしたら自分達を弱体化させ、明確な勝者と敗者に分けた原因だからだ。

そして、原作ゲームでは雄太郎が孤児院を経営する裏の理由は、他の妖魔一族の子を

匿い育てることと、内通者としての入り口として機能させること。それらの原因となった理由が呪いにより子を失った事だ。

天正帝の呪いは妖魔に効くだけでなく半妖にも効く。だが、半分は人間である以上、妖魔に比べたら半分以下の効力となる。それでも厄介なことには変わりないが、自身の能力が落ちるという意味ではかなり危険なことだろう。先ほどの少女たちのように、普段罹らない病に罹る恐れがあるからだ。

ちなみに、天正帝の呪いは死後千年経つても残るほどに非常に強力だが、実はそこから呪いに向かう方法があるのだ。まあ、この解呪方法がエロゲーらしい方法且つ凌辱エロゲーにしては逆方向に向いているのが厄介な点なのだがそれは割愛しよう。

だが、雄太郎からしたら恨み骨髄と言つていいだろう。都では半妖の狸の鍛冶師と偽っているが、本当は凶妖の一角なのである。なので、呪いによる弱体化を最も受けた存在であり、そして息子を呪いで死なせてしまい後悔しているのも理由だ。

確かその息子は、呪いで病に罹つて死んだ。側室の息子ではあったが、分け隔てなく子や同族を愛する雄太郎にとつて大事な息子なのは変わらない。息子や娘達が次々に死んでいった。

その正妻の子も、既に三人目である。それまでの兄弟達も呪いの弱体化からの病で次々に死んでいき、彼の産ませた子が文字通り手元に一人も残らなくなったので朝廷に

伺いを立てて許可を貰って作ったのだ。生まれたおかげで族滅が免れたのはいいが、正妻も呪いの影響を受けて産んだので産後の肥立ちが悪く死んでしまい、雄太郎の手に残ったのは生まれたばかりの子、そして半妖の孤児達となった。

正妻の子だけは絶対を守るが、この子が死んでしまつては一族の危機に瀕してしまふ。孤児に狸の一族もいるから族滅にはならない。だが、流石に自分の直系の子孫がいなくなる恐れがあるというのは非常に不安だ。呪いが強力でどれほど残るか、これから呪われ続けるのかもわからない。

だから、主人公である波羅を手籠めにして孕ませ一族復興の兆しとする。その他にも、他の妖魔と協力し、この孤児院を駆け込み寺のような扱いにして裏切り者の烙印を取り消してもらい、内通の入り口として機能している。他の妖魔を匿い始めて許されたことにより都の外にいる狸の同族も迫害されなくなった。

と、言うのが原作ゲームの設定だった。

だが、雄太郎という存在が無くそのポジションが伊予さんという女性になつてる上に、雄太郎と伊予さんの共通点が鍛冶師ということしかないから、二人の繋がりがわからない。もしかしたら、性転換した双子の妹達みたいに、この世界では伊予さんという

女性が雄太郎とイコールなのかもしれないが、そうだという確証が持てないのだ。

確証が持てないというのは、雄太郎が性転換の術で伊予さんになったのか、原作ゲームと違って逆転してるから最初から伊予さんだったのか、それとも雄太郎は既に死んで代わりに彼の妻が切り盛りしてるのか、ということである。

初めて彼女に出会った時、貞操逆転で男女も逆転してるから雄太郎が伊予さんなのだと思います。だが、単純に逆転してるだけなら雄太郎のような荒々しさが伊予さんからは微塵も感じられないのだ。

例えば僕の双子の妹達はそっくりそのまま男だったのが女になったって感じである。だから、こっちはそのまま転換したのだというのがわかるし名前からも一文字似てるからそうだと言える。性格や行動もゲームとほぼ同じだから同一人物が性転換したというのがわかる。

それに対して、雄太郎は女好きだし性欲強いし男の妖魔らしく荒々しいという感じだ。だから、逆転してるのならそのまま性格などもそっくりだと思いきや、伊予さんは非常におしとやかなおっとり系熟女という感じで似ても似つかないのだ。

番頭さんが雄太郎の息子に当たるかな？　と思っただが、他にも子狸の少女たちがたくさんいるから誰かわからない。その息子にも名前がついてたはずだし、親子揃って波羅を二穴攻めするスチル画があったほどだが、あまり影が薄かったせいかな、そして僕自身

が友人のようにはつきり覚えていないせいかな失念してしまった。

今この場で息子について聞いて、情報の確度を上げることは可能と言えば可能だ。だが、原作ゲーム通りなら息子を失った人に息子について聞くなんて気分がいいことではないだろうし気が引けるのでその手段は取れない。なので、ここからの会話で情報を引き出して雄太郎と伊予さんがイコールなのだという確度を上げていきたいなと思っていた。

そう思っていると、彼女から口を開いた。

「頼君、このような形になって申し訳ないんだけど私が貴方を無理やりとはいえ抱いたのは理由があるの。天正帝の呪いで、妖魔は私のみならず一族の存続が危うくなったわ。男が種無しになった上に呪いで弱体化してしまった。だから、私はこれからの一族の為に子を産まなければならぬ。故に、貴方を抱き子を孕みたいの」

抱いた理由を話してきた。話の内容は、大体原作ゲームと同じで呪いで一族が滅びかかっているからそれを防ぐために抱くというものだ。最も内容が男女逆転してるから自分が主人公みたいに言われていることに凄い違和感があるが……。オマケに抱きたいだけでなく孕みたいとか、長身爆乳巨尻糸目顔良美人女性にストレートに言われて、股間に血が集結してしまうがそこをなんとか霊力を送って抑えるようにする。

だが、これで気が引けるために聞けなかったことが聞ける。ここで聞かない手段はな

いので聞いてみる。

「ですが、この都に住まう半妖は子は一人のみまでと決まっています。貴方は子を産まないといけないと言いましたが、一人も残っていないのですか？」

「……………。いいえ、貴方も会った番頭が、翠が私の娘よ。残りの子は血の繋がりはない孤児よ」

ここで番頭さんの名前を初めて聞いた。ていうか、一番最初に息子に当たる部分かな？ と疑問に思ったのが当たりだったとは。となると、伊予さんが雄太郎とイコールな可能性が高まって来た。大体ゲーム内容と同じに近づいてきたからだ。最も、息子ではなく娘になってしまったるのが違うが。

「ならば、貴方の頼みを聞くことはできません。私は朝廷に仕える身です。逆らうことなどできません」

というか、ここではないと領くことは出来ない。僕は当主代行という身分な上に我が家は朝廷の家来という立場だ。御上の決定に逆らうことなんて、妹達や親戚のことを考えるとお家取壊し確定だし。

「ええ、貴方の立場ならそう言うしかないのはわかるわ。だけど抜け穴があるの」

そう言つて彼女の口から出た抜け穴とは、監視は既に形骸化しており、朝廷は半妖の孤児院の数などあまり気にしないこと。ちゃんと半妖の受け皿として機能すれば最低

限の支援もするので、孤児院の子が増えても問題ないのだと。事実、あの病に苦しむ子や赤子の半妖を引き取っても朝廷は大昔のように事細かに監査に來なかつたのだと言った。

まあ、ここらの内容も原作ゲームと同様だ。ここから、主人公が断るか受け入れるかの選択が出来る。受け入れたのなら高い金を払わずに武器作成が出来るが運が悪いと抱かれた波羅は当たって孕んでしまう。受け入れない場合はその逆で武器作成に高い金を払うことになるが孕む心配はなくなる。

立場は逆だし、いきなり最初に僕は流されて抱かれた点が違うところを除けば原作ゲームと一致してる。しかし、僕は交易品の金があるし何より孕ませるとか朝廷にバレたらどうなるかわからないし、無責任で怖いのもあるので受け入れる理由がない。

「抜け穴についてはわかりました、ですがそれでも受け入れるわけには行きません」

なので、それでも拒否した。

すると、伊予さんは表情を微塵も崩さずそのままだ。おかしい、原作ゲームなら雄太郎は大いに落胆するシーンがあった。ここまで一緒なら原作同様に落胆すると思ったのだが……………。

「そう、なら仕方ないわね。これを見てもらえるかしら？」

そう言ってちゃぶ台の上に置いてきたのは、水晶だ。だが、その水晶は掘り出された

ような雑な形ではなく、きちんと宝石のようにピラミッドの形に整えられている。それだけでなく、木彫りのブローチのような石座にはめ込まれており更にはその石座には紋様などが書かれてある。一見しただけでは木目だと思うが、僕は退魔師一族でそちらの勉強をしているので木目のように見える紋様だと看破した。

「というか、これはまさか——」

そう思っていると、ちゃぶ台の上に置いた水晶を伊予さんが指でコンコンと叩く。すると、水晶から上に向かって楕円形のような形で円の周りはぼやけているが中心あたりははっきりと見えるような、まるでSFチックのような映像が映し出される。

これが、原作ゲームでもあった記録水晶だ。この水晶を使って式神に持たせたり、隠しカメラのように設置したりして映像を記録し、偵察や不審者の発見に犯罪の解決などといった現代の監視カメラや偵察機のような真似事が出来る。

だが原作ゲームはエロゲー世界。故に、拷問や情事の記録をして脅したりすることもある。そう、今流れてる映像のように——

「伊予さん、貴方まさか——」

「頼君には悪いけど、私は狸の一族の長として一族を存続させる義務がある。だから、使える物は使っていくわ。この映像のようにな」

流れる映像は、風呂場での僕と伊予さんとの痴態が綺麗に映し出されていた。その映



像を見たことで、そして第三者視点から見るとまた違ったエロさを感じ取って僕は勃起しかかかってしまう。勃起自体はちやぶ台に隠れてわからないだろうが、僕が顔を真っ赤にしているのは隠せてないので伊予さんには赤面した僕の顔を思いつきりみられている。

いつの間にかこの映像を撮られていたのか、何故ここまで用意周到なのかわからないが、今それを考える暇はない。思わず、その水晶を取り破壊しようとしたがその前に素早い何かが水晶を奪った。式神の鳥だ。

その鳥は、両足で水晶を捕まえると格子窓に降り立つ。そしてそのままそこにじっと待機した。

鳥に対して術を放とうと印を結ぶが、伊予さんから声を掛けられる。

「貴方が術を放つより、あの鳥が出ていくほうが早いわよ？ あの鳥は、私の友人の下に行くようにしている。もし、あの映像が広まったらどうなるか……………」

「ど、どうなるっていうんですか？」

情事を撮影した映像の使い道などわかりきったことだ、だがそれでも震えながらも聞かしくない。伊予さんは、ニッコリとほほ笑みながら

「私の友人は公家と強いつながりがあつてね？ もしあの映像が公家の間に広まったら、貴方はそれを材料として犯されることになるわねえ？」

こ、これは原作ゲームでもあつたエロビデオ撮影脅迫！

それは、よくあるエロ本ネタやNTRネタレイプネタでも良くある王道的手法だ。情事を撮影した映像をネタにヒロインを犯しまくるという鉄板的手法。

だが、その手法は原作ゲームだと都のデブ貴族が、主人公のトイレシーンや妖魔に犯されたりしたのを撮影してネタにし脅迫するというシーンがあつた。雄太郎がそれをしたというシーンは一切なかつた。

僕という異物のせいとか、貞操と男女が逆転してるせいとか、思わぬ方向からのパンチを喰らつて思考停止してしまう。

衝撃で止まった僕に畳みかけるように伊予さんは口を開く

「貴方が私の色んな頼みを聞いてくれるのならば、あの水晶は貴方が壊していいわ。でも、聞いてくれないのならばあれは友人の下に行つて広まることでしょう。あれが広まったらどうなるかしらねえ……？」

あくどい笑みを浮かべながら言う伊予さんに、僕は何も言えなかつた。寧ろ、あれが広まったことを考えると僕が犯されることになるんだらうか？ そう考えると股間に血が集まりそうになるが、それ以上に僕がそのような目に遭つたら妹達に迷惑がかかるし、叔父上含めた家族にも迷惑がかかるだらう。何より、醜聞を広めたくない。そして、この状況を打破する方法が見当たらない。

だから僕は――

「……………頼みを聞けばいいんですか？」

——伊予さんの脅しに屈するほかなかった。

脅しに屈した僕を見た伊予さんは鷹揚に頷くと、指を鳴らして式神の鳥を呼び寄せる。式神の鳥は足に掴んだ水晶をちやぶ台の上に戻すと格子窓から飛んで行った。

その水晶を手に掴んだ僕は、手の中に火遁を宿して燃やす。靈力で燃やすため手は火傷をしないが、僕の心には火傷を負っていた。

「それで、頼みとは？」

やや嫌そうに聞く僕に、困った表情をしながらも伊予さんは言う。

「そんなに嫌そうな顔はしないで欲しいわ、まあ脅すのは悪いと思ってるけど貴方の望む武具作成をしてあげるのだから。本来ならばたとえ公家の頼みだろうと聞かないわよ。」

まだ、確定とは言えないが伊予さんが雄太郎だったとするならば、原作ゲームでも義理は尽くしたので一切作らないと宣言し公家などが大金積んでも首を縦に振らなかつたというほどだ。だからもしそれと同じならば彼女の言うことはその通りなのだろう。

それでも、脅迫してきたのだからいい顔をするわけがない。まあ、可愛い妹がレイプされる心配が一つ減つたのは嬉しいが、まだまだ油断できない上に僕がこうして抱かれることになる、これからどうなるかの不安もある。しかめ面をしながら返答する。

「好き好んで抱かれないわけじゃないですから………、頼みとはこれだけですか？」

「いいえ、それも一つだけであの子達のことよ」

「あの子って病に倒れてる子達ですか？ 僕は金を持っていますが、あの子達を治せるほどの薬を用意はできませんが」

抱かれる以外にあの子達について言ってきたので、あの子達を治療しろということなのだろうと思つて機先を制して先に言う。実際、境界線を越えてしまったのならあの子達を治すことなど、アレ以外見つからない。せいぜいが今伊予さん達がやつてるように延命治療くらいしかできないだろう。

だが、伊予さんは首を振つた。彼女の口から出た言葉に僕は驚愕した。

「いいえ、薬はいらないわ。ただ、あの子達を看取つて欲しいのよ」

二十五話 呪いで命運尽きた子を看取れと言われて平気でいられるやつおる？

看取つて欲しい。

そう言われて、一瞬何を言われたのかわからなかった。

いや、言葉の意味は理解しているが脳が言葉の内容を拒絶してしまった。時間を掛けてゆっくりと噛み砕いて漸く受け入れた。

つまり、あの子達はもうそろそろ死ぬのだと。

「看取れとはどういう意味ですか？」

それでも、その頼み事の理由を聞かなければならない。僕が看取らないといけない理由を。すると、伊予さんは話始める。

「私達半妖は、人間の男との関わり合いを持たないの。当然よね、被支配者であり被差別対象者なのだから。そして、男の数が大昔から比べて大分減っている現状だと男と出会えることがないのよ。山奥に住んでる妖魔なら猶更ね」

孤児院の子は被差別者であるので、外で遊ばせたら誘拐や暴力に晒されることは想像に難くない、だから安全のために孤児院の外にほとんど出さずにいる。そのおかげで孤

児達の安全は確保できているが、逆に出会いがないという。

妖魔も同様だ。半妖は半分だけ人権があるが妖魔は基本的にない。それこそ、妖魔の数を増やさないためにも人間の男はがちり守られている。唯一の例外が、朝廷が黙認している妖魔の町くらいだ。だが、あそこは人間側に利益を齎し、攻め入ると他の妖魔が共同して出張するという厄介さから表向きは討伐対象としつつ裏では流通を黙認しているといったくらいだ。そして、流通がある以上人の出入りがあり、そして人間の男も売られてきたりする。人間側から見ても役立たずになった男は使い道があるのか、思いのほか高値で買ってくれるそうだ。

要は、半妖も妖魔も異性との出会いが極端に限られてしまっているのだ。それもこれも、男子の出生率が年々下がって来ていることもあるし、妖魔も種の存続のため男を狩るも出会いがない慢性的な男日照りになってるからという二重の苦で喘いでいる。

異性との出会いがないまま死ぬのは余りにも無情無慈悲すぎる。だが、このような頼み事を聞いてくれる人なんてまずいない。そんなところに、僕がやって来た。そして、上手いこと脅迫材料を使って頼み込むことが出来た。無理やりだが、こうまでしないともうそろそろ命運尽きる子達の願いを叶えることが出来ない。だから外道と言われようがこのような手段を取り、僕に頼むことにした。

脅迫材料まで使って頼むにしては急すぎると思ったが、最後の願いを叶えるために急

いでいたというならば納得できる部分はあるにはある。最も、手際が良すぎるような気もするが。

「だから、僕に頼むと？」

「貴方にしか出来ないことなのよ」

簡単に言ってくれる。

「あの子達が、もうすぐ死ぬとわかって、尚僕にあの子達を看取れと？」

お前は何を言っているのかわかってるのか？ 目の前で死ぬのを看取れというのがどういう意味かわかっているのか？ 言外にそう言う意味を込めて強めに言った。伊予さんも、それをわかっている上で領き、その場で丁寧な土下座をした。

「どうか……どうか……伏してお願います……」

たった一言。だが、その声は震えていた。

これが、この世界に住む住人ならば聞くわけがないだろう。半妖の頼み事を、被差別且つ被支配者の頼みなど聞く価値もないと切り捨てるし場合によつては無礼だと打ち首されても文句は言えないほどの無茶な頼みだ。

だが、僕は別世界に住んでいた転生者でこの世界をゲームとして知っているし、成り立ちも完全ではないがある程度知っている。そして、転生者であるがゆえにこの世界の住人のような蟠りが無い。だから、この世界の住人ならば激怒して立ち上がり罵詈雑言

を吐きながら去るような頼み事であつても、僕はそこまで行くことがなかった。

はつきり言つて死ぬ子を看取れとかふざけるな！ と怒鳴りたくなる気持ちがないわけではない。目の前で子供が死ぬのを黙つて見ていただけなんて、いくら何でも辛すぎるからだ。だがしかし、こうして土下座してまで頼む親としての心もわかる。最後の晩餐のように、最後にいい思いをさせたいという親の気持ちが。

何より、妹達を可愛がつている僕からしたら小さい子が死にかかつているというのを知つて無碍に出来るほど冷徹になれなかつた。ただのお人好しな甘ちゃんなのかもしれないが。

命の炎が尽きそうになつてる子を看取るのだから正直言つて物凄く放り投げたい。でも、震える声で土下座してまで頼まれたしまつたら、僕にはもう怒鳴る気持ちも断る気持ちも消え失せた。

だが、彼女の覚悟を聞くために僕は尋ねた。

「貴方は僕を抱きたい上に子を看取れという、余りにも欲張りすぎです。どちらか片方を選べと言われたらどちらを取るんですか？」

「看取る方を選ぶわ。貴方を抱けなくてもいいから、どうかあの子達の願いを叶えて欲しいの。最後に男の人の腕に抱かれながら死ぬという願いを」

意地悪な質問に対してまさかの即答だった。



男の腕に抱かれながら死ぬ………、僕の前世の価値観ならば、愛する女の腕に抱かれながら死ぬ男は幸せだ。みたいな話を聞いたことがあるがそれが逆転したならこういうことなのだろうと呑気に考えてしまった。

だが、エロゲー世界なのにエロを差し置いて命運尽きかかる子の願いを優先する伊予さんに覚悟を見た僕は――

「はあ………、看取る前にあの子達にもう一度会わせてください」

――溜息一つ吐き、そう彼女にお願いをした。

改めて再度隔離部屋に入る。

先ほどは急に入ったが、今回は手ぬぐいを口に巻いて簡易マスク代わりにする。そして、部屋は閉め切っていて暗かったからわからなかったのも、灯りの術式を結んで札に流し込み、それを六枚浮かせて六角形の形にして照明代わりにする。さながら、六角形の形をした蛍光灯バルブのようなものになった。おかげで、暗かった部屋が蠟燭よりも明るい部屋になる。

「灯りをつけてくれてありがとうね」

「これくらいならお安い御用ですよ」

退魔師である僕からすれば札は普通に持つてるものだ。だが消耗品だし退魔師が使う奴なのでタダではない。補充に金がかかるが、そこは交易品で稼いでいるから大したことではない。

だが、孤児院を経営している伊予さんからは高価なものになる。朝廷からの支援はあるが潤沢ではないし札など術式関係のものは基本的に送られない。当然だ、それを使つて反乱されたら困るからだ。攻撃に転用できるものは支援せず、食料など換金出来ないものしか送られない。一応反物も送られるが、こちらは換金できるような上等な奴ではなく低品質で下等なものだ。反物は特に孤児達の服やらに仕立てたり、裁断して治療患者の包帯に転用したりするので換金する余裕がないとも言えるが。

時間経過で効果が無くなるが一時的な照明手段として有用だ。空中に灯り玉を浮かす術もあるが高度だし靈力消費も高いので僕はこうして道具を使つて体力靈力消費を抑えてケチつてる。妹達みたいに強くないからね、仕方ないね。

明るくなった部屋には、暗くて人数がわからなかったが四人の少女達がいた。四人の子にはそれぞれ特徴があり、頭に狐耳や角が生えてる子、背中から黒い片翼が生えてる子、下半身が蛇のような子がいた。だが、個別に認識できる場所はそれくらいで、残りは包帯でぐるぐる巻きにされている。肌が見える場所がほとんどないし、顔すらも包帯で巻かれてるほどだ。

伊予さんと翠さんが飲ませた薬が効いていたのかそれぞれ布団で寝ていたが、狐耳の子がその大きな狐耳をピクンと動かした。

「ううん……どちらさままでしようか？」

と声を上げててもそもそと動く。すると、他の三人の子も起きた。包帯の輪郭でしかわからないが、整った顔立ちなのはわかる。だが、それすらも包帯で顔が見えない状態になつてるので慰めにもならない。

「こんにちは、伊予さんのお願いで来ました。綾絶頼と言います。短い間だけど宜しくね」

丁寧にあいさつをする。僕の方が立場も身分も上だが、元が平民精神な僕は余程の場面じゃない限り少し下手且つ丁寧なあいさつをするようにしている。これが波羅や双子に煽だったならば、敬語すら使わず威圧的な挨拶をするだろう。まあ、それが当然なのだ。だが平民からの精神が引き継がれてる僕はそういうのが苦手なのだ。更には、命運尽きかけてる子に対して威圧的なことをしたくないし、した結果文字通りショックで命運尽きてしまった………なんてことが起きたら後味悪すぎるからだ。

僕の声を聴いて、狐耳の子は先ほどより激しく耳を動かす。そして驚きの声を出した。

「お、お、お………、男の人………ですか？ 痛たた………」

激しく狐耳を動かしたせいとか、痛がりながらもその子がそう声を上げると、残りの三人の少女達も驚いた声を出した。

「男……?! げほっ」

「うう……嘘じゃないよね? ケホケホ」

「夢なら……覚めないでくれ……うう……」

本当に男がやって来たことがそんなに驚くほどの事なのかと僕は一瞬思ったが、先ほどの伊予さんの説明と、この世界が原作ゲームと違って貞操男女逆転してるから、価値観も違うからこんなな驚くんだなと納得する。……………納得はするが未だに慣れない、それに、まだまだ確認しなければならぬことがたくさんあることだし……。

「無理じゃなくていいよ、そのまま寝てて結構。挨拶も不要だよ」

起き上がって挨拶をしようとしたので、それを無理やり制する。ただでさえ病人で酷いことになってるのに鞭うつ真似なんて出来るはずもない。僕がそういうと、それに従い布団に戻る少女達。

そのそばに座って更に話しかける。

「伊予さんから君達の体について聞きました。呪いでこんな事になってるんだね」

「は、はいそうです……………。妖魔にかかる呪いで、私達はこうして病気や怪我に悩まされていきます……………」

狐耳の子が一番手元にいたので受け答える。

「でも、私達は苦しいですが、悲しいとは思いません。何故なら、私達が呪いを受けたおかげで同胞が助かるのですから……」

「えっ？ それはどういうこと？」

初めて聞く情報に、尋ねるも彼女はゴホゴホと咳き込みながらも話そうとするのを慌ててやめさせる。そして、傍にいた伊予さんに視線を送ると彼女は神妙な顔をしながらも答えてくれた。

「私達妖魔は呪いを受けてるのは知ってるわね？ その呪いは無限に続く物じゃない。呪いを沢山受けた者は同胞の呪いを軽減させることがわかったの。それだけじゃなく、力も得ることも出来るわ。そして沢山呪いを受けた子は祝福の子と呼ばれるようになった」

伊予さんが言うには、呪いはデメリットばかりを感じるように思うが受けた者は命の炎が消えるのが速まる代わりに力を得ることが出来る。基本的に妖魔は生まれた時から各地の種族が住まう故郷にある龍脈を通じて呪われる。長年の研究により、呪いは少しずつではあるが段々と減っているのが判明している。その呪いをわざと一身に受け、多大な力を得てその力で同胞に貢献するものは祝福の子と呼ばれるようになった。

妖魔は人の畏れによって存在する。そこから人と同じように食事をして生きるのだ

が、その食事は生の食事でありそして人を食うのも食事であった。そこから、人を知り人の文化を知り人を学ぶにつれて人の作るモノを吸収し始め独自の集落を築き上げそれぞれの種族の文化を作り上げていった。

そこまではよかったのだが、妖魔は捕食者であるのと自分達の存在の維持の為に人を支配しようとしたが、敗北し立場が逆転したのが人妖大戦である。そこからは急落の一度途をたどってここまでできた。

弱体化の結果人を食えることがしにくくなったので、人と同じように食文化を発展させる必要がある。そのためにも自給自足体制を整えなければならない。整えたいが、嘗ては山を砕き川を作るほどの力は呪いにより発揮出来なくなつた。

だからこそ、一族の中から祝福の子として捧げられた子を使う。祝福の子は呪われながらも多大な力で故郷を開発し、治水をし、土地の実りを豊かにし、呪いで苦しみ生き糧を得にくくなった同胞たちが人間と同様に狩猟農耕で自給自足が出来生きられるようにしてきた。更には一族の呪いを沢山受けるので同胞が浴びる呪いが減り生き残れる、そして祝福の子は皆から感謝されながら死ぬ。それを長年繰り返したおかげで、あの人妖大戦から今日まで生き延びることができた。

と、伊予さんから説明を受けた。

………こんな原作ゲームにあつたつけ？ いや、なかつたはずだ。

原作ゲームだと呪いは単に妖魔の弱体化と子孫を残すのに影響があつたという舞台設定みたいなものだった。なので、このような話は初耳である。呪いが段々と目減りしていつていつていくというのだ。そうになると、妖魔側は完璧とは言い難いが呪いを克服していつていつていくということでは？ そのことを伊予さんに言うと、彼女は頷き

「ええ、妖魔側も座して死を待つわけには行かないから、色々と考えたのよ。まだ呪いは残ったままだけど、大昔の時代に比べたら凡そ四分の一は減らすことが出来たみたいよ」

それでも完璧に消すことは出来ないし、人妖大戦から千年で四分の一なら呪いを消すまであと三千年である。母を訪ねて三千里どころか、呪いを消すまで三千年だ。それまでに妖魔は一匹残らず滅び人間のみが住まう世界になるだろうことは想像に難くない。「そのための祝福の子ですか……………」

自分たちが生き残るために、生まれた子に呪いを押し付け同胞が受ける呪いの負担を減らし、そしてその力で同胞の礎にする。その犠牲が無駄にならぬように、呪われた子と呼んで忌み嫌うことを絶対にせず祝福の子と呼んで感謝を捧げる。実際にその命を捧げて奉仕してもらうから感謝するわけだが、自分たちは感謝をしているというポーズをすることで命尽きる前に反乱を起こさないようにするためだろう。こうして狐耳の子の口から悲しくないという言葉が出てるだけでも、そこら辺の教育が行き届いている

のがわかるほどだ。

誠に以てカミソリ一枚の隙が無いほどに無駄がない、それこそ吐き気を催すほどに。だがしかし、吐き気を催すと思つたものの、彼女たちは妖魔だ。そして、天正帝の妻をNTRした結果修羅が生まれて呪われたのだからある意味自業自得である。

……そう、自業自得なのだ。同情する必要はない。このまま突き放してみなかつたことにしてもいいし、放つておいてもいい。見捨てた場合は僕が抱かれることになるだろうが、呪いで苦しむ少女達の最後を看取るといふ心的外傷を負うよりマシだろう。

だが、苦しみながらもその身を同胞に捧げんとする姿を見て、見捨てることなんてできなかつた。例え、妖魔に手を貸すという人類を裏切ることになろうとも、命尽きるこの子達に最後の温情として優しくしてあげてもいいかもしれないと思つたほどに少女達の献身に打たれた。教育によって教え込まれたという点もあるだろうが、それでも命を捧げようとする忠の心に突き動かされたと言つてもいい。

僕は静かに一番近くにいた狐耳の子に近づき、その包帯に巻かれた手を取る。いきなり触られたことにビクツとして怯えたが、僕が優しく握っているのがわかるとおずおずと握り返す。

「温かい……」

「(くん)としか出来なくて(ごめんね)」



僕の手を握る少女にそう言うことしか出来ない。だが、それで満足しているのか少女は小さく首を振る。

「いいえ、とても嬉しいです……。死ぬ前に男性に看取られるなんて……。貴方のお顔を見れないのが残念ですが……」

呪いで四人の少女達は、肌が荒地のように鱗割れ血が流れ、目も見えないのが大体共通している。そこから、片腕が無かったり足が無かったり片翼しかなかったりと片端の状態になっている。耳は聞こえるのが幸いだろうか、僕の声は聞こえるようだ。

「あの、私の手も握ってください……」

「私も……」

「お願いします……」

「いいよ、いくらでも握ってあげるよ」

他の三人の少女達が言ってきたので、それぞれ手を握る。僕の手は彼女達の血で汚れる。だが、それを不愉快とは思わなかった。怒りもしなかった。怒りが沸くのは寧ろ、目の前で命尽きる少女達に何もできない己の無力さだ。せめて何か出来ることはないかと思う位には同情してしまった。

狐耳の少女はおおずと申し訳なさそうに言う。

「すいません、私達の血で貴方の手を汚したかもしれません。人間の男性に不愉快な思

いをさせて、姉妹を代表して謝罪します……コホッ」

目は見えないが、己の体が包帯でぐるぐる巻きにされるほど血と膿で汚れているのは理解している。そんな彼女たちの手をそれぞれ握ったのだから汚れたというのは想像に難くなく、そう思ったからこそ申し訳なさそうに少女は謝罪した。妖魔という共通点意外全く違う種族の四人なのに、姉妹と言うところを見ると同じ祝福の子として苦しみを分かち合う間柄なのか、彼女達の繋がりを理解できてしまう。

「気にしないでいいよ。汚れたのは確かだけど、君たちのことを考えたらこの程度、汚れた内に入らないよ。それに、洗えばいいだけさ」

彼女達のことを考えると、強く言うことなんて出来ないので努めて優しく言う。実際洗えばいいだけなのも事実だ。これが他の人間ならば呪われた者の血を触れたら呪われる！と悍ましく思うだろうし、その危険もないわけじゃない。だが、この呪いは妖魔に効く物なので人間の僕は大丈夫だろうと緩く考えていたのでそう返答した。天正帝の呪いは妖魔に効き弱体化は即効性とゲーム内説明や資料集でも書いてあった、もし僕にも効果があるのなら最初に部屋に入った時点でアウトである。にもかかわらずこうして血に直接触れても何も問題がないので、多少は怖かったがやはり大丈夫だと認識できると、こうやって触れることが出来る。

その返答を聞いて、ほうと一息付き体をゆつくりと弛緩させて布団に横たわる少女

達。狐耳の子だけでなく、他の子達も僕を不愉快にさせたのではないかと心配していたようだった。

「嬉しいです……そこまで言ってくれる優しい男性がいるなんて……死ぬ前の願いが叶います……ゲホゲホッ」

苦しみながらも心底嬉しそうに言う彼女達、口元も笑顔を示す緩やかな弧を描いているが、僕は逆向きの弧を描いていた。まだ時間があるとはいえ、死を看取るのがこんなにもつらい物なのかと。

「お礼なら僕だけじゃなく伊予さんに言つてね。伊予さんが土下座するほどにお願いしたから、その心意気を汲んだだけだよ」

「はい、伊予お婆様にも厚く礼を言いますね……ゴホッ」

これ以上話すことはないのです、傍にいる伊予さんに視線をやる。伊予さんも意図が伝わったのか短くうなずくと立ち上がり襖に掛けた結界を解除し開ける。結界は間違つて孤児達が入らないように、伊予さんか翠さんじゃないと解除できないようになっていたので、襖の開け閉めも僕は出来ず彼女にやつてもらうしかない。

そのまま退出する前に、天井に浮かせた蛍光灯パッパッを停止させ、札を六枚回収すると伊予さんにどうぞと渡す。ありがとうと短く札を言い伊予さんは受け取る、効力が切れるまでこれで照明代わりにどうぞという意図だったがほとんど何も言わずに伝わってくれ

たようだ。ツーカーで伝わるのはすごい楽だなと思うと同時に、もしかして彼女と交尾したからツーカーで伝わるようになったのかなって考えると素直に楽だなと思つていいのかどうか微妙である。

部屋から退出し、もうここでの要件は全部終わらせたので、伊予さんにお暇することを書いて孤児院の玄関へと案内してもらおう。僕は歩きながら伊予さんに尋ねる。

「あの子達はいつまで？」

「あと三週間か四週間………凡そ長くて一月ほどね」

「そうですか……」

提示された少女達の命日は、奇しくも僕ら一行が都に滞在する期間である一月とほぼ同様だった。僕が都から我が家に戻る間際辺りに看取ることになるかもしれない。ただ帝や公家との謁見や会見など諸々の公務が終わつてないのに余計な仕事を抱え込んでしまった感が否めないが、僕が彼女に抱かれて脅されたのだから仕方ない。妹達がいちたのなら防げたのかもしれないが、そうすると万太の条件が達成できず桃代姉さんの治療薬が貰えなくなるから連れてくる手段はとれなかった。

……今更ながらどうも裏があると感じ始めた。ちゃんと商売事なら金を要求するのが商人万太だ。そんな彼が、僕の依頼した『建木の雫』というLRアイテムを指定された人物に単身で会うという条件で引き受けた。原作ゲームでも、そして万太が出てくる他作品でも確かこういうのは一度もなかったはずだ。どのような物品でも取り寄せ依頼は必ず金を払う。ゲームの都合といえればそれまでだが、それを彼はしなかった。

桃代姉さんへの治療薬でLRアイテムの取り寄せ依頼を受けてくれたことで舞い上がったが、あの場面を色々思い返すとゲーム中であんな脅す場面はなかった。最初、『建木の雫』という激レアアイテムの名前を出したから警戒したのかと思ったが、ゲームプレイで『建木の雫』と同等かそれ以上のレアを依頼しても金銭のやり取りだけだった。あの強烈な威圧を喰らったからNGワードなのかと怯えてしまったが、良く考えたらあの威圧も何のためにやったのかの疑問が出てくる。

それに、万太は基本的に利益が出ることじゃないと動かない。商人モードは当然だが神モードでもだ。

彼が取り寄せ依頼を受ける条件として、僕にメモ紙に書かれた人物に単身で会いに行くことだとあったが、そうなると万太にとっての利益とはなんだ？ 金も受け取らず人物に会って交流を深めるだけで万太にとって何が利益になるんだろうか？

そして、あのメモ紙に書かれたのは場所とそこにいる人物と書いてあつて名前は書いてなかった。刑部の鍛冶場という場所にいる人物と仲良くなれ、という風にメモ紙には複数の場所とその人物という風に書かれてある。名前は書かれてない。そして、僕は刑部の鍛冶場ということで雄太郎がいるのだろうと原作ゲーム知識で思い込んでいた。

だが、実際は似ているが別人物且つ女性であつた。そして、貞操男女逆転しているから彼女に抱かれてしまった。抱かれた結果、こちらの依頼を受けてくれるし孤児院の子も送つてくれるようになったのはいいが、こうして繋がりが出来ることが万太にとつての利益なのだろうか？ そして、刑部の鍛冶場を筆頭にメモ紙に書かれてある場所は、僕がこの世界と原作ゲームがどれほど共通しているかを確認する場所とほぼ一緒である。そう考えると………、万太はこちらの考えを見透かしている？ メモ紙にも僕がこの世界と価値観が違うつてことを知った上で注意書きと変装道具が一緒に入つていたくらいだし。

一応こちらとしても、今から行く場所で確認すると同時に、万太の条件をクリアできるわけだから問題はない。……ないのだが、どうも上手く乗せられてるような気がしなくもない。実際商人モードもそうだが神モードでも色々条件出してプレイヤーを言いくるめたりNPCと取引する際も上手い具合に乗せたりと商人ならではの強かさや神モードでの神視点で噛み合つて会社随一の強キャラだからしょうがない面もあるの

だが。

仮に、上手く乗せられたとしてもその通りに動くしかない現状がもどかしい。事実一つ目の交流するという条件はクリアした………はずだし。抱かれてしまうのは予想外だった……。

そうこう考えているうちに孤児院の玄関へと着いた。翠さんが既にいる、僕を見送るためだろうか。

「頼の旦那、祝福の子を看取る条件を受け入れてくれてまず礼を言わせて欲しくてヤンス」

そう言うと、彼女は深々と頭を下げる。それと同時に、どたぶんという擬音が聞こえそうなくらいの巨乳がたわわに動き、そこから見事な巨大I字の谷間が見えて股間に血流が集中してくる。慌てて霊力を送って鎮めるも、疑問が出た。翠さんは傍に居なかったのに、なぜ話の内容を知っているのか？ もしかして――

「念話……ですか？」

「ええ、退魔師だから知っているでしょうけど、短い距離なら会話出来るのよ」

条件があるけどね、と僕の出した答えに伊予さんは付け加える。

退魔師を含めた術師は基本的には式神を通じて連絡を行う。式神通信は現代社会で言うスマホなどの通信機代わりのようなものだ。持ち運びが簡単だし式神を鳥などの

小動物にすれば手元のない人に飛ばせて通信も行える。

だが、式神を使わない通信もある、それが念話だ。式神のようなわかりやすいものは、破壊されると通信不能になるのは言うまでもない。念話は文字通り頭で念じて送るので式神が無くてでも通話できるメリットがある。

しかし、極端に距離が短いという欠点がある。長距離になると念が薄れて会話が聞き取れなくなるのだ。更には、念は盗聴されやすい。精神系に特化した妖魔や退魔師などは、相手の精神を支配するのだが、念話などの念も拾うことが出来るので注意が必要だ。なので、長距離通信は式神、短距離通信は念話という風に術師は分けて使っている。

伊予さんが使えるのも凶妖という強い妖魔だからだろう。呪いで弱体化してるとはいえ、近距離ならば、孤児院の範囲ならば、そして翠さんという娘ならばそれなりの強さもあるので使えるから通信ができると見た方がいいだろう。

……となると、僕が客間で祝福の子についての説明諸々や、隔離部屋でのやり取りも伊予さんを通して知らされたということだろうか？ 筒抜けになってると考えるとそれはそれで少し恥ずかしい気がする。確認のために聞いてみた所。

「あの……もしかして全部聞いてました？」

「はい、母ちゃんから念話で全部聞かされたでヤンス」

そう言うのと、彼女の横に伊予さんが並び立ち、二人揃って背筋を伸ばす。そして二人



が口を開く。

「あつしらの妹達を看取つてもらおう約束、女として妹達も最上級の冥途の土産になるでござんす。貴方様に深くお礼を申すでヤンス」

「ですが貴き身分である貴方様に、賤しき身分の子を看取らせるという約束を押し付けたこと、私めが貴方様を抱き脅迫したこと、全ての罪は私と翠が負います。貴方様が子を看取つた後、私達の首を差し出す所存です。ですが孤児達に罪はありません、どうか私達の首だけでお許しください」

二人揃つてお礼と反省の言葉を述べその場で深々と頭を下げる。それと同時に、どたぷんという擬音が聞こえそうなくらいの巨乳がたわわに動き、そこから見事な巨大I字の谷間が見えて股間に血流が集中してくる。今度は二つの爆乳が、大きさに差があれど凄まじく柔らかさそうなので、翠さんの時より倍の靈力を送つて鎮める。その二つの内片方の爆乳は揉んだり吸つたりしたんだよな……つて余計なことを考えてしまったため再度勃起しかかる。莫迦たれ、何やつとるねん自分と己を内心で叱咤しながら平静を装う。

お礼を言うのはまだいいが、まさか二人揃つて首を出すとは思わなかった。だが、言つてる内容はわかる。貴族の男を無理やり抱いたんだから死罪間違いなしだろう。

そして、翠さんまで負うのは一族連座ということだ。翠さんは伊予さんの娘だから、親子揃って首を出すということは、高名な狸の一族の中でも名を馳せた刑部狸族が族滅することに他ならない。そこまでしてでも反省し、そして自分たちの首だけで孤児達は守りたいという子を守る親を見た。血は繋がらず妖魔と半妖という薄い繋がりであったとしても守ろうとするその意思は尊く見える。

彼女達は本当にそう心に決めて言っているし首を差し出す覚悟も感じ取れた。だが、看取る約束をしながら首を斬るみたいなRTA走者のような真似は僕には出来ない。何より、孤児達から恨まれるようなことはしたくないし、あの子達にはまだまだ親が、保護者が必要だ。

「謝罪は受け取ります、その上で許しましょう。但し、今後二度とあのような真似はしないでください」

こちらは無理やり抱かれたが、その結果彼女へ武器作成の依頼を通しやすくなったのだ。わざわざその利点を潰すかのような処刑など出来ようはずもない。考えた結果、こう言うことで仕舞いとする。我ながら甘いと思うが、これ以外の選択肢が思いつかない。抱かれたことで情が沸いてしまったのもあるが、

「寛大なお心に心の底から」

「感謝するでヤンス」

いい連携で二人が礼を言う。若干コントみたいだが突っ込むのは野暮だろう。草履を履いて、玄関を出たら、再度二人がこちらに向かつて頭を下げる。それに対して会釈をしつつも

「では伊予さん、孤児院の子は僕らが都を出る時までを送る子を決めてください」  
「わかりました」

そう言つて、孤児院を後にした。

自分達の夫となる少年の背中を見送りつつ、声が聞こえないあたりになると二人は話始める。

「母ちゃんの言つた通りでヤンス。あの旦那はとても甘いつて」

「ええ、そうね。まさか私達妖魔に対して嫌悪感を抱かないのは驚いたわ」

自分達妖魔に抱かれるなんて、この世界の男ならその場で舌を噛み切つて死ぬくらいは恥辱だ。何故ならば、天正帝の教育典範によりそのように教え込まれたからだ。内容は至つて当たり前で、男が種を出すと沢山の女を孕ませる。人間ならばいいが、妖魔の数を増やすことは人類に敵対することに他ならぬ。故に、男が人間の女に無理やり抱かれるのは百歩譲つて良いが妖魔に抱かれるのは最大級の恥と心得よ。

公家や平民だけでなく、農民までにすらお触れを出して徹底し、妖魔の数を漸減してきた天正帝。己の命を捧げた呪いも相俟って、今では妖魔の数を数えるのが早いほどにまで減ってしまった。

「本来ならば、私に無理やり抱かれた時点で舌を噛み切ってもおかしくなかったわ」  
「でも、母ちゃんに抱かれて嫌がるどころか腰を自ら振るなんて……………信じられないでヤンス」

「ええ、彼こそが私達の求めた漢ね」

「一族復興の…………、いや、妖魔全体のでヤンスね」  
娘の相槌に母は頷く。

無論、この場合の妖魔全体とは大妖以上の物を指す。伊予や翠のような知識ある存在は最低でも中妖以上だ。孤児院の半妖の子達が中妖程度であり、そこから大人になれば大妖になるとみていい。知識とは力であり、彼女らが振るう妖力は一部を除いて莫迦が振るっても大したことになるからだ。

その成長した大妖……………所謂大人たちがどんどん減り、下である子供達も生まれなくなれば後は滅びるだけだ。残る妖魔は小妖程度となり、そうなるともはや人間の脅威ではなくなる。霊力を持たぬ農民ならば小妖一匹に農具を持った農民が五人で漸く對抗できる。こうなると、未だ脅威が残る様に見える。

だが、天正帝は己の持つ知識を一部を除いて積極的に公開し、技術力の底上げをしたのだ。そうして、火縄銃すら官給品として大量生産され兵士で長筒、上級武士で短筒を持つほどに普及し、更には裕福な村では農民すら獵師として長筒を持ち狩りをしているほどだ。そして、狩りは獣が中心だったが今では小妖すら積極的に狩っていき、剥いで素材にして生活に役立てたり役所に持つていき報奨金を頂くほどになっている。

このまま進めば、もはや妖魔は熊などの害獣程度にまでなってしまう。それを防ぐために、人間に媚びるように協力して妖魔の町を作り上げ、有用な物品を売り出してなんとか公家や有力者との繋がりを持ち、そこから数百年以上かけて妖魔への認識を少しずつ亀の歩みではあるが変えていった。

人間の妖魔への認識だけでなく、その逆もまた然りである。

見下していた人間がいなければ自分たちが存在できないというのは天正帝によって骨の髄まで教え込まされた。奴隷市場で買った人間の雄を調べつくし、行動を勉強したもの、やはり教育の力というのは強い。千年もひたすら同じことを繰り返せば三つ子の魂百までのように染みつくものである。それをどうにかこうにか少しづつ引き剥がしているし、妖魔の呪いも減らす努力をしているが、知識衆の計算でもってしてもやはり我等が滅ぶのが追い付くという無情なる結果が出た。

もはや、見下していた存在に浅ましく足を舐めても良いほどまでに追い詰められてい

る。これは、各有力な種族で集まった会議でも決まったほどだ。一部の高慢ちきで最盛期は人間の踊り食いすらしした凶妖ですら、性転換し人間の雄に土下座して種乞いして種族を維持しなければならぬほどである。

そんな中、伊予の下へ手紙が来た。他ならぬ朝廷にいる友からである。

途中政敵に捕まり見られても問題ない様に、その手紙にはたった一言。「日の出」とのみ記されていた。

たった一言、だが数百年以上生きて自分にはよくわかる。男が見つかったのだと。だが、やはり数百年以上もの長い時を待ったというのもあり、半信半疑に近かった。

その疑問を無くしたのが、行商人万太という男である。少年がやって来る少し前にやって来て、商談だと言ってきた。

彼の存在を見た時、その肉体美は惚れてしまうほどだがそれ以上に一目で只ならぬ存在だと伊予は看破した。そして、商談があるとのこととで客間で人払いをし、わざわざ結界まで張った上で彼は自身の正体を明かし、その場で恐れ戦きながら土下座する。自分達を始末しに来たのかと思ひ、自分の命はいいから孤児達は見逃してくれと伊予は命乞いした。

万太は手を振りそれが目的ではなく寧ろ手助けしに来たと言う。そして、各種盗撮道

具を渡し、これから来る少年に対してあれこれ理由をつけて抱けとまで言った。

怪しさ満点である。しかも商売人なのに、その少年の情報に対する報酬どころか道具代すら要らぬとまで言ったほどだ。伊予も鍛冶場と孤児院を経営する身なので、商人が金を要らないとまでいうのはあり得ないと思っっている。

それに関して、天上の存在に言うのが憚られるも凶妖としての矜持を發揮し堂々と尋ねた。すると、少年と関係を持つことが自身に対する報酬と言った、更には朝廷にいる友人の名前を、潜伏しての名ではなく真名を出してきた。その名は限られた者しか知らないの、それを出されると信じる以外の道がなかった。

その結果、彼の言う通りに少年が来た。女装したのは別に珍しくもない。堂々と男だと言うのは周りに護衛が守っていることが多い。单身の場合男は襲われないために女装するのが普通だ。

客間にあげて話を聞けば、唯の少年かと思いきや四方守護の一角であるというから驚きである。その少年を万太は抱けと言ったが、これほどまでの高貴な身分を抱くなんて本当に出来るのかどうか不安だった、下手すると自分と娘の首だけで済まず孤児院を取り潰しすらあり得るほどだ。

だが、少年は万太の情報通り非常に色事に弱く、あつさりと快樂墮ちした。これには

驚いたが、何より驚いたのが少年が自ら腰を振るほどに積極的だったことだ。

万太の情報通り、そして指示された通り盜撮道具で脅し、更には祝福の子の男の腕で死ぬという最後の願いを聞き届けてくれた。正直言つて、ここまで上手く話が進むことに未だに信じられぬ思いである。まるで御伽噺のような無駄のない進み方だ。

何より驚いたのは、彼は自分の真名を知っていた。だから、万太の情報を信じる事が出来た。

そう、嘗て自身が男だった時の名前を。

これは、娘である翠には言っていないことだ。

彼女は、紛れもない自分の娘ではあるが自身が生んだわけではない。呪いによって種無しになった後、自身は凶妖故の頑強さのため病に罹らずそのまま過ごしていたが、息子達はそうではなく全て呪いからの病で死んでしまった。

自身の子がいなくなってしまうので、決まりに則つて天正帝に土下座して懇願した。自身の族滅を避けるために、一時的に呪いを解除してくれと。当初天正帝は「子がいなくなつたらと言つたが、血が薄いが親戚や縁戚がいるだろう」と言つて拒否したが、貴族など周囲が説得したのが功を奏した。他ならぬ鍛冶師としての腕前でひたすら腕



を奮い道具を作り公家や武家達に貢献したからこそ、周囲も族滅は勿体ない、まだまだ利用すべきだと声を上げて説得してくれた。

無論、その説得は自身を最大限に有効活用するためである。だがしかし、族滅を避けられるならばいくらでも道具になつてやる。そう思つてひたすら毎日土下座しお百度参りの真似事すらしした。最終的には、自身の取り決めたことだからか、天正帝も渋々と認めてくれたので、漸く子を作れた。

子を作れたのは良いが、天正帝の呪いの為に男は作れなかつた。当然だ、男を産んでも種無しが決まつているからである。息子達は呪いからの病で死んだのだが、「病は氣から」という言葉がある様に自身の男としての機能が働かなくなり、それを氣に病んで病に罹り死んでしまった。雄太郎自身は数百年以上生きてきた精神性によつて耐えられたが、子供達はそうではなかつたのだ。

そして、妖術を使つて性別を女に固定し妻に産ませたのが翠である。そしてその後、天正帝の呪いを再度かけられたのだが、二度目はないと言われたのだ。更には妻が産後の肥立ちが悪く死んでしまった。

それまで、自分自身は人間側に下つたのもあり安寧とした生活を過ごしていたが、種の存続は他の妖魔と同じく喫緊の課題であるとは思つてもみなかつた。沢山息子がいたから大丈夫だろうと思つていたが、息子達は雄太郎のように男の機能が、子孫を作る

ことができないということに耐えられるほどの精神が強くなかったのだ。

翠まで死んでしまったら、もう自身の血族が遠い縁戚しかいなくなる。それを防ぐためにはどうするか……？ そう考えた結果、雄太郎は他の妖魔と同じく性転換したのである。そして、愛娘の翠が生まれて直ぐに女になり、翠が物心つく頃には既に女としての生活が板についた。

後は、男としての生活も名も捨て、女として再走したが思いのほか女の体というのは男とは違っていた。何より、男の放精と違う快樂に伊予はすっかりハマってしまった。

雄太郎の時は、放精すれば疲れて再起動に時間がかかる。沢山子供を作った刑部狸の長であるが、やはり無限にあるわけではない。

だが、伊予と生まれ変わった姿だと、放精のような疲労はあるものの回数制限が一切ない。更には、天正帝の呪いで男としての性欲が薄れてしまっていたのが、女になって復活したのである。それはもう、失われた性欲を取り戻すかのようにひたすら自慰にふけた。結界を張って三日に一回、酷いと毎日は張型でふけているほどである。

こんなにハマるほどだから、男が欲しくなった。既に数百年も経ったら忌々しくも頭の上からない恐ろしい天正帝は既に死んでいるし、当時の大臣らや貴族も代替わりしている。更には友人の働きかけのおかげで雄太郎から伊予へと性転換した際、刑部の鍛冶場の主人の雄太郎は死んだ、今いるのは全くの別人の半妖の伊予である。と情報操作を

してくれたおかげで彼女は雄太郎という過去を完全に捨て去ることに成功した。

そして、朝廷にいる友人と連絡を取り、種の存続について話し合いをした。友人も同じ危機感を抱いており、既に他の種族と連絡を取り合っているという。自分も参加したかったが、自分は人間に下った裏切り者。ここからどうすれば同胞に許してもらえるか、それについて友人に相談したら、鍛冶場を孤児院と併用して経営すればいいとの助言を受けた。すぐさま行動に移し、朝廷に伺ったところあっさり許可が出た。

朝廷側からしても、昔と比べて大分増えた半妖の扱いに苦労していた。そんなところに、半妖の鍛冶師として朝廷に貢献してきた伊予が孤児院を経営するという。半妖の扱いは半妖がしやすかろう、そう役人たちに言われてすんなり決まったのだ。

そして、孤児院として受け入れる孤児の中に、他種族の妖魔の子をこっそり引き受ける。そして、その子を孤児院で育てる。育った後にまた里に戻して繋がりを作る。これを何度か繰り返し、妖魔の駆け込み寺兼内通者としての働きをした結果裏切り者の烙印を消すことができ、凶妖会議に出席できた。

ある程度孤児院の経営も軌道に乗る裏切り者の烙印も消え順風満帆になったために、色町で男を探しに行ったが、結果は無残なものだった。それと同時に、天正帝の教育がここまで広まり、妖魔もそれに連なる半妖も嫌われていると知り、女になったからと

いつて大丈夫ではないということに気づいたのだ。天正帝の頃と違って、女の妖魔が当たり前になり男を攫うようになった。それを人間は防ぎ、教育で教え込み、男は妖魔に近づいてはならぬというのが常識となった。だから色町でもあんなに嫌われたのかと納得した。雄太郎の頃もあまり好かれなかったがあの時以上の嫌われっぷりである。

人間の男からすれば、男娼からすれば当然だろう。半妖が客として来ているとしても、半妖を孕ませてしまつては問題だ。防ぐ方法はあるにはあるが、その避妊術を半妖が解除しない保証がない。更には、天正帝の呪いから数百年以上経つて男女比率が段々と変わり、女の性欲が右肩上がりで強くなるのに反比例するように男は性欲が弱くなつていった。これは致し方無いだろう、当初は女性の数が増えて一人の男に複数の女性が群がり、男は喜んだ。だがその喜びも、複数の女性からの求めに耐え切れなくなり最終的には不能になつてしまふ。それを何回も、何年も、果ては何百年も続いてしまつた結果、男は本能的に自身の身を守るために性欲が薄く、そして女性に対して恐怖感を抱いていくようになったのだ。もし、雄太郎が伊予になつたのがあと百年早かつたのなら妊娠する機会があつたが時すでに遅し。伊予が色町に繰り出す頃には、男は女に対して忌避感を持つのが常識になつてしまつたのである。

だが、男娼である以上自身が忌避感を抱いても仕事の為に抱かねばならない。そのために、張型や潤滑液ローションなどの道具などで満足してもらつたり、張型帯ベニスバンドで女性の相手をする

のが普通だ。だが、当然そのようなもので伊予が満足できるはずもなく、多少はやつてもらったがすぐに不満になり二度と色町に行かなくなった。

なので、ひたすら男日照りで悶々と過ごしていたのだ。翠からも苦言を呈されるほどに自慰に耽るほどに男が欲しかった。雄太郎という、男だった記憶はほとんど薄れ、ほぼ完全に伊予という女になっていた。

そう過ごしている中で、万太という行商人がやつて来て、その情報通りに綾絶頼がやつて来て、そして伊予として初めての交尾であった。色町で張型帯ベニスバンドで数回相手してもらったから完全な初めてではないが、それを除いて真正面から交尾しあったと但し書きをつけるなら頼が初めての男になる。

しかも、護謨を使った避妊具である「今度産無コンドーム」すら無しの生腔内射精である。初めての男、初めての生交尾、そして初めての生腔内射精。何から何まで初めてでありながらも、新鮮で素晴らしかった。思い出すだけで、胎の中の熱が再燃する。あの熱い子種をまた発射されたいと思うし、何より頼は美少年だ。美しい者を抱くというのは、男の時でも女になってもいい気分がする。

そして、今まで自慰で我慢し、色町でやる気のない張型帯ベニスバンドで相手をしてもらったが、女として生きているはずなのに生活に色がつかず灰色の生活であった。雄太郎として生

きていた時は、複数の妻を抱き子を産ませ男として充実していたが、呪いで種無しになつたので仕方なく女になつたが、女として熱い交尾も出来ず、子を産むこともなく悶々と過ごす灰色の生活。

そんなところにやって来た美少年、こちらに對して嫌悪感も抱かず、自身の体に欲情し、複数回射精できる上に生腔内射精までしてもらつた。挙句の果てには、彼から腰を振つて来る始末。あの腰振りに、自身の嘗ての男だつた姿をみた。そして、それを受けた自分は漸く女として生きているという実感が沸いた。あの後、本能的にこの少年が自身の夫になる男だと認識してしまった。

「んっ、ふう……………♡」

思い出したら、それだけで達してしまつた。翠がそれに気づいたが顔を顰めるどころか羨ましい表情をする。

「母ちゃん、ずるいでヤンス。あつしも旦那を抱きたいでヤンスよお……………でも……………」  
母に言い募る途中で尻すぼみになる。

理由は、抱くのと看取るとどちらか選べと言われた時に前者ではなく後者を選んだからだろう。無論、翠としても死に行く妹達が生腕に抱かれるという最上級の死に様を選べるならそちらがいい。だがしかし、本能として男を抱きたい子を産みたいという気持ちが強く、理解はしても納得してない状態であつた。

そんな娘のことを理解し、伊予は口を開く。

「大丈夫よ、彼は優しいし押しに弱いから。私とあなたのこの無駄に大きい胸で挟めば  
一気に落ちるわよ」

「うっほお♡そいつあ楽しみでヤンス♪ まさか無駄にでかくて邪魔だったこの胸が役に立つ時が来るなんて思いもしなかったでヤンス♡」

翠にはまだ話さないが、友人からの情報によれば彼は催眠に弱いかもしれないという不確定情報がある。もしその辺もはつきりしたのなら、確実に彼を抱けるし子を孕めるだろう。そう考えると、再度股間が濡れてきた。

実に楽しみという風に二人は話しながらも、孤児院に戻る。その背中は半妖として差別され悲しい気分にいるものではなく、これからの未来に思いを馳せる女としての姿があった。

「うっ?! なんか悪寒が………もう冬になったのかな………」

頼は悪寒を感じながらも、すっかり日が落ちて暗くなりかけているので宿屋である蓬萊亭に向かって歩みを少し早めていく。彼に女難がまだまだ降り注ぐのを知るのは天

のみであることを彼は知らない。そう、今宿屋に帰っている状態でまた問題に巻き込まれることなど彼は知らない。

「や、やめて下さい!!」

「うっへっへ、いいじゃねえか兄ちゃん、あたいらと一緒に楽しいことしようぜえ？」  
「待てい!!」

今まさに、複数の女性に襲われそうになっている少年を助けようと、頼は首を突っ込んでいた。



## 二十六話 フラグはボウリングのピンみたく全て取つて いいもんじやないんだぞって話

「うゝちよつと冷えてきたなあ」

今、一等宿屋に向かって小走りしている僕は、ごく普通の少年。

強いて違うところを上げるとすれば、何の因果かゲーム世界に転生してしまった上に北方守護つてちよつと偉いところの当主代行つてどこかナ——。

名前は綾絶頼。

そんな僕は小走りしてる最中に、視界の端に青い髪の毛を肩甲骨まで伸ばした男の子を見た。

うおつ、いい男……………。

男の僕から見てもイケメンである。

遠目からでもスツキリした顔立ちに片眼鏡をかけている。キリつとした目つきも相俟つて、インテリイケメンというのがよくわかる。更には流れるようなサラサラした青い長髪が目立ち、風に流れているのを見るだけでもサラサラヘアーなのが見てわかり手触りが非常によさそうだ。だが、身長は目測で僕と同じくらいの165cmと低めだか

ら、年齢は僕と同じくらいかもしれない。単にこの世界の男性の平均身長がこれくらいなので、もしかしたら年上なのかもしれないが。というか、この世界の女性がデカすぎんだろ：：つてくらいに巨女巨乳巨尻巨腿ばかりだつてもあるが。

いやまあ、僕もエロゲー世界に転生してしまった今では前世の平凡童貞顔に比べて整った顔立ちになったと鏡を見て思うがそれでもやはり隣の芝生は青く見えると言う奴か、自分以外の男性の方がかつこよく思ってしまうのだ。単に日本人特有の自己評価が低いだけかもしれない。妹達も桃代姉さんも僕のことをかつこいとか可愛いとか言ってくれるのは嬉しいが、前世の価値観を持つてるせいでおべっかな？ と少しだけ不安に思ってしまうのだ。女性歴が童貞Ⅱ年齢で全く経験なかったからそういう評価を素直に受け取るのも怖いというのも原因だが……。

話が逸れた、自分の事などどうでもいい。

その青髪少年はスタスタと手に持つ本の束を大事に抱えながら歩いていたところ、破落戸に絡まれた。破落戸は山賊のような襤褸を纏った女性達だ、筋肉はそこそこあるしおっぱいが大きくてダブついたぼろい服からは巨乳だけでなく乳首までもが見えてしまう。ちよつとエッチだった。顔はモブといった特徴のない顔だが、その顔は青髪イケメンさんを前にして下卑た笑みを浮かべていた。

その女性達に絡まれ話しかけられた青髪少年は、見てわかるような嫌がる顔と素振り

をする。その反応を更に面白がつて囃し立てて絡まる破落戸。少年は耐えられなくなったのか、来た道を反転して逃げる。すると、破落戸達もそれをゆつくりと追いかける。

その追いかけてつこを周りの住人達は心配そうに見ていた、かくいう僕もその一人だ。その追いかけてつこの中、どこからか建物の角から仲間と思われる破落戸が現れ道を塞ぎ、そこから青髪少年はあろうことか路地裏に逃げ込んでしまった。破落戸達もゆつくりと追いかけていたのを路地裏に入り込んだのを確認した瞬間走って追いかけた。

周りの住人達はそれを遠巻きに見るだけだ。当然だ、破落戸は強そうな女性達だったし柄が悪い。積極的に関わろうとする人間はいないだろう。

それに、周りを見渡すと男性もいるにはいるがきちんと傍には女性が一人乃至複数人で困っている。後、中には歩き方がやや硬い女性がいるが、その人は今の僕みたいに変装してる男性だった。僕と同じく変装してる男性は一人だが、こちらは変装が効いてるのか周りも女性だと思ってるようで意識を向けない。周りの女性は、たまにいるわかりやすい男性を目で追う。

貞操逆転してる世界だというのがわかると、男性を目で追うというのも、僕の前世で男性が美人を目で追うのと同じことなのだろう。同様に、周りの女性達も青髪少年の姿を視線で追いかけるも、その後ろから破落戸がやって来てるのがわかると目を逸らす。

そして、誰もがあの青髪少年のその後の展開を予想しているようで、やや悲観的な表情をするも関わりあいたくないのが強いのか衛兵に通報しようという行動もしない。

これは集団心理の「傍観者効果」が働いているのもある。

とても恐ろしい心理効果だ。近場で悲劇が起きた時、誰も衛兵に通報しないのだ。理由は簡単で「自分以外の誰かが通報するだろう」「自分以外の誰かが助けに行くだろう」「自分以外の誰かがどうにかするだろう」皆が皆そう思つて、誰も！ 行動しないのである!!

「都の検非違使は優秀じゃ……。帝のお膝元ということとで治安には一層力を入れており、人や物の物流を維持して金の巡りを良くするためにも、治安は必要不可欠。故に、衛兵に通報すれば半刻以内には現場に駆け付けるじやろう。退魔師も衛兵に混じっているから尚優秀且つ速度も速いんじや。その衛兵が全く来ない……。何かがあつたに違いないのう……。」「一体何が……」

どこからともなく現れたお婆さんのやたら詳しい説明に、付き添いの女性が困惑した声を出しているが、その二人さえも！ 衛兵に通報しないのである!!

その心理効果が働いた結果、哀れな少年が路地裏で強姦にあい、心に傷を負つたまま

生きるか、絶望して死ぬか、果ては放たれた種が実を結ぶ結果となるか、それらのいずれかになりました世界は廻っていくのだろう。変わらない世界のよくある光景の一つだ。その光景が増えることは、誰もその少年を助けようとしなから必然的と言えよう。

その青髪少年の姿が気になった、僕を除いて。

本屋で前から注文していた本がようやく届いたとの連絡が入り、女装せず幼馴染の子も連れて行かずに買いに行ったことを少年は今後悔してる。嬉しさのあまりそのままの格好で行った結果が、慣れた道だしすぐに行つてすぐに帰るだけだから安全だろうと思つた結果がこれだ、後悔先に立たずとはよく言つたものだ。彼は逃げるために走つて路地裏に逃げ込んだことを失敗だと悟るのは目の前に立ちふさがる女郎を見て理解した。

「へっへっへ、こんな暗いところに坊ちゃんが一人でやつてきたら危ないぞお？」

ニヤニヤとした笑みを浮かべながら道を塞いでいる。そして、後ろから先ほど声を掛けてきた破落戸達が追いついてきた。どうやら、目の前の大柄な女が後ろの破落戸達の

女郎頭らしい。

「男は一人で出歩くものじゃないぜえ？　じゃないと、危ない連中が襲うんだからよお？」

「もしかしたら、坊ちゃんは襲われるかもしれないから、あたしらが家まで送ってやろうかあ？」

女郎頭の声に合わせて、後ろの破落戸達も下卑た笑い声を上げる。危ない連中が襲うなど自分達が宣うことが実に白々しい、その家まで送るといふ言葉が文面通りではないことは連中の態度で嫌でも理解できる。どこかに連れ込んで少年を強姦するつもりだろう。

もし、少年が目の前道の道を塞ぐ一人の女郎頭に対して、手に持っている本の束を投げつけて駆け抜ければ脱出の機会があった。だが、ようやく来た本ということ少年はそのような行動がとれなかった。その結果がこれである。現実是非情だ、怯えてしまう彼に対し女郎頭が手を伸ばそうとしたその時――

「待ていッッッ!!!!」

女性のような男のような中世的な声、その怒鳴るような声が辺りに響き、少年に手を伸ばそうとした女郎達は思わず周りを見渡す。すると、女郎の一人が驚いたような上

擦った声を上げた。

「あ、あそこにあります!!」

夕暮れ時が過ぎて夜の帳が降りかかり、月が顔を出し始めた。その美しく月光を浴びて家屋の屋根の上に立つ人影が一人。女郎達がその存在を確認し一斉に目を向け、嫵られそうになった少年もその存在に目を向けた。

謎の人物は静かに口を開く。

「嫌がる相手を弄び、同意無しに性交に奔る者……人其れを……強姦と言う……」

「だ、誰だっ?!!」

女郎頭の叫びに対し――

「貴様らに名乗る名前はないッツツ!!」

――其の謎の人物はきつぱりと拒絶し、屋根から飛び上がる。

その後、地面に落ちる前に一回転し、右拳と右膝を同時に叩きつけるような着地をした結果、轟音を立てて地面が少々陥没した。それだけで力があると言うのを見せつけたことにより、破落戸達も謎の人物が只者ではないと理解し少々怯える。

謎の人物は、その後ゆっくりと立ち上がり、その姿を破落戸と少年に見せる。服装は

ありふれた町民の服だが、顔を頭巾で覆い隠し、首元には藍色の襟巻が巻かれてあり月光に照らされた幾何学模様美しい。胸元は慎ましやかに膨らんでいるから女性だろうことは誰の目にも明らかだ。

ありふれた町民服で頭巾と襟巻を巻いて顔を隠す変人が、危機的状况にやって来た状況は可笑しさがあるが、足元は陥没した地面なので唯の町民ではないことは先ほどの着地劇で思い知らされている。

その覆面女性は大仰に拳闘のような構えをした。まるで、歌舞伎役者の見え切りのようだ。その構えは、仏閣に飾ってあった金剛力士像のような構えだなど知識のある少年は思い出し、その存在の格好良さに思わず心が震えてしまった。

恐らくその覆面女性は胸元が膨らんでいるから女性であろうと言うのに、この危機的状况にやって来て、歌舞伎のような見え切りを見せたことで、少年は生理的な女嫌いなはずなのに、女性に憧れを抱いてしまいそうだった。

「なんだあ？ 格好つけやがってよお、お前も女だろ？ ならこの坊ちゃんが美味しい存在ってのはわかるはずだろお？ あたいらのこれからの事にケチつけず一緒に楽しもうぜえ？ 今なら仲間に入れてやるぞお？」

相手も自分達と同じ女だと思つた破落戸達の一人が大きく声を出しながら誘う。当然だ、男がこのような状況で助けに来ることはない。男が出来るのは衛兵に通報するこ



とが精々だ。黽られそうになっている少年は退魔師であった。なので、術を使って危険を切り開けばいいだろうと思うが、都での安易な術の使用は御法度である。危機的状況且つならば、ある程度の情状酌量の余地はあるが、それでも裁きは受けるのだ。もし許されるような存在がいるとするなら、四方守護の各筆頭家の者たちや、朝廷の公家などの貴族だろう。

少年は退魔師ではあるが身分は平民である。否、元を正せば貴族の血筋ではあるが没落貴族故に身分も平民に落とされてしまっているのだ。故に、少年は術を使うと後に拙いことになりそうだと思い、中々攻撃的な術は使えなかった。仮に使って、死人が出なくても怪我人を出し、破落戸達が衛兵に泣きつけば没落貴族である自分はどうなることか……。他の貴族のように守ってくれないだろうし、術を使えば御爺様に迷惑がかかる、少年はそう思つてなるべく使わないようにしていた。

その結果がこのように囲まれてることで後悔しているわけだが、少年はこの覆面女性が女性ならば、この誘いに乗るかもしれない。そういう恐怖があった。

護衛をしていない男が女に襲われるのは普通だ、都では戸籍謄本を作っているので出生率低下と比率低下に伴い、出産奨励もしており男一人に複数の女がつくのが当たり前となつている。大事な男は囲んで守るようにし、貴重な子種を分け合い出産するように。そういう御触書が出されているが、それを破落戸達が悪用した結果一人の男を複数

で襲い強姦する事件が多発した。無論、捕縛されたりしたが、破落戸達は悪びれもせずその男の妻だと言う。

いけしやあしやあと宣うも、襲つたのは事実だし男の被害の証言と慟られた痕により罰が下され労役が課せられたのだが、その子種で年内に出産し、出産したことを鑑みて労役が減輕されたりした。中には男子を産んだ破落戸もおり、その者は貴重な男子を出産したことによる特例として釈放された。

当然ながら、男子出産による朝廷からの報奨は健全な平民に適用される。このような強姦した破落戸に適用すべきかどうか朝廷で激論が起きたが、結局は男子という実を取ることにした。後日、その男子を産んだ破落戸は行方不明となり、破落戸が産んだ男子は朝廷が運営を任せている孤児院に送られたと聞くが真相は定かではない。

なので、少年は破落戸の誘いに覆面女性が乗ってしまつたらどうしよう……、そういう不安があつたのだが――

「俺らと一緒はこの坊ちゃんをなぶ――ぶべらっ!!」

――破落戸が下卑た声で誘つたその瞬間、特徴的な悲鳴を声を上げながら破落戸が吹っ飛んだ。覆面女性が一瞬で懐に入り込み、掌底で顔を殴りつけたのだ。

「外道ども、貴様ら悪党共に御仏の慈悲は無用! 成敗してくれるっ!!」

「こいつう! やつちまえええ!!」

そして、覆面女性による蹂躪が始まった。

彼女の動きは素早く、破落戸共では目で追うのがやつとだ。更には、素手で破落戸の棍棒を払い、いなし、態勢を崩したところに腹部や首元に一撃を見舞い昏倒させる。更には、錆びた刀すらも素手で弾いた。少年は退魔師である故にわかる、あれは体を靈力で纏うことで堅くしているのだと。御爺様から聞いた退魔師の基本的な防御術の一つだ。錆びているとはいえ、破落戸の刀を弾くほどであるから、覆面女性の靈力が高いというのはわかる。低かったら鋼のように硬くできないからだ。

そして、どんだん数を減らしていったところ、女郎頭が少年の背中に回り腕を掴む。そして、首に刀を向けた。

「う、動くんじゃないか！ こいつがどうなってもいいのか?！」

少年はその動きに見惚れて逃げているのを忘れてしまったことを後悔した。このままでは、自分が人質に取られたことで覆面女性の動きが封じられるだろう。少年は同性愛者であるし、女性に生理的嫌悪を持つほど嫌っている。だが、それでも世話になる幼馴染や、目の前の助けてくれた覆面女性に対して嫌悪を抱くほどではなく例外と心の戸棚くらいは作っている。そんな覆面女性に対して、足手纏いになってしまつて申し訳ないと思つてしまった。すると、覆面女性は最後の破落戸を倒すと、素早く印を結んで手をこちらに向けた。手を開いて握つてそれで恰好をつける形となる。

「なんだあ？ 格好つけか？ この坊ちゃんが傷ついても——」

「やってみろ」

「は？」

「やってみろと言ったんだ」

女郎頭の脅しに屈さず寧ろやってみろと促す。その言葉を聞いて少年は本来ならば絶望し、再度女性に対して嫌悪を抱く、筈であった。

だがしかし、先ほどの印と手の動きで、彼女が何をしたのかを理解したから絶望を抱かず希望を抱くほどだった。そしてその格好が、女郎頭の言うような格好つけではないことも理解した。何故ならば見えているから。

「そんなに言うならやってやらあ!!」

そう言つて、刀を動かして少年の首を切ろうとした。本来ならば貴重な男子を傷つけるのは重罪だ、殺したのなら極刑が待っているだろう。それくらい女郎頭も理解してるし、少し傷つけるだけだった。だが、同じ女として相手より自分が劣っているという屈辱が、脅しているのに相手は屈さない姿を見せた雄姿が、ここまで虚仮にされたことによる激怒が女郎頭に冷静さを失わせ、少年の首を斬るところまで行ってしまった。だが

「う、動かねえ……?! う、腕が……何故だ?!」

女郎頭の腕は一切動かない。当然だ、なぜならば、先ほど覆面女性がやった動きは霊糸を投げつけたからだ。そして、覆面女性が腕を動かすとゆっくりと拘束していた腕が徐々に開き、少年は脱出できたので急いで離れて覆面女性の下に駆け寄った。

霊糸は可視と不可視の二種類に大別できる。前者はほぼ全ての退魔師が使えると言つていいだろう、何故ならば妖魔を補殺するための基本のきという奴だからだ。モグリの術者すら使えるほどだし、これを使って動きを止めるといふのは大事な事なので、真つ先にこれが出来るか否か、捕縛が上手いか否かで術者の力量を見極められると言つていい。そして、可視である故に色んな色に発光して縛り付ける。その発光色は術者の力量並びに得意属性によつて色が変わるといふ。例えば、赤土焰のような火属性特化ならば赤色に発光などという風になる。そして、可視化してる故に霊力のない平民ですら見れるほどだ。

対して、不可視の霊糸は不意打ちなどに使われる。文字通りの不可視化なので、霊力で凝視しなければ見れない。そして術者の力量が高ければ高いほど隠蔽率が高くなる。少年は退魔師であるがゆえに、凝視してその霊糸を見ることが出来た。白く輝く発光する様はとて美しく、それでいて女郎頭の腕をがっちり縛つて固めている。先ほどの印と動き、そしてポーズは女郎頭の腕に向けて不可視の霊糸を投げつけ、絡ませ、縛り付ける形にしたからあのような動きになったのだ。それを少年は見えて理解したため、

覆面女性が脅しに屈さなかったことに絶望しなかった。

「邪ツツ!! チェリアアアアアアツツ!!」

「うわああああ!! ——がはっ!!」

その霊糸を覆面女性は大きく上に向かって振りかぶり、女郎頭を空中へと送る。そこから、地面に向けて思い切り叩きつけた。肺の中の空気が無くなり、背中から叩きつけられた衝撃が強かったのか、そのまま女郎頭は痛みに耐えきれなくなり気絶した。

大柄な女性を軽々と持ち上げて叩きつけるなど、上位の退魔師でないと出来ないだろう。その動きで、覆面女性がやはり只者ではないと改めて少年は認識した。

辺りの破落戸共が倒れ、静寂が訪れる。覆面女性は残心を解くと、少年に振り向いた。「もう大丈夫ですよ、怪我はありませんか?」

男のように聞こえる中性的な声、耳障りが非常に良く心地よい。彼女が自分を助けてくれたのだから猶更だ。

だが——

「あの、助けてくださってありがとうございます。ですが、女性相手にお礼は何もできません。体を売ることとはできません、ごめんなさい」

——助けてくれた女性に対して、非常に無礼な言葉を言う、言ってしまう。

本来ならば言いたくない、それはそうだ、彼女は自身の恩人だ。だが、少年は女性が

嫌いである。男を性の道具としか見ておらず、種を貰ってとつとと孕むことしか考えてない野獣たちを幾人も見てきた。そして、そいつらはこぞつて手助けをする見返りに体を求めようとする。

だから、恩人に対して無礼なことは承知の上で体売ることはできないときっぱりと言いつ張った。幾ら自身が女性嫌いの同性愛者としても、恩人に対して恩を仇で返すようなことはしたくはないが、それでも出来ないことは出来ないと言わないと体に触れられる。だから最初に言った。

その女性は目を見開いた。そして、納得したように頷く。

目を見開いたことで少年は彼女が驚いたことは理解できる、だが納得したように頷いたのはわからなかった。

すると、覆面女性は覆面を剥いだ、端正な顔立ちが現れる。だが、その顔に違和感を抱いた。少年からしたら、その覆面女性の素顔は男のように見えた、いや、見えすぎるからだ。

そう疑問に思っている少年を差し置いて、覆面女性は胸元に手を入れる。その胸を曝け出すのか?! と少年は嫌そうな顔をして身構えたが、彼女の手握られていたのは男が変装で使う詰め物だった。

まさか、そんな………覆面女性と思っていた人はもしかして

「大丈夫ですよ、僕は男ですから」

彼女もとい彼の性別告白に、女性だと思つてた人が男性だったことに、その男性が少年の好みの美形であつたことに、少年は不覚にも勃起してしまい、思わず体ごと後ろを向いてしまった。

青髪美少年を助けたら、体ごと背けられた。まあ、いきなり自分の胸辺りを出すなんてこと痴女だろうししょうがないだろう。

にしても、本当に危機一髪だった。あのまま放置してたら犯されていたかもしれない。同じ男として見過ごせないし、この世界が貞操逆転で男が性欲が強い女性に忌避感を抱いてる価値観ならば、逆レイプされたら立ち直れないだろう。

伊予さんの鍛冶場を出た時、僕の服はあそこに置いて行つた。洗うためと乾かすためというのもあるが、彼女達から替えの服を貰つたしそれが上等な奴なのと、町民のよくある小袖服なので動きやすいのだ。僕が着ていた服は売つていいとも言つた、あれで食費などの足になるといいだろう。一応上等な布だから結構な金子になるはずだ。



そして、着替える際には女装したので、少年を助ける時も助けた後も全部女性として見られていたことだろう。実際破落戸共が僕を女と見て誘ったわけだし、少年も僕のことを女と見ていたわけだし。女装が上手くいったのか、万太のくれたグッズが便利なのか、多分両方かな。

ただ、女性として見られていたせいか、助けた相手に礼を言われたが体で払うのを真っ先に拒否された事に、最初は失礼だと思ったがすぐに納得した。

価値観が逆転してるし性欲強いし複数の女性が男を囲っているために、こういうことにかこつけて体で要求するということが多発しているのだろう。青髪少年も、僕が見惚れるくらいの美形だからそのようなことなど良く起こっているのだろう。だから、失礼ながらも助けた相手に真っ先に礼と拒絶の言葉を放つたのだと理解した。

……………いやあ、こんな美少年が真っ先にそういうことをいうくらいだから相当ひどいことになってるんだろうなって思いました。セクハラなんて当たり前に起こっているのだと思わせるほどだ、だから先ほど周辺の町民の中にいた男を複数の女性が囲っているのも、そういう輩から防ぐためというのもあるのだろう。そうなると、この美少年が一人で女装もせずに移動したのはまさに鴨葱だったわけだ。本当に危機一髪だったところを僕は救ったということだ。同じ男として、なんだかちよっぴりいい気分である。

良いことをして気分がいいのもあるが、後は僕の好きな漫画やアニメなどのカッコイイ漢達の真似をして気分がノリに乗ってしまった。些か調子に乗り過ぎた所もあったかもしれないが、破落戸共は成敗したし、少年の貞操も守れたし言うことなしである。強いて言うならば一つだけ注意点があるくらいだが、それは問題ないだろう。落ち着いたのか、少年がこちらに体を向けた。そして、先ほどの無礼について頭を下げ謝罪しながら話始めた。

「貴方は男性だったのですね、失礼しました。見事な女装でした。ですが、急いでこの場から離れましょう。音で住人や衛兵が寄つて来るでしょうし、何より先ほど貴方は霊系を使いました。そのことを破落戸共が衛兵に言うとは拙いことになりかねません」

そう、不可視化を施したが霊系を使ったので、そのことで破落戸共が騒ぐと厄介なことになるのが注意点だ。町や村では基本的に術の行使が治安維持のために禁止されている。例外が認められた退魔師や衛兵などだ。大きな町ですら、貴族が不用意に使うとお叱りを受けるほど。それが都ならば言わずもがなである。だが、僕はその点は大丈夫だと言える。

「大丈夫ですよ、私は綾絶家の者です。これをご覧ください」  
「えっ?! こ、これは——間違いなく本物ですね……」

そう言つて、首に巻いていた襟巻と、家紋の入った銭入れを見せる。それを見た少年

は目を見開き絶句する。

襟巻は桃代姉さんが作ってくれたものだ。幾何学模様は術が織り込まれているのか、首に巻くだけで全身がポツカポカである。更には、両端から少し離れた場所に我が家の家紋が入っている。そして、僕の出した小銭入れにも家紋が入っている。少年は文学少年みたいだし、僕の家は北方守護総代つて有名どころだから知ってるかな〜と思っていましたがどうやら絶句したところを見る限り知っていたようだ。よかった、これで何これ知らんとか言われたらどうしようかと思った。

「ですので、多少の術は行使しましたが火急の事にて使用したと言いつつ、相手も我が家に対してそうそう強気な態度は取れないと思います」

「な、成程……………」

驚きながらもうんうんと頷き理解しようだ。

「では、これにて失礼します。道中気を付けて——」

「お、お待ちください！ 貴方はこれからどうするのですか？」

「え？ いや、蓬萊亭に向かおうと思ひまして、宿を借りてるわけですし」

「で、でしたら我が家に泊つていきませんか?! もう暗くなつてますし、ここからだとは分時間がかかりますよ？」

少年の言う通り、ここから蓬萊亭まで距離はある。遅くなつても貸し切りだから文句

は言われないうが、それでも風呂や飯の時間が遅くなるのは確かだし、そうすると宿屋の従業員に迷惑かけるかもしれない。自分が貸し切って偉い家だからそういうことを考えないでいい筈なのだが、前世が平凡サラリーマンだからか、従業員に迷惑かけるってことを余りしたくないとついつい考えてしまうのだ。

だが、見ず知らずの少年の家に泊ると言うのも――

「申し遅れました。私は、綾小路薫と申します。先ほど助けていただいたこと、そして無礼なことを言ってしまった事のお詫びに、是非とも我が家でお礼をしたいのです」

――そう言って遅れた自己紹介をしてきたのだが、爆弾発言だった。綾小路薫と言えば、原作ゲームでも主人公に関わりのある人間だ。念のために確認のため、ある人物の名前を出してみる。

「綾小路……………？　もしかして、貴方には祖父がいませんか？　確か、道玄というお方だったような……………」

「おや、御爺様をご存知でしたか」

当たり前！

思わぬ人物との巡り合わせに宝くじが当たったような感覚を覚えてしまう。彼と彼のお爺さんは、原作ゲームでも有能な退魔師として使えるユニットで結構強い。特にお爺さんのほうは、ある研究のことで有名且つエロゲー故のエロシートの為に役立つ部分

もある。だが、どちらも有能ではあるが主人公である波羅をバチクソに犯すシーンもあるので、ある意味では要注意人物であった。

そんな人物との巡り合わせに、ある種の運命を感じてしまう。だが、それ以上に彼らがどれほどの者か見極めなければならぬ。何故ならば、貞操が逆転したからと言って、それが全ての人物に適用されるわけではないからだ。特に、爺さんの道玄の方は滅茶苦茶性欲強くて波羅を修行という名目で犯しまくる人物でもある。エッチな修行でひたすら犯すシーンが沢山あるから多くのプレイヤーがお世話になったほどだ。だが、犯されはするものの道玄は一流の術師であるので、そこから師事を受けるのはステータスや新しい術を覚えるのに非常に役に立つ。特に術回り関係を一通り彼から学ぶことが出来ると言うのはとても大きいメリットだ。

そして、道玄の孫にあたる薫。彼もゲーム中に出てきた人物である。青髪なんてエロゲー世界だからか、そこらの平民でも多種多様な髪色をしているので、名前を言われて漸く思い出した。道玄に比べて影が薄いのが、彼も結構強い部類のキャラだったはず。だが、彼はルートによっては男色家だったような……。確か、祖父である道玄がひたすら女を抱くのでそれを見て反面教師した結果、お淑やかな女性がいいと言う風になり、それで最初主人公である波羅に目を向けるが波羅はエロゲー故にひたすら犯される。だが、道玄に師事する際一切抱かれないルートが存在し、その場合低速だがちゃんと技術

はアップすると同時に、薫の嗜好も変化するようになっていく。抱かれない場合は薫は道玄の誘いを断る貞淑な女性と見做し、波羅に惚れて結婚ルートすら用意されてるほどだ。だがしかし、術技能を一気に高めるべく抱かれまくると技能は急激に上昇するが、それを見た薫は貞淑な女性などいないと思ひ、発想を逆転して男がいいんじゃないか？ という風になってしまふのだ。

尚、その後は男色故に波羅と関わり合いは中立より下となり、協力関係も結ばなくなるデメリットがある。ある程度は協力してくれるが、味方ユニットとしては使えなくなってしまう。敵対勢力と対峙するとき有能な退魔師が減るので地味に痛い、そこは祖父の道玄を骨の髄までしゃぶりつくして馬車馬のように働かせましようとはRTA走者の話だ。実際問題道玄のほうが上位互換だし抱かれて孕ませられるデメリットがあるが、それを補うほどに有用なユニットだ。だが、結果的には両方使えるようなルートを通ると、孫と祖父の専用合体技などがあり、最終的には楽になるという攻略情報がある。RTAを目指すか、最終的に楽になる王道プレイを目指すかはプレイヤーの判断に委ねられる形だ。

なので、目の前の少年が本当に綾小路薫と言うのなら、普通か男色かを調べなければならぬ。男色ならば、僕が適当に仲良くなつて協力関係を結んでもらうようにしてもらえばいいかなと思うし、普通ならばうちの妹達の旦那候補に入るからだ。三姉妹で

もいいし、焰でもいい。綾小路家は平民だが祖父である道玄のやらかしで没落してしまつた。だが、血筋という意味では由緒ある貴族なので問題ない。もし薫が男色で仲良くなつた場合は……、まあ掘られないように気をつけなければいいだけか。立場上僕の方が貴族なわけだから、下手に言い寄つて来たなら無礼だと突き放すことも可能だし。余りそういうことはしたくないが、自身の貞操を守るためなら強気に出ることも重要だろう。

ならば、二人の人物を見極めるためにも、彼の提案に乗つた方がいいだろう。僕の妹を守るためにも、薫さんは兎も角エロジジイとプレイヤー達から渾名で呼ばれる道玄についてはしっかりと見極めなければならぬ。虎穴に入らずんば虎子を得ずというし、二人の為人を調べるためにもここは彼の好意に甘えておこう。

「わかりました、では綾小路さんのご厚意に甘えさせていただきます」  
「ありがとうございます！ ではこちらです！」

そう言つて、目に見えて喜ぶのに不思議に思つたが、とりあえず彼についていくことにし、彼の家で一泊泊まることにした。途中、式神で妹達に連絡を入れたから大丈夫だろう。

尚、その後破落戸共は衛兵に捕縛され、相手の覆面女性が術を使ったと言ひ訳したも

の、  
証拠不十分且つ目撃者も誰もいないのでそのまま裁かれて労役につくことになる。



二十七話 怪しいジジイと男色少年の下に一人で行く  
だつて？・鴨葱ではとボブは訝しんだ

「むさ苦しいあばら家ですが、どうぞ」

「失礼します」

あの後、頼は薫の手引きによつて平民の居住区画にある一軒家へとたどり着いた。その家は、外観からするとこじんまりとした家であり、どこにでもある家だ。事実、同じような家が複数あることから、大工からしても作りやすい二階建ての家なのが良く分かる。

「おお……中は広いですね」

「はい、御爺様の術のおかげです」

「それに大量の本……圧巻ですよ。これだけあると読むのも大変ですが、大量にあると  
いうだけでも面白いですね。沢山暇が潰せそうだ」

「フフフ、そう言っていただけだと嬉しいです。本を収集する傍らで貸本業も営んでい

るんですよ」

頼は扉を開けた薫に続いて中に入ると、思わず感嘆の声を漏らした。

本棚が所狭しと並んでおり、棚には隙間がないほどに本が埋まっている。二階にも本棚があるほどだ。更には本棚から溢れてると言わんばかりに机や床に小さな小山のような、それでいて塔のように本が積み重なっている。まさしく本の山と称するに足るだろう。先ほど薫が言ったように貸本屋としての側面もあるせいか、入ってすぐにシヨツブカウンターが頼の目に入った。そこを中心にくるつと本が囲む形となっており、それぞれの本棚には童話やら学術やらと札を書かれたもの、作者別に仕切りを入れられてるものなどがあつて非常にわかりやすい。ただ、見るからにヤバそうな雰囲気の本も頼は見つけてしまった。そこだけはスロープで隔離されたように少し離れた場所に置いてあり、注意書きの看板すらおいてあるほどだ。本に鎖をつけているほどだから、誰が見ても重要なのがわかる。

外観はごく普通の民家なのに、店の中は大商人が住まい経営するような二階建ての広々とした中身になっており、外観と内装がアンバランスである。だが、このちぐはぐさが何なのかは頼は原作ゲームとこの世界の術式で理解していた。

これは、空間術を用いたものだ。

頼が万太から貰った桐箱のように、外装とは裏腹に中身がたくさん入るような代物。それと大体同じ術を家全体にかけた結果がこうなるわけだ。

こういう空間術は退魔師の家では狭い領地を広くするための工夫の一つとして知られている。領地の範囲は狭くとも、家の中は領地に匹敵する広さを持つことで、領地の少なさによる負担を減らす方法の一つである。事実、倉庫など場所を取る物件に、一軒で中身は二軒分、上位貴族だと中身が三軒分の広さの倉庫を建てて物品管理と圧迫解消などの工夫をしており、それは頼の住まう北方守護たる綾絶家も例外ではない。

これは、北方によく出現する「迷い家」という妖魔を参考に、解体研究して人類が使えるようにしたのだ。その長い研究結果の末に生み出された空間術は、家のみならず袋や牛車などに使えるようになり、人類の輸送効率を大幅に上げることになった。

こういう居住空間にも使われており、簡単な物では間取りを広げる物だが、貴族や公家といった高名な退魔師の屋敷では、侵入者撃退のための迷路を編み込んだりしている。許可なく侵入すると、永遠に続くような迷路をぐるぐる回る羽目になるほか、所々で捕獲し調伏乃至洗脳した小妖や中妖を襲わせ体力を消耗させる、といった厭らしい迷路を作るところもあるほどだ。

北方守護を担う綾絶家の領域では、迷い家が沢山生息？ してる。なので、これを利用した研究は一番捕獲し研究した綾絶家が進んでいるはずだったのだが、この空間の間

取りを見るとその認識を改めなければならぬようだ。頼は心中で感心し反省した。なぜ、北方に迷い家が沢山いるのかは、後で追々説明することにする。

「我が家でも空間術を用いて屋敷の中身を広げてますが、此方の方がやはり質が良いですね」

「ほほう、わかりますか」

「ええ、僕も端くれですので」

「フッフ、御爺様がやったこととはいえ、我が事のように嬉しく思いますよ」

頼の言葉に薫は気を良くして、案内を続ける。身内が褒められたのが非常にうれしかったのだろう。

「それにしても、沢山本がありますねえ」

「ええ、私の家は御爺様の趣味と研究で本屋のようになっておりましたね。こうして、私自身も最新の本を買いに行ったり取り寄せ依頼をしたりした結果、こちらの区画で貸本屋の真似事をする事が出来るくらいにまで蔵書が溜まったんですよ」

「それは凄い、気になった本を見つけたら僕も読んでよろしいでしょうか?」

「もちろんですとも、尤も本を読ませる程度で貴方への助けてくれた返礼にはなりませんか」

「いえいえ、見た所禁書などもあるのではないのでしょうか？ ほら、あそこの本棚とか」「ほほう、お目が高い。ちよつと読んでみますか？」

本棚の中には通常のように置かれてる中で、スロープで区切られた場所があった。そこに向かつて、薫は禁書の中の一つを取り、手で開いて頼に見せる。その姿は、生来の親友のように二人は親しく禁書を読みあっているようだった。だが、頼が言ったようにそれは朝廷で嚴重に保管されてる禁書の写しであった。どこから入手したのか不明だが、読めるんなら読んでおこうという頼の貧乏性な考えにより読みたいと言い、相手が目敏く禁書を見つけて読みたいのであれば、それに応えてもつとお近づきになろうという薫の思惑が合致することになる。

そして、頼が手にしたその本は真つ白であった。

そう、スロープで区切り、鎖を付けているほど重要そうな本なのに真つ白である。だがしかし、頼は靈力を目に送って目を凝らして見た。この凝視により、本の内容を読めることが出来る。

平民区画においておけるのも、一定以上の靈力を持たない者には見ても何も書いてな

い本にしか見えないように工夫をしてある。だからこそ、こんな風に堂々と置いておけるのだ。ある意味、頼がやったような霊力凝視が出来るかどうかで読む人間を選別するといってもいい。衛兵が見たとしても、何も書いてない白紙にしか見えないだろう。仮に退魔師が読んだとしても、一定以上の高い霊力を持たないと文字すら見えないほどに高度な隠蔽をかけている。並大抵の木っ端退魔師では読むことも出来ないだろう。

そして、それが出来る頼は読むに値する退魔師ということに他ならない。だからこうして読むことが出来るのだ。

「ふむう……やはりこれは噂で聞いたことにあるあの本ですね?」

「ええ、御爺様が朝廷で教授を勤めていた際に編纂に関わっていたのもあり、その内容を覚えていたので御爺様が書き写したのですよ」

「なんと?! それはちよつとばかし危ないのでは?」

「ええ、ですが貴方にとつてもこの本は価値ある物でしょう。貸しますのでどうか内幕に」

「おやおや、それと同時に僕を仲間に引き入れるつもりですね? 中々に綾小路さんは遣り手ですな、これは一本取られました」

「フッフ、失敬失敬。恩人に対して仇で返す真似をしてみましたね」

「なんのなんの、こちらにも利益があることですし黙っておきますよ」

出会って一日も経っていないのに、本という共通の趣味で盛り上がる二人、男性同性愛が好きな女性がこの光景を見たら鼻から血を噴出してらるだろう。美男子同士がやり取りをしてるだけでも絵になっていた。

「それにしても、綾小路さんはよくここまで本を集めましたね」

頼はそう言いながら辺りをぐるりと見まわした。まさしく書店というにふさわしい量の本があり、カウンター周りにはまだ整理されてないのか、本棚に収まらず塔のようが高く積みまれている本の山があるほどだ。平民相手に貸本屋としているというのもうなずけるほどの量である。二階にもある本棚を見上げながら言う頼の様子を可愛いと思い苦笑しながら薫は口を開く。

「薫で結構ですよ、その代わりこちらも頼さんと呼んでもよろしいでしょうか？」

「ええ、構いません」

平民と貴族とでは天と地の差がある。没落貴族とはいえ平民である薫が頼をさん付

けで呼ぶなど無礼討ちされても文句は言えない。薫はそれを理解しているが、数回の会話で頼が親しみやすい人物であること、自身の身分を明かしても尚敬語をやめぬ姿を見て、彼はこちらが下手に且つ丁寧に接すれば、そして平民と言えど敬意を持てる相手には敬意を表する人物だと見抜いた。勿論、全てがそうではないし、薫の背後にいる道玄と繋がりを持ちたいから丁寧に接しているのだろうとも思う。だが、今まで高圧的に出れる場面はあつたのに、そのようなことをしない姿を見て好感が持てたし、さりげなくさん付けで呼ばせる許可を頂いてお近づきになればという下心が薫にはあつた。そしてそれは見事的中し、心中でほくそ笑む。

「お恥ずかしながら、本が大好きでしてね。生活は苦しくありませんが貧乏生活ですよ」  
「ですが、ここまで本を集めるにはそれなりに金がかかっている筈です。それはどこから？」

平民でも貸本屋は普通にやれる、だが当然ながらそれなりの数の本がないと成り立たない。良くて、大商人が集めた本を平民に貸本屋としての仕事を与えて、与えられた平民は顧客の所に背負い籠を担ぎ出向いて本を貸し代金を頂き、大商人はその上前を頂く、といったやり方が基本的だ。このようなスタイルの貸本屋もないわけではないが、



ある場所は上級区画である。理由は当然ながら本の借りパクを防ぐためだ。上級区画に住む人間は、身分も資金も保証が出来るので、仮に借りた本が戻ってこなかったら賠償を求めることが出来る。そしてそれをされた家は名誉が傷つく。だから上級区画では現代風の図書館、つまり大店の貸本屋が成り立つのだ。

没落した綾小路家が信頼の低い平民区画で貸本屋を営むのは偏に追放されたからである。だがそれ以上に、綾小路道玄の術により借りパクを防いでいるから貸本屋が出来るとも言える。しかし、大商人から渡されたわけでもない大量の本を平民が集めるのは難しい。没落貴族だったころの縁かな？ と頼は当たりをつけて言ってみた所、正解との返答が来た。

「朝廷からの取り立ての際、文字通り根こそぎでした。屋敷は当然の事ながら、服や本に至るまでの差し押さえです。最低限の金子しか残らず文字通りのほぼ素寒貧でしたが、御爺様はこう言いました『わしらには重荷にならぬ価値のある物があるじやろう』と」

流石に服まで差し押さえられたのは痛かったですね、と自嘲気味に苦笑しながら自身の安物の服の襟を掴んで示す。最も、人間慣れればどうともなるものであり、数年経てばそれが普通になってしまうものだ。上等な服だと汚れなどを気にしていたもの

だが、今の平民が着る服は多少汚れても問題ないのである。最も、貴族時代の綺麗好きがあるためこれらの平民より綺麗且つ清潔に保つよう心掛けているが。そのおかげで、顔立ちがいいのもあり、服も綺麗に整えていることもあり、薫は周囲の女性から狙われているのだが本人は気づいていなかったのが悲劇である。

綾小路家は没落貴族ではあるが、退魔師としての腕や術師としての力量が失われたわけではない。平民に落ちた後でも、貴族や公家とは一部繋がっているし、祖父である道玄は理究衆筆頭教授を務めた経験のある名の知れた退魔師だ。

没落した理由は道玄の自身の研究作が失敗した結果、その責任を受け解任されたからである。

重大計画の失敗の責を取られ、その際の予算超過をしたことに対して監査を入れられた。すると、いくつかは間違いなく計画に関わるものの個人的趣味が高じた物品が多数見つかったため、それらの点を政敵から攻められた。無論、道玄は釈明したしその通りに計画に関わる物品ではあった。だが、計画失敗したという汚辱がある人物に対して寛容な目を向けるほど朝廷の役人たちは優しくなく、その個人的趣味に関するものは全て本人からの支出という沙汰が出た。その結果、朝廷から根こそぎ取り立てられたわけである。

その中には政敵がこっそりと入れ込んだりした関係のない奴も混じったりしてし、

それについての反論もしたが、やはり計画失敗という責が重く信用も失ったのが痛かった。その際の負担も全て自分持ちとされた上に、財産を全て売り払つてもなお足りぬため、債務を朝廷が肩代わりする代わりに身分剥奪を受けた。貴族に置いて、没落したら死にも等しい恥辱である。だがしかし、偏屈老人としても知られている道玄からすれば生きていれば儲けものという考えだった。そこが分かれ目となり、他の貴族のように屈辱に耐えきれず自死を選ぶことはせず、生きて別の方法を見つけることにした。

最低限の金子しか残らぬ極貧生活になる………と、思いきや。素寒貧になったとしても培った知識まで無くなったわけではないのだ。

知識は力である。かの福沢諭吉はこう言った

——「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えよう

よくこの一節を用いて、福沢諭吉は人類平等を唱えている！　と言う人がいるが実は全く違う。この文には続きがあるのだ。

——だけれど世の中は貧乏な人と裕福な人がいる、賢い人愚かな人、身分の高い人低い人、それらの差は何故あるか？　それは知識の差だ。愚かなままなら裕福にならない、だが賢くなれば裕福になる。だから、不平等を埋めたかったら勉強しなさい。

このように福沢諭吉は言っている。そして、この世界では中興の祖にして人と妖魔と

の支配権をめぐる争いの決着をつけた天正帝が仰った言葉だ。それ故に、全国各地に寺子屋があり、農民と言えども読み書きができるほどになった。

それで術関係の仕事をして金を貰っているが、これが実は割がいい。何より、道玄自身が元理究衆筆頭教授を務めたという肩書を持っている。これにより、貴族や公家から術式展開の依頼や個人教師の依頼などの仕事が舞い込んだ。知識を教えることに關しては教授を務めたのは伊達ではなく、教え子となった貴族の子息はメキメキと成長していき、それが評価と更なる依頼へと繋がり、極貧生活から脱出出来た。

当初は、平民に落ちた道玄を見縊る貴族が大多数であったものの、やはり百数十以上生きた怪物老人であり教授まで勤めたのは伊達や誇張ではない。その術式展開や講義をすると見縊った貴族の目を洗い流すことになる。結果、平民になったものの家庭教師として、時には講義をしてその報酬を手に入れ、貴族時代には劣るが苦しくない生活が出来るほどにまで金を儲けることが出来たのだ。その儲けた金を本の収集につき込んでいたので、このように大量の本を集めることが出来たわけである。金がない場合は本を代わりに頂くとということもしているので、貧乏貴族でも良質な本があればそれを対価に家庭教師してもらおうという寸法だ。

実は、朝廷からもいくらか依頼を貰ってるほどである。

確かに失敗したという汚辱はある。だがしかし、その件は身分剥奪という重い沙汰に

よつて既に罪を雪いだ。それに、教授を務めたという肩書も働いているし、たまに帝に進講する依頼が来るほどだ。単に朝廷が使える人材を無碍に放置せず、無駄なくこき使っているとも言えるが。

要は現代風に言うならフリーランスになったわけである。その結果貴族の時のような堅苦しさが無くなって、いちいち会計監査などが来ず、失敗した研究を再度続けることが出来たと道玄は孫に良く言っている。

これが貴族時代の、朝廷の役人としての立場だったならば失敗した研究をもう一度やるなど無理だろうし、貴族位を剥奪されてなくても窓際冷や飯食いだったのは間違いないだろう。貴族時代より動きやすくなった結果失敗した研究も再度続けることが出来たというのは、皮肉なものである。

齢百数十を超える彼の研究、それは――

「おお、薫よ、帰ってきたんじやな」

店内の奥の襖を開けて入ってきたのは小柄な老人であった。

頭髮はすでにほとんどない、だが横側には白髪が生えているし、頭頂部の天辺には所謂アホ毛というものが生えている。まるで、どこぞのアニメで海の幸の家の主人みたいな髪型だと頼は思った。そして、孫が青い髪をしているからか、その白髪もうっすら

と青みがかかっている。そこは遺伝が関係しているだろう。

身長は頼と薰より低く、百四十か百三十センチしかないまさしく小柄な老人と云うほかない。好々爺の顔をしており、見た第一印象は人柄が良さそうだなと頼は思った。だが、その本性がとんでもない人物であることは頼は転生知識で知っていた。

「ふむ、中々の霊力を持つておるな……………、それにその襟巻の家紋。綾絶家に連なるものですかな?」

「はい、ご明察の通りです。僕の名前は綾絶頼、当主代行をしております」

「ほほう、これは失礼仕った。わしは綾小路道玄、そのの薰の祖父でございます。あばら家ではありますが、ようこそおいでくださった」

お互い礼を持って挨拶をした。貴族の中ではかなり高い位置にいた綾小路道玄ではあるが今は平民の身、故に年の功があったとしても相手が貴族であるならば下手にでる。そして頼は年功序列なこと、初対面には誰であろうと丁寧に接すること、そして相手が原作ゲームでも有用な霊術ユニット且つ、高名な退魔師であり教授でもある故に下手に出て頭を下げる。これにより、お互いの身分関係の挨拶は終わった。

「して、北方守護総代とも言えるお方が、このような平民の貸本屋に何用ですか？」  
「御爺様、それについては私が説明します。実は——」

かくかくしかじかのほにやららでまるまるうまうま、とこれまでの経緯を薫が説明する。

説明を全て聞いた道玄は、その場に膝をつき、綺麗な土下座をした。

「我が孫が犯されそうになったところを救っていただき、感謝の言葉もありませぬ」

本心からの言葉なのはわかる、だが土下座までしたのは驚いた。頼は慌てて片膝をつき

「頭を上げてください、同じ男として見過ごせなかつただけです。それに、僕自身の高名な退魔師であり教授でもある道玄さんと知己を得たいと思っております。薫さんと出会い、彼を救えたこと、そして貴方とこうして出会えたことはまさに運命と言えるでしょう」

「そこまで言われましては敵いませんな、では失敬」

相手が上げていいと言うならば、それに従うのも礼儀だ。一言言った上で頭を上げ立ち上がる。尚、頼が言った運命とは薫と道玄という二人の有能キヤラに出会えたことで、どちらかという比重は道玄の方が重い意味で言った。だが、傍で聞いていた薫は自身と出会えたことだと解釈し心臓が早く波打ち興奮し勃起しかなかった。

「して、薫よ。何をもって礼をするのじゃ?」

「とりあえずまあ、蓬萊亭に行くには距離があり過ぎたのでこちらで一泊して頂くか。あと、一泊だけでは流石に恩を返すのに足りないので御爺様の持つ禁書を貸したいのですが」

「わしの禁書か。本来なら初見お断りじゃしそのようなことを言う者がおれば即刻店から叩きだすわい」

「じゃが、と一泊置き。」

「名門綾絶家に連なるもの且つ、わしの孫の恩人であるならば、わしからも礼をせねばならぬ。故に頼殿、貴方に禁書を御貸ししましょう」



「ありがとうございます」

互いに礼をする。

本来ならば道玄の言うように店から叩きですが、ここまで恩があるのならば話は別だ。何より、身元がはつきりしており北方守護総代という名門四家の一角と知己を得ることは道玄からしても利益がある。そして、それほどの名門の家ならば、本を貸してもそのまま返されないことはないだろうという信頼もある。

家紋や名家というのは、こういう信頼で成り立っているのだ。故に、禁書に限らず物品の貸し借りは名門同士でやるのはよくあることである。普段の平民相手ならば術をかけ必ず返すようにするが、流石に名家相手にそのようなことは出来ないし、信頼があるためする必要もない。

そこで、思い出したように道玄は言う。

「そう言えば薫よ、蒲公英たんぼほが心配しておつたぞ。いつものように挨拶に来たら薫が本を買いに西区に行ったと言ったら泣きそうな顔をしておつたわい」

「ああ、彼女ですか。今回は彼女を連れていけばよかつたと思ってますよ」

ややぶつきらぼうに言う薫。幼馴染である蒲公英は平民で貧民区画に住んでる者だ。薫が幼少期に襲われそうになった時に助けてくれた以来親しくしていた。だが、それ以降は今に至るまで女から狙われるようになり、親しい蒲公英に護衛を頼むのだが、彼女も彼女で薫にやや激しいスキンシップをしてくるのである。

これが、蒲公英が性欲を我慢できる知能があるならいいが、寺子屋で最低限の読み書きができるとはいえ平民且つ貧民であるので、我慢できず押し倒したことがあるのだ。それ以来、薫は童貞を捨てたが女に対して忌避感を持つ決定的な原因となった。

確かに快樂はあつた、それは間違ひなく認める。だが、こちらのことを考えず一方的な腰振りで、天上の染みを数えるだけで後は子種を吐き出すだけの作業感となつてしまったのだ。薫も男故に性欲はあるが、自分から発散するほど高まることはない。それどころか、幼馴染に押し倒されたという事で、女は所詮ケダモノと思つてしまい、男のほうがいいのではないかと思ひ始めた。

蒲公英は強引に押し倒したことについて謝罪しただけでもマシと言えよう。これが、謝罪なしだったならば縁を切っていた。

それ以降、蒲公英と付き合ひはあるが幼馴染以上恋人未満の關係に収まっている。そして薫はこき使つているのが現状だ、相手が逆レイプしてきたのを理由にあれこれ利用している。対する蒲公英はというと、薫に対して強姦したことの負い目と、彼と縁を切

られたくないという思いがあるので、喜んでこき使われている。

そんな関係ではあるが、もし結婚も視野に入れるなら薫は蒲公英を妻にする予定だ。理由は幼馴染以上恋人未満ではあるが、力持ちで平民区画での相撲大会で上位に食い込んでる彼女なので護衛としてピツタリであるし、何かと家事洗濯もそつなくこなすし、こちらが良い様にこき使つても喜んで使われてるからだ。まあ、最低限の情はあるというのも理由だが。

欲を言えば薫個人的には退魔師として名を馳せるために没落した家を復興させ、その上で貴族の子女と婚姻を結びたいが、道玄の研究が完成しないとそれは無理だろう。その完成のための最後のピースが簡単なようで非常に難しいからだ。

そのピースは、この世界に生きる男として非常につらい物と言えるものだ、薫は愚かな性欲の強い道玄ですら無理と言うほどである。運命的な出会いで頼と知己を得たが、その頼でも無理だろうと薫は思っている。

突如、店の引き戸が開かれる。そこから、背丈の高い少女が入ってきた。

「薫ちゃん！ おら心配してたんだべー！」

言うや否や、その少女は薫に抱き着き、豊満な胸で薫の頭を埋める。

背丈はこの場に入ってきた少女含めて四人の中で彼女が一番大きく百七十センチはあるだろう、波羅より低いが年の若い平民の少女ならばこのくらいが平均なのだ。

その少女は顔は芋臭さが残ってる田舎少女といった感じで、エロゲー世界にしては特段別嬪ではない。だが落ち着いた雰囲気のある顔をしているので飽きは来ない。不自然に歪んでるわけではないので、そこらのモブといった顔だ。

だが、モブな顔に対して胸と尻と太腿は大きく、田舎少女なものも相俟って元気な子を産んでくれるのが約束されている体付きをしていた。

その少女は、薫がバシバシと腕を叩いたので、それに気づいてようやく引き離す。

「どこいったんだべか、薫ちゃん。外に行くなら、おらと一緒に言ったべ」

「どうしても欲しい本がようやくやく入荷してね、我慢が出来なかつたんだよ」

そう言って、手に持っていた数冊の本を見せる。それを見た道玄は

「それはもしや、アレか?」

「ええ、アレです」

「はあ……………、我が孫がそつちの道に進むとは、我が家はお前で断絶じやのう」

「いざとなれば蒲公英を使いますよ」

「えへへ、嬉しいべ。おら頑張るよ」

薫が欲しい本とは衆道向けであり、上級区画でこっそり売られている物であった。我が孫がそつちの道を進むようになってしまった事に嘆く道玄だが、薫本人は蒲公英に産んでもらうと物のように扱う。だが、当の本人は物のように扱う発言をされても喜んでいた。

やや混沌とした空間に、蚊帳の外となる頼。少し呆然とした様子でそれを見ていたのに気付いた薫が彼女を紹介する。

「頼さん、紹介しましょう。私の幼馴染であり将来妻として使う予定の蒲公英です」

「初めまして、おら蒲公英ともうすだ。はえ、薫ちゃんに負けず劣らずの色男さんだべ」

「これ蒲公英よ、此方の方は貴族じゃぞ。平身低頭せい」

紹介された蒲公英は、薫とは違った美形の少年に顔を赤らめて自己紹介するものの、道玄から言われて顔を青ざめてその場で土下座した。

「お、お貴族様にご無礼仕つただ！ 許してくんろ!!」

平民からすれば貴族など雲の上の存在だ、その相手に対して無礼を働いたらどうなるかなど学がない彼女でも理解している。恐れ戦くも、対する相手は穏やかな口調で語り掛ける。

「初めまして、僕は綾絶頼と言います。確かに貴族だけど、礼儀作法は求めないし気にしないから普段通りにしてください。立ち上がって結構、話がしづらいからね」

「は、はあ、わかりましただ」

その彼女に頭を上げていいと言う頼。戸惑いながらも相手がいいというならば頭を上げる。その様子を二人の男はそれぞれの思惑で見っていた。挨拶が終わった二人を見て、道玄が口を開く。

「そういえば、頼殿。わしと知己を得たいと言っておりましたが、朝廷から身分?奪を受けても尚へばりつきながら生き恥を晒す老骨に何用ですかな?」

やや皮肉めいた口調で自嘲しながら言う、その言葉をしっかりと聞きながらも頼は答える。

「生き恥を晒すなど、御戯れを。貴方は貴族や公家相手に家庭教師が出来るほど活躍しているではありませんか。更には未だに理究衆でも講義をするほどの見識を持っている。恥を晒すと言うならば、そのようなことはしないはずでしょう」

「ほほほ、知っておりましたか。失敬失敬」

自罰的に言うのは、これで相手を見極めているからである。それを頼はゲームで知っていた。この選択肢で調子に乗って高圧的になって命令するか、先ほど挙げた例を言いながら下手に出るか、二択があり、どちらもメリットデメリットが存在する。前者の場合は、身分の差を利用してあれこれ命令出来る上に、講義授業もいくつかは無料で出来る。だがしかし、裏切り天秤が敵側に傾く上に一部の術や孫との合体技などが出来なくなるデメリットがある。後者はその逆で、金を高めに払わなければならぬが、後半で有用なユニットになる。RTA走者なら前者で、じっくり攻略なら後者という風に別れている感じだ。もっとも、RTA走者でも後者を選んでタイム更新出来るし、じっくり

り攻略でも前者を選んで妖魔に裏切らせずに活用できるほどだからどちらを選んでもそれぞれ利点がある。

頼はその選択肢で後者を選んだというわけだ。最も、見極めているのは道玄だけではなく頼もだ。この偏屈老人の厄介さが、この原作ゲームと世界観が違った状態だとなるかを見極めなければならぬ。

そんな中、腹の虫が薫と頼の両方から出た。お互い顔を見合わせ、赤らめる。その様子を見て道玄は笑い、蒲公英は美形少年二人が羞恥で顔を赤らめる絵姿を見て少し発情した。

「ほほほ、二人とも腹が減った様子。話は夕餉の後にしませんかな? 蒲公英よ、何時ものように頼むぞ」

「はい! おらに任せるべ!」

「あ、それでしたら僕も手伝いますよ」

「えっ?! 頼さんは貴族なのに料理をしますか?」

純粹に驚く薫。

当然だ、貴族は料理などしない。それは料理人の仕事であるからだ。没落した綾小路家も同じであり、身分? 奪を受ける前までは料理すらしたことがなかった。だが、平民



に落ちてからは自分たちの手で拙いながらも手料理を作り、時には周りに頭を下げて教えてもらい作った。

今では、通い妻として蒲公英が料理を作りに来るのでその必要性がなくなつたので助かっているが、それでもあの料理の大変さを忘れたわけではない。なんど塩の量を間違えて不味い料理を作つたことか……………。

そんな苦い過去がある故に、ちゃんとした名家である綾絶家の当主代行ともいえる存在が料理をすると言つたので驚いたのである。驚愕する薫に対して

「料理を作るのが好きなんですよ、僕は代行ですがあくまで代行なので、当主は妹が継ぐんです。その後、仮に政争が起きて妹から追い出されても一人でやっていけるように自炊できるように努力したんですよ。後はまあ、妹達が可愛いから作つてあげてたりもしますが」

頬をかきながら恥ずかし気に言う頼。本人からしたら原作ゲームで美味しい料理を食べればキャラが強くなり成長するから、前世と比べて調味料が不足し物足りない料理ばかりで改善したいから、そして政争により追放されても一人でやれるようにという理由がある。後は、前世も独身で自炊してたのでその経験もあるし、可愛い妹達が美味しい美味

しいと言ってくれるだけで嬉しいのでそのために作ってあげてるといふ理由もあるが、流石に全部の理由を言うのは恥ずかしいし秘密でもあるので少しだけ打ち明けた。だが、その台詞はこの世界の住人からしたらまさに女を支える男その者であり薫は愚か道玄と蒲公英からしても理想の男として映っていた。

「後、僕の手元に市場で売る予定の砂糖があるんですよ、それを少し使おうかなと思いまして」

「ほほう、北土の砂糖ですか？わし、甘い物が好きでしてのう」

「それだけでなく、お酒も用意してありますよ。我が家で作った清酒です」

「ほっ！それはまたまた楽しみですよ！いつかは飲みたいと思っておりましたがまさか飲める日がこようとは、感謝しますぞ。さささ、どうぞ上がってください」

持参した手土産に目に見えて喜色をあらわにする道玄。どうぞどうぞと家にいそいそと上げようとするのを見て、苦笑しつつも頼は言葉通りに上がる。そして、一宿一飯をネームドキャラの家で過ごすのであった。

## 二十八話 強い人に弟子入りはしないといけないよね

「この魚の煮付け、甘くて美味しいですね」

「この大根も中々じゃぞ」

「頼様の持ってきた調味料のおかげだべ」

「いやいや、蒲公英ちゃんが手伝ってくれたおかげだよ」

僕らは料理を食べている、僕と蒲公英ちゃんが作った料理は好評のようで何よりだ。蒲公英ちゃん背が高いから年上かなと思つて、年齢を聞いたら僕と薰さんと同じ年だと言うから驚いた。

僕と同じ年なのに背が波羅より少し低いとはいえ体格は色々でデカイくてエロい。薰さんから説明を受けたが、彼女は平民の祭りでやる相撲大会で上位に食い込む力持ちだそうだ。だから尻も太腿も太いのかと納得した。同じくらい胸も大きい上に、晒しながら巻いてないからノーブラで乳首が服の上から丸わかりである。

恥ずかしくないんだろうかと思つたが、貞操逆転すると男がノーブラなのと同じなのだろう。やはり、貞操逆転して男女の出生率と価値観が変わると女性がオープンに体を

晒すようになり、尚且つ沢山子を産めるように体格差が違ってくるのだろうかと思ってしまう。

僕自身その可能性には気づいていたが、あの紙芝居を見るまで自身の記憶を暗示で封印していたからなあ……。いや、エロゲー主人公の兄だから自分は違うだろうって思ってたことが、実は自分がその主人公枠じゃないのかと恐怖してその時の記憶を封印したのだ。それが紙芝居のお姉さんの言葉で破られ、恐怖で気絶しそうになったところで万太と出会えたんだから、ある意味怪我の功名である。レアキャラに出会えたのは嬉しくもあるが、恐怖がぶり返したのもありアンビバレントな状態になってしまるのが玉に瑕だが。あと、今更ながらあの飲まされた薬もどんな代物か効くの忘れた。活力剤とは行っていたが、出来れば效能などを教えてもらいたいものだ。今度会った時話してみよう。

蒲公英ちゃんはムツチムチな体格の見た目と違って、手先は器用で料理作りは僕より上手だ。彼女曰く、薫の妻として毎日出向いて料理を作ってるとのこと。成程、毎日作ってる彼女に比べて僕は毎日じゃないから経験の差が出てくるのだろう。そこは素直に認め称賛すると、顔を真っ赤にした。芋っぽい顔だけでも、赤らめる姿はちよつとかわいかった。

妻と言っていたが、それにしても薫さんの「いざとなれば使う」という言葉や、道玄

さんの「薫で断絶」という言葉が非常に気になる。男として見る場合、種馬として見られるから女をモノ扱いするのだろうかと疑問に思った。そして、道玄さんの断絶という言葉……、まさかもう男色に走つてないよね？ と少し恐怖してる。原作ゲームでは主人公たる波羅が体を売るか否かで男色に走るかどうかになっている。だから、既にそつちに行つてたら……という恐怖がある。

その割には蒲公英ちゃんが料理を作る際、薫さんの妻として働き彼と既に体の繋がりを得てるからいずれ子供を産むつもりだと言っていた。本当に男色ならば、女性から触られるのを嫌悪するほどだ。原作ゲームではそれくらいのガチホモだった。尤も、逆転したこの世界だとまだなのかもうなのかの判別がついていないからそこを見極めなければならぬ。

その見極めの為にも、彼らとお近づきになり、情報を手しなければならぬ。全ては、可愛い妹達の為だ。虎穴に入らずんば虎子を得ずどころかケツを出す羽目になるかもしれないから、自身のケツに注意しなければならぬが。

料理と一緒に作る際、彼女が持ってきた材料では素朴過ぎたので、僕が市場でいろいろ買った食材を使つて料理を作った。結果、彼女は恐縮するくらい平民にしては御馳走となつた。

「これほどまでの馳走、正月や祝日などの御祝い事じゃないと食べられませんよ」  
「まあ、わしらが本に金をかけてるせいもあるがのう」

二人の言葉は事実であった。

趣味と実益、そして自身の知見のために本を収集している。それは確かに役に立っているし、講師としての仕事にも、貸本屋としても使えている。講師は道玄だけでなく、薫も寺子屋でちびっ子達相手に教師の代役をやるほどだ。そうやって金を稼いでいるのだが、新しい本や禁書を餌にされてはそつちに金が流れてしまうのである。故に、金を稼いでもその日暮らしのような質素な食生活であった。これは原作ゲームでもそのように紹介されたから、そこは変わってないのだろう。

ただ、本の収集もそうだが、道玄の失敗した実験も関わっている。この実験がどこまでの完成度なのかも調べなければならない。これによって、妹達がレイプされるかどうかに関わるからだ。それだけは避けなければならない。兄として妹を守らねばと心に決めている。

それが、客人を迎えたことで贅沢になったのだ。一汁一菜が一汁三菜、更には酒と甘味までつくおまけつき、喜ばない理由がない。

だが、僕がここまでのことをするのにはもちろん理由がある。それは、彼らと近づき

術の師事を受けたいからだ。

食事が終わり、蒲公英ちゃんが食器を片付け台所に持っていき、僕らは食後の緑茶を飲む。この緑茶も、僕が出した高級茶葉だ。

「ふむう……大変良い香りじや。頼殿、感謝しますぞ」

「高級茶など、貴族時代に飲んだ限りですよ。私は小さい時だったので、もうほとんど忘れかけてました。頼さん、ありがとうございます」

「いえいえ、これくらいお安い御用ですよ」

本心である。有能なキャラと繋がりが作れるのなら高級茶葉くらい安いものだ、それが妹の夫候補の一人なら猶更だ。だが、もう一人の道玄さんについてはまだわからないからこれから調べないといけないが。

「さて、一服したところで道玄さんに僕からお願いがあります」

「ほほう、この老骨に何用ですか？」

「教授まで勤めた貴方から、術の師事を受けたいのです」

そう言って、その場で頭を下げる。

立场上、こちらが依頼を出す形でもいいが、依頼と師事とはそれぞれメリットデメリットがある。原作ゲームで道玄に師事を受ける時、中級、上級、最上級と三つのコースが選べるのだ。そして、依頼だと中級まで、それより上の上級、最上級を選びたいなら師事という風に別れてある。

依頼にあたる中級の場合は金を払うだけで素早く教えてくれる。デメリットは上級術を学べるか否かというところなので、上級まで行きたいのなら師事を受ける必要がある。

師事の場合は依頼と違って金がほとんどかからない。尤も、弟子の教育のためと言いながら色々な物品を用意する必要がありそれらがどれも集めるのが簡単であるものから大変であるものまで様々だ。だが、大変なものであっても無理ではないので数年かければ師からの課題をクリアできる。

金ならば中級まで、金がないなら物納で上級まで、という風に別れてある。中には両取りの最上級もあるがこれは序盤では非常に厳しくかなりのリセマラをして運が無け



ればキツイとRTA走者に言わしめたほどだ。そして、どのコースでもエロゲー故に体の要求が度々起こる。その体の要求に応えようと、肉体レベルで術技能が上がる他、道玄の研究が進むのだ。

肉体要求は師事ラインが一段階上がるといふ、最大のメリットがある。中級コースが上級コースに、上級コースが最上級コースに、最上級コースが特級コースにという風になるのだ。余談だがRTA走者の大半は中級コースで道玄に体を捧げるルートを選びさつさと上級術まで覚えたりしている。物納である上級で体を捧げて最上級にする手もいいのだが、RTA故に時間最優先でプレイヤーの手で処女を散らされるのだ、仕方がないね。その結果、薫が男色に走って夫候補から脱落するがしょうがないのだ。

「師事を受けたい？ 貴方に教えることなどありますか？」

「ご謙遜を、先ほども申し上げましたが貴方の術は未だに衰えを見せません。それどころか、理究衆筆頭教授まで勤めた貴方の術は金子を積んででもお願いしたいと思っております」

「ほほほ、そこまでの評価はありがたいですな。ですが、金子以外にも色々要求するやもしれませんぞ？」

「それは……………、もしかして貴方の研究のことについてですか？」

「ほほう、知っておりましたか」

「ええ、話半分程度ですが」

道玄の研究とは、若返りの秘術である。

誰もが求める若返り、それは靈力で老化を抑えるのとは全く違う。

老化抑制は、実年齢が八十や九十といった老人なのに、四十五代あたりまで肉体を維持する。こちらとどう違うのか？ と言うと、老化を抑えるために靈力を使い続けなければならぬというデメリットがある。そしてそれは、年を重ねるごとに老化抑制のための消費靈力も比例して上がって行くのだ。

幾らベテランの退魔師と言えども老化に勝てぬ。だからといって、肉体を維持するために老化を抑えるほうに靈力を回すと今度は術式展開の効果や威力が下がってしまう。当然だ、本来ならそちらに使うべき靈力が老化抑制のために使われてしまうのだから。無論、強い退魔師は老いても健在だし、年を取れば取るほど技術も洗練されていき、靈力も省エネ出来るように知識も上がって行く。それでも、齢百数十超えの一流な老齡退魔師と言えども三割から四割はそっちに持っていかれてしまうのは明確なデメリットと言えよう。見た目が若くとも中身はヨボヨボ、なんてのもあるほどだ。どこぞの少年

探偵の逆バージョンになってしまふのが、老化抑制の欠点と言えよう。

なので、道玄の若返りの研究とはそれらの肉体をリセットするようなものだ。これにより、純粋に若返ることでも更に沢山活動できる他、老化抑制のために回していた霊力が必要なくなるので文字通りの全盛期を味わうことが出来る。更には、子供辺りまで若返れば成長による霊力の上昇もあり得るので、全盛期を越えて更なる躍進へと向かうことが出来る。

「ならば、わしが失敗した理由もご存じですか？」

「ええ、端的に言うならば予算と材料が足りないことですね」

「ほほほ、ならば——」

「もつと言うならば、根回しの賄賂を渡さなかったことでしょうか」

からからとした笑い声をピタリと止めてスツと目を細める道玄。その研究をしてきた道玄は、いいところまで行っていたが、結局のところ失敗した。

失敗した理由は、予算と材料が足りないことであつた。

予算は申請すれば通るだろうと思うが、材料を買うための予算が足りない。その材料とは、公家や大臣クラスですら持っていることは稀というくらいの高級な霊験あらかた

な代物の他、果ては大妖や凶妖から手に入る素材や、朝廷が管理する禁足地などにある代物などだ。どちらも高すぎて予算超過をするのは想像に難くない。だが、それらを申請しなければ研究が完成しないので、道玄は申請してみるものの却下された。

却下は帝は関わっておらず、当時の大蔵省の長官である大蔵卿が独断で却下した。

研究の事は知っているが、高い金を使う物品の癖に進みは遅い。そういう理由でもう少しどうにかありませんか？ 的な却下理由の文を書いて突っぱねた。だが、突っぱねた理由は自分に対して賄賂を持ってこなかったというのが『現世の波羅姫』の設定資料集で書かれてあった。

いつの時代も、役人への根回しは重要である。当然ながらそれは賄賂も含まれている。現代日本ならば、口座管理の出納帳による増減などで国税局からの査察が入って賄賂があったかなどがわかるだろうが、この世界にはまだそのような銀行制度はない。タンス預金ではあるが、そのタンス預金は公家や貴族が管理している上に余程の罪状がなければ家宅搜索などされないのである意味嚴重に守られていた。

当時の大蔵卿は金にがめつく吝嗇であり、その吝嗇さで朝廷の財政を改善させた手腕がある。だが、一方で根回し的な賄賂は必要とも考えており、それを渡さなかった道玄に怒った。

賄賂というと顔を顰める人がいるだろう。僕も現代日本で生きていた記憶があるか

ら、そういうのは宜しくないと今でも思っている。だが、この世界に転生した今となつては、ある程度必要だと割り切るようになった。いや、割り切るといふより理解させられたと言つた方が正しいだろう。

それは、先ほどの大藏卿のように役人に賄賂はある程度必要なのは欠点だが、各種根回しをしつかりやってくれる存在でもあるため、物事の移行がスムーズに進むのだ。

それは大藏卿に限らず役人に付け届けをするのもそうだ。役人は基本的に頭が固い、当然だ、朝廷に仕えているのだから。固くなければ自分達の首が飛ぶので仕方がない。更に言うなら、余計な仕事を貰つたところで給料が増えるわけじゃないのだ。

基本的に考えると、現代日本と違つて地位と給与が保証されてないのである。なので、アレコレ役人をお願いをしたとしても、それを受けた役人からすればそれをやつたつてタダ働きなのだ。なので、頭の固い対応をするしかない。当然だ、いきなり他人が余計な仕事を持ってきてきても自分に何の利益もないからだ。

だが、その固い頭を柔らかくして、余計な仕事を押し付けてもいいようにするのが賄賂である。誰だつて、袖の下を貰えば嬉しいし、話を通そうと努力をしてくれる。言うならば、余計な仕事を持ってきた際の報酬が賄賂、と考えるといいだろう。

僕が当主代行となつた時も、朝廷からの役人に対して特産品を専売扱いするために賄

賂を渡したりした。

勿論、賂賂を渡さないという方法もあるが、その場合特産品が横流しされたり商売敵に邪魔される恐れがあった。なので、当時は結構な賂賂を支払ったし痛かったが、その結果スムーズな流通と専売になったので、その痛かった賂賂は十分ペイしたので結果的に考えれば払って良かったと思っている。原作ゲームにも賂賂機能はあったが、これは朝廷での決議に対してのみ働いていたものだった。だが、この世界に転生した今となつては僕が転生知識で作つた特産品はゲームにかすりもしてないので、そう言つた意味でも賂賂で専売権を確保することは重要であつた。

細めた目を閉じ、深々とため息を吐く道玄。

「中々に痛いところを突いてきますな」

「これでも当主代行ですから。それに、僕自身賂賂の重要性を理解しておりますし、貰っています」

「ええ、ええ、そうですとも。あの頃のわしは研究第一と考えており、そのための金もモノも研究につき詰めばいいと考えておりました。勿論賂賂で物事を流れやすくするべきなのでしょうが、研究を完成させることばかりにかまけてそちらの根回しを怠つてしまつたのですじゃ……」

全く持つて、悔恨の限りですじゃ。と道玄はごちながら頭を撫でる。

このご老体も貴族故に賄賂の重要性は理解はしてた。だが、研究とは自分ではなく国が金もモノも用意してくれるので、その楽さに胡坐をかいてしまい、研究費の一部などを渡して靈藥などを持ってこさせるようにすればよかつたのにしなかつたのが研究失敗の原因の一つと設定資料集で書かれてある。

ちなみに、賄賂自体は僕も貰っている。この場合、寄付と言わせているが。

貰っているのは、うちの領地にやってきた商人からだ。各種通行税やら関税やらで徴収するのだが、僕はそれを撤廃して戦国時代の有名大名がやったような楽市楽座の真似事をした。最初、税を撤廃したことによる収入減で親族から批判が来たので、半年待つて欲しい、その時収入が下回ったら再度戻すし、戻す際の補填は僕がする、という条件で予先を修めてもらったことがある。

その結果、楽市楽座のおかげで流通が加速し収入爆増、僕の作った清酒や砂糖などの各種特産品は飛ぶように売れて入荷待ちが起こるほどとなり、親族の方にも金が流れていったので親族も怒り顔からニコニコ顔に変化した。トドメと言わんばかりに、さらに税撤廃した際に起きた一時的な赤字補填を十倍にして返したので、北方守護の楽市楽座については僕が管理するという管理権まで勝ち取ることに成功した。

んで、楽市楽座にすれば後は家来などの町奉行に任せて放置すればいいんじゃないやね？  
と考えていたのだが甘かった。商人からは、ウチを優遇してくれと賄賂合戦が始まったのである。

商人にも各種の特産品を持ち込んだりして他の商人と競合したりして諍いが起こったりする。他の領地ならば、やくざものなどの破落戸達を雇って襲うなどの昔ながらの手法を行うが、僕はそれを禁じており、斬首とまで言い渡した。一時期は収まったものの、それを破って実行した商人は、宣言通り斬首して晒し首にした。

女性を斬首するのは辛かったが、それで領地に揉め事を持つてくるのなら話は別である。心を鬼にした。全ては後を正當に受け継ぐ波羅のためだ。そのために、僕の目の前で白洲で破落戸達と共に斬首し晒し首にして一罰百戒にした。

同席した町奉行からは

「頼様御自ら裁かなくても良いのでは？ 流血を見せるなど、御身の御心を煩わせてしまします」

と心配されたが



「当主代行自らやることと、町奉行である貴様がやることとでは前者の方が重みがある。貴様の面目を潰してしまつて申し訳ないが、今後の領地の治安を守るためだ。スマンがこの時だけは許してくれ。後は貴様に任せる」

と言つて詫びた。

町奉行は、僕の心意気が伝わったのか、その場で平伏し、他の与力や同心達も一同平伏した。

その際、美人な彼女達の巨乳がゆさつと揺れて勃起しかかったのは僕だけの秘密である。

話が逸れた。

僕が言うように、当主代行自らやることは、北方守護のトップが決めることに等しい。これにより、他の領地や大名たちの麓で起きていたこの手の諍いがパツタリと無くなった。

じゃあ、争いが無くなって平和になったかというところではなくなった。その手が使えなくなつたとなつたら、商人達は挙つて僕に付け届けもとい賄賂を持ってきて正攻法に切り替えたのだ。

僕から役人に賄賂を贈ってスムーズに事を進めることに忌避感は大分薄れたし、その結果専売特許を貰ったりしたから今ではそれなりに賄賂を贈ってる。

だが逆に、僕が貰うという事態は想定していなかった。今まで自分から贈るばかりだったので、まさか自分が貰う立場になるとは全く考えていなかった。ここで、賄賂を受け取るとどこぞの山吹色のお菓子見たいな風になるのではという心配が多少なりともあつたし、現代日本で生きていた感覚で受け取りにくかった。だが、先ほどやったような一罰百戒をしたことと、楽市楽座による解放は市場競争を生み出したが、優先権をどうするかで揉めた。

そこを町奉行に任せた所、寄付もとい賄賂の量で優先度を決めると言ったのだ。これには僕もビックリして町奉行に話を聞いたところ。

「頼様、賄賂の多寡は信用度と緊急度の証でございます。金を沢山積むということは、それなりの金子を持っているということの表れであり、自分を優先してほしいという表れでもあります。それに、ここで賄賂を拒否するとせつかく頼様が沈めた揉め事が過熱する恐れがあります」

故に、寄付もとい賄賂を受け取り、その量によって優先度を割り振るといふ方向に決めた。僕は町奉行に説得されたし言ってる内容も理屈が通っているためその通りにした所、我こそはという風に金が沢山積み上げられ、それによる商人の優先順位も決まり、加熱して爆発しそうだった諍いが落ち着きを見せた。

なお、積み上げられた寄付は一割は僕、二割は各種領地の町奉行や同心に衛兵といった家来、三割は各種領地を治める親族、残りの四割は北方守護の公共事業費として割り振った。

家来からは感謝され、親族からも感謝された。僕より家来や親族に多く渡すことで自尊心や金銭的余裕を満たせることができるし、僕が一割貰ってても自分達はそれ以上に貰ってるから文句は言えない。そして残りを公共事業費として村や町の治水工事に割り振ったことで、土木工事による臨時収入で平民が潤い、北方守護の領域は一気に底上げ成長することに成功した。もう、原作ゲームでヒーコラしていた貧乏な寒村なぞ数えるほどとなっており、こちらも吸収統合などをする予定なので、北方守護の領民たちから貧民が根絶するのも目前である。

おかげで、わが領地はみるみるうちに発展していき、僕の金も溢れんばかりに入り込んできたので、それをせっせと桃代姉さんの治療薬や研究開発費につき込んで、さらなる開発を目指していった。

色々話が逸れたが、要は両取りルートを選ぶのだ。

「道玄さん、もし師事をしてくれるのならば、貴方の研究を資金と物品両方で全面的に援助します」

「なんと?!」

「頼さん、それは本当ですか?!」

そう言つて、深々と頭を下げる。道玄さんだけでなく薫さんまで驚いた。

こちらのルートはRTA走者ですらそれなりの運がないと厳しいと言わしめたが、僕はそれを実行できるほどの金がある。ここで使つて、僕だけでなく妹達にも師事をさせて、彼女達の力の底上げをすれば今後が楽になるだろうという考えだった。

道玄は今でも、若返りの秘術の研究を行っている。理由は、研究者気質であるため自身の手掛けた研究が道半ばで放り出すなど出来ないという至極尤もな理由だ。

だが、平民になつてしまった今では、研究は出来るし大蔵省からの査察もないが、高級材などの材料ルートがほとんど断たれたのである。流石にこれは道玄にとつても痛く、彼が必死に家庭教師として教鞭を振るい貴族の家に出入りしているのも、繋がり

再構築して研究材料を手に入れるルートを構築することである。

こちらは順調に行っているから問題ない、目下の問題は金がないことにより霊薬や秘宝のような、高級材が手に入らないことだ。これが貴族時代ならば、国からの直接支援もとい、国家事業の一部として容易に要求することが出来た。しかも費用は国持ちである。

しかし、平民になった今ではそれが厳しい。貴族に送るための賄賂も、生活費と本代で消えてしまう。なので、賄賂や霊薬の代金の代わりに彼が教鞭を振るうのだ。金から逃れられない運命がそこにあった。

原作ゲームで主人公である波羅が道玄と繋がりを持てるのも、彼女が貴族だからというのも理由の一つだ。中級コースならばそこからの報酬で研究を再開する。上級コースならば、金よりも物ということ、修行という名目で貴族じゃないと入れないような禁足地に向かわせ材料を取りに行かせる。という風になっている。原作ゲームで、中級コースで金を、上級コースでは逆に物をという風に別れている理由が道玄の研究のためであった。そして、三つ目の両取りもとい最上級ルートでは、物を持つてくると同時に道玄に金を払うことで彼の研究を一気に加速させると同時に自分の技術を高めるために最高のルートなのだ。

ある意味、リセマラしないとイケないような厳しい条件も、金が潤沢にある今の僕な

らそれが選べる。ゲームじゃなく現実だからリセマラなんて悠長な真似できないから必死に領地開発していったが、その結果が早くも実を結びそうだ。

彼の研究を加速させる理由は、若返りの秘術を使うと、肉体が若くなるがそれと同時に性欲も戻るのだ。

道玄はドスケベジジイであり、エロゲー故に体の要求を主人公にしてくる。百歳を超えてるのに、下の息子は元氣澆刺なのだ。

それだけでも問題なのに、肉体が若返ってロリババアならぬシヨタジジイになってしまったらもうほぼ毎日のように犯され確実に孕まされてしまう。妹を守るためにもそれを防がなければならない。

だが、体の要求が起こるのはちゃんと理由があり、若返りの秘術は受精卵が必要で、有能な退魔師の卵子ならば強いエネルギーもとい靈力を持つ。これと、道玄の精子を組み合わせて受精卵にするのだが、そこから子を作るのではなく、子を作る過程のエネルギーを抽出することで肉体を若返らせる……とかなんとかだったっけな。

その際絞られた受精卵は当然実を結ぶことなく搾りかすとなり捨てられるので、子を作ることにはならないが、悍ましい研究なのは間違いない。

そして、道玄は自身の精子がまだ元氣な内に、有力な退魔師の卵子が欲しかったのだ

が、貴族から平民に落とされた状態で、貴族の卵子を要求するなど非常に厳しいとか無理である。ここで身分剥奪された痛みが襲ってくるのだ。

そんなところに、犯され主人公兼ヒロインである僕の妹の波羅がやって来たのはまさに天啓、まさに鴨葱と言えよう。

もちろん、体を捧げないルートもあるしそこから完成もさせられるのだが、当然遅々とした進みとなる。どちらを選ぶかはプレイヤーの決断だが、研究を完成させると肉体のステ振りリセットや、重篤な傷の瞬時な治癒など特典がある。

若返りの秘術とは肉体を若返らせるが、それだけでなく肉体を戻すという効果もある。つまり、片端の状態から五体満足に復帰できる。これは、桃代姉さんの子継病を治す手段の一つになっているのだ。勿論、傷や病の具合によって時間の偏りがあり、重篤過ぎると延命だけだ。だが、姉さんにせつせと薬を買っているので、研究を完成させることが出来れば、治す手段を一つ手に入れることになる。そういう意味でも、研究を完成させることに意義はあるのだ。

ちなみに、若返りの秘術の正体もとい外観は肉繭である。そう、触手系とかそつち系でよく使われるような肉繭である。中に入ったら改造されること間違いなしなアレだ。何故そんな外観にしたのかという質問に対して開発スタッフは

「某有名バトル漫画の回復ポッド、あれを参考にしました。ほら、中に入れたら怪我也治るし無くなった腕も生えるでしょう？ 寧ろ一部の機能を上回ってますよ」

と言ったが、プレイヤー達からは「中身の機能はほぼ同じで一部上回っていても外觀がグロすぎるだろ!!」と強いツツコミが入ったがそれは置いておく。

「どうでしょう？ 僕のことを知っているならば、我が領地が発展しているのもご存じでしょう。ならば、そこからの援助で道玄さんの研究を支援できますよ」

「ふむう……」

「御爺様、これは引き受けるべきだと思います。ここまでの好条件はありませんよ」

顎を撫で考え込む道玄に、薫さんが援護してくれる。その甲斐あつてか、彼はようやく首を縦に振った。

「わかり申した、そこまでの条件ならばこちらも否とは言えませぬ」

「ありがとうございます」



「では、綾絶頼殿、これからはわしのことは師匠か先生と呼ぶように」  
「はい、師匠。では、お近づきのしるしにこちらをどうぞ」

そう言つて、万太の桐箱から蓋をされた酒瓶と盃を取り出す。

「師匠、我が領地で作られた高級清酒です。さきつ、どうぞ」

「おおッ！ これはこれは弟子からのありがたいものじゃのう！」

目に見えて喜色をあらわにする道玄。さきつと盃を取つたので、酒瓶を傾け酒を与え  
る。それと同時に、薫さんにも酒を注いだ。

「私の分まで………頼さん、ありがとうございます」

「いいんですよ、これからはしばらくお世話になる間柄になりますし」

「しかし弟子よ、酒は飲まないのか？」

自分の分の盃も置いたが、そこには酒は注がない。僕はあまりお酒が強くないから  
だ。

「あまりお酒に強くないんですよ、飲めないわけではありませんが」

「ふむう……だが、これからのことを考えるなら、酒程度は飲めるようにならないか  
いかなぞぞ？ 貴族の宴会ならば猶更じや」

「それはまあ、そうですが……」

道玄の言っていることは事実だ。貴族の宴会は、ひたすら会議しながら酒や食い物を  
食べるからだ。

読者諸君ならば、宴会と聞くと酒と食べ物を食べで大騒ぎするだけという認識がある  
だろうし、僕も現代日本で生きていた故にそう思っていた。

だが大昔の宴会は意味が違う、平安時代の宴会は会議だったのである。それこそ酒と  
食べ物があるのは同じだが、食べながら今後の事について会議するのだ。だから、朝廷  
の公家や貴族がひたすら宴会していたという記述があるが、あれは遊び惚けていたわけ  
ではない。ひたすら食べて飲みながら今後のことについて会議をしていたのだ。

そして、この和風ファンタジーエロゲー世界な『現世の波羅姫』でも同じだ。主人公  
である波羅が朝廷に参内して会議に参加する際、その後の宴会でも酒を飲まされるのだ  
が、この時酒酔いに耐性がないと、都のデブ貴族にお持ち帰りされて処女を散らされる、  
なんてことが運悪く起きたりする。

この世界だと、それが逆転していると考えると、僕が耐性をつけなければならぬかもしれないが、妹が当主を継ぐ以上は彼女も耐性をつけなければならぬ。何より、逆転してるからといって全部逆転しているわけじゃないのだ。事実、全部逆転しているのならば目の前にいる薫と道玄が女性になつてないとおかしい。なのに、目の前にいる二人は男性である。故に、そこにも注意を払いながら行動する必要がある。

「わしとお主は師弟の関係になつた、ならば盃を交わすのが道理じやろう。じゃからほれ、一緒に飲む——」

「みんなく、お風呂が沸いたべ」

道玄の言葉を遮つてやつて来たのは蒲公英ちゃんだった。顔をちよつと煤で汚しながらやつて来た。恐らく、先ほどまで火を噴いていたのだろう。ということとは、外から薪を燃やして沸す薪風呂なのだろうか。

そう思っていると、道玄が口を開き

「どうやら風呂が沸いたようじゃな、ならば頼よ、先に入るが良い」

「えっ？　こういうのは師匠が先ではないでしょうか？」

「よいよい、それにお主からの酒と馳走の礼もあるし。あと、酒を飲んだ後に風呂は入らない方が良くと聞く。ならば、盃を交わすのはお主が入った後にしようぞ」

「そういうことでしたら、お先に失礼します」

「うむ。薫よ、彼の背中を洗うが良い」

「わかりました」

先に入ろうとしたところに、いきなりぶつ飛んだことを言ってきた。

「そんな、師匠のお孫さんである薫さんに三助のような真似をさせるわけには………」  
「いいえ、私は構いません。それに、私は頼さんに助けていただいた身、それのお礼の一つの為に是非ともさせて頂きます。さあさあ、戦闘の疲れと汚れを落とすためにもお風呂に行きましょう！」

余りの熱意にぐいぐい押された上に、手を掴まれて引つ張られて成すがままにされてしまった。そして、僕は風呂に入ることになった。

「おお、中はそこそこ広いですね」

「はい、こちらも空間術を用いております。更には、風呂桶も檜なので居心地は良いですよ」

僕は裸で浴場に入った。

物凄く恥ずかしいので、僕が先に風呂に入つて、彼には後から入ってもらつた。そして、今に至るまで後ろを向いていない。背中で会話をしているので、薫さんがどのような格好なのかは見ていない。

風呂場は流石に蓬萊亭の大浴場に比べたら劣るが、個人宅にしてはそこそこな広さであつた。外から沸す五右衛門風呂のようで、外ではフーフー息を吹いてる声が聞こえる。恐らく、蒲公英ちゃん火を吹いているのだろう。

「二人とも、お湯の調子はどうか？」

声を掛けてきたので、風呂釜に手を少し入れて音頭を確かめる。うん、ちょうどいい

温かさだ。

「ちようどいいよ、そのまま温度の維持をお願いね蒲公英ちゃん」  
「わかりましただ！ 頼様はゆつくり風呂につかってくんろー！」

格子窓から見える外では、彼女が手を伸ばして振って答えた。

「では。まず最初に、かかり湯をしましょうか」

「はい、薫さんお願いしますね」

彼が男色じゃないようにと祈りながら、風呂椅子に座る。風呂桶から掬ったお湯を、ゆつくりと背中にかけていつてもらおう。

「では、背中を洗いますね」

そう言うと、ヘチマと無患子を使って背中をこすってきた。うん、凄いい楽だ。

「次は腕を洗いますね、伸ばしてください」

言われた通りに片腕を伸ばし、それをしつかり洗ってもらう。その際、左腕を上げたから右を向き、右腕を上げたら左を向くようにして、出来るだけ彼の姿を目に入れないようにした。

目に入れない理由は、彼が青髪インテリイケメンだからに他ならない。それ故に、彼が裸の姿でも美しいのは自然と想像できるし、目に入れたら僕的情绪がぶつ壊れそうになるからだ。

「次は髪の毛を洗いますね、解いてください」

「はい」

言われた通り、紐をほどいてポニーテールを解く。僕の髪の毛は薫さんと同じく長髪で肩甲骨辺りまで伸ばしている。ポニーテールにしてるのも、侍の丁髷モドキに見せるためだ。実際この世界は和風ファンタジーだからか、男は髪を伸ばしてポニーテールにして丁髷にしているのをよく見る。もちろん、本当の丁髷の男もいるにはいるが、原作ゲームでは数が少なかった。まあ、犯す男もそれなりの美形とかじゃないと萎えるから

と資料集に書いてあったつけなと思ひ出した。

僕の黒に近い茶髪は、妹達からは勿論、姉さんや下人たちからも人気があつた。普段嫌味を言う親族すら、僕の髪の毛は褒めるほどだ。実際自分の髪の毛はサラサラヘアなので、自分でも触つて気持ちがいいほどだ。ほとんど碌な手入れをしてないのにサラサラを維持できるのはエロゲー世界だからだろうか？と思わなくもない。前世の自分にはがないサラリーマンで短髪だったし髪の毛にも無頓着であつたが、今生は無頓着にさせないほどの美髪だと周りから褒められている。

そんな髪の毛を解いて、薫さんに洗つてもらふ。

「無患子が目に入つていませんか？」

「大丈夫ですよ、そのままどうぞ」

「はい、綺麗な御髪だからしっかり洗いますね」

言つた通り、彼は丁寧な、しっかりと洗つてきた。髪の毛から伝わる感触から感じるに、両手でしっかりと挟んでゴシゴシと洗つているようだ。そんな風に丁寧に表れると、こつちも悪い気はしない。



「綺麗な御髪ですね」

「ありがとうございます」

「肌も綺麗です、が、所々生傷がありますね」

「ええ、妖魔退治もそうですが訓練でもつけていましてね。まあしょうがないものと割り切って——」

「いけませんよ、頼さん。男は体に傷をつけては女性を不愉快にさせていただきます」

そう強く言われて言葉が詰まる。

逆転すると、女の体に傷をつけるなどということになるのだろうか？　だが、そんなことを言ってる暇もないくらいに中妖や小妖といった獣たちが襲ってくるので、それに対して退治しなければならぬので怪我は必定なのだ。

それに、男の傷は勲章と漫画などで教わったわけだし、僕は気にしていないのだが薫さんは違うようだ。

「では、次は足を洗いますね」

「えっ?!　い、いや前は結構で——」

「足を洗うだけですよ、ほら伸ばしてください」

そう言つて、薫さんは前に出てきた。

そして、彼の姿を見てしまった。

肌襦袢がお湯の蒸気で濡れたせいも、しつとりと肌に吸い付きその下の肌も薄つすらと見えてしまう。青い長髪も蒸気でしつとりして肩に張り付いているのが大層厭らしい。顔はイケメンなのも相俟つて、非常に絵になる美しさだった。

だが、その体付きは細いとはいへ硬い男の体だ。だが、ピンクの乳首が見え、禪からは股間の盛り上がりが見えているが、その盛り上がり天を突いていた。天を衝く股間は、まるで少年やおい本みたいな可愛さと猛々しさが混じっている。その股間の一物さえなければ、彼が貧乳の女性のように見えたかもしれないが、あいにく股間のブツから目を逸らすことが出来ない。

同性で勃起しているのがまずおかしい、薫さんはまさか……原作ゲームが始まる前に男色に走つてしまっているのか?!

僕がまじまじと見ているのに気付いた薫さんは、申し訳なさそうにし

「頼さん、貴方に打ち明けるのはとても心苦しいのですが私は男色なのです。ですので、先ほどから貴方の体に欲情しております」

「そう言いながらも、足を持ちながら近づく。」

「その……………、あの時助けて頂いてからお慕い申しております。貴方に惚れました、付き合っていただけじゃないでしょうか？」

「そうぶつちやけられて、冷や水を浴びせられたようになる。」

「股間のブツさえなければ綺麗な貧乳美少女が僕に近づいているのだが、彼の一物が、僕の魂がそれを否定している。この時点でケツを掘られるのは勘弁してほしい。」

「そうですか、正直な告白に感謝します。ですが、僕は嫁のいる身で同性愛者ではありません。申し訳ありませんが、薫さんの告白に応えることは出来ません」

「そうきつぱりと断った、流石にここは断らないと僕のケツがヤバイ。」

「薫さんは目に見えてシユンとし」

「そう……………ですよね、貴方も当主代行という身で十六歳ならば、既に嫁がいても不思議じゃないですね。ごめんなさい、気持ち悪いことを言いました」

そう、悲しげな顔をしながらも言う。

だが、それに対して僕はこう語り掛けた。

「貴方の男色家という性癖について僕は応えることは出来ません。ですが、それを好きじゃないと言いはしますが、やめると押し付けることはしません。ですので、貴方はそのままでもいいのです」

すると、驚いた顔をして僕の顔を見上げた。

現代日本で生きていた感覚で答えただけなんだが、そんなに驚くことだろうか？ 僕の住んでた日本なんかコミケを筆頭に数々の性癖が公開されているがそれを否定と嫌悪はされてても、やるなとかするなと押し付ける人間は居なかった。いるにはいたが、表現の自由の否定に当たるため大反発を喰らって、やるなと押し付ける側は必然と負けていった。

まあ、そういう前世の感覚があるので、やおいやゲイホモに理解をしてる。それらの性癖は好きじゃないし、好きか嫌いかの二択で答えるならば嫌いを選択するだろう。だがしかし、絶対にやるなやめると否定することはしない。それをした所で何にもならな

いし、みんな違ってみんないいからだ。それを言ったら、僕の巨乳好きなんてのも否定されるからだ。否定していったら芋づる式に終わりが無くなってしまうのである。

故に、寛容と慈悲の心をもつて、薫さんの告白を拒絶はするが性癖は否定しなかった。すると、薫さんは嬉しい顔をして

「私の告白を拒否してくれたことは悲しいですが、性癖を否定しなかったのは初めてです」

お礼にすっかり洗いますね、そう言いながら足を洗い始めた。足の指先までしっかりと洗ってくれて気持ちがいい。あと、僕がそう言ったのは、性癖を否定しないのもそうだが、道玄との繋がりがここから壊れるのが嫌だからという現金な理由もある。だから、ある意味玉虫色のような回答であったが、どうやら薫さんにとっては嬉しかったようだ。

右足、左足と膝下まで洗って貰った。太腿は流石にダメですよと断り、前も結構と言った。そして、洗ってる最中に僕のブツをガン見してきたので、見るだけです触ったら支援は無しですよと釘をさす。

「どうして、そのように優しくしてくれるのですか？」

洗つてる最中に不思議そうに聞いてくる薫さん、それに対して僕は

「ここで、師匠とのつながりが貴方から壊れるのが嫌という打算的な理由もあります。あの人から師事を受けられなくなるのは嫌なので、後は——」

「後は？」

「薫さんが、僕にとって男性の初めての友達だから、ですかね」

そう言った、すると、みるみるうちに羞恥心が高まつて来て、思わず見つめあつてた顔をそむけてしまう。薫さんも顔を下に向けてしまいがらも、足洗いをするのをやめなかつた。

洗い終わったので、薫さんは立ち上がり失礼しますと一言言つて出ていった。

そして、僕は風呂に入る。風呂は気持ちよかつたのだが、なんだかドツと疲れてしまった。まさか風呂に入つてる最中に男色に走っていることが判明した上に、相手から愛の告白を受けるとは、あの世紀末世界の高名な軍師の目をもつてしても見抜けないだろう。ていうか無理である。

しかし、男色に走っているというのが判明しただけでも収穫がある。それと同時に、妹達の夫候補からは外れてしまうこともわかった。蒲公英ちゃんを使うという言葉からして、男色家ではあるが、お家存続のために種馬として蒲公英ちゃんを孕ませて子を産ませるといふことなのだろう。

逆転世界で、男が少なくなっているという中で、男色に走っている、なんかもう色々ヤバイ。こうなると、僕が入門しようとしている道場。あそこもめっちゃ怪しい気がしてきた。

格子窓から見える月景色は綺麗であったが、僕の心はモヤモヤしていた。

風呂から上がり、居間に戻ると、僕の盃に酒が注がれていた。そして、薫さんと師匠がちやぶ台に座って待っている。

「風呂はどうだったかな？ 弟子よ」

「はい、一番風呂を頂き感謝します。とても気持ちよかったです。薫さんの三助も大変丁寧でした」

「それは重畳、さあ盃を交わそうぞ」

流石にこれは避けられないかなあ、お酒はあまり好きじゃない。というか、酔っぱらうと頭が上手く働かないのが嫌いなだけだが、チューハイみたいなジュースのような酒なら飲めるが目の前にあるのは清酒である。

自画自賛になるが、いい香りがする味の良い酒なのは間違いない。作った僕自身が味見してるのもそうだが、結構酒精が強いのだ。それを盃一杯とはいえ飲むのはちよつとだけ辛い。でも、師と弟子の関係になったのならば、師の決定には従わなければならぬ。

ちやぶ台に座り、盃を手につ。そして、二人に目をやり、僕らは共に

「乾杯」

そう言つて、同時に酒を呷つた。

口に入れると、アルコール特有の強みが口の中に広がるも、それと同時に清酒の良い



香りが口蓋から鼻の奥を通って香りを感じる。そして、喉に流すと焼酎よりは弱いが焼けるような熱さが喉を、そして胃を通る。

大人ならば大丈夫だろうが、この体は転生してまだ十六歳だ、元服した以上は酒は飲める年齢だが、現代日本ならばまだ未成年である。なので、前世のサラリーマン時代に比べてお酒に強いわけじゃないから結構キツイ。

体がほかほかしてきたと同時に、頭も回らなくなってきた。

「どうだ弟子よ、酒の味は」

「ひゃい、わがやのりょうちの特産品だから、とてもおいしいですう」

「うむ、この清酒はわしも飲みたいと思っていた一品。その特産品を、こうして飲んで幸せじゃわい」

「それはそれは、よかつたでしゆ」

「ところで、先ほどから呂律が廻っておらぬが大丈夫か？」

ししようが、しんぱいしてくれてる。優しさにありがたくおもうも、なかなかことがでてこない。

「いいえ、あまりだいじょうぶじゃないですう、なんだかとてもねむく——」

「そうかそうか、ならばそのまま眠ってよいぞ、わしらが運んでやろう」  
「ししよー、ありがとうございますう……………」

その後の記憶は眠っていて覚えていない。

目の前の少年は、可愛らしい顔をしながら眠ってしまった。

お酒に弱いというのは間違いなかった、だがそれ以上に酒に入れた薬が効いたのが原因だろう。

「御爺様、本当にやるのですか？」

「もちろんじゃ、せつかくやって来た高名な貴族じゃぞ？　しかもわしに弟子入りする上に、資金と物品の援助を申し出てくれる。これほどありがたいことはない。ならば、

まず先に物を頂くことになるかのう」

頼は、原作ゲームの資料集で道玄の研究の予測をつけており、それは凡そ当たっていた。だが、当たっていたのは凡そでしかない。若返りの秘術というのも大体間違っていないし肉繭の外観も変わっていない、だが決定的な違いがあった。それは、この世界が原作ゲームと世界観が天正帝によりゆがめられたこと、それによるバタフライエフェクトで道玄の研究も多少なりとも影響を受けてしまったことにある。

そう、頼は若返りの秘術と想っていたが、それは微妙に違っていた。道玄の研究とは「自分自身の願う体を手に入れる」という研究である。

「さて、妖魔の卵子はいくらでもある。だが、わしらの子種では活力がない。じゃが、この子なら？」

原作ゲームでは、妖魔の卵子と優秀な退魔師の精子を掛け合わせ、それによる受精卵のエネルギーを使う。妖魔の卵子を使うのは、平民に落とされた身では優秀な退魔師の卵子とは必然と貴族の物となる。しかし、それが出来ないから代用として妖魔の卵子を使い、受精卵のエネルギーを使うところまではこの世界と一緒だが、精子の方に問題が

あつた。

この世界の男は天正帝の呪いの影響の反動により女の性欲が強くなり、妖魔も断種され女の妖魔もとい淫魔だらけになってしまった世界になったことで、男は狩る側から狩られる側となりその結果精子が弱くなってしまうのだ。

その結果、この世界では精子が貴重になってしまった。そして、更なるバタフライエフェクトが起こり、道玄がその影響を受けたのだ。

「わしの息子はまだまだ現役ではあるが、流石にもう女を抱きたいとは思わんしう」

道玄の性欲も健在だ、だがしかし、若いころは躍起になるほどだったが、年を取った今では女の性欲が強すぎて逆に押されてしまう。押し倒されるのがこの世界の普通なのだ、道玄はそれを良しとしないほうだった。彼は、大昔は男が上にある物だという価値観を知っており、それは自分もそうだろうと思っていた。

だが、呪いの反動によって影響を受けたこの世界の女性の強い性欲には負けてしまい、それなりの数の売春婦を孕ませてしまったものの、流石に自分が押し倒されるのは嫌なのであつた。プライドとして、相手を支配するような性交が好きなのだ。それが出来なくなってしまう以上、己の愚息が萎えてしまうのも致し方のないことであつた。

「それに、私達の子種に活力がありませんからね」

「うむ、天正帝の呪いの反動じゃな」

道玄の実験に薫も協力はしていたが、二人とも子種に活力がないので思ったような受精卵が出来ないのだ。何より、精子を出す作業が非常に辛い。蒲公英が相手になつてくれているが、3Pをしてるのに対して二人は押し負けるほどだ。それほど思春期の少女の性欲が強いとも言えるが、「今度産無<sup>コンドーム</sup>」に精子を溜める作業だけでも一苦労なのだ。

「じゃがしかし、この子はどうかじゃろうな？」

そう言つて、笑みを浮かべる道玄。彼からすれば、頼は正に鳴葱であつた。新鮮且つ、自分たち以外で優秀で血筋も悪くない子種が欲しかつた。それこそが、道玄の研究のための受精卵を作るのに必須だからだ。その条件に見事に当てはまつたのが頼である。しかも彼から、資金物品両面で援助を申し出てくるのだから逆にこちらが驚いた。だが、それと同時にチャンスでもあつた。自分達以上の貴族の子種がホイホイやつて来たのである。これを利用しない手はない。故に、彼の言う物品を今まさに貰うわけであ

る。

「さて、蒲公英よ。準備はよいか？」

襖越しに掛けられた声に反応し、シャツと襖が開けられる。彼女は荒い息と共に、巾着袋に入った「今度産無」を持つてきた。田舎少女のような所謂モブ顔の垢抜けなさがあつたが、それを吹き飛ばすように目に見えて発情していた。

「お、おらこのお貴族様とまぐわえるんだべか？」

「もちろんじゃ、ちゃんとその今度産無に子種を溜めるようにするのが条件じゃがの」「わかつただ！ おら頑張つて絞りだすだ！」

そう言つて、お米様抱つこで頼を担ぎ上げる。彼女の禪からは液が溢れ出ており、それが歩いていく道を濡らしていきつつ寝所へと向かつていった。

その様子に若干顔を顰める薫だが、すぐにキリつとした顔になり

「では御爺様、念話で話していた内容は間違ひありませんね？」

「無論じゃ」

「では、私も彼の射精を手伝いに行つてきます」

片手で片眼鏡を調整しながらも、スツと立ち上がり蒲公英の後をついて行く薫。

薫は、風呂場で頼の体を洗つてる最中に道玄から念話で話しかけられた。内容は、彼の子種を蒲公英を使って睡眠姦により絞り出すというものだ。

薫からすれば、道玄の提案した睡眠姦など拒否するところだった。当然だ、愛する男の子種を睡眠姦で絞り出すなど許せない行為だ。

だがしかし、道玄からこう言われたのだ

「わしの転生器が完成すれば、お主の望みを叶えることが出来るぞ？」

「お主だって、あやつの体を堪能したいのじやろう？ ならば蒲公英と共に子種を絞り出せばよいではないか」

「わしの調合した薬は朝まで起きぬ、その間にじつくりと楽しむが良い」

そこまで言われて、迷った。だが、それでもやはり出来ぬと思い、その決意の為に彼に風呂場で告白したのだ。だが結果は知つての通り撃沈であった。

彼からは、自身の男色の性癖を認められたことは嬉しかったものの、失意と失恋によ

る傷は大きかった。トボトボとした足取りで居間に向かった薫、居間では道玄が酒を楽しんでいたが、そのそばに例の睡眠薬が置いてあった。

それを見た薫は理解した、本当に御爺様はやるつもりなのだ。それを阻止しようとしたものの、心の傷を埋めるかのように、道玄の甘い囁きが彼に入り込んでしまった。

「透視で見ておつたが、お主は振られたのじやろう？　ならばその腹いせに彼の体を好き放題すればよい。自分は彼の体を弄んだのに、相手はそのことを一切知らぬ。それはそれで滾るのではないか？」

心に罅が入っていた薫は、その甘言を防ぐことは出来なかった。

齢百数十を超え、教授の身までたどり着いた老人からすれば、言葉一つで孫を弄するなど簡単なことであった。